

青森県埋蔵文化財調査報告書 第621集

古野（2）遺跡

— 下北地域広域避難路確保対策事業に伴う遺跡発掘調査報告 —

2021年3月

青森県教育委員会

古野（2）遺跡

—下北地域広域避難路確保対策事業に伴う遺跡発掘調査報告—

2021年3月

青森県教育委員会



古野(2)遺跡遠景(北西→)



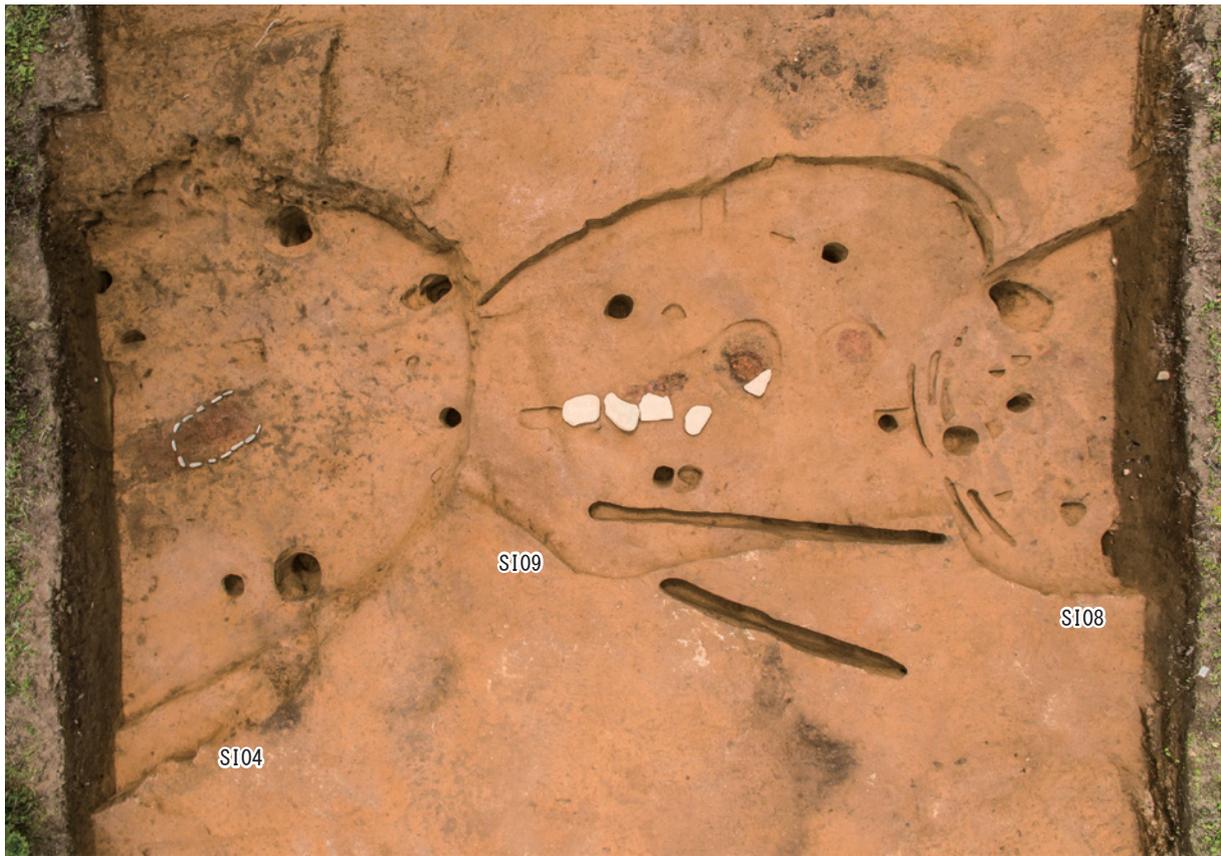
調査区遠景(南東→)



調査区北側完掘（北→）



第1号・第2号竪穴建物跡調査状況（南西→）



第4号・第8号・第9号竖穴建物跡完掘（北→）



調査区南東斜面の捨て場調査状況（西→）



縄文時代前期後葉の土器



縄文時代中期以降の土器



磨製石斧と関連遺物



土製品と球状耳飾（左側は縄文時代中期後葉、右側は前期後葉）



S=1/1

遺構外出土土偶（縄文時代中期後葉）（図 114-1）

序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、平成30年度と令和元年度に下北地域広域避難路確保対策事業予定地内に所在する古野(2)遺跡の発掘調査を実施しました。

風間浦村役場がある易国間地区中心部の西側に位置する古野地区は現在、保育所、小学校、中学校が集う教育地区としての一面を見せています。

海峡の向こうに北海道島を望む海成段丘上に位置する本遺跡は、調査の結果、縄文時代及び近世・近代の複合遺跡であることが分かりました。

縄文時代前期後半、この古野地区では円筒形の土器が用いられ、人々は竪穴建物に暮らし、同一文化圏の道南部の人々とも盛んに交流していました。

数百年を経た縄文時代中期後半にも、ここに集落が営まれました。この時期、南東北の大木式土器文化の影響は本州島北端のこの地にも及び、その影響が見られる土器群に加え、縄文時代の精神文化を示す土偶をはじめとする貴重な資料が出土したことにも注目されます。

この調査成果が今後、埋蔵文化財の保護のために広く活用され、また地域の歴史を理解する一助となることを期待します。

最後に、日頃から埋蔵文化財の保護に対してご理解をいただいている青森県県土整備部道路課に厚くお礼申し上げますとともに、発掘調査の実施と調査報告書の作成にあたり、ご指導、ご協力をいただきました風間浦村役場をはじめとする関係各位に対し、心より感謝いたします。

令和3年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 佐藤 禎 人

例 言・凡 例

- 1 本報告書は、青森県県土整備部道路課による下北地域広域避難路確保対策事業に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが平成30年・令和元年度に発掘調査を実施した風間浦村古野(2)遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査面積は、4,130㎡である。
- 2 古野(2)遺跡の所在地は青森県下北郡風間浦村易国間字古野地内、青森県遺跡番号は425021である。
- 3 発掘調査及び整理作業・報告書作成の経費は、調査を委託した青森県県土整備部道路課が負担した。
- 4 本報告書に関する発掘調査から整理・報告書作成までの間は、以下のとおりである。

発掘調査期間	平成30年6月12日～同	年10月19日
	平成31年4月24日～令和元年	8月9日
整理・報告書作成期間	平成31年4月1日～令和3年3月31日	
- 5 本報告書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆と編集は、青森県埋蔵文化財調査センター永嶋豊文化財保護主幹、平山明寿文化財保護主幹、藤田祐文化財保護主事、長谷川大旗文化財保護主事が担当した。依頼原稿及び委託原稿については、文頭に執筆者名あるいは機関を記した。

発掘調査成果の一部は、現地見学会や発掘調査報告会等において公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合は、本書が優先する。
- 6 発掘調査から整理・報告書作成にあたり、以下の業務については委託により実施した。

基準点測量	有限会社 下北測量
黒曜石産地同定分析	株式会社 パレオ・ラボ
微細遺物(種子・骨)同定分析	パリノ・サーヴェイ 株式会社
放射性炭素年代測定	株式会社 加速器分析研究所
土壌選別分析	第一合成 株式会社
空中写真撮影、遺物の写真撮影	有限会社 無限
遺構測量の一部、遺物写真切り抜き	株式会社 知立造園
土器実測の一部	株式会社 シン技術コンサル東北支店、株式会社 アルカ
石器実測の一部	株式会社 ラング
- 7 遺跡周辺の地形・地質の原稿および石器の石質鑑定は根本直樹氏(国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科)に依頼した。ガラス小玉の蛍光X線分析は、村串まどか氏(国立大学法人筑波大学人文社会系)に依頼した。
- 8 本書に掲載した地形図(遺跡位置図等)は、国土地理院発行の地図を合成・加工して使用した。
- 9 測量原点の座標値は、世界測地系(JGD2011)に基づく平面直角座標第X系による。挿図中の方位は、すべて座標北を示している。
- 10 遺構には、その種類を示すアルファベットの略号に検出順位を示す算用数字を組み合わせた略称を遺構ごとに付した。遺構に使用した略号・略称は以下のとおりである。

SI: 竪穴建物跡	SK: 土坑	SV: 溝状土坑	SN: 焼土遺構	SF: 焼土	BL: 遺物集中区域
-----------	--------	----------	----------	--------	------------
- 11 遺物については、取り上げ順に種別ごとの略号と番号を付した。略号は以下のとおりである。

P: 土器	S: 石器	C: 炭化材
-------	-------	--------
- 12 遺跡の基本土層にはローマ数字、遺構内堆積土層には算用数字を使用した。各土層の色調表記等には、『新版標準土色帖2006年版』(小山正忠・竹原秀雄)を基に記録した。土層断面図には水準点を基にした海拔標高を付した。

- 13 各挿図中の遺構実測図の縮尺は、原則として、竪穴建物跡・土坑・溝状土坑・焼土遺構は1/60とし、スケールを示した。地形図・調査区域図・遺構配置図等は適宜縮尺を変更し、各挿図にスケールを示した。使用した網掛けは、下記のとおりである。このほかの網掛けについては、各挿図中に凡例を示した。



- 14 各遺構の規模に関する計測値は、原則として現存値を記載している。
 15 遺物実測図の個別番号は、図版ごとに1から遺物番号を付した。
 16 遺物実測図の縮尺は、土器類1/4、剥片石器類1/2、礫石器類1/3、土製品類・石製品類・金属製品類1/2、銭貨1/1を原則とし、各挿図にスケールを示した。また遺物実測図に使用した網掛けは、下記のとおりである。このほかの網掛けについては、各挿図中に凡例を示した。



- 17 各遺物写真には遺物実測図と共通の図番号を付しており、縮尺は原則として実測図と同様である。
 18 出土した縄文時代の土器は、「縄文時代後期前葉深鉢」などの時期と器種の組み合わせで呼称した。また土器型式名が明らかであるものはそれも用いた。土器の器種名は「形土器」を省略し、深鉢・鉢・壺などと記した。

以下に当報告書で用いた時期と土器型式名、器種名を記す。概ね、『青森県史 資料編 考古1 旧石器 縄文草創期～中期 (2017)』、『青森県史 資料編 考古2 縄文後期・晩期 (2013)』、青森県埋蔵文化財調査報告書 第588集『三内丸山遺跡44 (2017)』に準拠した。

時期	土器型式名等	器種
縄文時代前期後葉	円筒下層 d 1 式土器	深鉢
	円筒下層 d 2 式土器	深鉢
縄文時代中期後葉	榎林式土器	深鉢 壺
縄文時代中期末葉	大木10式併行型式	深鉢 壺
縄文時代後期初頭	後期初頭新段階	深鉢
縄文時代後期前葉	十腰内 I 式	深鉢 鉢 壺
縄文時代後期末葉	「十腰内VI群」前後	台付鉢
縄文時代晩期前葉	大洞 B 2 式	深鉢
縄文時代晩期中葉	大洞 C 1 式	深鉢 鉢 浅鉢 台付鉢 壺
縄文時代晩期後葉	大洞 A 1 式	壺
	大洞 A 2 式	深鉢
縄文時代晩期末葉	大洞 A' 式	浅鉢

- 19 石器類は次のように分類し、さらに器種に細分した。
- 石鏃 鋭利な先端部が作り出された扁平な石器で、全長が概ね5 cm未満のもの。
 - 石槍 鋭利な先端部が作り出された扁平な石器で、全長が概ね5 cm以上のもの。
 - 石筥 剥片の周縁を加工し、へら状に成型し、主要な刃部は下端に設けられているもの。
 - 石錐 剥片の一端に先端部を作り出されたもの。
 - 石匙 剥片素材の一端に抉りを施し、つまみ状の小突起を作り出したもの。
 - スクレイパー 剥片の縁辺に連続的な調整によって刃部を作り出したもの。急角度で調整されたものもある。

石核 原石から剥片を剥離した後の残核。

二次加工のある剥片 剥片の一部に二次加工が施されているもの。

微細剥離のある剥片 剥片の一部に微細な剥離痕が認められるもの。

剥片 二次加工が施されていない剥片。

原石 珪質頁岩や玉髓等の礫で、石質が良質で大きさが5 cm以上のもの。

磨製石斧 器面全体を研磨し、器体の端部に刃部を形成するもの。

敲磨器類 礫に研磨や敲打による使用の痕跡が認められるもの。使用痕の種類により、研磨による磨面をもつものを磨石、礫の側面に敲打痕が認められるものを敲石、敲打による凹みを形成しているものを凹石に細分した。

半円状扁平打製石器 板状素材の周辺及び表裏面を、剥離あるいは研磨によって半円形や長三角形に整えたもの。

挟入扁平打製石器 板状素材の周辺及び表裏面を、剥離あるいは研磨によって半円形や長三角形等に整え、長軸端部に挟りを入れたもの。

台石・石皿類 扁平な大型礫を素材とし表面に使用痕の見られるもの。小破片では細分できないが、素材礫を大きく加工することなく使用したものを台石、縁や脚を作出するものを石皿とした。

砥石 礫を素材とし、器面に被研磨痕があるもの。

軽石製品 軽石を加工したもの。

20 土製品、石製品は器種が明確なものは、次のように分類し、さらに細分した。

玦状耳飾り 扁平で切れ目が入る石製の装身具

棒状礫 棒状の自然礫を加工したもの

三角形石製品 石を三角形に加工したもの

土偶 人形の土製品

ミニチュア土器 小型の土器

土器片利用土製品・土器片加工品 土器片を加工したもの

焼成粘土塊 焼成された粘土の塊

21 縄文原体は、山内清男『日本先史土器の縄文』（先史考古学会 1979）を参考に分類し、記述はそれに従った。但し、観察表では以下のように省略した。

結節回転文：結回、絡条体：絡、単軸絡条体○類：単絡○、結束第○種：結束○、多軸絡条体：多絡
また表中では、縄文原体の回転文の場合は種類の後に条の方向や回転方向等を、押圧文（捺糸圧痕・側面圧痕）の場合は種類の後に「押」を付けている。角ばった軸を用いた多軸絡条体で、軸の圧痕を串状に確認できるものを「角軸」と記載した。

22 発掘調査及び整理・報告書作成における出土品、実測図、写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。

23 発掘調査及び整理、報告書作成に際して、下記の機関からご協力、ご指導を得た。

風間浦村教育委員会、風間浦村総務課、風間浦村産業建設課、風間浦村議会、風間浦保育所、風間浦村立風間浦小学校、風間浦村立風間浦中学校

目 次

口 絵
序
例 言
目 次

挿図目次・写真図版目次・表目次

第1章 調査概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法	1
第3節 調査及び整理体制	3
第4節 発掘・整理作業経過	5
第2章 遺跡の環境	9
第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡	9
第2節 古野(2)遺跡周辺の地形及び地質	12
第3章 検出遺構と出土遺物	22
第1節 概要	22
第2節 縄文時代の遺構・遺物	22
第3節 古代以降の遺構・遺物	160
第4章 自然科学分析	165
第1節 古野(2)遺跡出土黒曜石製石器の産地推定	165
第2節 古野(2)遺跡出土微細遺物(種子・骨)同定分析	168
第3節 古野(2)遺跡出土ガラス小玉の蛍光X線分析	173
第4節 古野(2)遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)	176
第5章 総括	185
第1節 縄文時代前期後葉の土器	185
第2節 縄文時代中期～晩期の土器	191
第3節 土製品・石製品	194
第4節 剥片石器	201
第5節 礫石器	208
第6節 津軽海峡域における円筒土器文化期の集落動態	211
第7節 古野(2)遺跡における集落変遷	223
引用・参考文献	233
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

図 1	遺跡位置図	8
図 2	縄文時代前期後葉・中期後葉における津軽海峽域の集落	11
図 3	古野(2)遺跡周辺の地形分類図	12
図 4	古野(2)遺跡の地形	13
図 5	古野(2)遺跡周辺の水系	14
図 6	古野(2)遺跡周辺の地質概略図	15
図 7	基本層序断面 A-B 及び C-D の土層断面図	17
図 8	基本層序断面 E-F の土層断面図	18
図 9	路線図・調査区域図	20
図 10	遺構配置図	21
図 11	第 1 号竪穴建物跡(1)	23
図 12	第 1 号竪穴建物跡(2)	24
図 13	第 1 号竪穴建物跡(3)	25
図 14	第 1 号竪穴建物跡(4)	26
図 15	第 1 号竪穴建物跡(5)	27
図 16	第 2 号竪穴建物跡(1)	28
図 17	第 2 号竪穴建物跡(2)	29
図 18	第 2 号竪穴建物跡(3)	30
図 19	第 3 号竪穴建物跡(1)	31
図 20	第 3 号竪穴建物跡(2)	32
図 21	第 3 号竪穴建物跡(3)	33
図 22	第 3 号竪穴建物跡(4)	34
図 23	第 4・8・9 号竪穴建物跡	35
図 24	第 4 号竪穴建物跡(1)	36
図 25	第 4 号竪穴建物跡(2)	37
図 26	第 4 号竪穴建物跡(3)	38
図 27	第 4 号竪穴建物跡(4)	39
図 28	第 4 号竪穴建物跡(5)	40
図 29	第 4 号竪穴建物跡(6)	41
図 30	第 4 号竪穴建物跡(7)	42
図 31	第 5 号竪穴建物跡(1)	44
図 32	第 5 号竪穴建物跡(2)	45
図 33	第 5 号竪穴建物跡(3)・第 6 号竪穴建物跡	46
図 34	第 7 号竪穴建物跡(1)	48
図 35	第 7 号竪穴建物跡(2)	49
図 36	第 7 号竪穴建物跡(3)	50
図 37	第 8 号竪穴建物跡(1)	51
図 38	第 8 号竪穴建物跡(2)	52
図 39	第 8 号竪穴建物跡(3)	53
図 40	第 9 号竪穴建物跡(1)	54
図 41	第 9 号竪穴建物跡(2)	55
図 42	第 9 号竪穴建物跡(3)	56

図43	第9号竪穴建物跡(4)	57
図44	第9号竪穴建物跡(5)	58
図45	土坑(1)	61
図46	土坑(2)	63
図47	土坑(3)	66
図48	土坑(4)	68
図49	土坑(5)	71
図50	土坑(6)	72
図51	土坑(7)	73
図52	土坑(8)	74
図53	土坑(9)	75
図54	土坑(10)	76
図55	土坑(11)	77
図56	土坑(12)	78
図57	溝状土坑(1)	80
図58	溝状土坑(2)	82
図59	溝状土坑(3)	84
図60	溝状土坑(4)	85
図61	R-30遺物集中ブロック(1)	87
図62	R-30遺物集中ブロック(2)	88
図63	R-30遺物集中ブロック(3)	89
図64~91	遺構外出土遺物(土器)(縄文時代1~28)	97
図92~99	遺構外出土遺物(剥片石器)(縄文時代29~36)	128
図100~113	遺構外出土遺物(礫石器)(縄文時代37~50)	139
図114~116	遺構外出土遺物(土製品)(縄文時代51~53)	156
図117	遺構外出土遺物(石製品)(縄文時代54)	159
図118	焼土遺構	160
図119・120	遺構外出土遺物(古代)(近世・近代)	161
図121~126	総括 縄文時代前期後葉の土器	185
図127	総括 縄文時代中期~晩期の土器	193
図128~132	総括 土製品・石製品	195
図133~136	総括 剥片石器	202
図137・138	総括 礫石器	209
図139~145	総括 津軽海峡域における円筒土器文化期の集落動態	213
図146~152	総括 古野(2)遺跡における集落変遷	224

写真図版目次

写真1	遺跡の立地・地形と縄文時代前・中期の遺構群	258
写真2	遺跡南側 調査区	259
写真3	竪穴建物跡調査状況・基本層序	260
写真4・5	第1号竪穴建物跡(1)・(2)	261
写真6・7	第2号竪穴建物跡(1)・(2)	263
写真8・9	第3号竪穴建物跡(1)・(2)	265

写真10～12 第4号竪穴建物跡(1)・(2)・(3)	267
写真13～15 第5号竪穴建物跡(1)・(2)・(3)	270
写真16 第6号竪穴建物跡・第7号竪穴建物跡(1)	273
写真17 第7号竪穴建物跡(2)	274
写真18 第8号竪穴建物跡	275
写真19・20 第9号竪穴建物跡(1)・(2)	276
写真21 第1・2・3号土坑	278
写真22 第4・5号土坑	279
写真23 第6・7・8・10号土坑	280
写真24 第11・12・13・14号土坑	281
写真25 第15・16・17・18号土坑	282
写真26 第18・19・20・21号土坑	283
写真27 第1・2・3・4号溝状土坑	284
写真28 第5・6・7・8・9・10号溝状土坑	285
写真29 第10・11・12・13・14・15号溝状土坑	286
写真30 R-30 遺物集中ブロック	287
写真31 遺構外・斜面調査状況	288
写真32 焼土遺構・調査風景ほか	289
写真33～42 遺構内出土遺物(縄文時代1～10)	290
写真43～70 遺構外出土遺物(縄文時代1～28)	300
写真71 遺構外出土遺物(古代・近世・近代)	328

表目次

表1 古野(2)遺跡と周辺の遺跡一覧	10
表2 微細遺物水洗選別サンプル出土の微細剥片数	207
表3 第Ⅲ層出土剥片石器 器種・石材組成表	207
表4 礫石器 石器・石材組成表	208
表5 北海道・北東北の円筒土器型式期の広域編年案	211
表6 時期ごとの集落数	213
表7 時期ごとの集落数(地域ごと)	213
表8 津軽海峡域の集落集成表	219
表9 土器観察表	237
表10 剥片石器観察表	249
表11 礫石器観察表	252
表12 土製品観察表	255
表13 石製品観察表	256
表14 古代遺物観察表	257
表15 近世・近代陶磁器観察表	257
表16 近世ガラス観察表	257
表17 近世銭貨観察表	257
表18 近世金属製品観察表	257

第1章 調査概要

第1節 調査に至る経緯

下北地域広域避難路確保対策事業予定地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについては、平成25年度から青森県県土整備部道路課及び下北地域県民局地域整備部道路施設・高規格道路建設課（以下「道路施設課」）と青森県教育庁文化財保護課（以下「文化財保護課」）が継続的に協議・踏査を重ねてきた。用地買収や立木伐採等上物撤去の進捗状況に合わせて、文化財保護課が2回の試掘確認調査を行った。平成28年11月の試掘調査では工事用センター杭No. 0～4工区を対象とし、遺構が確認された（青森県教委 2017）。平成29年5月の試掘調査では工事用センター杭No. 4～16工区を対象とし、一部工区において遺構・遺物が確認された。これらの調査結果により、工事用センター杭No. 0～12工区及び周辺域は「古野(2)遺跡」、工事用センター杭No. 14～16工区及び周辺域は「古野(3)遺跡」として平成29年度に周知の埋蔵文化財包蔵地の新規登録がなされ、工事施工前の本発掘調査が必要であるとした（青森県教委 2018）。

この結果を受け、再度道路施設課と文化財保護課との間で協議を行ったが遺跡の現状保存が困難であることから、工事優先箇所や他調査事業との調整を経て、平成30年度に古野(3)遺跡を、平成30～令和元年度に古野(2)遺跡の本発掘調査を完了する計画とし、青森県埋蔵文化財調査センターが調査を担当することとなった。

古野(2)遺跡については、平成30年2月27日付け下県局整備第1344号で下北地域県民局長から文化財保護法第94条第1項の土木工事等のための発掘に関する通知がなされ、青森県教育委員会教育長が平成30年3月16日付け青教文第1698号で工事着手前の本発掘調査（記録保存調査）を指示している。

（神）

第2節 調査の方法

（1）発掘作業の方法

〔測量基準点・水準杭の設置・グリッド設定〕調査区設定・遺構測量に用いた基準点設置は、有限会社下北測量に委託し、調査区内に4級基準点8点を打設した。基準点からの測量に支障が生じた場合、調査区内の任意点に座標を移動し使用した。グリッドは世界測地系による国土座標値を基準として4×4mに設定した。古野(2)遺跡と共に調査を行った古野(3)遺跡の調査区全域を含むように、原点A-1は平面直角座標第X系のX=165,400、Y=12,850とした。各グリッドは西から東方向にアルファベットを、北から南方向に算用数字を1から付し、北西隅の組み合わせで呼称した。

〔基本土層〕基本土層は、試掘調査の結果を踏まえ、調査区の堆積を把握できるように、主に調査区壁面で確認し、上位から層順に第Ⅰ層、第Ⅱ層とローマ数字を付した。基本土層は、土層観察時に色調や混入物により第Ⅲa・第Ⅲb層などと細別した箇所もあるが、遺物取り上げは大別層にて行った。

〔遺構外の調査〕人力あるいは重機を用い、表土及び第Ⅱ層を掘り下げ、遺構確認作業を行った。遺構外出土と判断した遺物は、調査グリッドと出土層等を記録し取り上げた。同一個体がまとまって出土した土器などは、トータルステーションで出土地の詳細な記録を行った。

濃淡はあるものの、調査区南側全域で第Ⅲ層を中心に縄文時代前期・中期の遺物を主体として、後期・晩期の遺物も少量出土している。しかし、平成30年度に調査を行った遺跡の北端寄りでは、遺構検出もなく、遺物出土も極めて少ない状況であった。

遺構外では2地点において、まとまった遺物の出土が見られた。R-30グリッドを中心とした遺物集中ブロックと呼称した平坦地形の区域と調査区南東側の斜面である。R-30グリッド周辺では縄文時代前期後葉の円筒下層d式期の土器が同一標高で出土し、当初竪穴建物跡の可能性を考えたが、遺物集中ブロックとして認定し、トータルステーションを用いて、各遺物の出土位置の記録を行った。同一区域の第8号溝状土坑から出土した円筒下層d式土器も、本来この集中ブロックに由来するものが、溝状土坑内に落ち込んだ可能性が高い。調査区南東側の斜面ではQ-47・48グリッドを中心に、調査区際に沿って長さ20mほどの範囲で、多くの円筒下層d式期と縄文時代中期後葉の榎林式期の遺物が出土した。それらはグリッド・層位で取上げを行った。一部に、グリッドの誤認によって、調査区外のグリッドからの出土と記録された遺物も存在する。

〔遺構の調査〕遺構の検出は主に基本土層の第Ⅳ層上面で行った。検出遺構は、原則として確認順に番号を付し、略称(SI〇〇、SK〇〇、SV〇〇…)との組み合わせで呼称し、精査を行った。堆積土層観察用のセクションベルトは、主に土坑・溝状土坑は2分割、竪穴建物跡は4分割で設定し、調査を行った。

遺構内堆積土には、確認面から順に層序番号を算用数字で付し、ローマ数字の基本土層と区別した。遺構内遺物の出土位置の記録は、ソキア製トータルステーションによる測量点を元に、株式会社CUBIC製「遺構実測支援システム」を用いたデジタル測量を行い、一部の遺構は株式会社知立造園に測量委託を行った。

竪穴建物跡、土坑等の平面図および堆積土の断面図は、グリッド杭を用いた簡易遣り方測量および前述のデジタル測量のいずれかによって、原則として縮尺1/20の実測図を作成した。遺構内の出土遺物については、層位ごとに取り上げた。また、出土状況によっては、遺物微細図の作成も行った。

〔写真撮影〕原則として35mmモノクローム、35mmカラーリバーサル、および約1,800万画素のデジタルカメラを併用し、発掘作業状況、土層の堆積状況、遺物の出土状況、遺構の検出・精査状況、完掘後の全景等を記録した。

(2) 整理・報告書作成作業の方法

〔図面類の整理〕遺構は、株式会社CUBIC製「遺構実測支援システム」で作成した平面図・堆積土層断面図または簡易遣り方実測で作成した堆積土層断面図の調整を行った。図面の測量点等については、エクセルファイル(.xlsx形式及び.csv形式)でHDD及びDVD-Rに保存した。

〔写真類の整理〕35mmモノクロームフィルムは撮影順にネガアルバムに整理収納し、35mmカラーリバーサルフィルムとデジタルカメラのデータは遺構ごとに整理し、スライドファイルまたはHDDに保存した。

〔遺物の洗浄・注記と接合・復元〕遺物の注記は、調査年度、遺跡名、遺構名またはグリッド、出土層位、取り上げ番号を略記した。直接注記できないものは、収納した袋に記載した。

〔報告書掲載遺物の選別と観察・図化〕縄文土器・陶磁器については、時期・型式毎に分類した上

で、遺構の構築時期を示す資料、時期・型式の特徴を良く表す復元資料を主として選別した。その他の遺物については、器種毎に分類した上で、遺構に伴って出土した資料、遺存状態が良く同類の中で代表的な資料を主として選別した。

一定の形状を復元した資料や遺構の構築時期を示す資料については、原則として実測図を作成して形状・特徴等を記録し、観察表を作成した。

〔遺物の写真撮影〕 有限会社無限に委託して実施した。質感や製作技法等を表現するよう留意して撮影した。

〔自然科学分析〕 石器の石材産地を同定するために石質鑑定を専門家に依頼した。株式会社パレオ・ラボに黒曜石の産地同定分析を、第一合成株式会社に委託し選別した土壌内容物を、パリノ・サーヴェイ株式会社に種子・骨同定の分析を委託した。放射性炭素年代測定は、株式会社加速器分析研究所に委託した。

〔遺物の実測・遺物写真切り抜き〕 土器実測の一部は株式会社シン技術コンサル東北支店および株式会社アルカに委託した。剥片石器の実測の一部は、株式会社ラングに委託した。土器・剥片石器・礫石器のトレースは、株式会社 CUBIC製「遺構実測支援システム」またはアドビ株式会社製Illustratorを用いて行った。遺物写真の切り抜きは、株式会社知立造園に委託した。写真図版はアドビ株式会社製Photoshopで調整した。版下はAdobe社製IndesignおよびIllustratorを用いて行った。

(永 嶋)

第3節 調査及び整理体制

(1) 発掘調査体制

平成30年度の発掘調査は隣接する古野(3)遺跡と並行して行うこととし、古野(2)遺跡はセンター杭No.0-4間とNo.8-11の平坦地と一部斜面地を調査対象とした。

令和元年度の古野(2)遺跡の発掘調査は、前年に終了した調査区を除いて行った。

〔平成30年度〕

調査担当者	青森県埋蔵文化財調査センター	
	所長	安田 正司 (平成31年3月定年退職)
	次長(総務GM)	黒滝 雅信 (平成31年3月定年退職)
	調査第三GM	神 康夫 (総括主幹)
	文化財保護主幹	永嶋 豊 (発掘調査担当者)
	文化財保護主幹	野村 信生 (発掘調査担当者・現文化財保護課)
	文化財保護主幹	平山 明寿 (発掘調査担当者)

専門的事項に関する指導・助言

調査員	福田 友之	元青森県立郷土館副館長 (考古学)
〃	上條 信彦	国立大学法人弘前大学人文社会科学部准教授(現教授) (考古学)
〃	根本 直樹	国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科講師 (地質学)

〔令和元年度〕

調査担当者	青森県埋蔵文化財調査センター		
	所長	鈴木 学	(令和2年3月定年退職 現スポーツ健康課総括主幹専門員)
	次長(総務GM)	川村 和夫	
	調査第三GM	神 康夫	(総括主幹)
	文化財保護主幹	永嶋 豊	(発掘調査担当者)
	文化財保護主事	藤田 祐	(発掘調査担当者)
	文化財保護主事	加藤 渉	(発掘調査担当者)

専門的事項に関する指導・助言

調査員	福田 友之	元青森県立郷土館副館長 (考古学)
〃	関根 達人	国立大学法人弘前大学人文社会科学部教授 (考古学)
〃	根本 直樹	国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科講師 (地質学)
〃	佐々木 実	国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科講師 (地質学)

(2) 整理・報告1書作成体制

〔令和元年度〕

整理主体	青森県埋蔵文化財調査センター		
	所長	鈴木 学	(令和2年3月定年退職 現スポーツ健康課総括主幹専門員)
	次長(総務GM)	川村 和夫	
	調査第二GM	笹森 一朗	(令和2年3月定年退職 現埋蔵文化財調査センター文化財保護主幹)
	文化財保護主幹	永嶋 豊	(報告書作成担当者)
	文化財保護主幹	平山 明寿	(報告書作成担当者)
	文化財保護主事	藤田 祐	(報告書作成担当者)

〔令和2年度〕

整理主体	青森県埋蔵文化財調査センター		
	所長	佐藤 禎人	
	次長(総務GM)	川村 和夫	
	調査第二GM	齋藤 岳	
	文化財保護主幹	永嶋 豊	(報告書作成担当者)
	文化財保護主幹	平山 明寿	(報告書作成担当者)
	文化財保護主事	藤田 祐	(報告書作成担当者)
	文化財保護主事	長谷川 大旗	(報告書作成担当者)

(永嶋)

第4節 発掘・整理作業経過

(1) 発掘作業の経過

平成30年度の古野(2)遺跡・古野(3)遺跡の発掘調査は、6月12日に開始し、10月19日に終了した。令和元年度の古野(2)遺跡の発掘調査は、平成31年4月24日に開始し、令和元年8月9日に終了した。発掘作業の経過は以下のとおりである。

[平成30年度]

- 6月12日 午前中、発掘調査作業員に作業の説明等を行った。
午後には発掘器材等の搬入と調査開始にかかる当センター所長の挨拶を終えた後に、発掘調査を開始した。
- 6月中～下旬 古野(2)遺跡センター杭No.0～4では、重機で表土を除去した後に、人力で遺構確認作業を行ったが遺構が検出されなかったため、杭No.7～10間も調査に着手した。
- 7月上～中旬 遺構確認作業、遺物取り上げ作業を継続的に実施し、古野(2)遺跡で縄文時代の竪穴建物跡3軒、土坑3基を検出した。
- 7月26日 「夏休みに考古学者になろう」を古野(2)遺跡で行い、下北地域を中心に県内各地より多数の親子連れが参加し、発掘調査体験、測量体験、写真撮影体験を行った。
- 8月上～中旬 古野(2)遺跡・古野(3)遺跡共に、遺物出土層を掘り下げながら、遺構確認作業を継続して行い、11～20日は現場は休止し、21日(火)に調査を再開した。
- 8月下旬 古野(2)遺跡・古野(3)遺跡共に、継続して遺物出土層を掘り下げながら、遺構確認作業を行った。
- 9月 古野(3)遺跡を中心に遺物包含層の掘り下げと遺構確認を行い、遺構を検出した。
- 10月上旬 むつ市教育委員会中央公民館の市民向け講座「むつ市民大学 遺跡ゼミナール」が、古野(2)・(3)遺跡で行われ、むつ市担当者3名と市民13名が訪れた。
- 10月5日 古野(2)・(3)遺跡の現地見学会を行い、風間浦村内外より34名が参加した。
- 10月中旬 古野(3)遺跡の調査へ作業を集中し、遺構精査と遺物包含層掘り下げを優先させた。
- 10月19日 午前中に、作業機材等の片付け・清掃を行い、午後には調査器材を県埋蔵文化財調査センターへと搬送し、すべての作業を終了した。

[令和元年度]

- 4月24日 作業概要や作業上の諸注意等の説明を行い、班分けや調査事務所・機材庫・作業員プレハブの整備を行った。当センター所長が作業開始にかかる挨拶を行った後、調査機材が到着した。午後より、人力による表土剥ぎを開始した。
- 5月 竪穴建物跡や土坑、溝状土坑を新たに検出し、前年度に続き遺構番号を付し、それぞれSI04、SK04、SV01と命名し、精査を開始した。5月を通じて、表土除去と遺構確認作業を進め、竪穴建物跡はSI05まで検出した。遺構の可能性のある箇所は適宜、ベルトを残しながら、掘り下げを進めた。

- 6月 遺物出土が少ない区域は、バックホーおよびクローラードンプを用いて、表土剥ぎと排土移動を行った。中旬からは、平場と斜面の二カ所に調査を分散した。
 竪穴建物跡はSI08まで検出し、精査を進めた。縄文時代中期後葉の榎林式期のSI04の床面中央で大型の石囲炉を検出した。溝状土坑もSV07まで検出され、精査を進めた。中旬には、斜面上位で複数基のフラスコ状土坑を検出した。中でも縄文時代後期前葉のSK05は土坑底面において、深鉢2点が潰れた状態で出土した。
- 7月 斜面のQ-47・48グリッド周辺の調査に着手した。調査を進めるにつれて、縄文時代前期後葉と中期後葉の一定規模以上の捨て場であることが判明した。台地上位の平坦面の遺構精査が進んだことから、作業を斜面捨て場に集中した。
 7月18日に斜面捨て場より、縄文時代中期後葉（榎林式）の土偶の頭部と上半身が出土した。
- 7月27日 古野(2)遺跡の見学会を行った。風間浦村教育委員会より、事前の村内各所へのチラシ配布・見学会の大型看板の作成、当日の村内放送による参加呼び掛けや佐賀教育課長による見学会の応援などの多大な支援を受け、参加者は前年度の約3倍の90名に上った。下北半島からの参加者が大多数であったが、上北地方からの参加も見られた。
- 8月上旬 8月6日、風間浦村と縁が深い同志社中学校の生徒と引率教員、風間浦村教育長、風間浦村中学校長、風間浦村教育委員会職員が土偶および遺跡の見学に訪れ、翌8月7日には、風間浦中学校生徒39名と引率教員が見学に訪れた。
 平場の遺構精査は順調に進み、斜面捨て場の調査も徐々に終了に向かい、8月8日に終了した。並行してリース機材の片付けや調査機材の清掃・整理、業者による産業廃棄物の回収を行った。
- 8月9日 午前に、風間浦村村議会による視察があった。また当センター所長より調査終了にあたっての挨拶が行われ、発掘調査を完了した。

(2) 整理・報告書作成作業の経過

報告書刊行事業は、令和元年度および2年度に行った。整理・報告書作成作業は平成31年4月1日から令和3年3月31日までの期間で行った。発掘調査では段ボール箱換算で196箱の土器類、石器類、金属製品、陶磁器が出土している。このことから、これらに応じた整理作業の工程を計画した。報告書は遺構や遺物の数に応じて各々の記載にあてることとした。

整理・報告書作成作業の経過は以下のとおりである。

[令和元年度]

平成30年発掘調査出土の古野(2)遺跡の遺物を、出土場所・層位ごとの仕分け・数量計測を行った。その後、古野(3)遺跡から出土した遺物を優先して整理作業を進めた。

[令和2年度]

- 4～6月 土器・礫石器は、調査区ごとの仕分けと数量計測を行った後、整理作業を開始した。土器は遺構内遺物から接合作業を行い、6月末には概ね完了し、復元作業へと移行し

- た。剥片石器は掲載遺物候補の選別と分類を行った。礫石器は掲載遺物の選別を行いながら、実測を開始した。
- 7～8月 接合・復元が進んだ縄文土器の実測図作成を、株式会社シン技術コンサル東北支店に委託した。残りの復元作業も順調に進み、さらに実測図作成を株式会社アルカに委託した。実測図を作成するもの以外に報告書に掲載する遺物の選別を行い拓本図作成と断面実測へと移行した。
- 剥片石器は、8月末までに分類と報告書掲載遺物の選別が完了した。
- 礫石器は、7月中に通りの実測図作成を完了し、8月よりトレースに着手した。遺構図の調整も開始した。
- 9～10月 土器は拓本・断面実測作成を継続した。陶磁器は掲載遺物の選別を行った。剥片石器は実測図作成を委託するものの選別を行い、礫石器はトレースを継続した。土製品・石製品の図化を開始した。遺構図調整は10月中旬に完了した。
- 11月 委託した土器実測図の修正指示を行い、納品となった。土器断面実測図のトレースも開始した。
- 剥片石器も実測図作成を株式会社ラングに委託し、礫石器はトレースを継続した。資料化が完了したのから、各種図版作成作業と共に報告書掲載遺物観察表の作成を行った。また、遺物の写真撮影を行うとともに、報告書の原稿執筆を開始した。
- 12月～ 原稿・版下が揃ったので報告書の割付・編集作業を行い、印刷業者を入札・選定し、契約事務を完了した。
- 1月～ 遺物写真図版を作成し、印刷業者へ原稿及び版下を入稿した。
- 2月～ 校正、及び出土遺物・記録類の整理を行った。
- 3月10日 3回の校正を経て、報告書を刊行した。
- 3月下旬 記録類、出土遺物等を整理して収納した。

(永 嶋)



図1 遺跡位置図

電子地形図 25000 (国土地理院) を加工して作成

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置と周辺と対岸の縄文遺跡

1 古野（2）遺跡の周辺の遺跡

本遺跡は、青森県下北郡風間浦村大字易国間字古野に所在し、下北半島の北西部、大間崎の南東約9kmに位置する。津軽海峡に向かって北東に流れる目滝川の河口から約0.6kmの標高、約37～44mの海成段丘の左岸に立地する。南東には古野（3）遺跡が隣接し、対岸には、小易国間遺跡や小倉畑遺跡がある。古野（3）遺跡は、発掘調査により、縄文時代中期中葉と後期初頭の遺物が多く出土し、後期初頭の建物跡等を検出している。古野（2）遺跡の調査では、縄文時代前期後葉の斜面捨て場、竪穴建物跡や土坑等、縄文時代中期後葉の斜面捨て場、竪穴建物跡や土坑が検出された。縄文時代前期後葉については、斜面捨て場から膨大な遺物が出土したが、遺物量に相当する居住域が検出されなかった。居住域は、北西側の平地に位置する古野（2）遺跡の未調査域や古野（1）遺跡が想定できる。

古野（2）遺跡の周辺の遺跡を図1に、遺跡の一覧を表1に示した。風間浦村域24遺跡、大間町域28遺跡、合わせて52遺跡ある。当地域は、発掘調査事例が少なく内容が判明している遺跡は少ない。

本遺跡は、下北半島の北端に位置し、津軽海峡を挟んだ対岸の北海道汐首岬まで約30kmの距離にあり、道南地域との交流を視野に入れた検討が必要である。津軽海峡域（道南地域、津軽半島北端、下北半島）における、本報告の主要な2時期、縄文時代前期後葉と中期後葉の集落分布を図2に示し、概略を述べる。集成方法や、詳細な分析等については第5章 第6節を参照されたい。

前期後葉（円筒下層c～d式期）（図2-1）は、多くの集落がある時期である。本遺跡北西側の拠点集落である風間浦村沢ノ黒遺跡には捨て場が2箇所ある。むつ市川内町熊ヶ平遺跡は竪穴建物跡が8棟、平坦部に捨て場がある。他に、石持納屋遺跡は竪穴建物跡が5棟、住居内捨て場がある。田野沢山（1）遺跡は竪穴建物跡が5棟ある。津軽半島では、中の平遺跡や山崎遺跡がある。中の平遺跡では前期後葉から後期にわたる大規模な盛土があることから、拠点集落と想定され、山崎遺跡には、斜面捨て場がある。津軽海峡を挟んで対岸の恵山地域では、浜町A遺跡、釜谷2遺跡、豊原4遺跡といった拠点集落が多くある。浜町A遺跡は、竪穴建物跡が12棟あるなど大規模な集落と考えられる。松前半島の南東側には拠点集落を含め多数の集落が密集する。

中期後葉（榎林～大木10式併行期）（図2-2）は、道南地域に集落が多い。一方、下北半島では遺跡数自体が少なく、集落は本遺跡を含み3遺跡である。瀬野遺跡では、竪穴建物跡が3棟見つかった。酪農（1）遺跡は、中期末～後期初頭が想定される竪穴建物跡が29棟が小さな環状を呈するように検出された。津軽半島では、山崎遺跡で竪穴建物跡が8棟検出されている。

恵山地域では、前述した遺跡の他に高屋敷川1遺跡や石倉貝塚がある。豊原4遺跡で竪穴建物跡が34棟、中期を通じた盛土が検出され拠点集落の様相を呈する。松前半島の南東側は遺跡数が減るが、拠点集落は複数ある。函館湾の北東側には、サイベ沢遺跡等の拠点集落や集落が密集して分布する。

本州北端部と比べ、道南部の津軽海峡域では、調査事例が多く圧倒的に集落数、その規模とも多い。円筒土器文化期を通じて、絶え間なく拠点集落、集落がみられる。本遺跡を含む本州北端部では、津軽海峡域の交易を通じて、道南部の影響を受けながら集落が営まれていたと考えられる。（長谷川）

表1 古野(2)遺跡と周辺の遺跡一覧

町村	遺跡番号	遺跡名	時代											種別	備考		
			縄文						弥生	奈良	平安	中世	近世			近代	
			草	早	前	中	後	晩									
風間浦村	425001	折戸神社遺跡			○	○										散布地	
	425002	潜石(1)遺跡			○	○										散布地	
	425003	古釜谷平遺跡				○				○						集落跡	
	425004	古野(1)遺跡			○											散布地	
	425005	易国間神社遺跡			○											散布地	
	425006	小倉畑遺跡					○	○								散布地	
	425007	桑畑遺跡			○		○									散布地	貝塚?
	425008	鳥谷場遺跡			○	○										散布地	※
	425009	甲平ノ上遺跡				○	○									散布地	※
	425010	釜ノ沢遺跡				○	○									散布地	
	425011	大川目遺跡						○								散布地	
	425012	根戸内沢遺跡			○	○				○						散布地	
	425013	易国間遺跡					○	○								散布地	
	425014	易国間小学校遺跡								○						散布地	
	425015	小易国間遺跡					○									散布地	
	425016	下風呂(1)遺跡														散布地	時期不明※
	425017	下風呂(2)遺跡						○								散布地	※
	425018	折戸(1)遺跡			○	○	○									散布地	
	425019	沢ノ黒遺跡	●?		○	○	○									集落跡	
	425020	潜石(2)遺跡								○	●					集落跡	縄文時代
	425021	古野(2)遺跡			○	●	●	●			●	●	●	●		集落跡	
425022	古野(3)遺跡			●	●	○	●				●	●			散布地		
425023	折戸(2)遺跡														散布地	縄文時代	
中世97	折戸坂遺跡										○				祭祀?	県史(2003)	
大間町	423001	材木遺跡					○									散布地	
	423002	小川代遺跡					○			○						配石遺構	
	423003	焼畑(1)遺跡					○	○								散布地	
	423004	奥戸遺跡						○								散布地	
	423005	大間遺跡						○		○						散布地	
	423006	冷水遺跡			○		○	○	○							散布地	
	423007	割石遺跡								○	○					散布地	
	423008	鳥間遺跡							○							散布地	
	423009	ドウマンチャ貝塚						○								貝塚	
	423010	大間平(1)遺跡						○		○						散布地	
	423011	大間平(2)遺跡			○											散布地	
	423012	白砂遺跡		●				●	●	○	○					散布地	
	423013	四十八館跡									○					城館跡	
	423014	奥戸館跡									○					散布地	
	423015	小奥戸(1)遺跡		●	●		●			○						散布地	
	423016	奥戸上道遺跡						○		○						散布地	
	423017	小奥戸(2)遺跡		●	●				●	○						散布地	
	423018	小奥戸(3)遺跡					○	○								散布地	
	423019	二ツ石(1)遺跡														散布地	縄文時代
	423020	二ツ石(2)遺跡								○						散布地	
	423021	二ツ石(3)遺跡								○						散布地	
	423022	二ツ石(4)遺跡						○								散布地	
	423023	田頭遺跡								○						散布地	
	423024	船橋遺跡								○						散布地	縄文時代
	423025	黒岩遺跡														散布地	縄文時代
	423026	小奥戸(4)遺跡		●				●	(●)	●	○					散布地	
	423027	山道遺跡														散布地	縄文時代
	423028	焼畑(2)遺跡														散布地	縄文時代

●：青森県教育委員会が調査した遺跡で、調査結果から加筆した時代。

※：図1に掲載されていない遺跡。

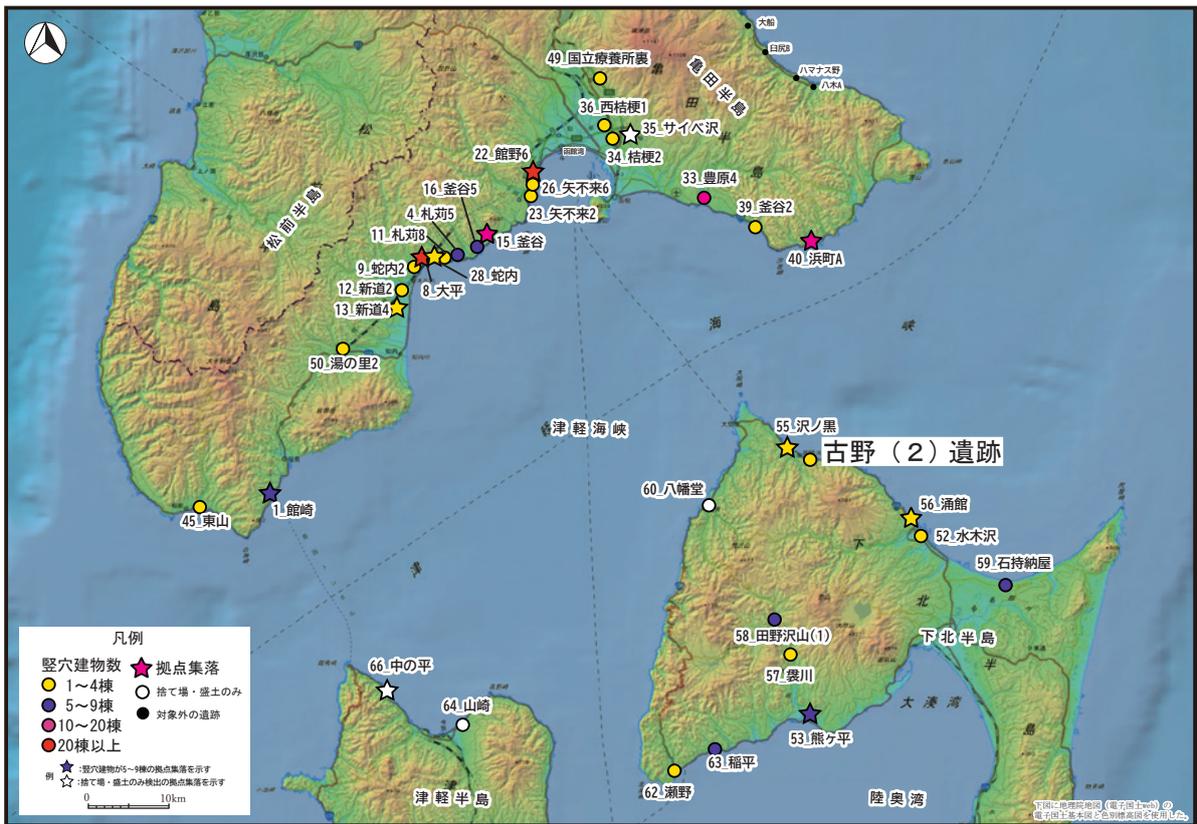


図2-1 縄文時代前期後葉における津軽海峡域の集落

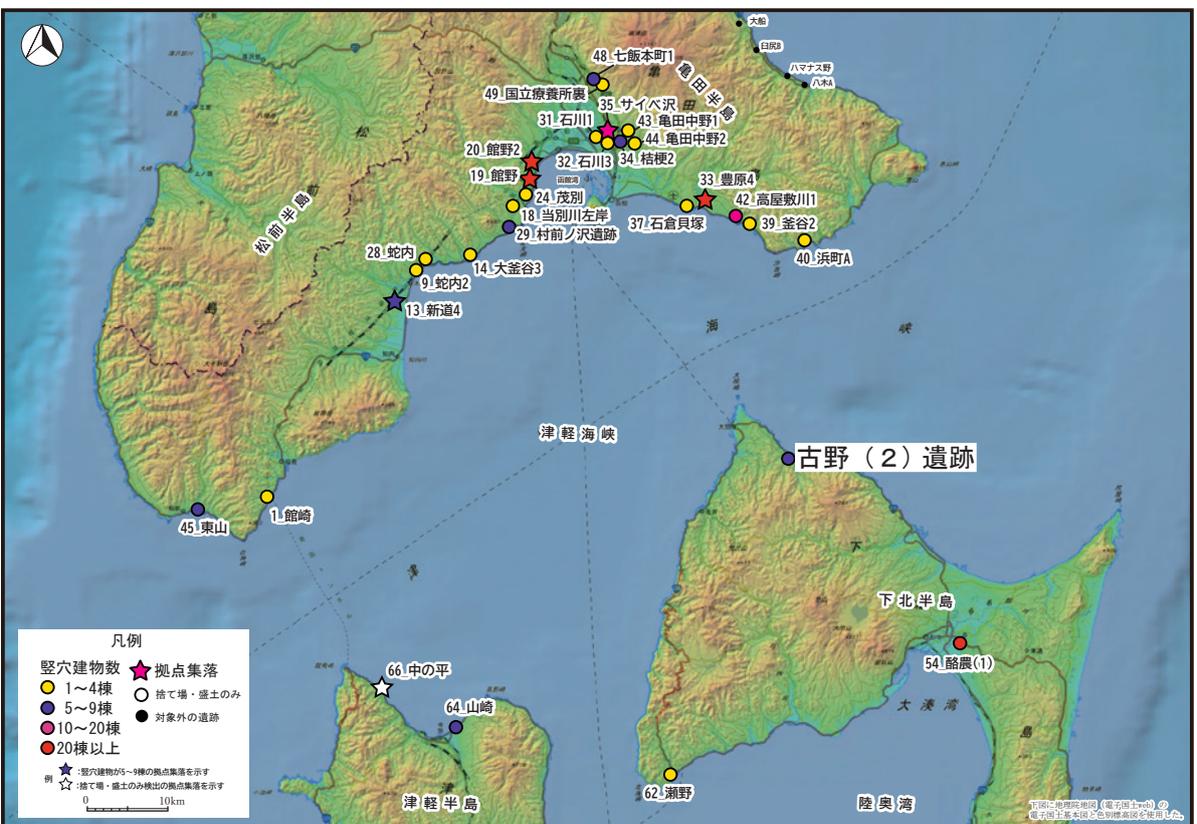


図2-2 縄文時代中期後葉における津軽海峡域の集落

第2節 古野(2)遺跡周辺の地形及び地質

弘前大学大学院理工学研究科 根本 直樹

1 古野(2)遺跡周辺の地形の概要

古野(2)遺跡は、下北郡風間浦村易国間字古野に位置する。地形的には、目滝川下流左岸の海成段丘面上からその南東の目滝川によって侵食された侵食崖にかけて分布する(図3)。標高は37~45mである(図4)。

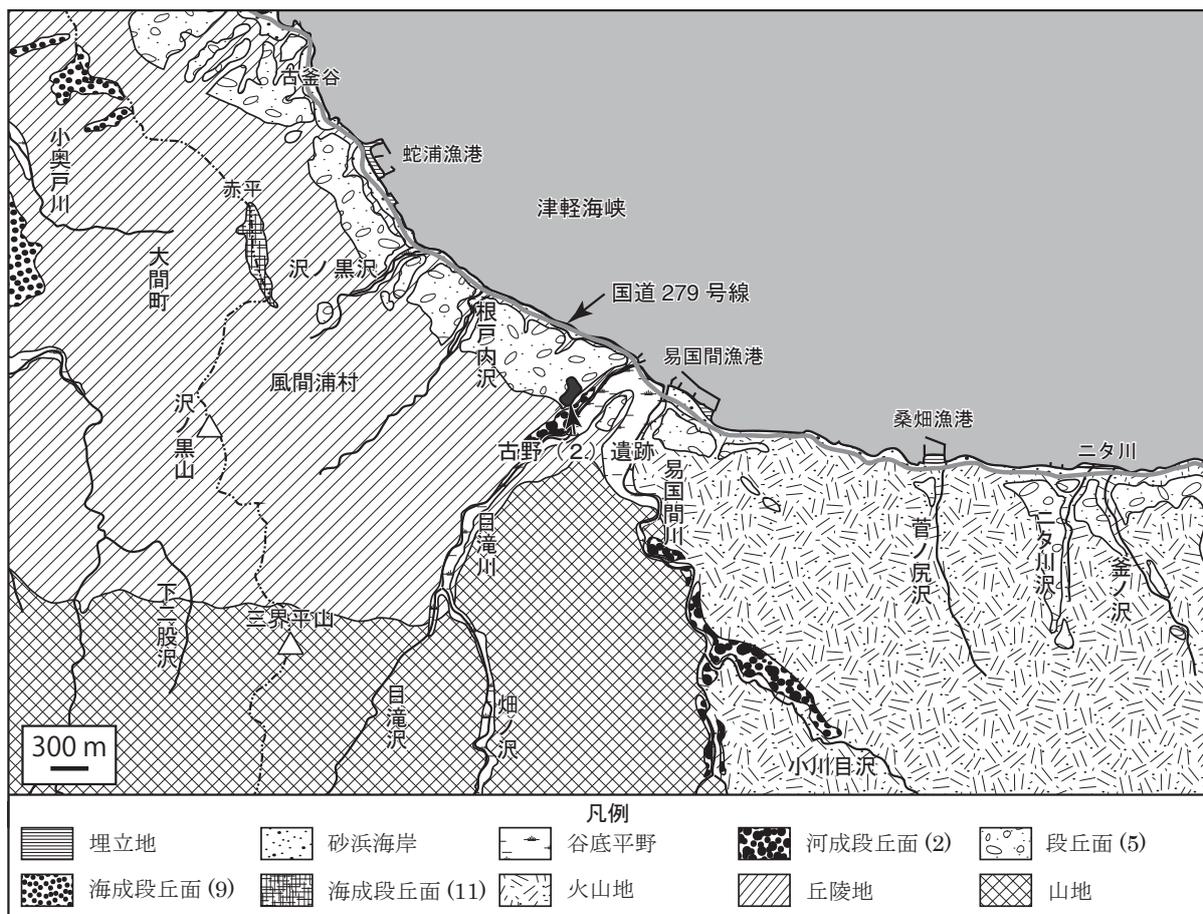


図3 古野(2)遺跡周辺の地形分類図(根本2020を改編)

古野(2)遺跡周辺の地形を概観すると、その周辺には丘陵地が広がり、その南方には山地が見られる。また、易国間川以東には火山地が広がる。丘陵地及び火山地には、数段の段丘が見られる。また、丘陵地及び火山地を北流する主要河川に沿っては、河成段丘及び谷底平野が狭長に分布する。さらに、海岸に沿っては砂浜海岸が狭長に、埋立地が断続的に分布する。

古野(2)遺跡南方の山地は、下北半島西部を占める恐山山地の北西端に当たり、水野・堀田(2000)の目滝山山地に属する。北に向かって標高を減じる。起伏量は300~500m/km²ある。

古野(2)遺跡周辺の丘陵地は、水野・堀田(2000)の大間丘陵に相当する。起伏量は100~200m/

km²である。この丘陵地も北に向かって緩やかに標高を減じ、津軽海峡に至る。

易国間川以東の火山地は、水野・堀田（1972）の燧岳火山地に相当する。むつ燧岳火山の北西麓に当たる。開析がかなり進んでいる。

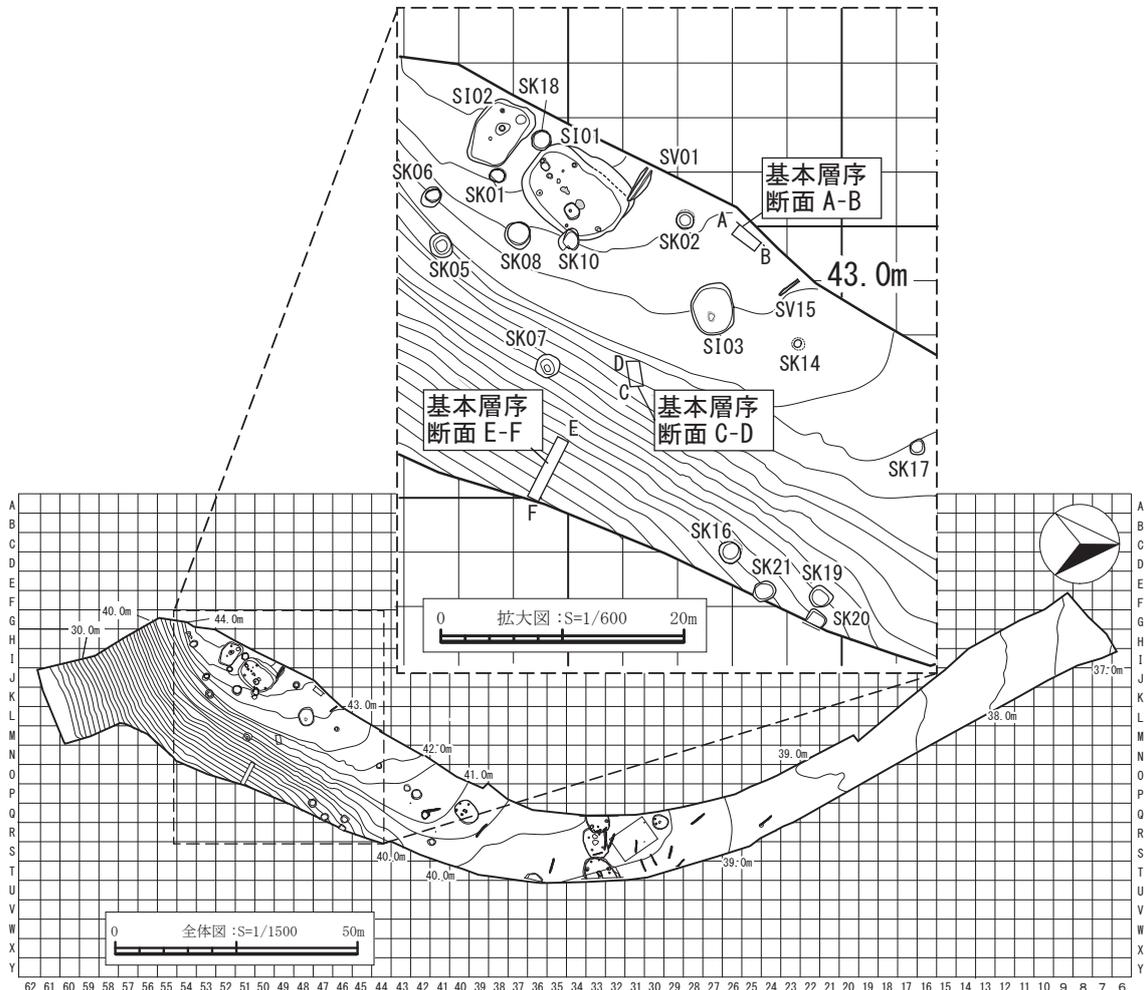


図4 古野(2)遺跡の地形(青森県埋蔵文化財調査センター作成の図を改編)

A-B, C-D, E-Fは、図7及び8に示した土層断面図を作成した位置を表す。

本稿では段丘を、根本（2020）に準じて海成段丘(11)、海成段丘(9)、段丘(5)、及び河成段丘(2)に細分する。

海成段丘(11)は、赤平付近に分布する。標高は160～170m程度である。新渡戸(1969)及び宮内(1988)の高位A面、渡辺ほか(2012)のH1面に相当する。小池・町田(2001)によると、海洋酸素同位体ステージ11(424,000～374,000年前；https://lorraine-lisiecki.com/LR04_MISboundaries.txt, 2020年12月14日閲覧)に形成された海成段丘である。

海成段丘(9)は、古釜谷西方の尾根沿い及び大間町の小奥戸川西方に分布する。標高は100～110m程度である。新渡戸(1969)及び宮内(1988)の高位B面、渡辺ほか(2012)のH2面に相当する。小池・町田(2001)によると、海洋酸素同位体ステージ9(337,000～300,000年前；https://lorraine-lisiecki.com/LR04_MISboundaries.txt, 2020年12月14日閲覧)に形成された海成段丘である。

段丘(5)は、風間浦村の古釜谷から同村のニタ川東方にかけての海岸に沿って断続的に分布する。小池・町田(2001)の河成段丘の一部と海洋酸素同位体ステージ5(130,000~71,000年前; https://lorraine-lisiecki.com/LR04_MISboundaries.txt, 2020年12月14日閲覧)に形成された海成段丘、新渡戸(1969)の上位~下位面、水野・堀田(1972)の砂礫台地GtII、宮内(1988)の上位面及び低位面、水野・堀田(2000)の中位面(上位)及び中位面(下位)、渡辺ほか(2012)のM1面に相当する。海成段丘の標高は20~50m程度、河成段丘の標高は50~200m程度である。小池・町田(2001)が示した菅ノ尻以東の河成段丘は、後述の河成段丘(2)に比べて標高が高い。また、海岸付近での標高は海洋酸素同位体ステージ5に形成された海成段丘と一部重複する。津軽地域では、海洋酸素同位体ステージ5の河成段丘面は、同じステージの海成段丘面に連続する(吾妻1995)。したがって、菅ノ尻以東の河成段丘も海洋酸素同位体ステージ5に形成されたと考えられる。

河成段丘(2)は、目滝川、易国間川、及びその支流の小川目沢に沿って分布する。小池・町田(2001)の河成段丘の一部に相当する。最終氷期に形成された。

谷底平野は、主要河川に沿って狭長に分布する。水野・堀田(1972、2000)及び根本(2020)の谷底平野に相当する。



図5 古野(2)遺跡周辺の水系(根本2020を改編)

砂浜海岸は、古釜谷から同村のニタ川沢河口にかけての海岸に沿って断続的に狭長に分布する。水野・堀田(1972)の浜、水野・堀田(2000)の砂浜、及び根本(2020)の砂浜海岸に相当する。

埋立地は、蛇浦漁港、易国間漁港、及び桑畑漁港に分布する。水野・堀田(2000)及び根本(2020)の埋立地に相当する。

水系は、易国間川以西の丘陵地及び山地では、本流が北ないし北々東へ向かう枝状水系である(図5)。易国間川以東では、北々西ないし北に向かう平行水系のように見えるが、むつ燧岳頂上を中心とする放射状水系の一部と考えられる。この相違は、易国間川を挟んで異なるこの地域の地質を反映していると解釈される。

2 古野(2)遺跡周辺の地質

古野(2)遺跡周辺の新第三系は、風間浦村の赤平から南南東に延びる背斜軸をもつ背斜構造によって特徴付けられる(図6)。これらは湯ノ川層、大間層、及び脇野沢安山岩類に区分される。新第三系の上位には、むつ燧岳火山噴出物と火山麓扇状地堆積物、段丘堆積物、及び沖積層が重なる。本地域に分布するむつ燧岳火山噴出物は、菅ノ尻火砕流堆積物、釜ノ沢火砕流堆積物、桑畑溶岩、易国間火砕流堆積物、及び立石沢火砕流堆積物である。以下に、各層について概説する。

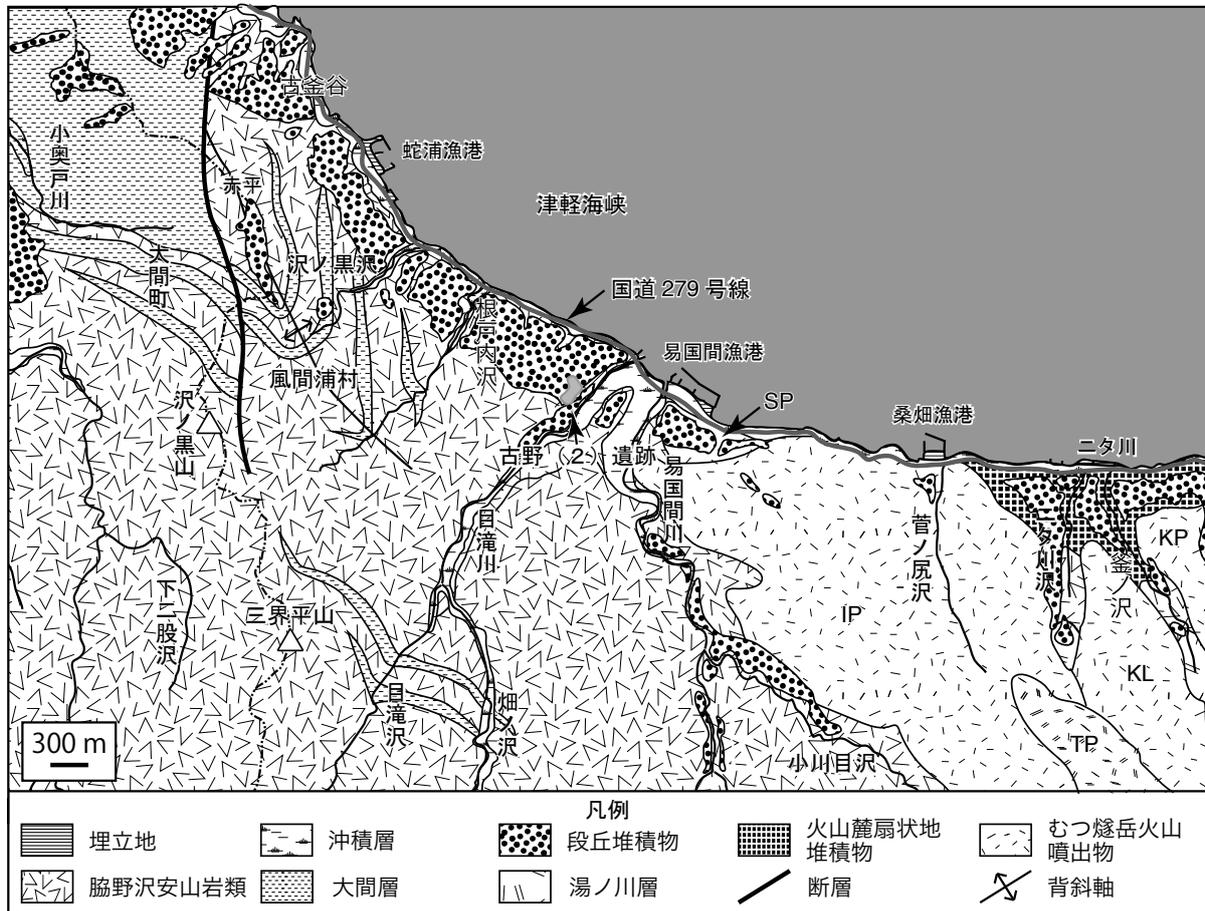


図6 古野(2)遺跡周辺の地質概略図(根本2020を改編)

むつ燧岳火山噴出物のSP、KP、KL、IP、及びTPは、それぞれ菅ノ尻火砕流堆積物、釜ノ沢火砕流堆積物、桑畑溶岩、易国間火砕流堆積物、及び立石沢火砕流堆積物を表す。

湯ノ川層の名称は、上村(1962)の湯ノ川緑色凝灰岩層に由来する。上村・斉藤(1957)の薬研層の大畑川緑色凝灰岩部層、根本(1998、2020)の湯ノ川層に相当する。模式地は、むつ市川内地区の和白沢の北岸から湯ノ川に至る一帯である。ニタ川沢と釜ノ沢にわずかに分布する。層厚は約450mで

ある。主に淡緑色を帯びたデイサイト質火砕岩類より成り、泥岩、砂岩、及び礫岩を伴う。本層の主体を成すデイサイト質火砕岩類は一般に塊状で、緑泥石化した軽石のほか、流紋岩、デイサイト、黒色のシルト岩等の角礫を含み、凝灰角礫岩、火山礫凝灰岩、軽石凝灰岩等の岩相を示す。

大間層は、上村（1962）により命名された。根本（1998、2020）の大間層に相当する。本層は黒色の泥岩を主とする。泥岩は珪質で硬質な層と軟質な層が互層を成す。大間崎より赤平西麓にかけて分布するほか、目滝川流域でも脇野沢安山岩類に挟まれてわずかに分布する。本層の上部には、淡緑灰色の凝灰岩や軽石凝灰岩が頻繁に挟在する。本層と湯ノ川層は分布域を異にしているため、両者の層位関係を確認することはできない。*Makiyama chitani*の化石が産出する。

脇野沢安山岩類の名称は、北村ほか（1959）の脇野沢安山岩質集塊岩に由来する。上村・斉藤（1957）の易国間集塊岩層、上村（1962）及び根本・鎌田（2000）の易国間安山岩類、根本（2020）の脇野沢安山岩類に相当する。易国間川以西に広く分布するほか、ニタ川沢と釜ノ沢にわずかに分布する。層厚は700mを超える。デイサイト～安山岩質の火山角礫岩、凝灰角礫岩、及び火山礫凝灰岩を主体とし、安山岩溶岩を挟有する。また、火山礫凝灰岩、凝灰質砂岩、シルト岩等の薄層を挟有する。資源エネルギー庁（1995）により $8.41 \pm 1.01\text{Ma}$ の全岩K-Ar年代が報告されている。湯ノ川層を不整合に覆う。大局的には大間層の上位に重なるが、本層下部と大間層上部は指交関係にある。

菅ノ尻火砕流堆積物は、梅田（1992）により命名された。易国間漁港南方に分布する2枚以上のフローユニットをもつ火砕流堆積物である。粒径20～30cm程度の角礫～亜角礫状の火山岩塊と同質の火山灰から成る。全体に塊状で淘汰が悪い。岩質は単斜輝石斜方輝石安山岩である。脇野沢安山岩類を覆う。

釜ノ沢火砕流堆積物は、梅田（1992）により命名された。ニタ川南東方に分布する火砕流堆積物である。本質岩片の岩質は、単斜輝石斜方輝石安山岩であり、稀に角閃石斑晶が認められる。全体に深層風化が進み、露頭での詳細な観察は困難である。これらの本質岩片はやや偏平しており、弱く溶結していると考えられる。また、本火砕流堆積物中には、閃緑岩の岩塊が含まれる。湯ノ川層及び脇野沢安山岩類を覆う。

桑畑溶岩は、梅田（1992）により命名された。ニタ川沢と釜ノ沢の間の尾根に分布する。暗灰色を呈するブロック状の溶岩で、岩質は石英含有単斜輝石斜方輝石安山岩である。一部は高温酸化を受けて淡赤色を呈する。湯ノ川層及び脇野沢安山岩類を覆う。なお、菅ノ尻火砕流堆積物、釜ノ沢火砕流堆積物、及び桑畑溶岩はむつ燧岳火山の旧期火山噴出物に属するが、旧期火山噴出物からは $1.15 \pm 0.05\text{Ma}$ （梅田・壇原2008）及び $0.73 \pm 0.05\text{Ma}$ （伴ほか1992）のK-Ar年代が得られている。

易国間火砕流堆積物は、梅田（1992）により命名された。風間浦村の易国間付近に分布する火砕流堆積物で、少なくとも3枚のフローユニットが認められる。発泡の悪い本質岩片と同質の粗粒火山灰によって構成される。岩質は単斜輝石斜方輝石安山岩である。湯ノ川層、脇野沢安山岩類、菅ノ尻火砕流堆積物、及び桑畑溶岩を覆う。

立石沢火砕流堆積物は、梅田（1992）により命名された。ニタ川沢上流域に分布する火砕流堆積物である。本火砕流堆積物は溶結しており、単斜輝石斜方輝石安山岩の岩片と同質の粗粒火山灰基質によって構成される。また、本火砕流堆積物中には粒径2～10cm程度の閃緑岩岩片が含まれる。桑畑溶岩及び易国間火砕流堆積物を覆う。易国間火砕流堆積物及び立石沢火砕流堆積物はむつ燧岳火山の第

2期噴出物に属する。第2期噴出物からは $0.77 \pm 0.10\text{Ma}$ 及び $0.81 \pm 0.14\text{Ma}$ のFT年代が得られている(梅田・壇原2008)。

火山麓扇状地堆積物は、ニタ川沢及び釜ノ沢の下流域に分布する。むつ燧岳火山噴出物由来の単斜輝石斜方輝石安山岩の岩塊とそれらを充填する土砂の基質から成る。淘汰が悪い。脇野沢安山岩類、釜ノ沢火砕流堆積物、桑畑溶岩、及び易国間火砕流堆積物を覆う。

段丘堆積物は、海洋酸素同位体ステージ11、9、及び5に形成された海成段丘と海洋酸素同位体ステージ5および最終氷期に形成された河成段丘の堆積物である。海成段丘堆積物は、中～巨円礫から成る厚さ4～5mの砂礫層と、それを覆う厚さ1～2mの細粒堆積物から成る。一部の海成段丘では、細粒堆積物中に洞爺火山灰を挟む。河成段丘堆積物は、礫層、砂層、及び粘土層から成る。厚さは数mである。

沖積層は、谷底平野堆積物及び砂浜海岸堆積物から成る。谷底平野堆積物は礫、砂、及び粘土から成る。河川の上流域では礫及び砂が多く、下流域では粘土の割合が増える傾向が認められる。砂浜海岸堆積物は、淘汰の良い砂から構成される。

3 古野(2)遺跡における土層の層序

古野(2)遺跡の土層について、青森県埋蔵文化財調査センターの調査結果を基に、以下に記述する。土層層序を観察したのは、A-B、C-D、及びE-F断面で、それらの位置を図4に示す。

基本層序断面A-Bの土層は、下位より第V～第I層に区分される(図7)。さらに第IV層は、下位より第IVb層及び第IVa層に細分される。第V層は黄褐色(10YR5/6)を呈する風成層(いわゆるローム層)で、粒径10～30cmで扁平な超円礫を5%含む。礫の大部分は安山岩から成る。第IVb層は明黄褐色(10YR7/6)を呈する風成層(いわゆるローム層)である。第IVa層は黄褐色(10YR5/6)を呈する風成層(いわゆるローム層)である。第III層は鈍い黄褐色(10YR5/4)を呈する土層で、長径1～5mmの炭質物を1%含む。耕作による欠損があり、側方への連続が悪い。第II層は暗褐色(10YR3/3)を呈する耕作土層である。基本的には第III層の上位に重なるが、第III層が欠落しているところでは第IVa層に直接重なる。第I層は黒褐色(10YR2/3)を呈する表土である。

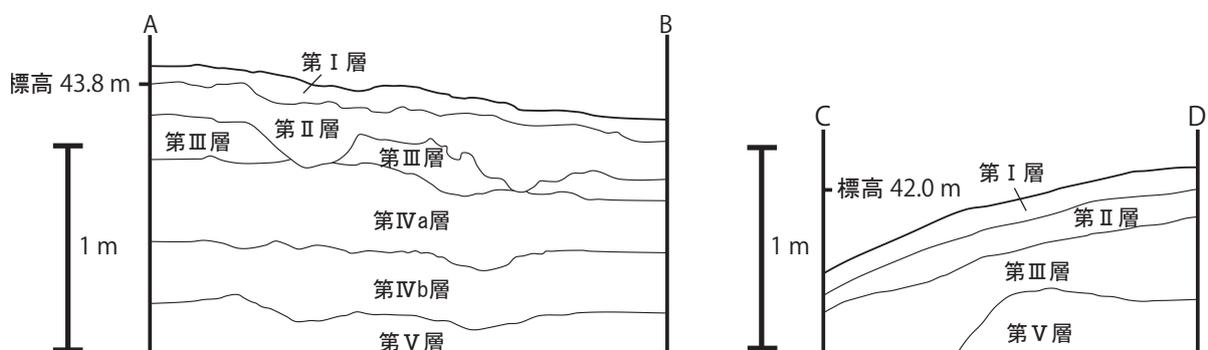


図7 基本層序断面A-B及びC-Dの土層断面図(青森県埋蔵文化財調査センターが作成した図を改編)

基本層序断面C-Dの土層は、下位より第V層及び第Ⅲ～第I層に区分される(図7)。第V層は粒径50～200mmで扁平な超円礫を45%含む礫層で、基質は黄褐色(10YR5/6)を呈する風成堆積物(いわゆるローム)である。礫の大部分は安山岩から成る。第Ⅲ層は鈍い黄褐色(10YR5/4)を呈する土層で、粒径50～100mmで扁平な超円礫を10%、長径2～5mmの炭質物を1%含む。礫の大部分は安山岩から成る。第Ⅱ層は暗褐色(10YR3/3)を呈し、耕作土層と思われる。第I層は黒褐色(10YR2/3)を呈する表土である。

基本層序断面E-Fの土層は、下位より第Ⅲb層、第Ⅲa層、及び第I層に区分される(図8)。第Ⅲb層は明褐色(7.5YR5/6)を呈する土層で、粒径15mm程度の円礫を20%、炭質物を1%含む。礫の大部分は安山岩から成る。第Ⅲa層は暗褐色(7.5YR3/3)を呈する土層で、炭質物を1%、粒径10mmの円礫を僅かに含む。礫の大部分は安山岩から成る。第I層は褐色(7.5YR4/3)を呈する表土である。

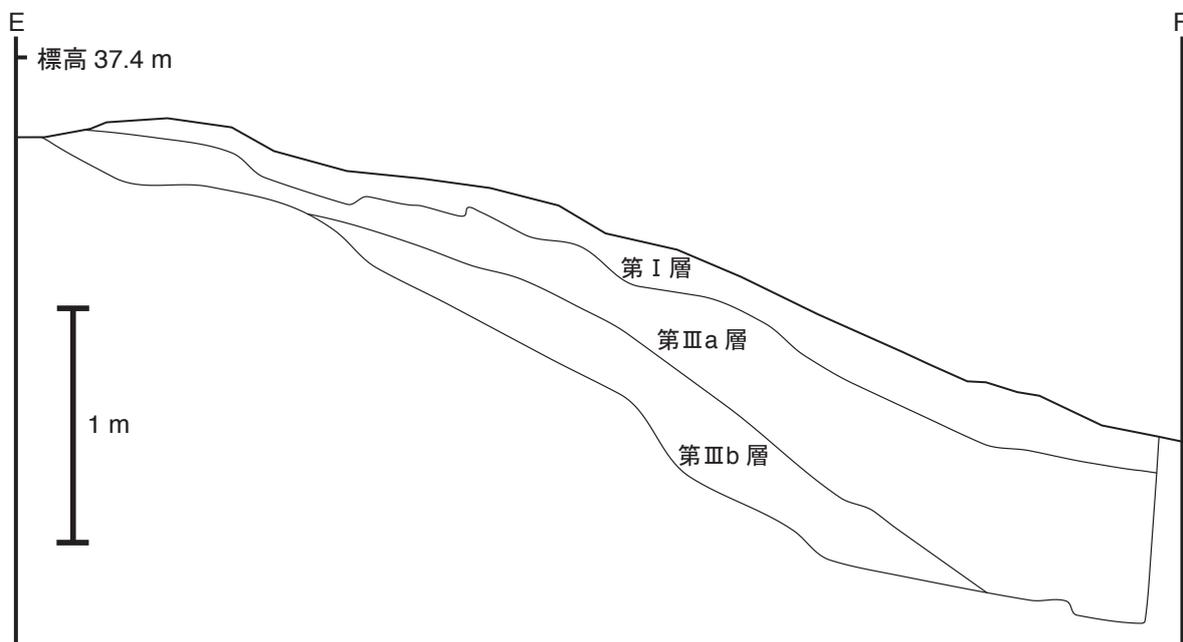
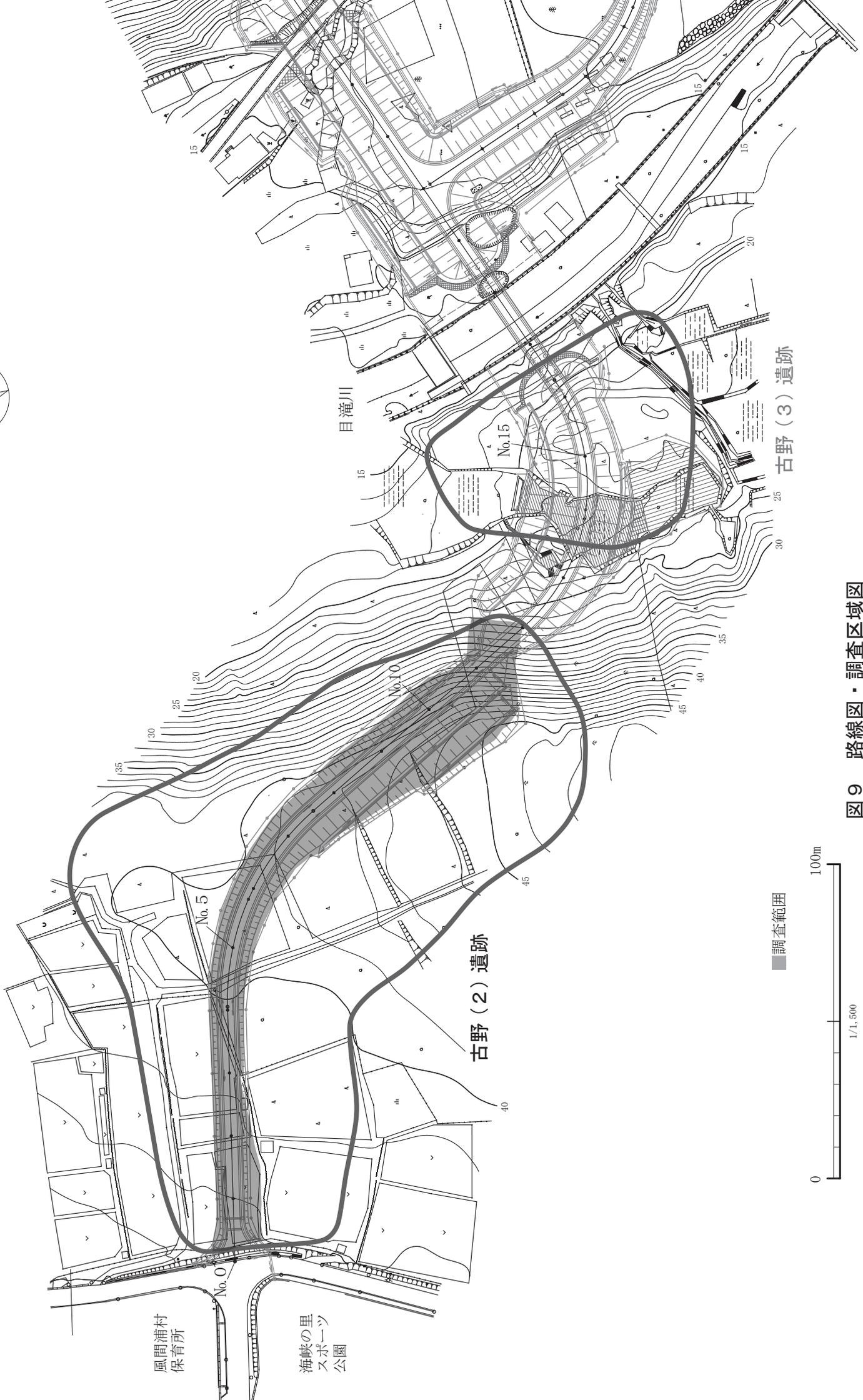


図8 基本層序断面E-Fの土層断面図(青森県埋蔵文化財調査センターが作成した図を改編)

引用参考文献

- 吾妻崇 1995 「変動地形からみた津軽半島の地形発達史」『第四紀研究』vol. 34 p.75-89
 上村不二雄 1962 「大間」「佐井」『5万分の1地質図幅及び説明書』地質調査所 39+6p
 上村不二雄・斉藤正次 1957 「大畑」『5万分の1地質図幅及び説明書』地質調査所 31+8p
 梅田浩司 1992 「下北半島、むつ燧ヶ岳火山の地質と岩石記載」『岩鉱』vol. 87 p.420-429
 梅田浩司・壇原徹 2008 「フィッション・トラック年代によるむつ燧岳の活動年代の再検討」『岩石鉱物科学』vol. 37 p.131-136
 北村信・鈴木養身・多田元彦 1959 「下北半島西部の地質」青森県商工課 p.1-11
 小池一之・町田洋編 2001 『日本の海成段丘アトラス』東京大学出版会 122p
 資源エネルギー庁 1995 「渡島大島・下北地域」『平成6年度広域地質構造調査報告』107p
 新戸部芳 1969 「大間崎付近の海岸段丘」『東北地理』vol. 21 p.23-29

- 伴雅雄・大場与志男・青沼正光 1992 「青麻-恐火山列、陸奥燧岳、恐山、七時雨および青麻火山のK-Ar年代-東北日本弧第四紀火山の帯状配列の形成時期-」
『岩鉱』 vol. 87 p. 39-49
- 水野裕・堀田報誠 1972 「地形分類図」『5万分の1土地分類基本調査「大畑」』青森県むつ小川原開発室編 p. 15-21
- 水野裕・堀田報誠 2000 「地形分類図」『5万分の1土地分類基本調査「大間・佐井」』青森県農林部農村計画課編 p. 22-38
- 宮内崇裕 1988 「東北日本北部における後期更新世海成面の対比と編年」『地理学評論』 vol. 61 p. 404-422
- 根本直樹 1998 「下北地域」『青森県の地質』青森県観光労働部鉱政保安課 p. 60-67
- 根本直樹・鎌田耕太郎 2000 「表層地質図」『土地分類基本調査「大間・佐井」』青森県農林部農村計画課 p. 22-38.
- 根本直樹 2020 「古野(3)遺跡周辺の地形及び地質」『古野(3)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第611集 p. 9-17
- 渡辺満久・中田高・鈴木康弘・小岩直人 2012 「下北半島北西端周辺の地震性隆起海岸地形と海底活断層」『活断層研究』 No. 36 p. 1-10



風間浦村
保育所

海峡の里
スポーツ
公園

目滝川

古野(2)遺跡

古野(3)遺跡

■ 調査範囲

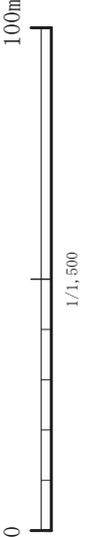


図9 路線図・調査区域図

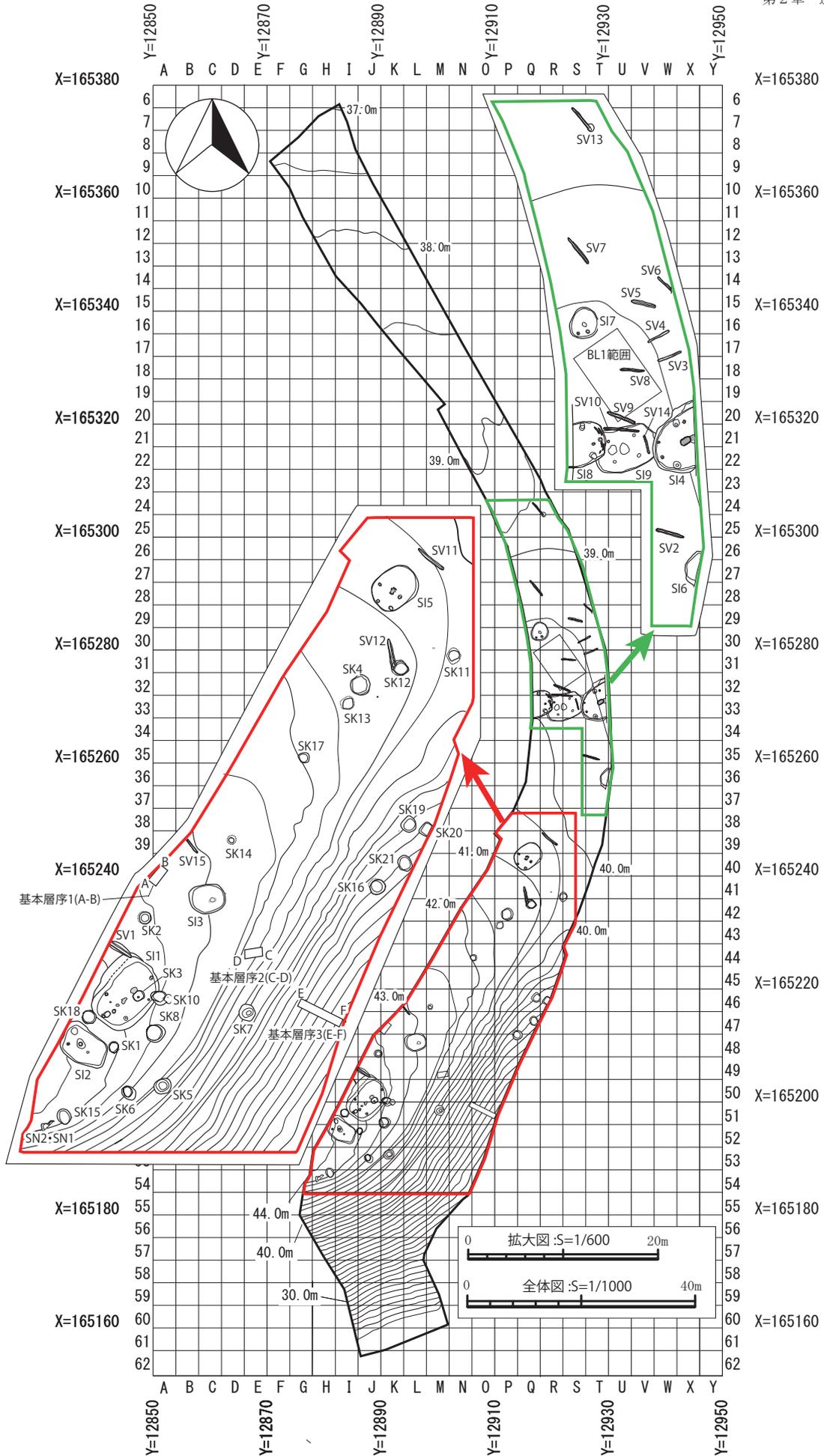


図10 遺構配置図

第3章 検出遺構と出土遺物

第1節 概要

縄文時代の遺構・遺物とそれ以後の遺構・遺物を確認した。土器や石器等合わせて、段ボール箱196箱の遺物が出土している。

調査区は大きく平坦面と急な斜面に分かれ、P～R-45～48付近は比較的なだらかな斜面である。台地平坦面のX=165,308の24ライン以北では、遺構検出は無く、遺物の出土も極僅かであり、平成30年度中に調査を終了した。同年、調査区南側の台地平坦面において、縄文時代前期後葉の竪穴建物跡1棟(SI03)、縄文時代中期後葉の竪穴建物跡2棟(SI01・02)と縄文時代の土坑3基(SK01～03)を検出し、調査を完了した。

翌令和元年度は、残った台地平場と斜面地の調査を行い、竪穴建物跡はSI04～09、土坑はSK04～21、溝状土坑はSV01～15、焼土遺構SN01・02、遺物集中ブロック1箇所と斜面捨て場を検出し、調査を行った。

遺構内外の出土遺物の帰属時期は、縄文時代前期後葉・中期後葉～末葉・後期初頭～前葉・末葉・晩期前葉～末葉である。中でも、多くの遺物が出土したQ-47・48グリッド周辺の斜面捨て場において主体となる時期は、縄文時代前期後葉円筒下層d式期と中期後葉榎林式期の2時期であり、共に直前・直後の時期の遺物をほぼ含まない良好な遺物包含層であった。この地点より、榎林式土器と共に出土した土偶は青森県の土偶研究において、貴重な一例を加えることになった。

台地上面の遺構群および緩斜面部の土坑群も概ね上記の2時期のものと考えられるが、出土遺物より、SK03が中期末葉大木10式併行期、SK05が後期前葉十腰内I式期と僅かに他時期の遺構も見られた。また縄文時代以後の遺構・遺物も少数見られ、土師器・須恵器の破片が見られることから、周辺に平安時代の遺構の存在が想定される。SN01・SN02は放射性炭素年代測定により中世に帰属する可能性がある。近世の遺物も表土を中心に出土しており、江戸時代中期と後期のものが見られる。近代の越後産焼酎徳利も隣接する古野(3)遺跡と同様に出土している。

第2節 縄文時代の遺構・遺物

1 遺構とそれに伴う遺物

(1) 竪穴建物跡

縄文時代前期後葉2棟(SI03・09)、縄文時代中期後葉の可能性が高い7棟(SI01・02・04・05・06・07・08)である。前期後葉のSI03・09は隅丸方形、楕円形を呈し、地床炉あるいは掘込炉を有する。SI09は中央軸に並ぶ焼土や掘込炉を囲んで4基の主柱穴が配されている。中期後葉の竪穴建物跡は、楕円形あるいは隅丸方形を呈し、主柱穴が壁際に配され、長軸の壁側中央床面にも柱穴が見られる。SI01のみ、長軸の片方の床面に土坑が見られ、円筒上層式期や、それ以後に盛行した特殊施設の可能性もある。

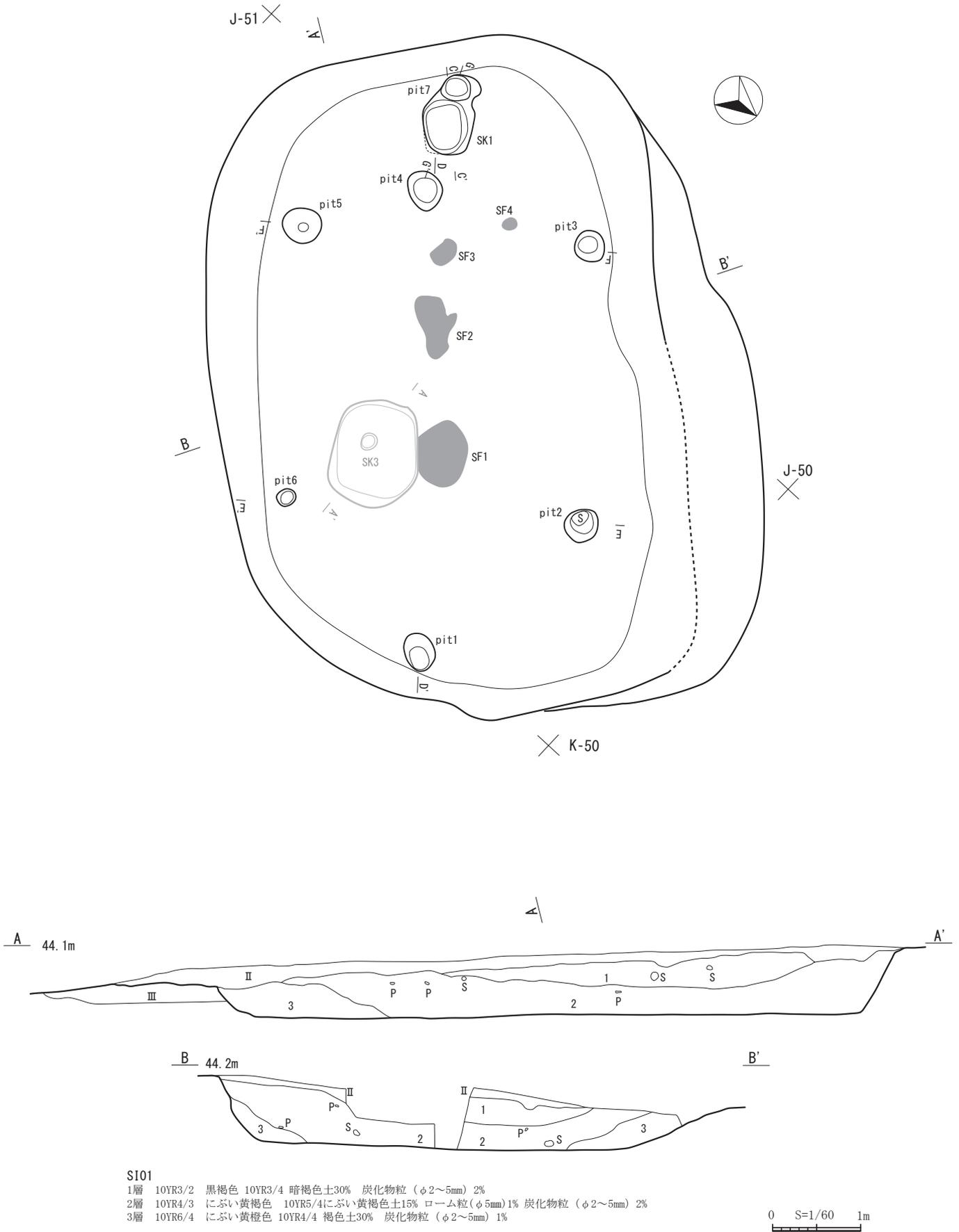


図11 第1号竖穴建物跡(1)

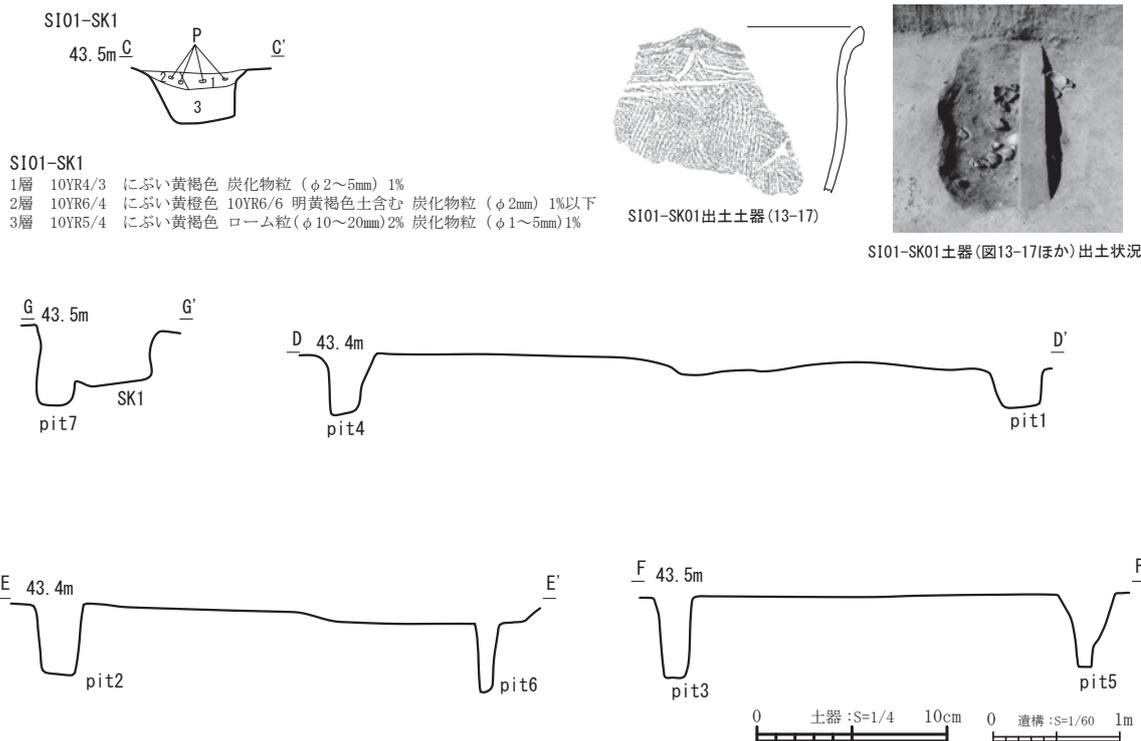


図12 第1号竪穴建物跡(2)

第1号竪穴建物跡 (S101) (図 11 ~ 15、写真 4・5・33)

【位置・確認】 I ~ K -50・51 グリッドで、第IV層上面で、黒褐色の楕円形プランとして確認した。

【重複】 SK03・10・18・SV01 と重複し SK03・SV01 より古く、SK10・18 との前後関係は不明である。

【規模・平面形】 床面の長軸 700cm × 短軸 402cm の楕円形を呈する。

【壁面・床面】 壁は最長 70cm で、外傾して立ち上がる。床面は黄褐色ローム層である。

【堆積土】 床面・壁面は地山由来のにぶい黄褐色土層が堆積し、上位に黒褐色土が堆積している。

【炉跡・柱穴】 SF 1 が主要な地床炉と考えられるが、中軸線上に SF 2・3、やや外れた SF 4 でも焼土が見られる。壁際の pit 2・3・5・6 が支柱である。また短軸壁面に近い pit 1・7 も検出されている。

SK 1 は壁際にあり、特殊施設の可能性もある。

【出土遺物】 土器が 10,596 g、剥片石器が 545 点・3,444 g、礫石器は 4 点・4,659 g が出土した。堆積土からは、円筒下層 d 式土器と榎林式土器が出土している。床面直上から出土した土器 (13-14・13-27)、建物内土坑から出土した 13-17 は榎林式土器と考えられる。

剥片石器は、石鏃 12 点 (41.4g)・石槍 9 点 (171.2g)・石核 2 点 (99.5g)・スクレイパー 17 点 (465.9g)・二次加工のある剥片 22 点 (294.9g)・微細剥離のある剥片 171 点 (1,512.7g)・剥片 312 点 (859.2g) が出土した。床面・床面直上からは石槍 1 点 (27.4g)・スクレイパー 2 点 (65.6g)・二次加工のある剥片 2 点 (58.2g)・微細剥離のある剥片 6 点 (106.1g)・剥片 6 点 (6.1g) の 17 点 (263.4g) が出土しており、SK01 からは石鏃 1 点 (5.0g)・スクレイパー 1 点 (31.0g)・二次加工のある剥片 1 点 (3.5g)・微細剥離のある剥片 2 点 (21.8g)・剥片 8 点 (8.8g) の 13 点 (70.1g) が、Pit 1 からは剥片 6 点 (1.6g) が、Pit 2 からは微細剥離のある剥片 1 点 (0.5g)・剥片 2 点 (3.8g) の 3 点 (4.3g) が、

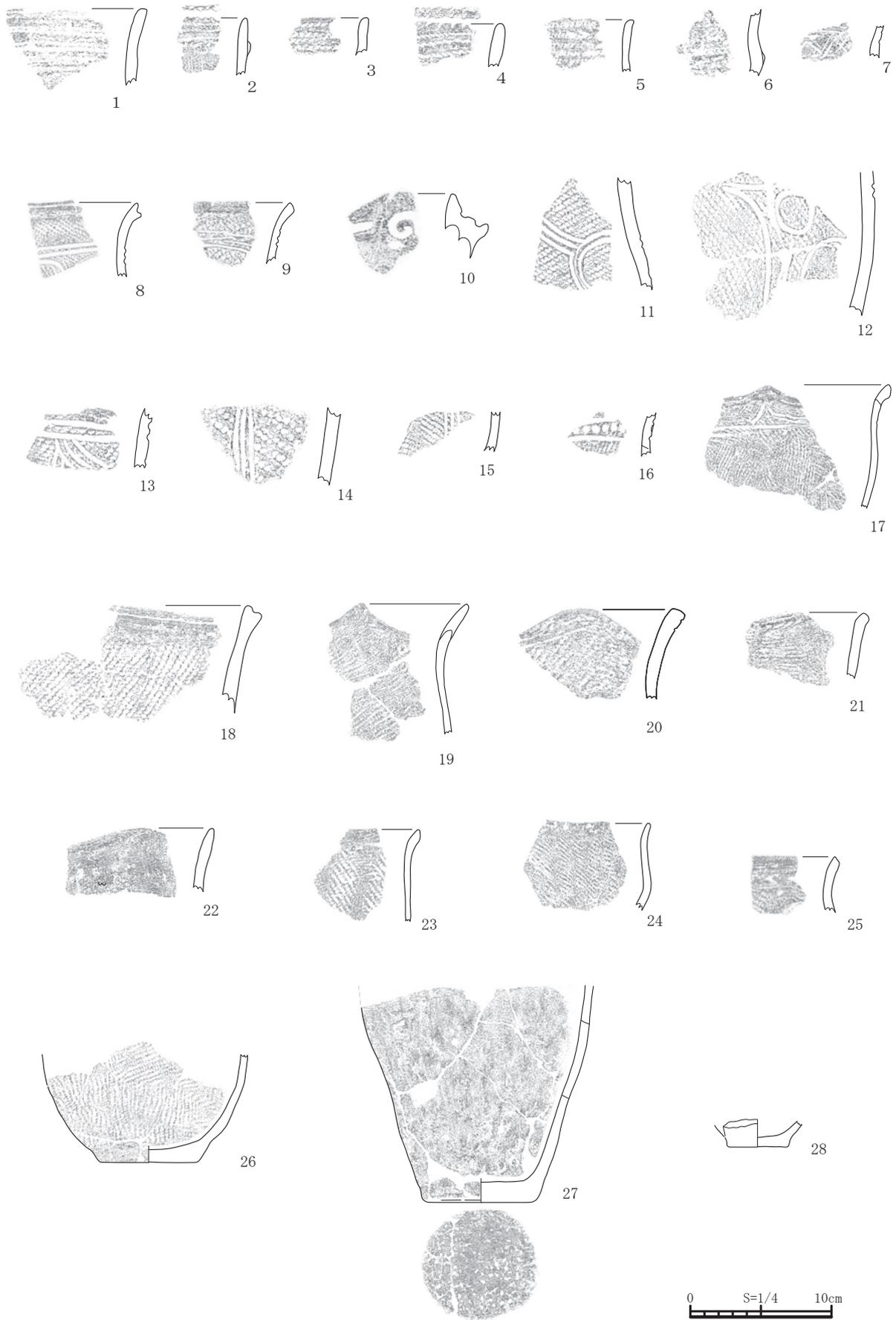


图13 第1号竖穴建物跡(3)

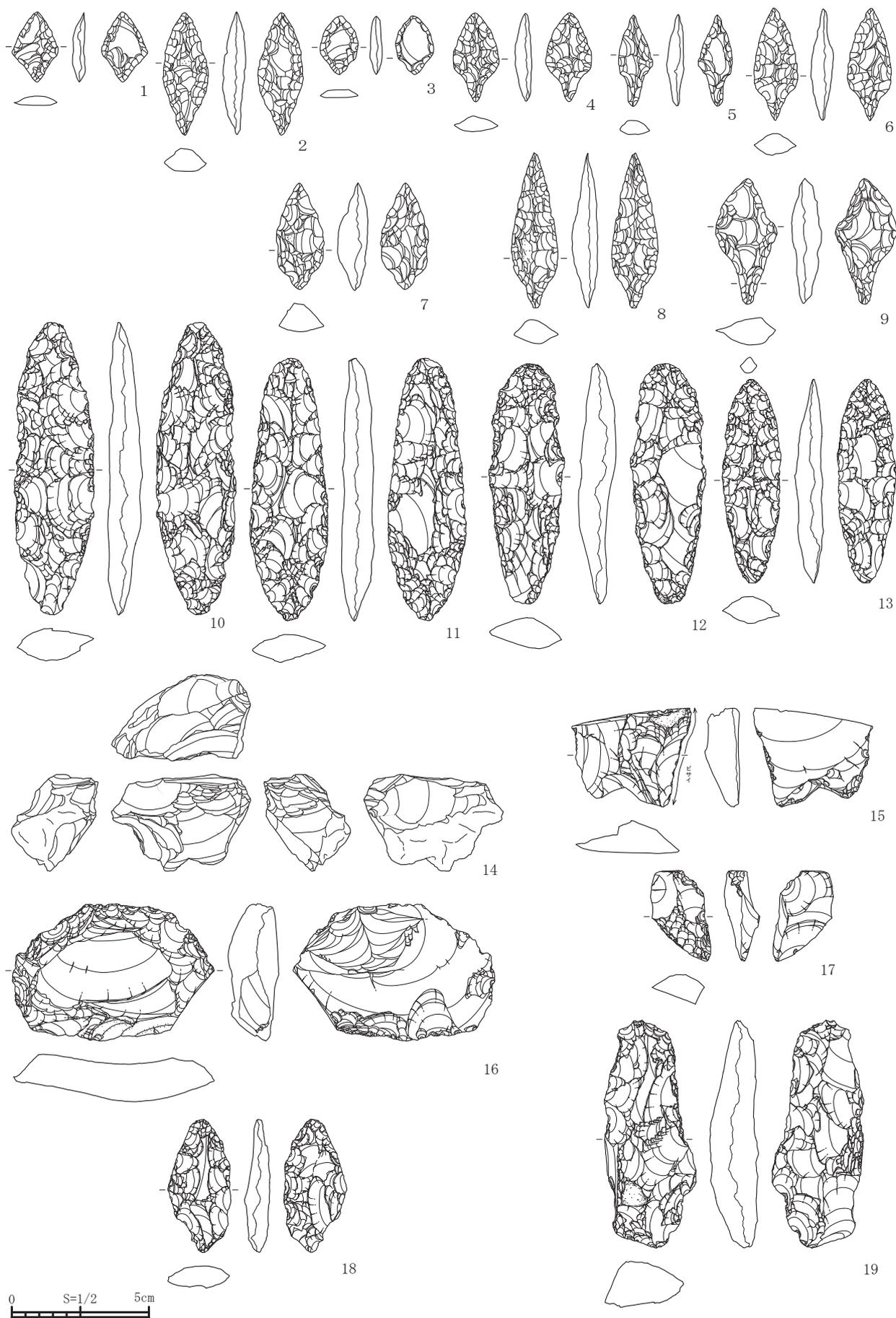


图14 第1号竖穴建物跡(4)

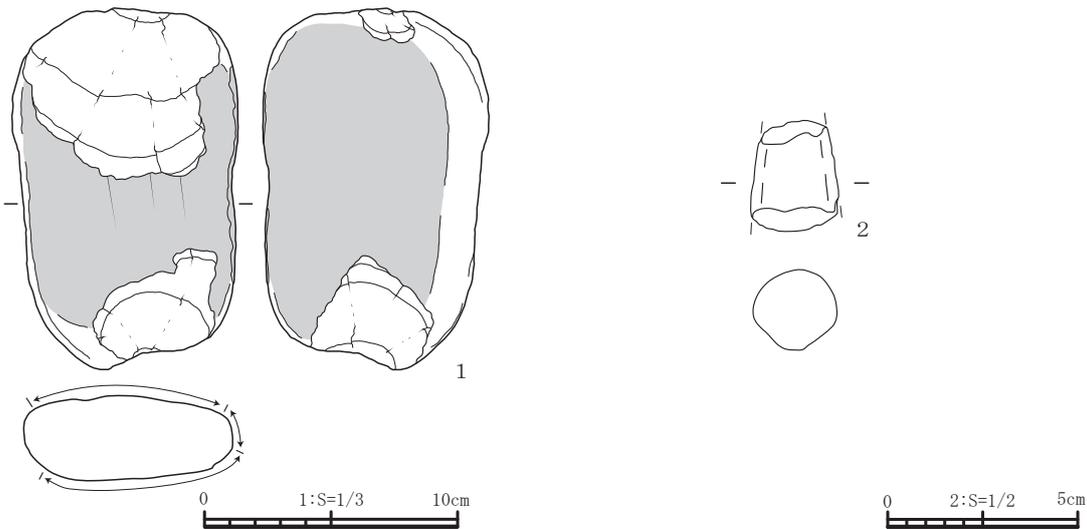


図15 第1号竪穴建物跡(5)

Pit 3からは微細剥離のある剥片1点(2.0g)が、Pit 4からは剥片1点(0.4g)が、Pit 5からは微細剥離のある剥片1点(1.9g)・剥片2点(2.1g)の3点(4.0g)が、Pit 6からは微細剥離のある剥片1点(3.3g)・剥片7点(3.6g)の8点(6.9g)が出土している。

礫石器は磨石2点、台石2点である。磨石(15-1)が床面直上から、そのほかは堆積土から出土した。

不明土製品が1点、焼成粘土塊が1点、いずれも堆積土から出土した。不明土製品(15-2)は、棒状で上に向かって細くなり、側面はわずかにすぼまる形態で、土偶等の土製品の一部の可能性もある。焼成粘土塊(写真69-1)は、指頭圧痕のある小型のものである。

【時期】床面直上・建物内土坑から出土した土器より、榎林式期の竪穴建物跡と考えられる。(永嶋)

第2号竪穴建物跡(SI02)(図16～18、写真6・7・33)

【位置・確認】H・I-51・52グリッド付近で、炭化物粒を含む、にぶい黄褐色の落ち込みとして確認した。

【重複】重複なし

【規模・平面形】床面の長軸450cm×短軸320cmの隅丸方形を呈する。

【壁面・床面】西側の壁面で壁高70cmが残存している。床面は平坦である。

【堆積土】大部分に、にぶい黄褐色土が堆積し、一部に暗褐色土が堆積している。

【炉跡・柱穴】床面中央において、炭化物を含むにぶい黄褐色土が堆積した窪みを検出し、炉の可能性が高いと考えた。片側の壁面近くで、pit 1・pit 2を検出した。

【出土遺物】土器が1,999g、剥片石器が423点・1,567g、礫石器は5点・10,738gが出土した。

堆積土から榎林式土器の破片が出土した。

剥片石器は、石鏃8点(19.0g)・石槍3点(57.7g)・石核4点(86.2g)・スクレイパー16点(360.0g)・二次加工のある剥片14点(204.5g)・微細剥離のある剥片102点(488.4g)・剥片276点

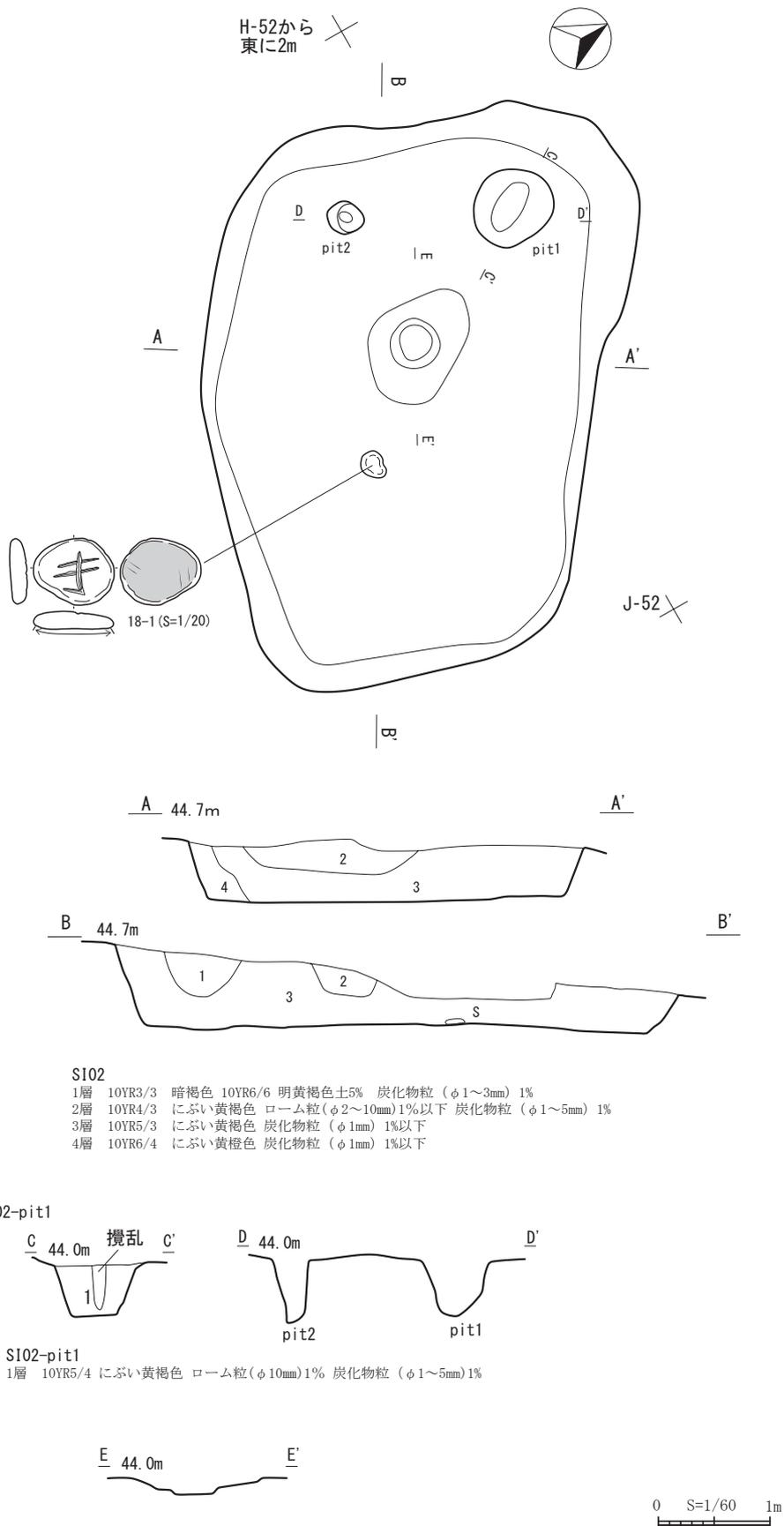


図16 第2号竪穴建物跡(1)

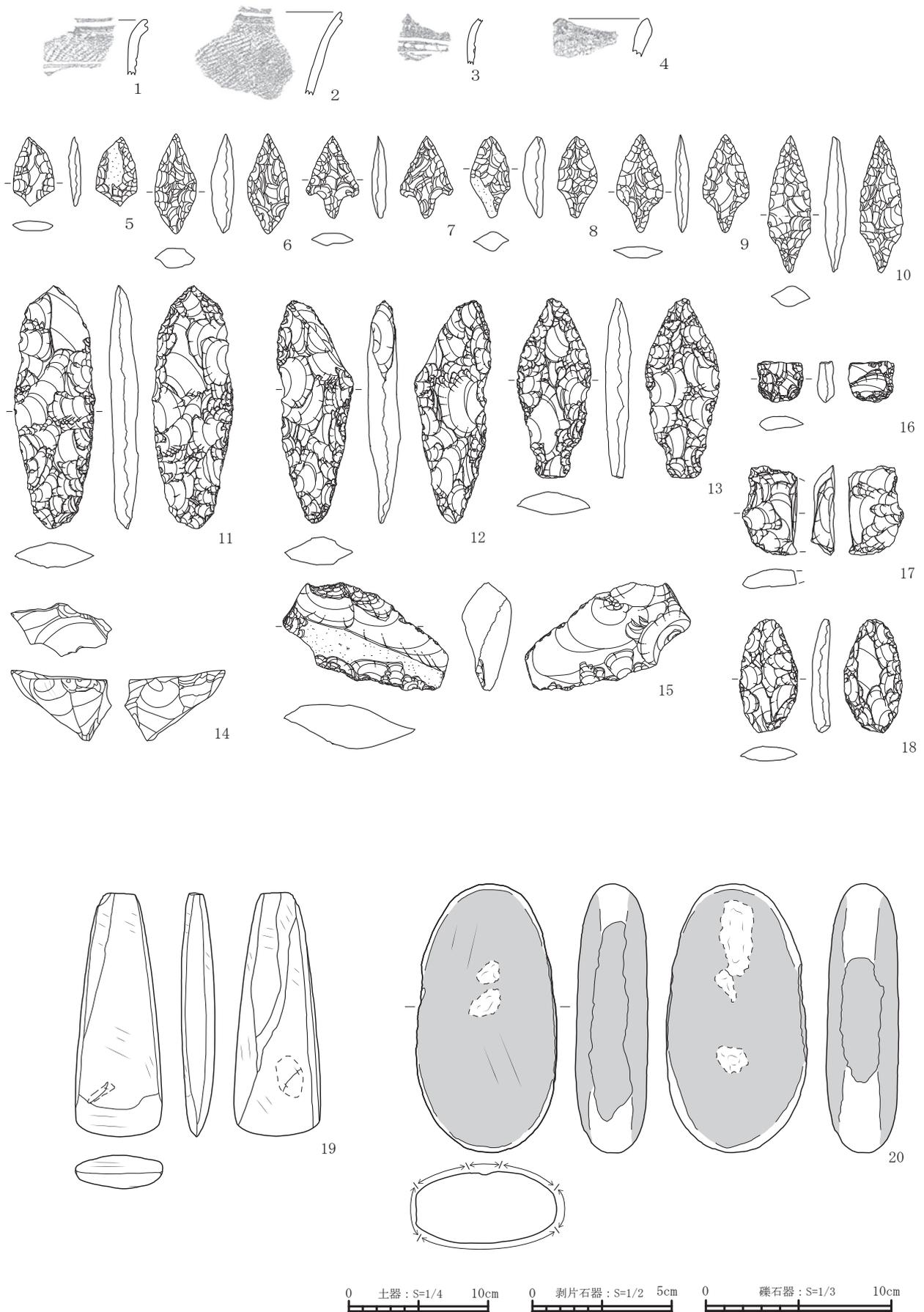


图17 第2号竖穴建物跡(2)

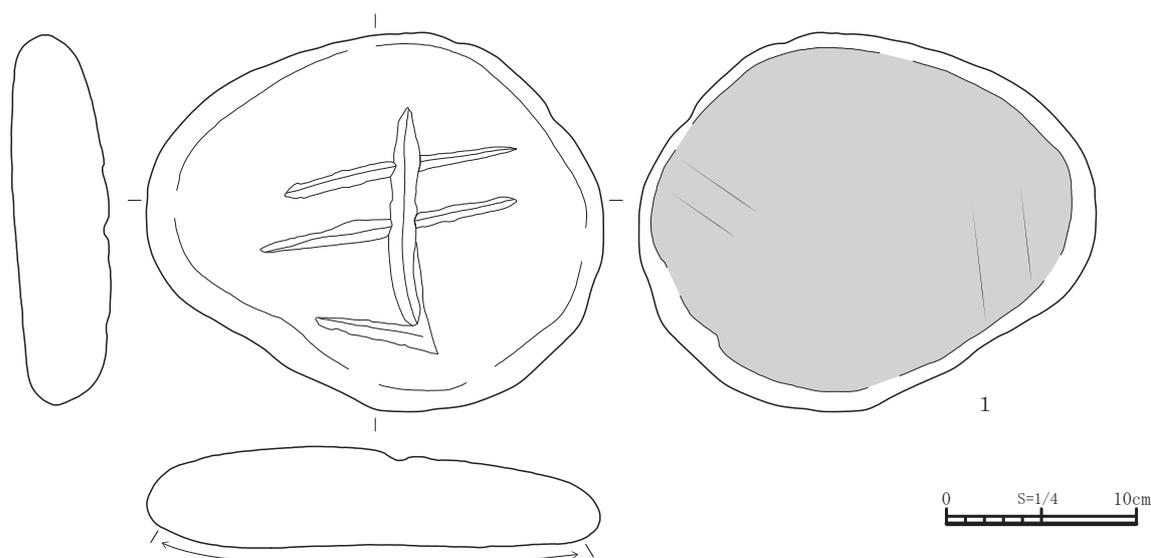


図18 第2号竪穴建物跡(3)

(351.5g) が出土した。床面・床面直上からは石鏃 1 点 (3.2g)・石槍 1 点 (13.9g)・微細剥離のある剥片 2 点 (6.3g) の 4 点 (23.4g) が出土しており、Pit 1 からはスクレイパー 1 点 (1.6g)・微細剥離のある剥片 4 点 (11.9g)・剥片 5 点 (3.5g) の 10 点 (17.0g) が、Pit 2 からは二次加工のある剥片 1 点 (27.8g) が出土している。

礫石器は、磨製石斧 1 点、磨石 1 点、凹石 1 点、台石 2 点が出土した。床面から出土の磨製石斧 (17-19)、凹石 (17-20)、台石 (18-1) を図示した。18-1 は、溝状の凹みの面を上にして出土し表面に縦 1 条、横 3 条の溝状の凹み、裏面に磨面が認められる。

【時期】堆積土から出土した土器片より、縄文時代中期後葉の榎林式期の竪穴建物跡と考えられる。

(永 嶋)

第3号竪穴建物跡 (SI03) (図 19～22、写真 8・9・34)

【位置・確認】L-48 グリッド付近で、炭化物粒を含むにぶい黄褐色土の落ち込みとして確認した。

【重複】重複なし。

【規模・平面形】床面の長軸 330cm × 短軸 250cm の楕円形を呈する。

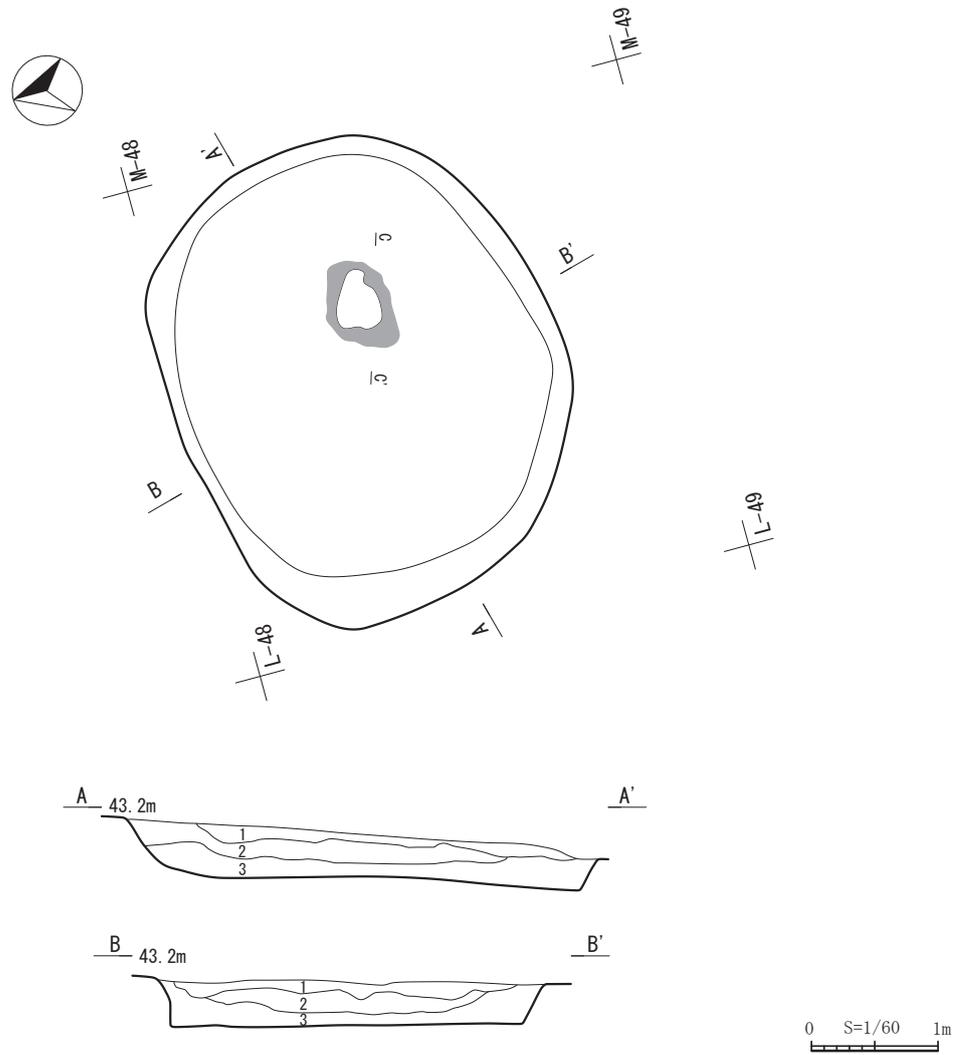
【壁面・床面】壁面は最大 48 cm 残存している。基本層序第 V 層まで掘り込まれており、同層に含まれる直径 30 cm 以下の安山岩の長円礫が床面一帯と壁面の一部に露出している。

【堆積土】地山由来の黄褐色やにぶい黄褐色土が堆積しており、僅かに炭化物粒・焼土を含む。

【炉跡・柱穴】柱穴は見られず、長軸中央よりやや壁際に寄った位置に地床炉が構築されている。

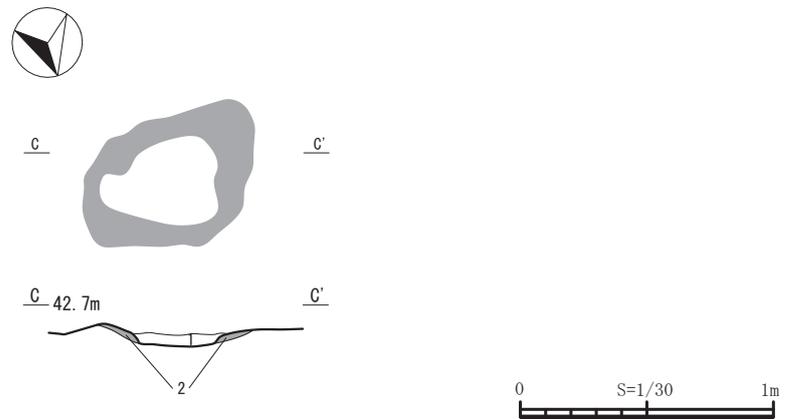
【出土遺物】土器が 4,584g、剥片石器が 38 点・584g、礫石器は 1 点・1,195g が出土した。炉跡直上の堆積土 3 層から、円筒下層 d 式の上半部 (21-1) がまとまって出土した。他の堆積土から出土した土器片もすべて円筒下層 d 式期のものである。

剥片石器は、石鏃 1 点 (2.0g)・石核 1 点 (178.0g)・スクレイパー 4 点 (55.9g)・二次加工のある



S103

- 1層 10YR4/3 にぶい黄褐色 炭化物粒 (φ3mm以下) 2% 焼土粒 (φ1mm以下) 1%以下 シルト質
- 2層 10YR5/6 黄褐色 炭化物粒 (φ3mm以下) 1% 炭化物粒 木根痕が多く締まりは3層より弱い 粘土質
- 3層 10YR5/4 にぶい黄褐色 2層より締まりあり くすんだ色調 3層上面で遺物出土 粘土質



S103地床炉

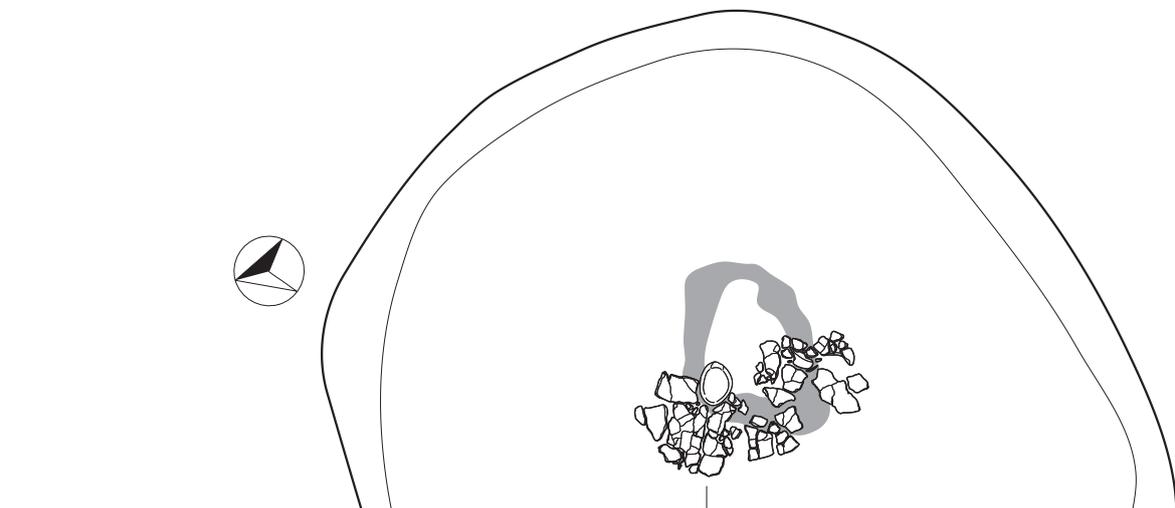
- 1層 10YR5/4 にぶい黄褐色 しまりややあり 焼土や炭化物粒は顕著ではない
- 2層 被熱範囲

図19 第3号竖穴建物跡(1)

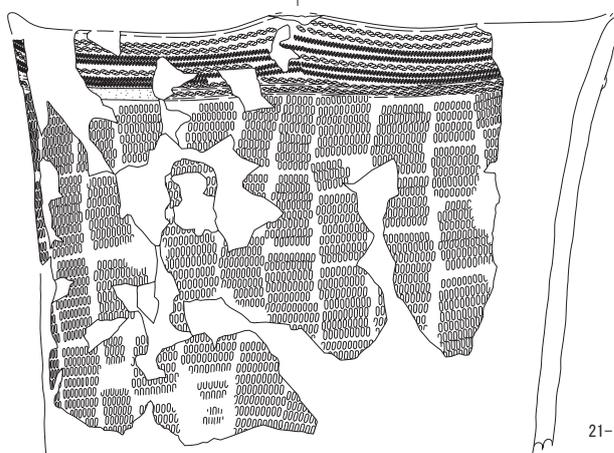


S103遺物出土状況

0 S=1/60 1m



0 S=1/30 1m



21-1

0 S=1/4 10cm

图20 第3号竖穴建物(2)

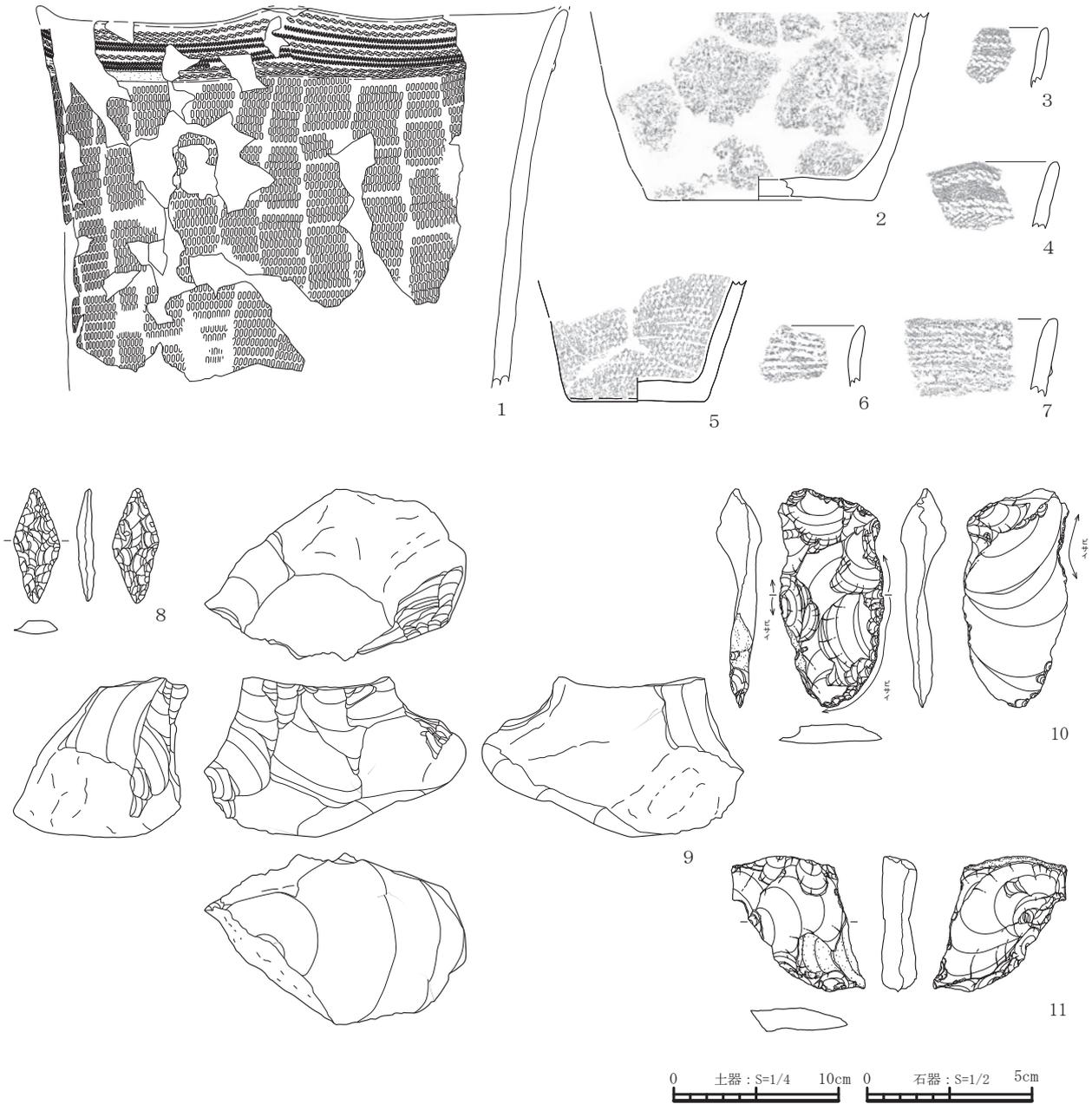


図21 第3号竪穴建物跡(3)

剥片 1点 (15.7g)・微細剥離のある剥片 14点 (193.9g)・剥片 17点 (138.8g) が出土した。

礫石器は、床面から磨石 (22- 1) が 1点出土した。

【時期】 炉跡直上出土の土器より、縄文時代前期後葉円筒下層 d 式期の竪穴建物跡と考えられる。

(平 山)

第4号竪穴建物跡 (S104) (図 23 ~ 30、写真 10 ~ 12・34・35)

【位置・確認】 S ~ T -32 ~ 34 グリッド付近で、第IV層上面で、炭化物を僅かに含む黒褐色土の落ち込みとして確認した。

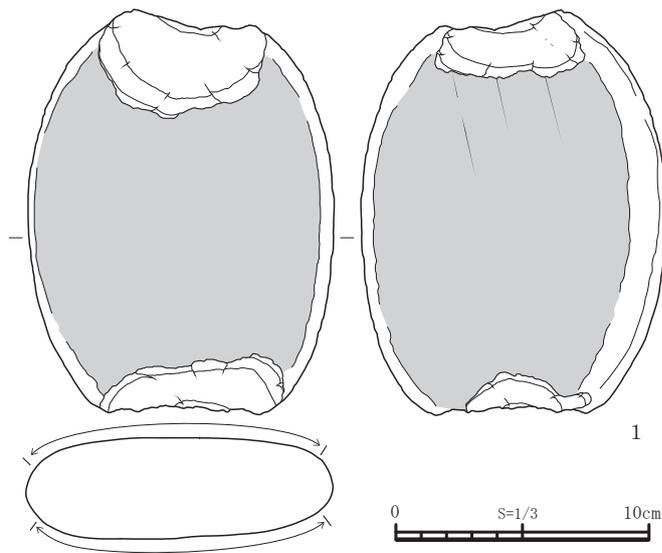


図22 第3号竪穴建物跡(4)

【重複】第9号竪穴建物跡と重複し、本竪穴建物跡が新しい。

【規模・平面形】短軸長は540 cm、長軸長は調査区内で600 cmである。建物跡の形状から全体では長軸長900 cm程度の大型の楕円形を呈すると推定される。

【壁面・床面】壁は良好に残存し、最大66 cmほどの高さであった。基本層序第IV層を平坦にして、床面が形成されている。

【堆積土】床面壁際に褐色土が、その上層は炭化物を含む黒褐色および暗褐色土が堆積している。

【炉跡・柱穴】住居中心軸上に長軸長120 cm×短軸長75 cmほどの大型の石囲炉が構築されている。長さ15 cmほどの炉石13点が、左右ほぼ対称にU字形に並べられ、南西側には炉石は見られない。更に、この炉石の範囲を超えて、北東側にも火床面が見られ、より古い炉と考えられる。柱穴は、壁際に複数基が見られ、主軸上にpit 2が存在する。

【出土遺物】土器が15,504 g、剥片石器が726点・2,971 g、礫石器は47点・40,043 gが出土した。堆積土あるいは上位の堆積土からは、円筒下層d式の土器片の出土が多い(26-1～13)。堆積土下位あるいは5層・7層の床面に近い層から出土したものは、縄文時代中期後葉の榎林式期と考えられる土器片が多い(26-17～21)。26-20は胴部無文で、頸部に橋状把手を有する壺の破片である。

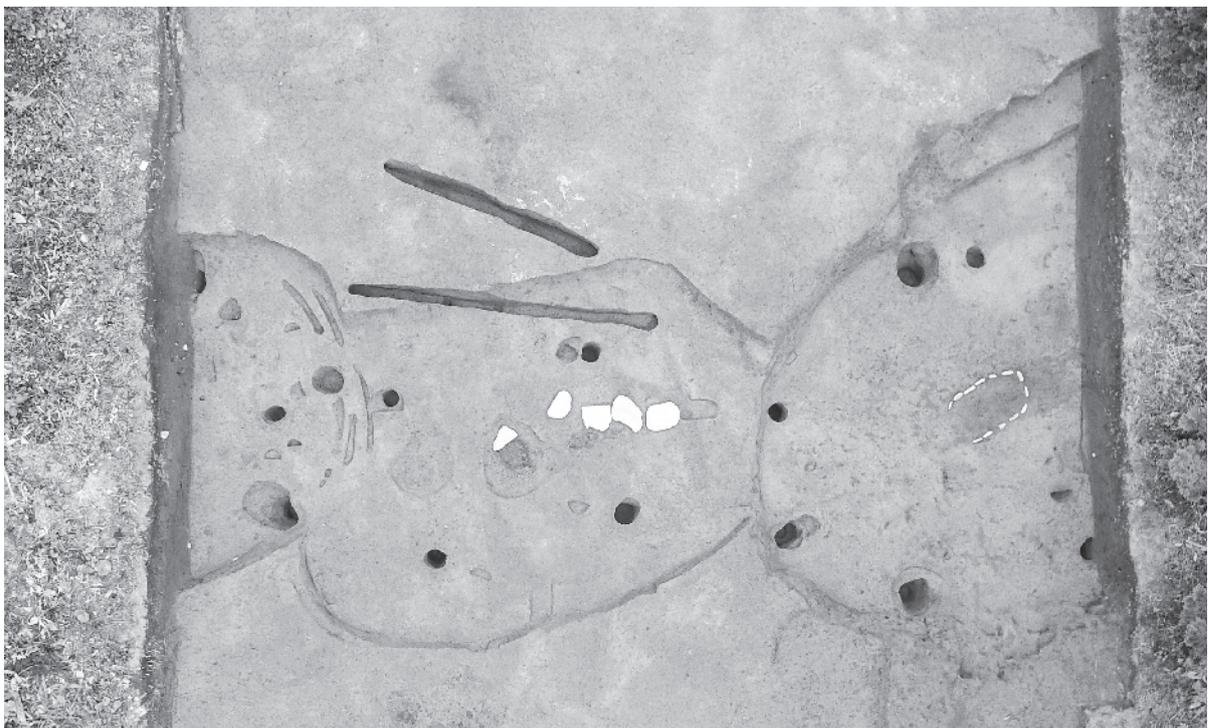
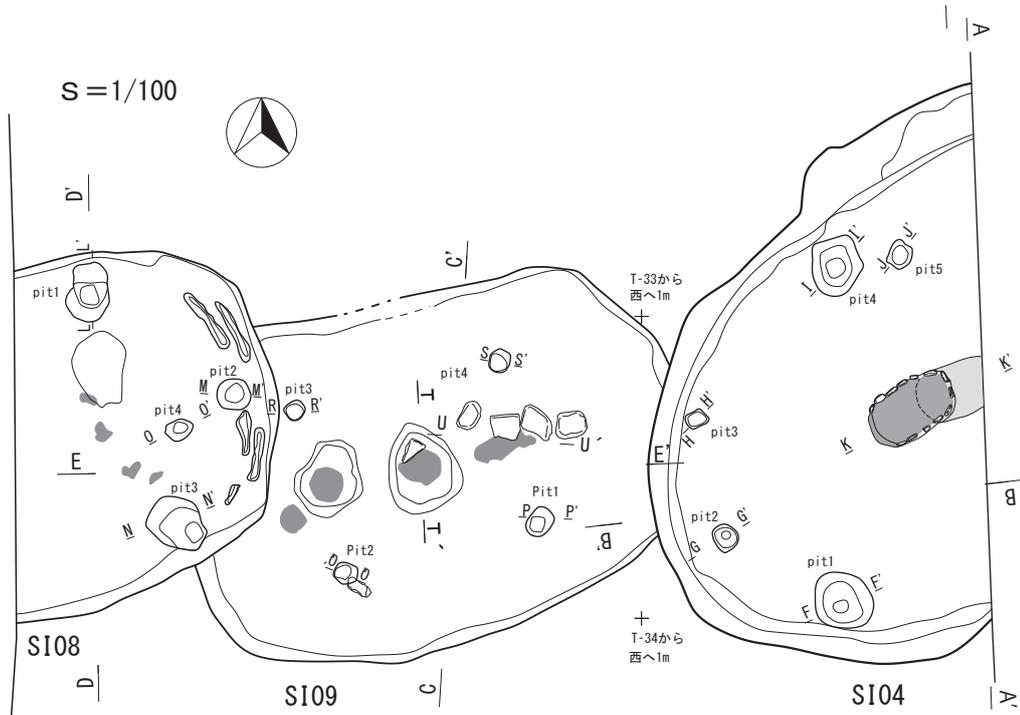
剥片石器は、石鏃6点(11.6g)・石槍1点(38.3g)・石匙2点(28.2g)・石核7点(278.4g)・スクレイパー28点(259.5g)・二次加工のある剥片13点(184.8g)・微細剥離のある剥片89点(944.1g)・剥片580点(1,226.6g)が出土した。

礫石器は、磨製石斧1点、磨石36点、敲石1点、半円状扁平打製石器1点、挟入扁平打製石器1点、台石5点、剥片2点である。磨製石斧(28-1)、磨石(28-2～6、29-1～3・5・6)、凹石(29-4)、挟入扁平打製石器(30-1)、台石(30-2～5)を図示した。28-2～6、29-1～3・5の磨石9点は、29-4の凹石と30-3の台石とともに石囲炉の炉石(図25下段)として転用される。

焼成粘土塊が1点(写真69-2)、堆積土から出土した。指頭圧痕のある小型のものである。棒状礫が2点出土し、1点(30-6)を図示した。堆積土からの出土で、30-6は堆積土上層、未掲載品は堆積土下層から出土した。石材は流紋岩で柱状節理である。未掲載品は被熱痕がある。寸法は、30-6は長さ131.5 cm、重量が266.3 gで、未掲載品は長さが37.0 cm、重量が41.3 gと比較的小型である。

【自然科学分析】当竪穴建物跡の石囲炉堆積土から3点、堆積土から1点、pit 2とpit 4からそれぞれ1点の計5点の放射性炭素年代測定を行った。その結果、全てが縄文時代中期後葉に相当する

年代値を示した（第4章第4節参照）。また石囲炉堆積土から水洗選別した微細遺物の分析を行った。その結果、石囲炉堆積土1層中から炭化した栽培の可能性のあるヒエ属2点、石囲炉中の焼土層から炭化したイネ1点が得られた（第4章第2節参照）。イネは後世の混入の可能性が、ヒエ属は同様の可能性と共に、縄文時代の類例があることから、年代測定の必要性が指摘された。



SI08（中期後葉）

SI09（前期後葉）

SI04（中期後葉）

図23 第4・8・9号竪穴建物跡

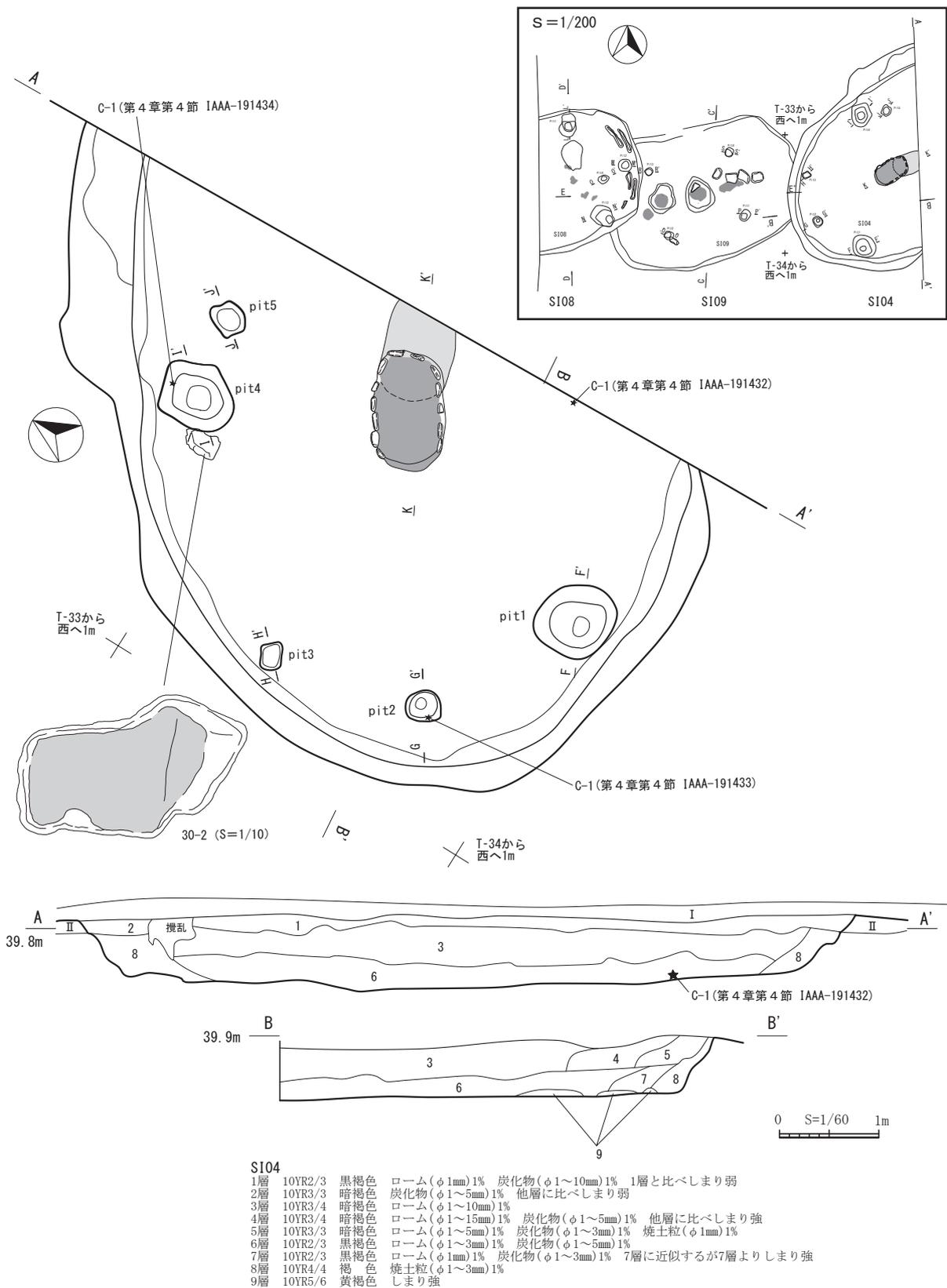
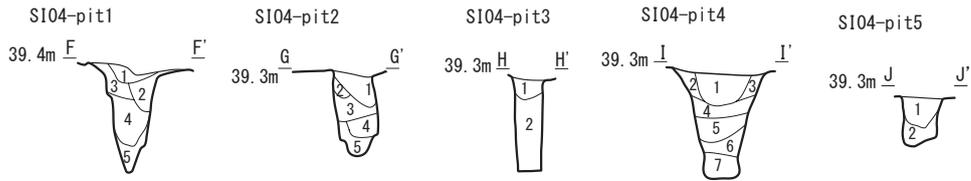


図24 第4号竪穴建物跡(1)



SI04-pit1

- 1層 10YR3/4 暗褐色 しまり弱 粘性やや強 明褐色(7.5YR5/8)ローム粒(φ10mm) 3% 炭化物粒(φ20mm程)2%
- 2層 10YR3/4 暗褐色 しまり弱 粘性中 明褐色ロームブロック(φ40mm) 5% 1層と壁面ロームが植物痕による攪乱で出来た層
- 3層 10YR4/3 にぶい黄褐色 しまり中 粘性やや強 褐色(7.5YR4/4)ローム粒(φ3mm程)2%
- 4層 7.5YR4/4 褐色 しまり中 粘性やや強 炭化物粒(φ5mm程)1%
- 5層 7.5YR5/4 にぶい褐色 しまり中 粘性やや強

SI04-pit2

- 1層 7.5YR5/4 にぶい褐色 しまり中 粘性中 橙色(7.5YR6/6)ローム粒(φ10mm) 7%
- 2層 7.5YR4/3 褐色 しまり弱 粘性中 橙色ローム粒(φ15mm) 10%
- 3層 7.5YR4/4 褐色 しまり中 粘性やや強 橙色ローム粒(φ30mm程)20%
- 4層 7.5YR6/8 褐色 しまり中 粘性強 橙色ローム粒(φ20mm程)20%
- 5層 7.5YR6/6 褐色 しまり中 粘性強 混入物ほとんど見られず*

SI04-pit3

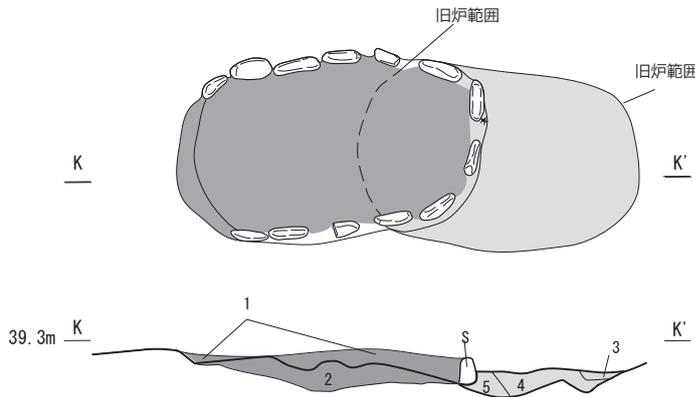
- 1層 7.5YR4/4 褐色 しまり中 粘性やや弱 にぶい橙色(7.5YR6/4)ローム粒(φ2mm)10% 炭化物粒(φ5mm程)1%
- 2層 7.5YR5/6 明褐色 しまり中 粘性やや強 黒褐色土粒(φ2mm) 20%

SI04-pit4

- 1層 7.5YR4/3 褐色 しまり弱 粘性やや強 明褐色(7.5YR5/6)ローム粒(φ10mm) 15% 炭化物粒(φ20mm程)2%
- 2層 7.5YR3/3 暗褐色 しまり中 粘性中 明褐色ローム粒(φ10mm) 15% 炭化物粒(φ5mm程)1%
- 3層 7.5YR4/4 褐色 しまり中 粘性やや強 橙色ローム粒(7.5YR6/6)(φ5mm程)2% 炭化物粒(φ3mm程)1%
- 4層 7.5YR4/3 褐色 しまり中 粘性中 明褐色ローム粒(φ2mm程)2% 炭化物粒(φ3mm程)1%
- 5層 7.5YR6/6 褐色 しまり中 粘性やや強 褐色(7.5YR6/8)ロームブロック(φ50mm) 10%
- 6層 7.5YR5/4 にぶい褐色 しまり中 粘性やや強 黒褐色土ブロック30%
- 7層 7.5YR4/3 褐色 しまり中 粘性中 黒褐色土ブロック20%

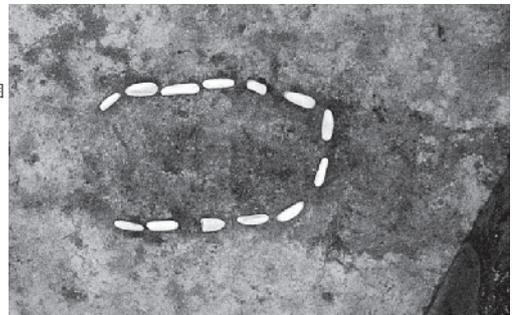
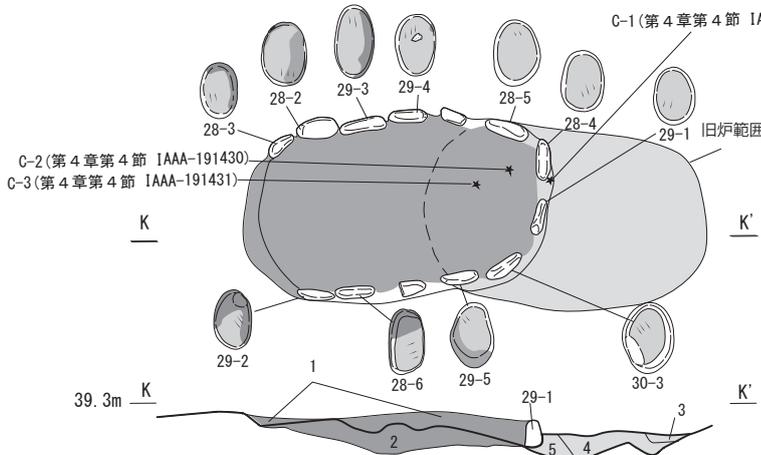
SI04-pit5

- 1層 7.5YR6/6 褐色 しまり弱 粘性やや弱 炭化物粒(φ2mm程)2%
- 2層 7.5YR5/4 にぶい褐色 しまり弱 粘性やや弱 橙色ローム粒(7.5YR6/8)(φ10mm) 3%

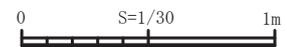


SI04石囲炉

- 1層 10YR3/4 暗褐色 焼土粒(φ1~3mm) 炭化物(φ1mm)1%
- 2層 2.5YR4/6 赤褐色 焼土層 炭化物(φ3mm)1%
- 3層 10YR4/4 褐色 炭化物(φ5mm)1% ローム混合土
- 4層 10YR3/4 暗褐色 赤褐色(2.5YR4/8)土焼土混合
- 5層 2.5YR4/8 赤褐色 地山由来のロームが被熱している



石囲炉(左)と旧炉跡(右)



礫石器は1/20

図25 第4号竖穴建物跡(2)



图26 第4号竖穴建物跡(3)

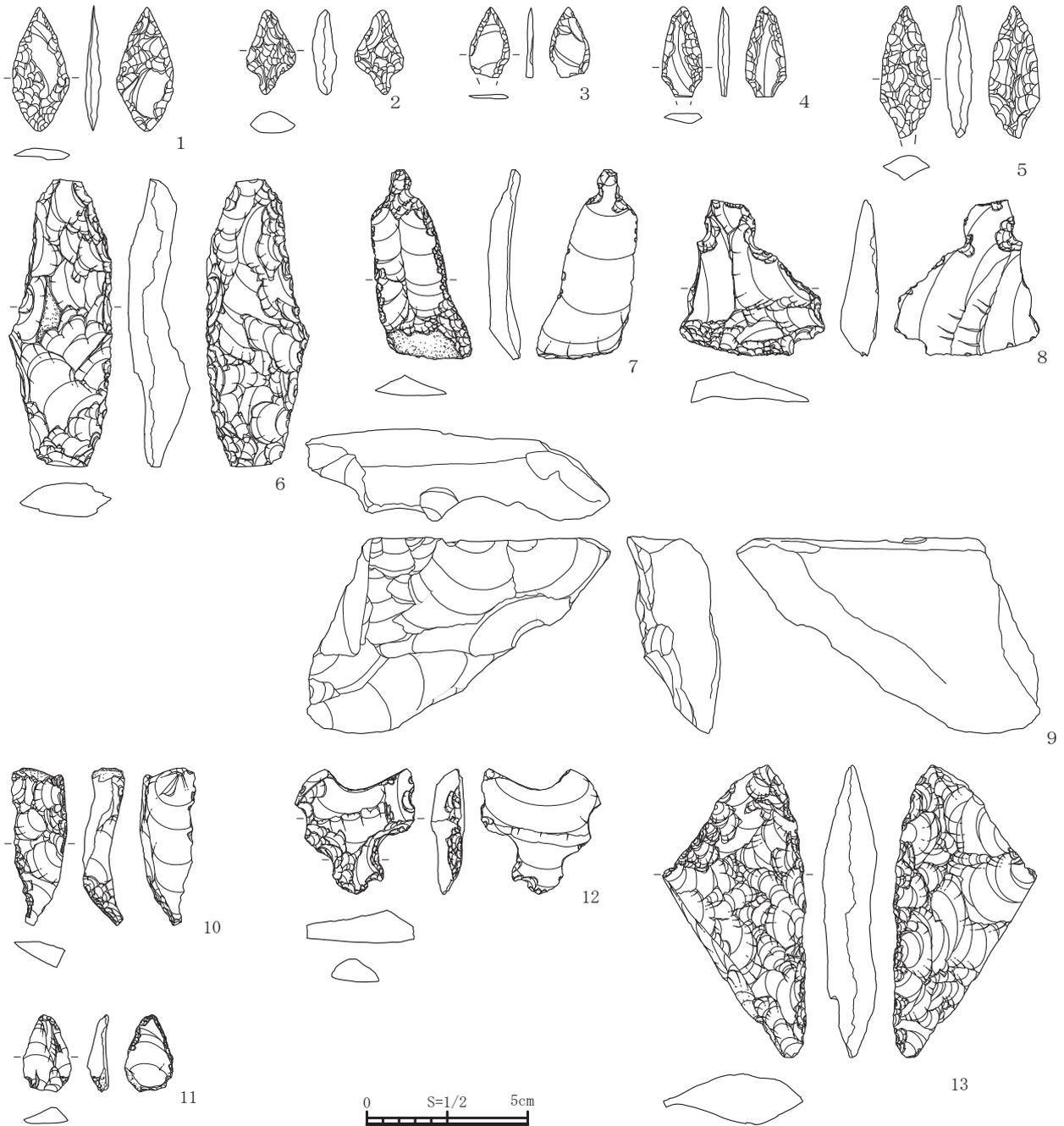


図27 第4号竪穴建物跡(4)

【時期】堆積土下位出土の土器片、石囲炉の形状や採取サンプルの放射性年代測定結果より、縄文時代中期後葉の榎林式期の竪穴建物跡である。(永嶋)

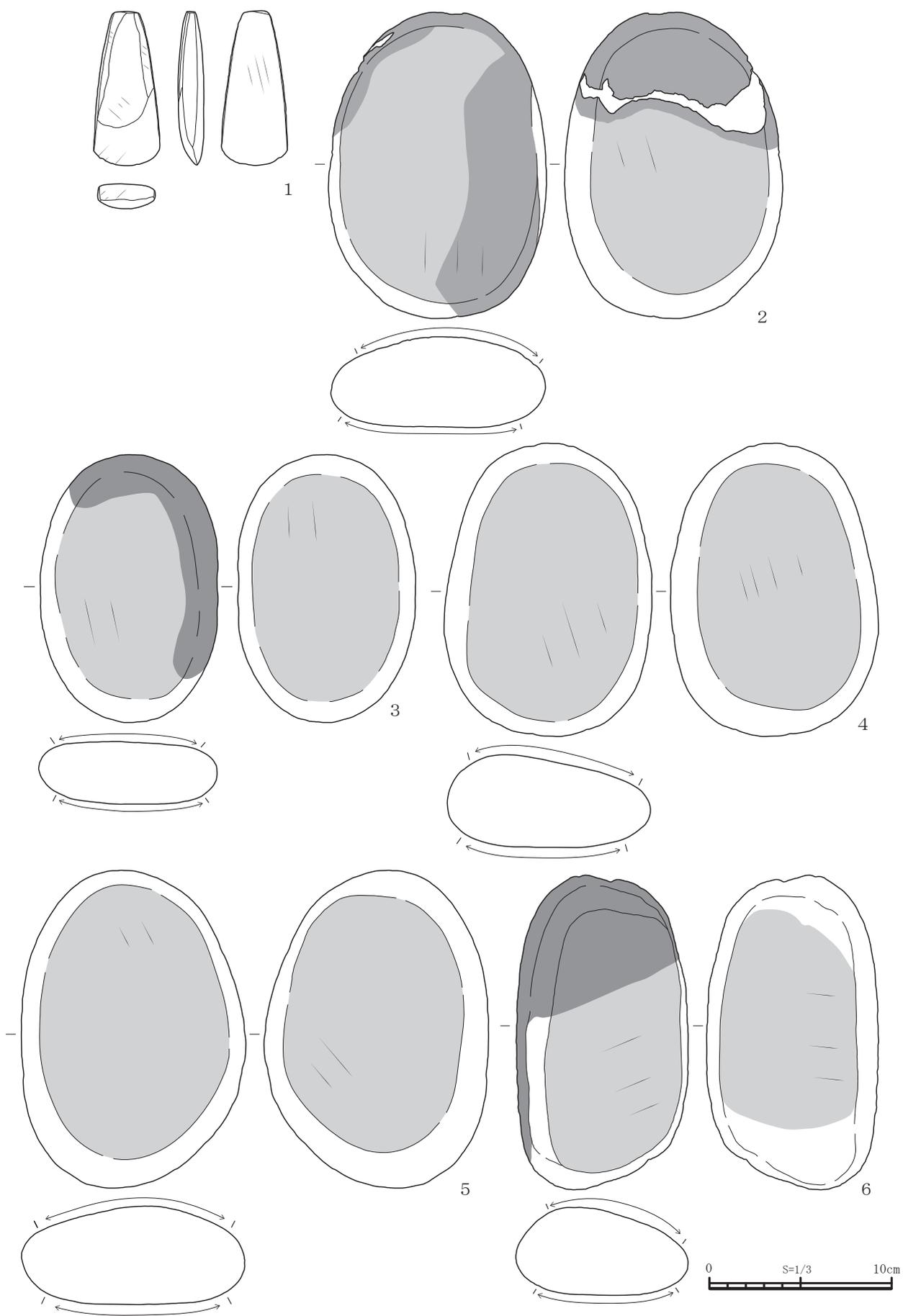


图28 第4号竖穴建物跡(5)

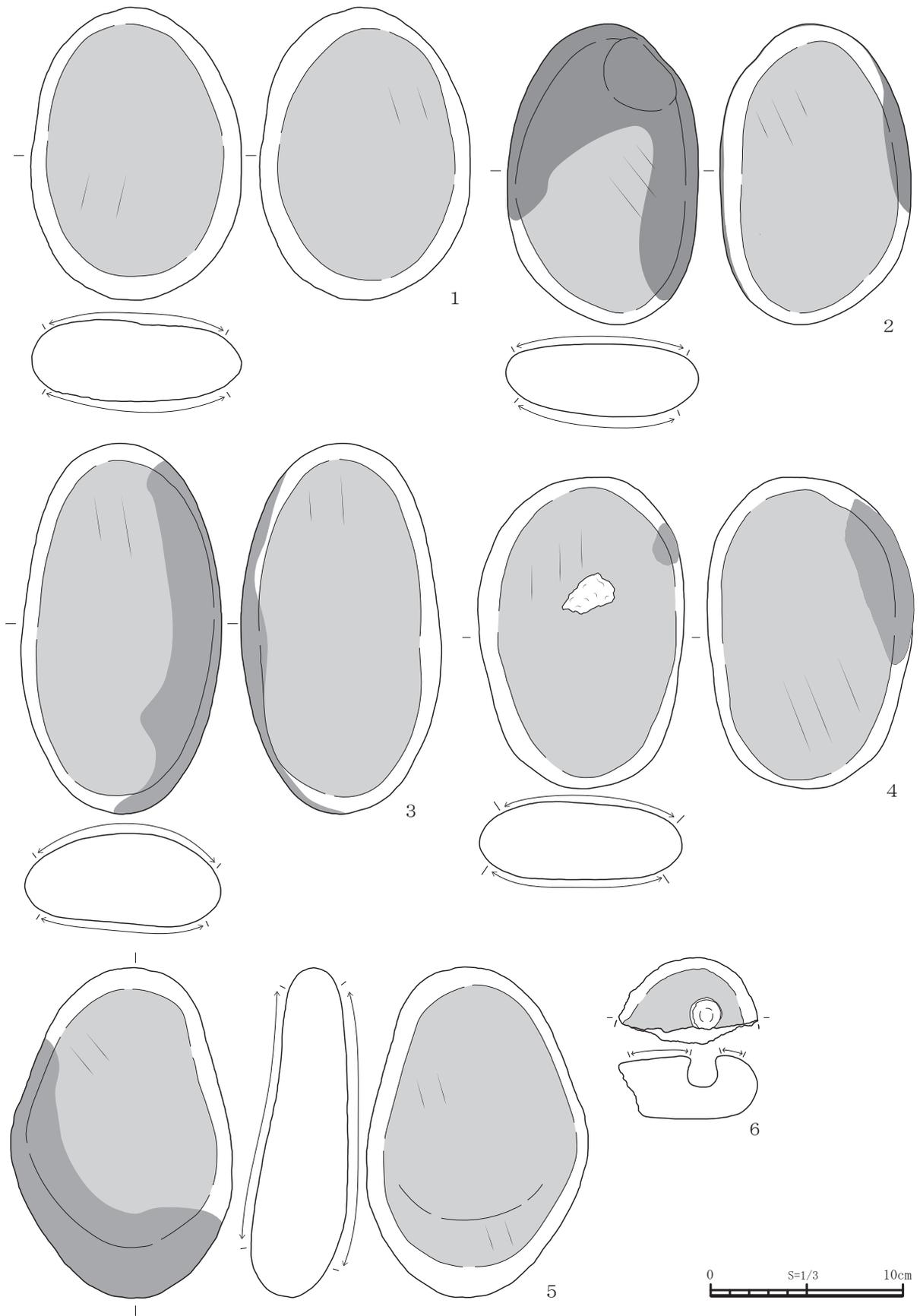


図29 第4号竪穴建物跡(6)



図30 第4号竖穴建物跡(7)



第4号竖穴建物跡調査状況

第5号竖穴建物跡 (SI05) (図 31～33、写真 13～15・36)

【位置・確認】 P～R -39・40 グリッド付近で、炭化物やローム粒を含む黒褐色土や暗褐色土の落ち込みとして確認した。

【重複】 重複なし

【規模・平面形】 床面の長軸長 500 cm×短軸長 390 cmの楕円形を呈する。

【壁面・床面】 壁は最大 30 cmほどの高さが残存していた。床はやや凹凸が存在する。

【堆積土】 床面壁際に褐色土が、その以上は炭化物粒を含む黒褐色・暗褐色土が堆積していた。

【炉跡・柱穴】 住居中心軸上に長軸長 75 cm×短軸長 60 cmほどの石囲炉が構築されている。長さ 15 cmほどの炉石 7 点が、点对称様に 3 点と 4 点に分かれて残存していた。柱穴は、壁際に pit 1～3 が見られ、やや内寄りに pit 4 が検出された。北東側の床面は入念に精査を行ったが、柱穴は検出されなかった。

【出土遺物】 土器が 1,240 g、剥片石器が 205 点・820 g、礫石器は 21 点・12,706g が出土した。

pit 2 堆積土と床面から榎林式土器の深鉢の同一個体が出土している (32- 4～7)。他の堆積土からは、円筒下層 d 式土器と榎林式土器の破片が出土している。

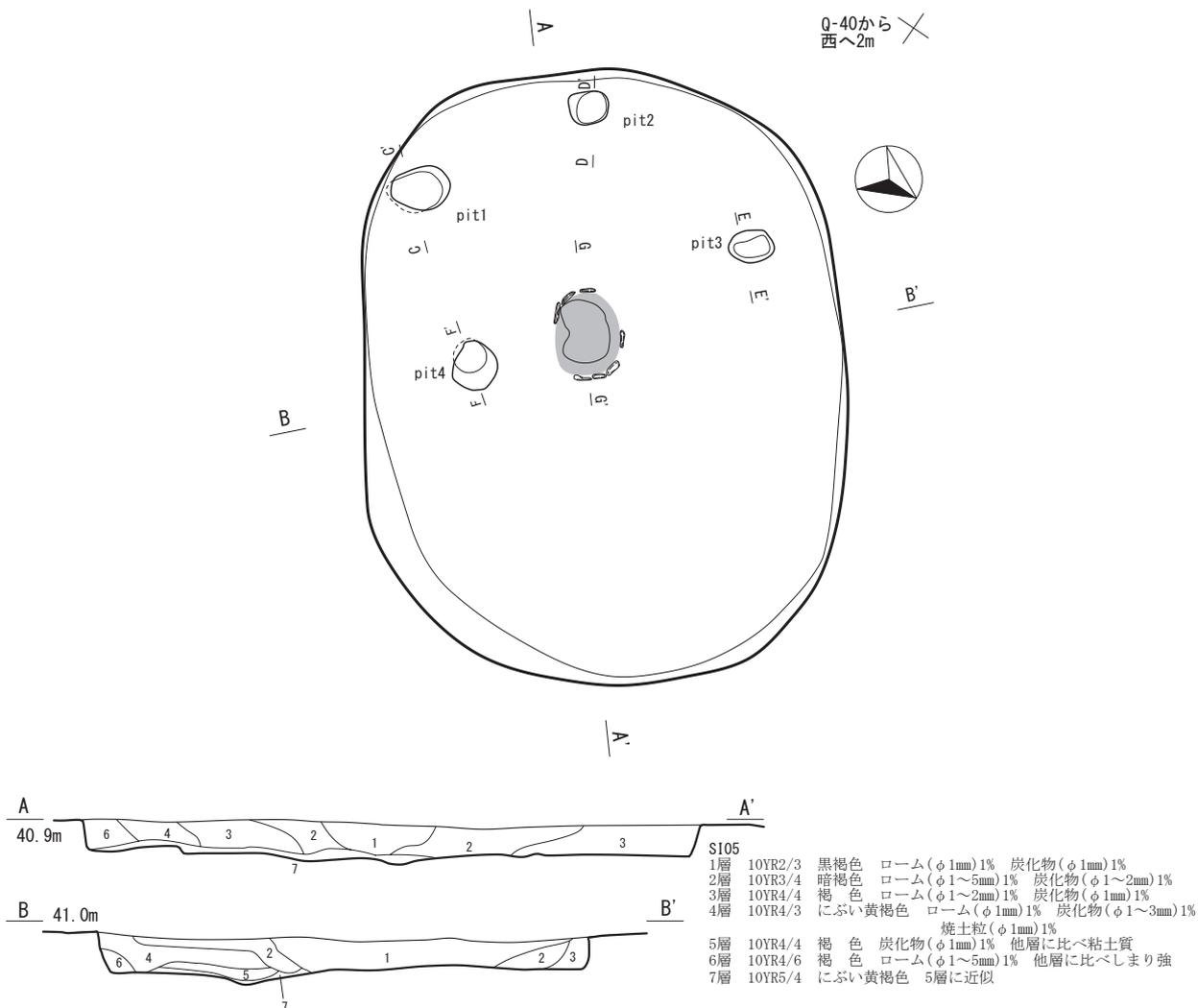
剥片石器は、石鏃 3 点 (8.2g)・石錐 1 点 (3.5g)・石槍 1 点 (26.6g)・スクレイパー 13 点 (157.9g)・二次加工のある剥片 6 点 (92.6g)・微細剥離のある剥片 48 点 (300.3g)・剥片 133 点 (231.4g) が出土した。床面・床面直上からは石鏃 1 点 (5.5g)・石槍 1 点 (26.6g)・スクレイパー 6 点 (89.2g)・二次加工のある剥片 1 点 (6.2g)・微細剥離のある剥片 20 点 (105.2g)・剥片 78 点 (93.0g) の 107 点 (325.7g) が、炉からは微細剥離のある剥片 1 点 (1.2g)・剥片 3 点 (0.8g) の 4 点 (2.0g) が出土している。

礫石器は、磨石 13 点、凹石 1 点、半円状扁平打製石器 1 点、台石 4 点、砥石 1 点、剥片 1 点である。磨石 (32-18・19～33- 1・3)、凹石 (33- 2)、砥石 (図 33- 4) を図示した。遺物は 32-19、33- 2 が堆積土、32-18、33- 1 が床面から、33- 3 が石囲炉の炉石 (図 31 下段) として、33- 4 が炉内堆積土から出土した。

【自然科学分析】 当竖穴建物跡の石囲炉堆積土内より炭化物サンプルを採取し、2 点の放射性炭素年代測定を行った。その結果、2 点とも縄文時代中期後葉に相当する年代値を示した。また石囲炉堆

Q-41

Q-40から
西へ2m



S105-pit1

S105-pit2

S105-pit3

S105-pit4

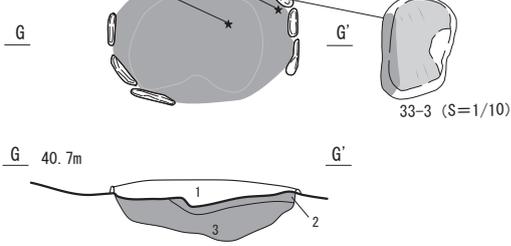
- S105-pit1**
- 1層 10YR5/6 黄褐色 炭化物(φ1~5mm)1%
 - 2層 10YR6/6 明黄褐色 1層よりしまり強
- S105-pit2**
- 1層 10YR5/6 黄褐色 炭化物(φ1~2mm)1%
 - 2層 10YR4/6 褐色 1層よりしまり強
 - 3層 10YR4/4 褐色 2層に近似
- S105-pit3**
- 1層 10YR3/4 暗褐色
 - 2層 10YR4/6 褐色 しまり強
 - 3層 10YR4/6 褐色 粘土質
- S105-pit4**
- 1層 10YR4/4 褐色 しまり強
 - 2層 10YR4/6 褐色 1層に比べてしまり弱
 - 3層 10YR5/4 にぶい黄褐色 ローム混合土

0 S=1/60 1m

C-1(第4章第4節 IAAA-191435)

C-2(第4章第4節 IAAA-191436)

Q-40から
東へ2m

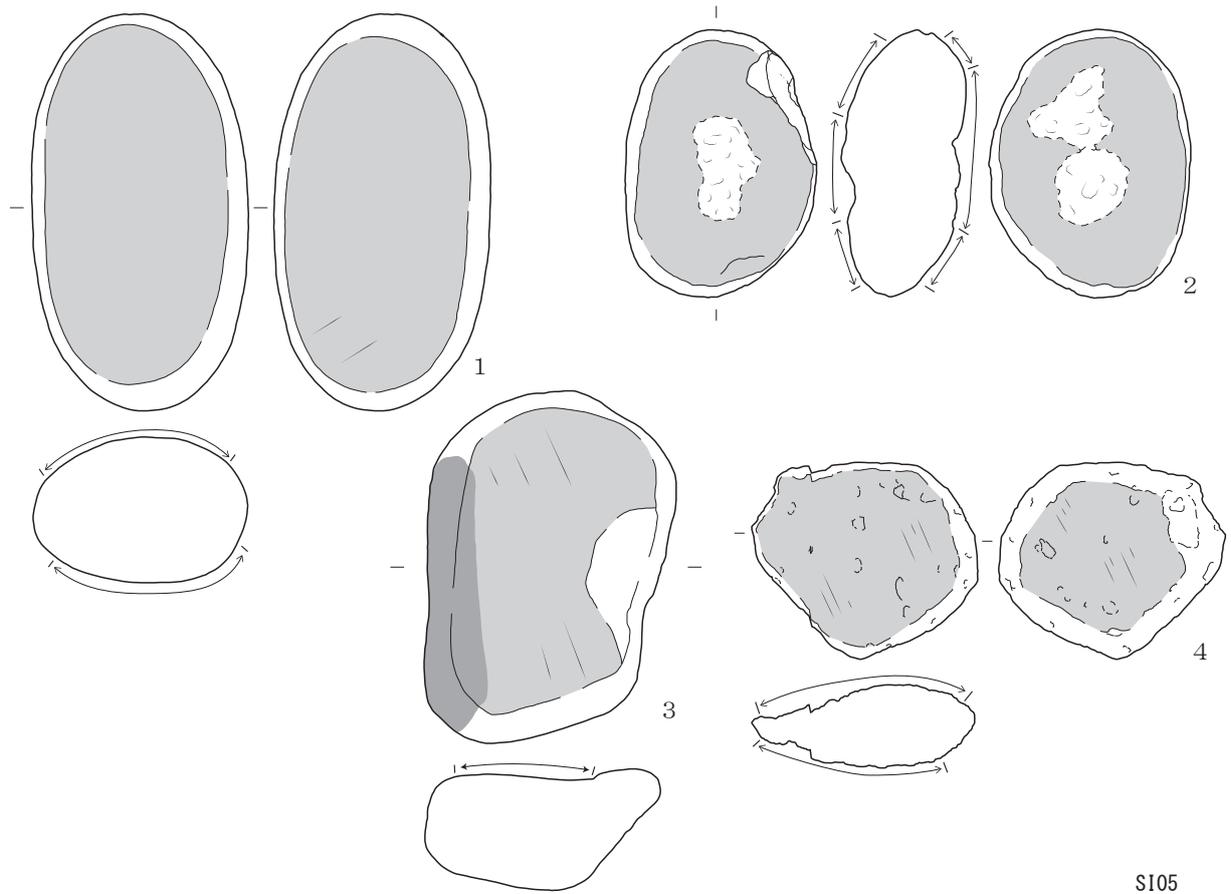


0 S=1/30 1m

図31 第5号竪穴建物跡(1)



図32 第5号竖穴建物跡(2)



S105

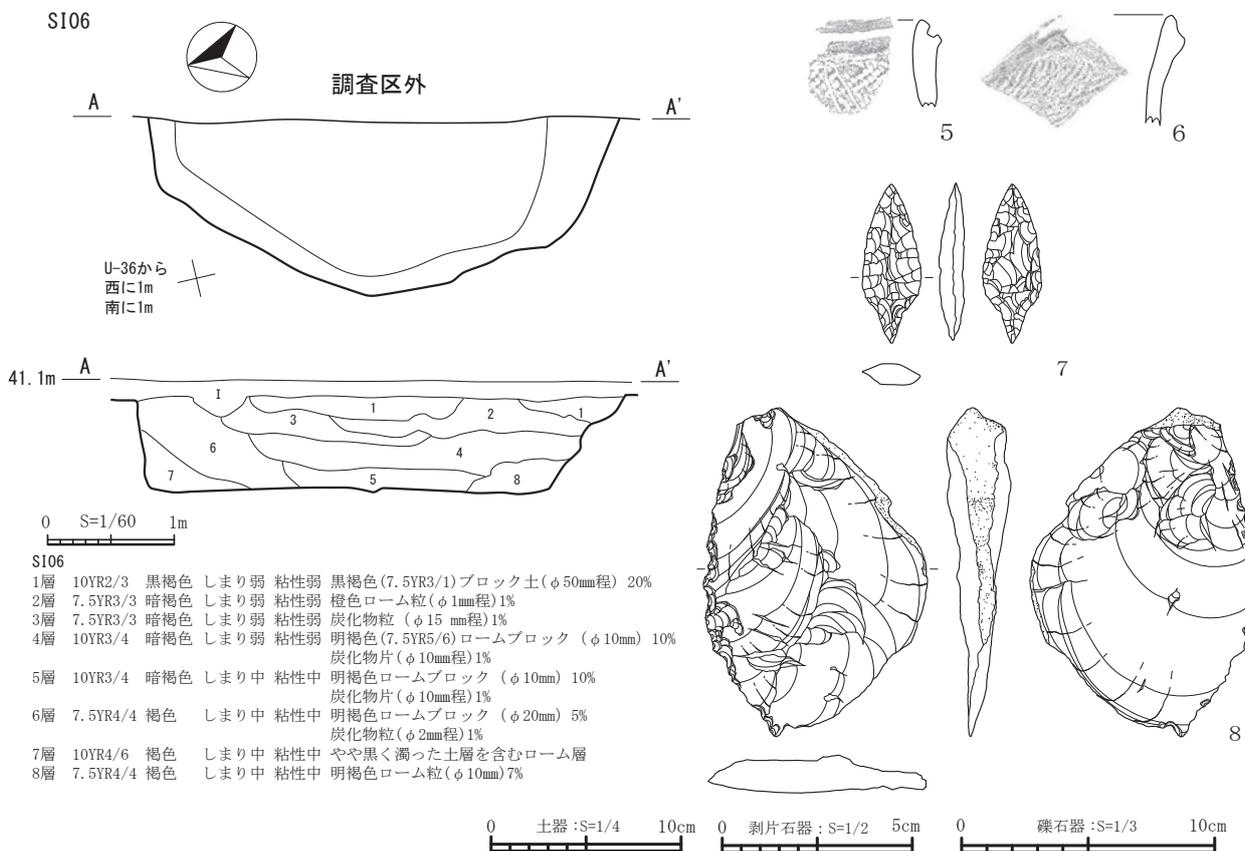


図33 第5号竪穴建物跡(3)・第6号竪穴建物跡

積土から水洗選別した微細遺物の分析を行ったが、現生のものの混入の可能性が指摘されるヤマブドウの種実1点が検出されたのみで、目立った抽出物は得られなかった。

【時期】 pit 2 堆積土と床面出土の土器片、石囲炉の形状や採取サンプルの放射性年代測定結果より、縄文時代中期後葉の榎林式期の竪穴建物跡である。 (永 嶋)

第6号竪穴建物跡 (S106) (図 33、写真図版 16・36)

【位置・確認】 T-36・37 グリッド付近で、黒褐色および暗褐色の落ち込みとして確認した。

【重複】 重複なし。

【規模・平面形】 大部分が調査区外に伸びるが、短軸 300 cm 程の楕円形を呈する可能性がある。

【壁面・床面】 壁面の残りは良好で、全体が 70 cm ほど立ち上がる。床面は平坦である。

【堆積土】 壁際に褐色土が堆積した後、暗褐色土・黒褐色土が上位まで堆積している。

【炉跡・柱穴】 各施設は確認出来なかった。

【出土遺物】 土器が 2,287 g 出土した。榎林式の土器片が僅かに出土している。剥片石器は、石鏃 1 点 (3.0g)・スクレイパー 2 点 (74.8g)・微細剥離のある剥片 3 点 (27.0g)・剥片 31 点 (26.1g) の 37 点 (130.9g) 出土した。床面からは微細剥離のある剥片 2 点 (5.1g)・剥片 21 点 (8.6g) が出土している。

【時期】 竪穴建物跡の一部の検出にとどまり、施設や時期を示す遺物がないため時期不明である。

(永 嶋)

第7号竪穴建物跡 (S107) (図 34～36、写真 16・17・36)

【位置・確認】 Q～R-29・30 グリッドにおいて、炭化物粒や焼土粒を含む暗褐色土の落ち込みとして確認した。

【重複】 重複なし。

【規模・平面形】 床面の長軸長 300 cm×短軸長 260 cm ほどの不整形円形を呈する。

【壁面・床面】 壁面は 35 cm ほど残る部分が多い。床面は比較的平坦である。

【堆積土】 床面壁寄りが褐色土で埋まった後、炭化物粒や焼土粒を含む暗褐色土が堆積している。

【炉跡・柱穴】 床面中央付近に、50×30 cm ほどの焼土と炭化物を含む褐色土が見られ、地床炉と考えた。南側の床面に pit 1 と pit 2 を検出した。Pit 2 は幅 10cm ほどの柱痕が確認できた。

【出土遺物】 土器が 9,755 g、剥片石器が 394 点・1,377 g、礫石器は 9 点・11,111 g が出土した。35-17 が唯一の床面出土の土器である。完形で、口唇部に LR 縄文が施され、口縁部～底部付近にも LR 縄文が縦回転で施されている。その他の土器片は全て堆積土から出土しており、円筒下層 d 式期のものである。中でも 35-16 は胴部から底部付近までの大きな破片で、多軸絡条体原体の軸の痕跡が明瞭に見られる。

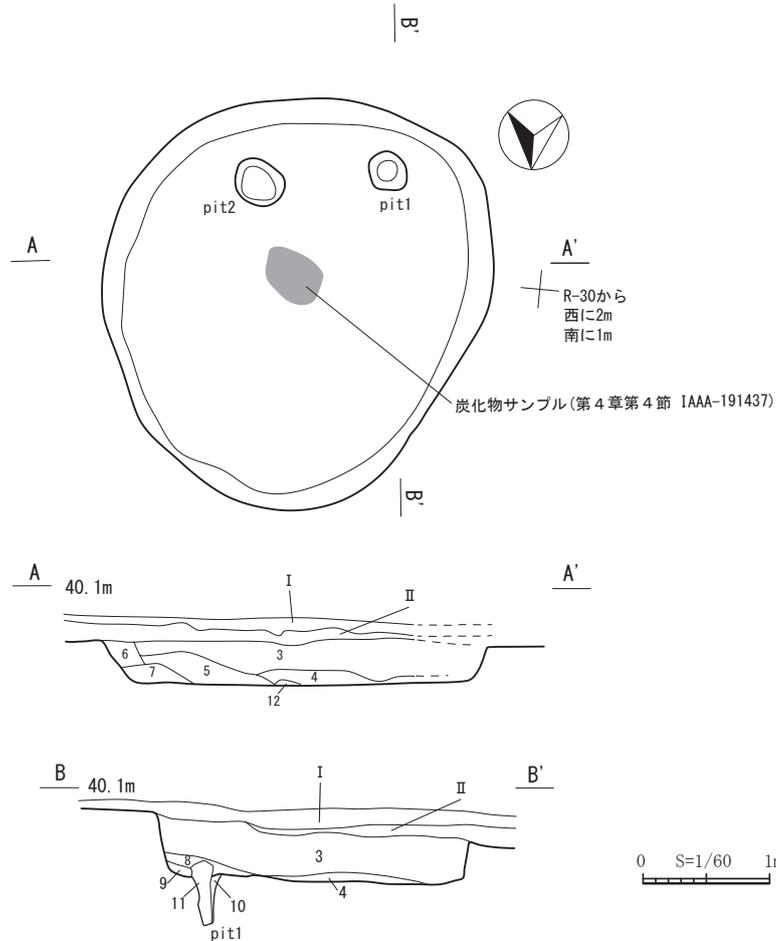
剥片石器は、石鏃 1 点 (2.3g)・石匙 2 点 (45.7g)・石核 1 点 (25.2g)・スクレイパー 6 点 (66.6g)・二次加工のある剥片 9 点 (103.9g)・微細剥離のある剥片 66 点 (560.3g)・剥片 309 点 (573.2g) が出土した。

礫石器は、磨石 7 点と凹石 1 点、台石 1 点である。磨石 (36- 1・3・4) と凹石 (36- 2) 台石 (36- 5) を図示した。遺物は 36- 1・3 が堆積土から、36- 2・4・5 が床面から出土した。

焼成粘土塊が2点、堆積土から出土した。写真 69-3 は、表面が凸凹、4 は指頭圧痕のある小型のものである。

【自然科学分析】地床炉堆積土内より炭化物サンプルを採取し、1 点の放射性炭素年代測定を行った。その結果、縄文時代中期後葉に相当する年代値を示した。

【時期】床面出土の完形土器(35-17)、地床炉からの採取サンプルの放射性年代測定結果より、縄文時代中期後葉の榎林式期の竪穴建物跡の可能性はある。(永嶋)



S107

- 1層 欠番
- 2層 欠番
- 3層 10YR3/4 暗褐色 しまり中 粘性中 橙色ローム粒(φ2mm)5% 炭化物粒(φ5mm以下)1% 焼土粒(φ1mm以下)1%
- 4層 10YR3/4 暗褐色 しまり中 粘性やや強 明褐色ロームブロック(φ5mm)7% 炭化物粒(φ5mm以下)1% 焼土粒(φ1mm以下)1%
- 5層 10YR3/4 暗褐色 しまり中 粘性やや強 橙色ロームブロック(φ30mm)5% 炭化物粒(φ5mm程)1%
- 6層 10YR3/4 暗褐色 しまり弱 粘性中 黄褐色ローム粒(φ10mm)40%
- 7層 7.5YR4/4 褐色 しまり中 粘性中 炭化物粒(φ5mm程)1%
- 8層 7.5YR4/3 褐色 しまり中 粘性中 炭化物粒(φ2mm)1%
- 9層 7.5YR4/3 褐色 しまり中 粘性中 炭化物粒(φ2mm以下)1%
- 10層 7.5YR4/4 褐色 しまり中 粘性やや強 炭化物粒(φ2mm以下)1% 柱穴覆土
- 11層 7.5YR3/4 暗褐色 しまり中 粘性やや強 炭化物粒(φ2mm程)1% 柱痕覆土
- 12層 7.5YR4/4 褐色 しまり中 粘性やや強 焼土ブロック(5YR4/6 φ30mm)30%



第7号竪穴建物跡 床面遺物出土状況(北から)

図34 第7号竪穴建物跡(1)



图35 第7号竖穴建物跡(2)

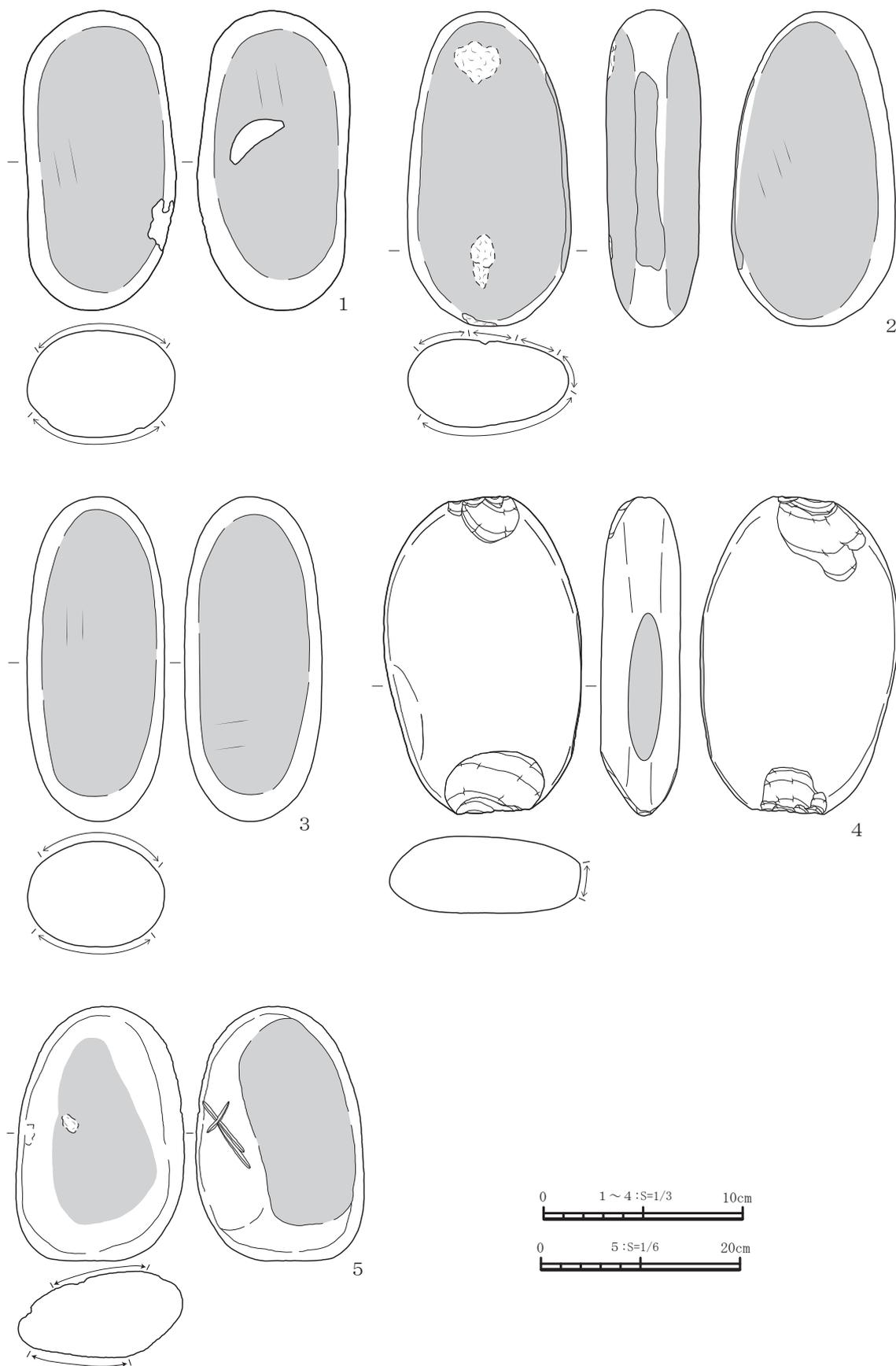


图36 第7号竖穴建物跡(3)

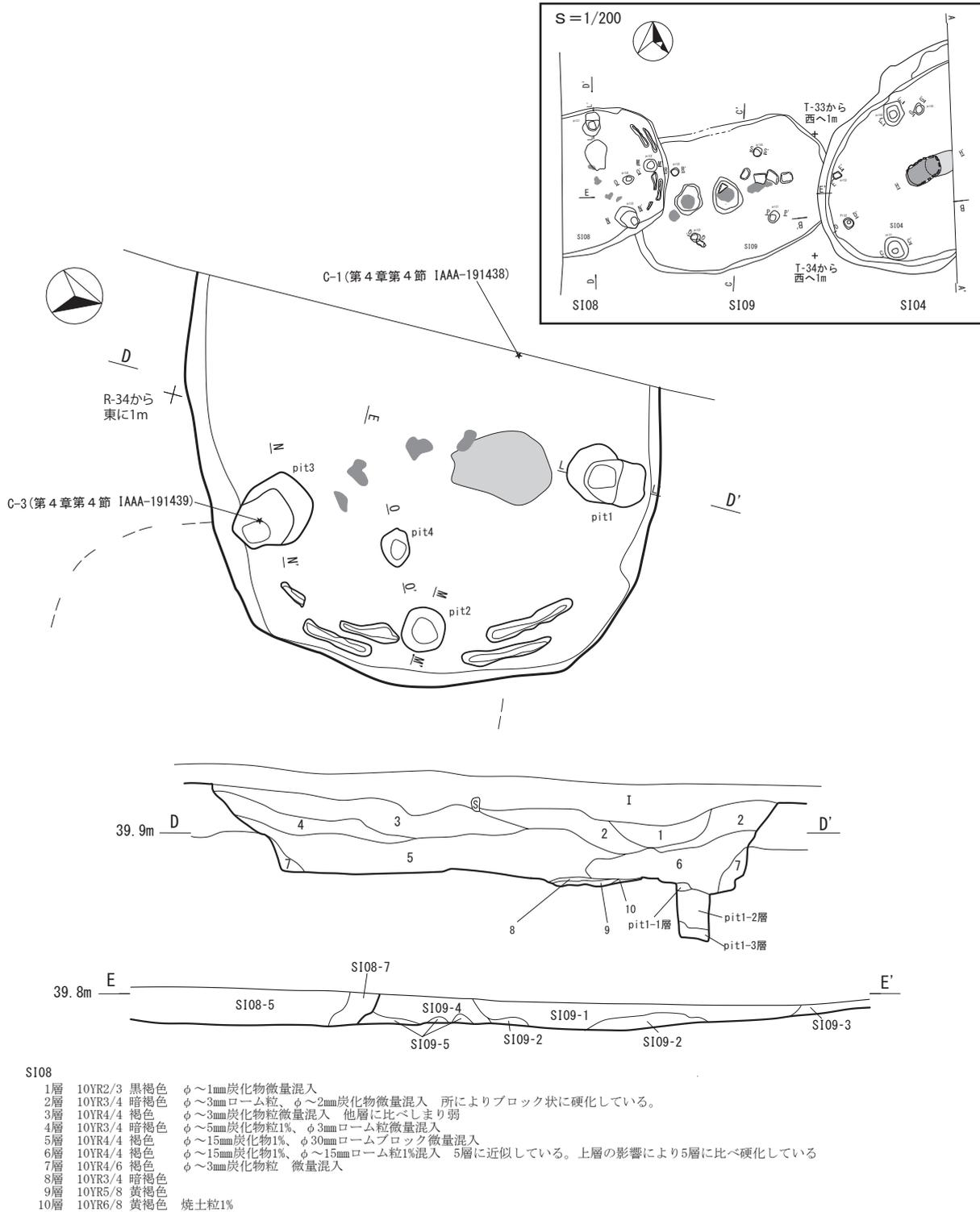


図37 第8号竪穴建物跡(1)

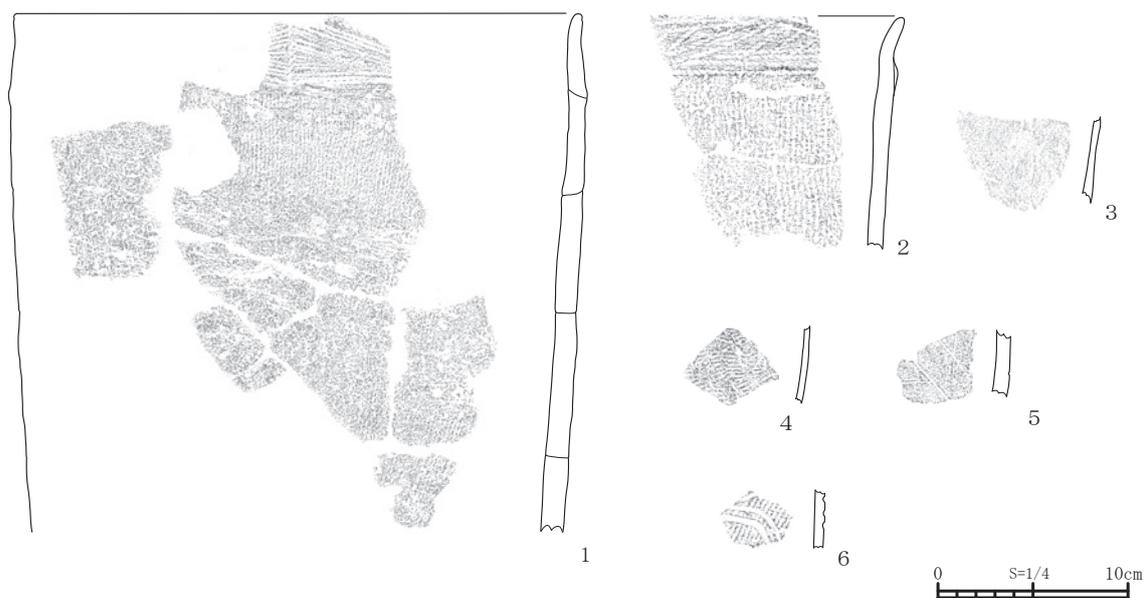


図38 第8号竪穴建物跡(2)

第8号竪穴建物跡 (SI08) (図 37～39、写真 18・37)

【位置・確認】 Q・R -32・33 グリッド付近で、炭化物粒を含む暗褐色土・褐色土の落ち込みとして確認した。

【重複】 第9号竪穴建物跡と重複し、本建物跡が新しい。

【規模・平面形】 半分ほどが調査区外に伸びると考えられるが、現寸値は、床面の長軸側は 380 cm 程度を測り、短軸長は 430 cm である。楕円形を呈する可能性が高い。

【壁面・床面】 壁面は、最大 90 cm 残存する部分もある。比較的平坦である。

【堆積土】 遺構確認段階で堆積土 1・2 層を確認したが、それ以下は褐色や明黄褐色の土層であった。

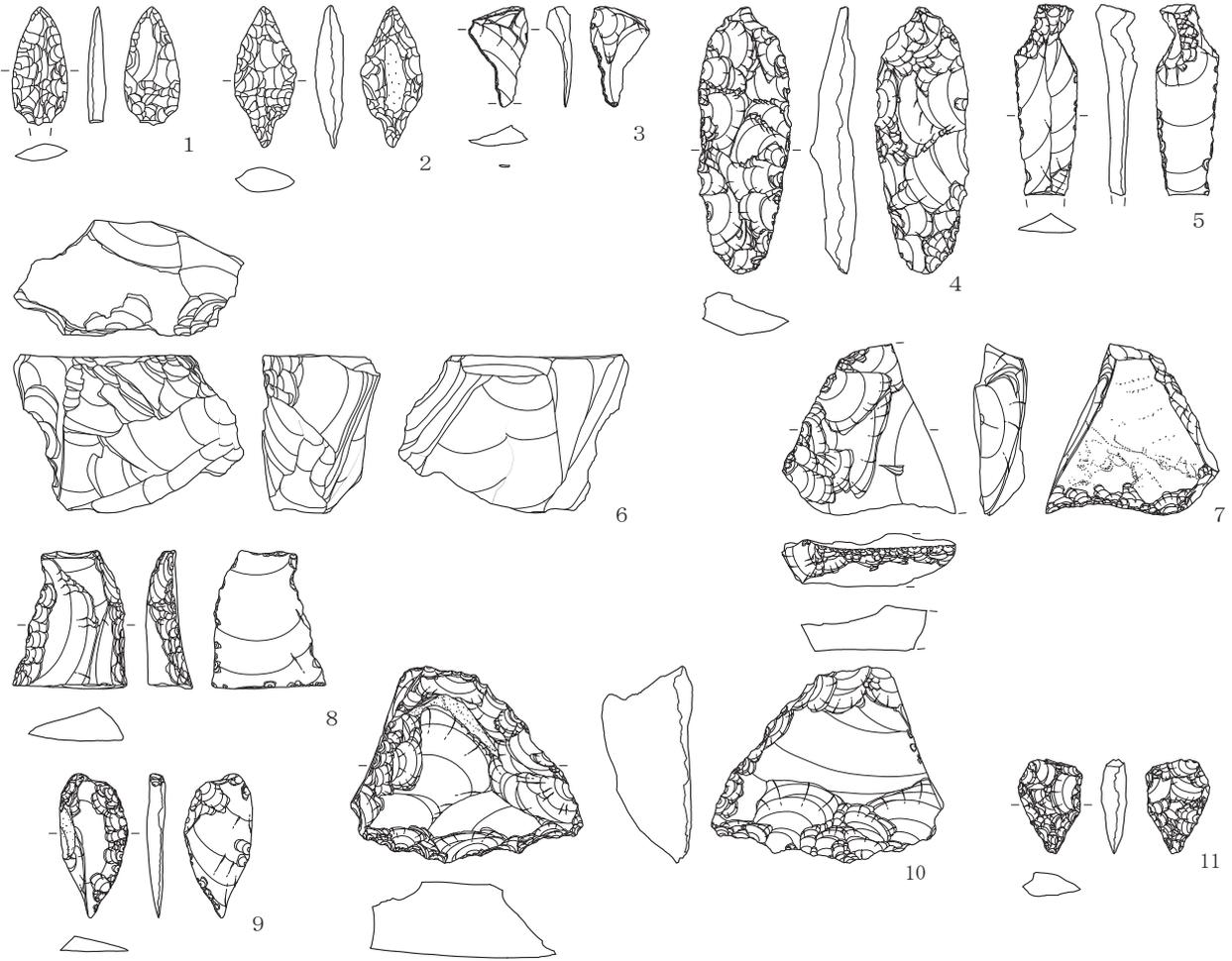
【炉跡・柱穴】 中央付近に 4 箇所の焼土が見られるが、炉跡であるかは不明である。柱穴は壁際に 3 基 (pit 1～3) が見られ、1 基 (pit 4) はやや内側に配されている。壁周溝は短軸側壁面に 2 重で残存しており、建物の拡張がなされたものと考えられる。

【出土遺物】 土器が 11,905 g、剥片石器が 228 点・1,595 g、礫石器は 7 点・6,863 g が出土した。ほとんどが堆積土出土の土器片である。38-1・2 は円筒下層 d 式期の土器であるが、3～6 は縄文時代後晩期の土器片と考えている。

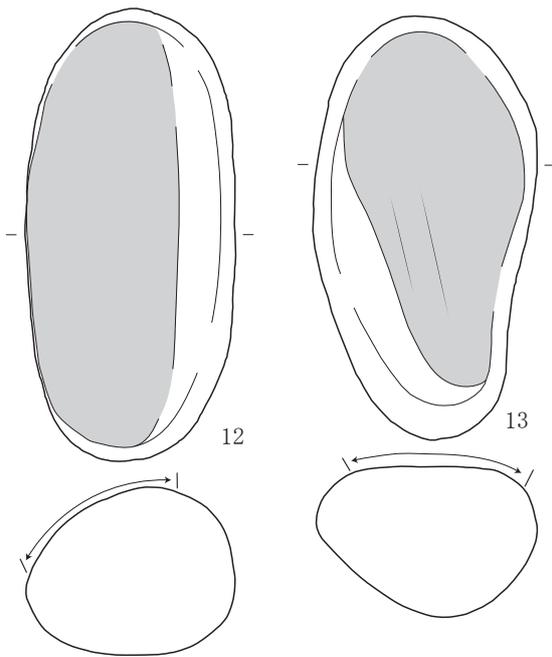
剥片石器は、石鏃 2 点 (5.8g)・石錐 1 点 (1.3g)・石槍 1 点 (16.0g)・石匙 1 点 (4.9g)・石核 4 点 (289.2g)・スクレイパー 11 点 (78.7g)・二次加工のある剥片 9 点 (255.1g)・微細剥離のある剥片 58 点 (387.3g)・剥片 141 点 (557.0g) が出土した。床面からは石槍 1 点 (16.0g)・二次加工のある剥片 1 点 (2.8g) が出土している。

礫石器は、磨石 3 点、半円状扁平打製石器 2 点、台石 1 点、剥片 1 点である。床面から出土した 2 点の磨石 (39-12・13) を図示した。

【自然科学分析】 地床炉堆積土内より炭化物サンプルを採取し、2 点の放射性炭素年代測定を行った。その結果、縄文時代中期後葉に相当する年代値を示した。また地床炉堆積土から水洗選別した微細遺物の分析を行ったが、菌核が多く、目立った抽出物はなかった。



0 S=1/2 5cm



0 S=1/3 10cm

【時期】 時期を示す良好な出土状況の遺物はなかったが、地床炉からの採取サンプルの放射性年代測定結果より、縄文時代中期後葉の榎林式期の竪穴建物跡の可能性はある。（永 嶋）

図39 第8号竪穴建物跡(3)

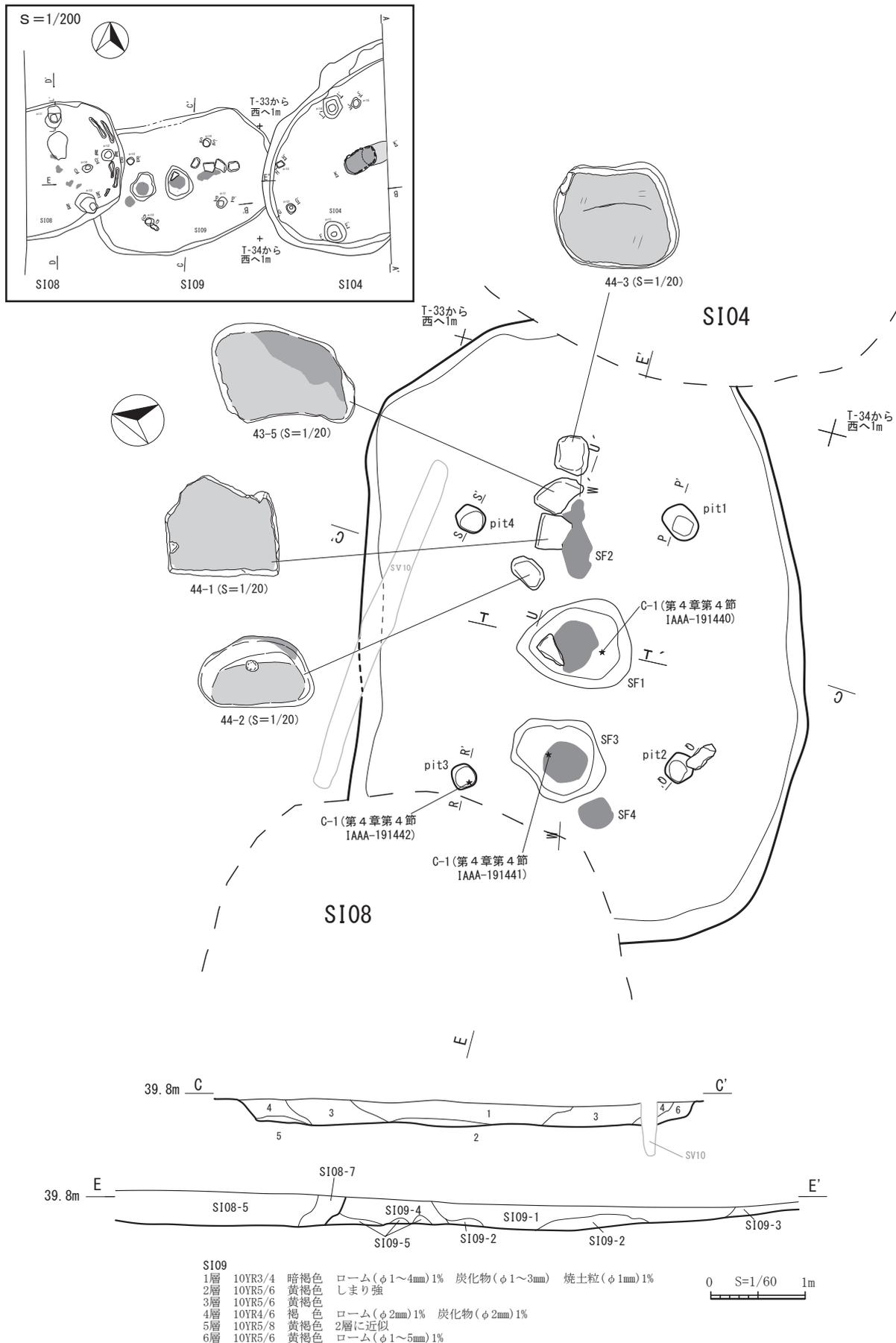


図40 第9号竪穴建物跡(1)

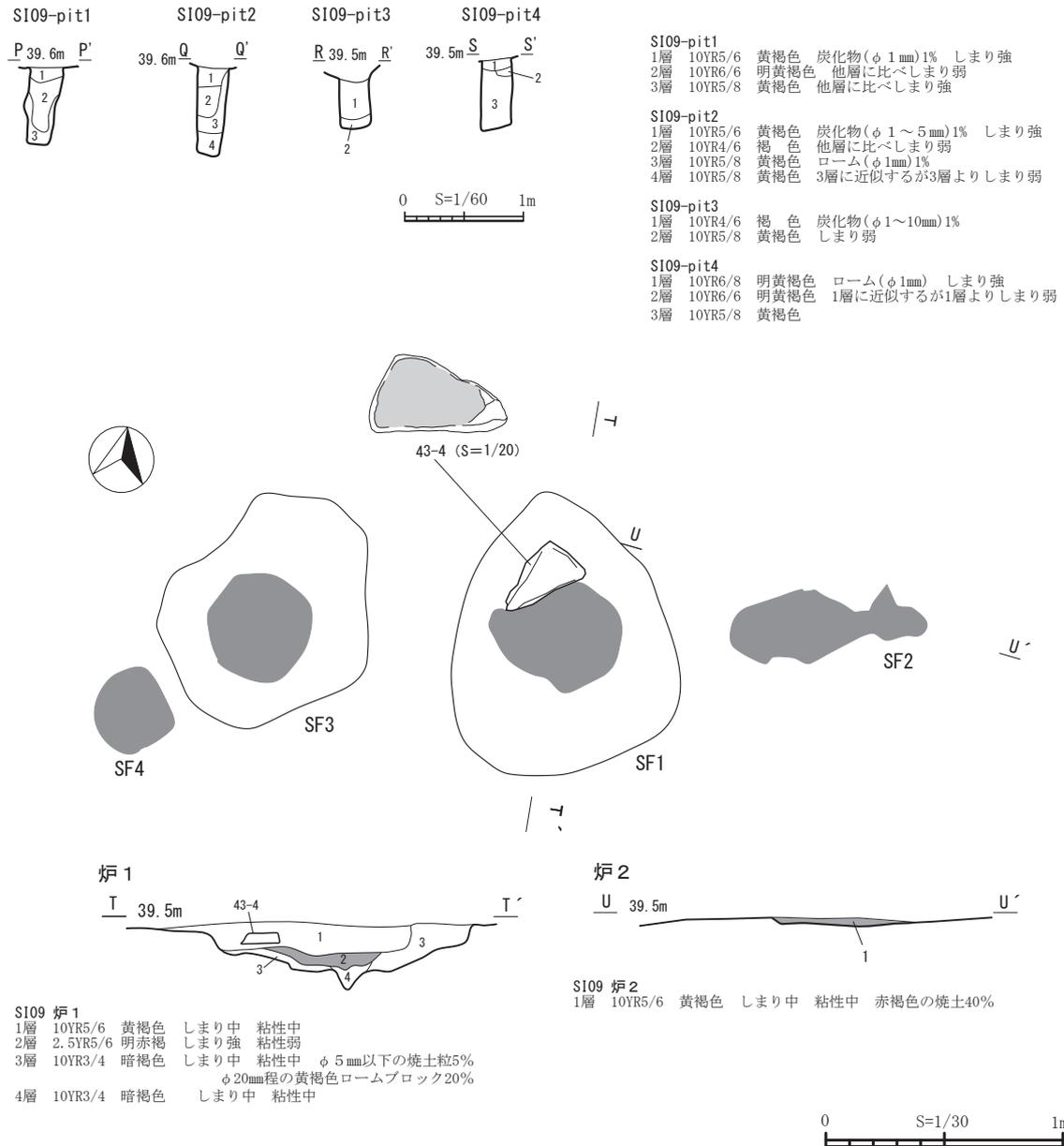


図41 第9号竪穴建物跡(2)

第9号竪穴建物跡(S109)(図40~44、写真19・20・37・38)

【位置・確認】R・S-32~34グリッドで、暗褐色土や黄褐色土の落ち込みとして確認した。

【重複】第4号竪穴建物跡と第8号竪穴建物跡と重複し、当竪穴建物跡が一番古い。

【規模・平面形】床面の長軸長610×短軸長430cmである。楕円形または隅丸方形を呈する。

【壁面・床面】壁面は、全体に30cmほどの残存である。床面は平坦である。

【堆積土】壁際に地山由来の黄褐色土や褐色土の崩落土が見られ、最終的に暗褐色土が堆積している。

【炉跡・柱穴】中央付近に3箇所の炉跡が残り、もう1箇所焼土が検出されている。炉は床面を掘り下げた面で、火を焚いた痕跡がある。中央の炉を囲むように4本の支柱穴が配されている(pit1~4)。

【出土遺物】土器が5,822g、剥片石器が133点・956g、礫石器は34点・167,228gが出土した。

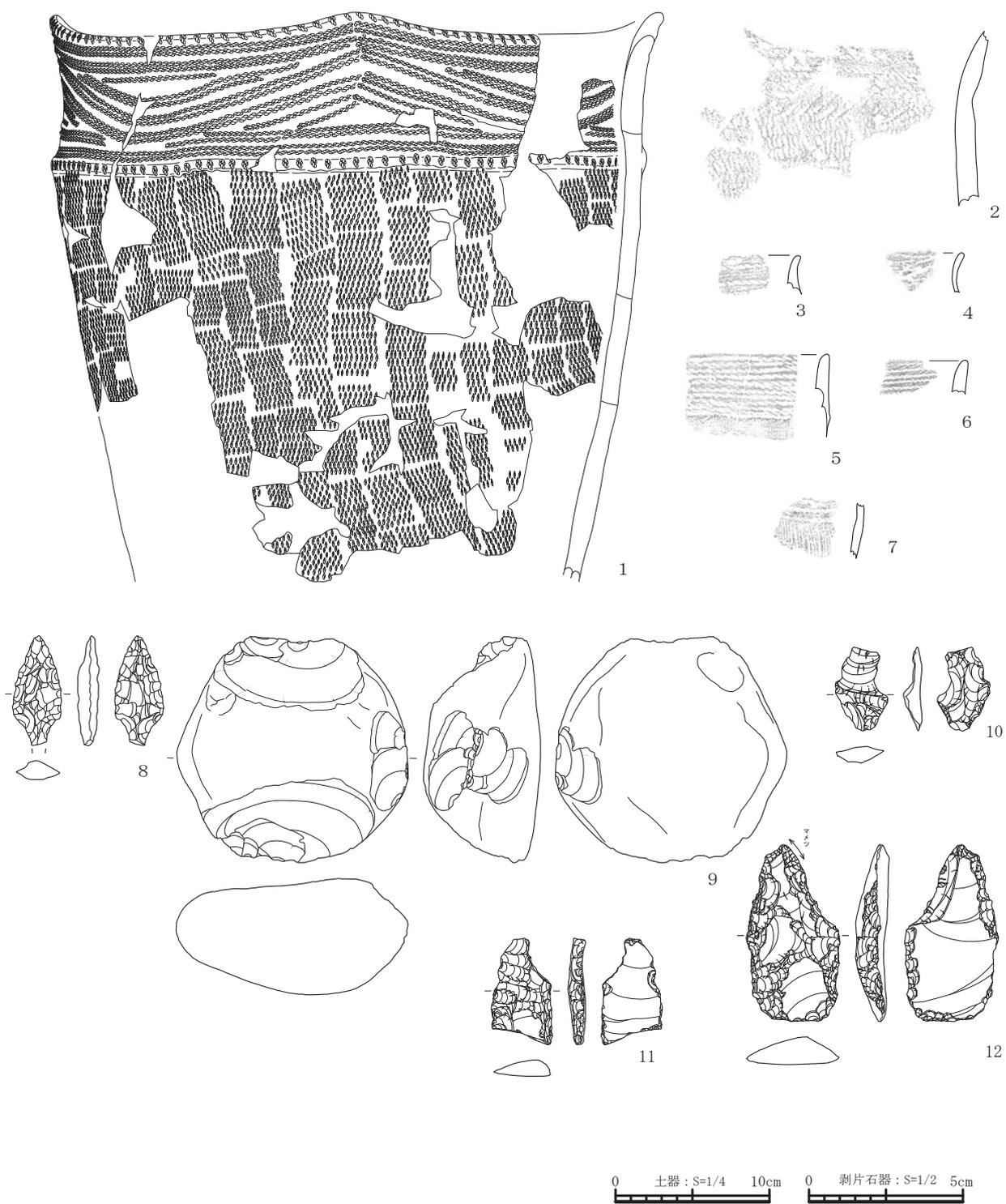


图42 第9号竖穴建物跡(3)

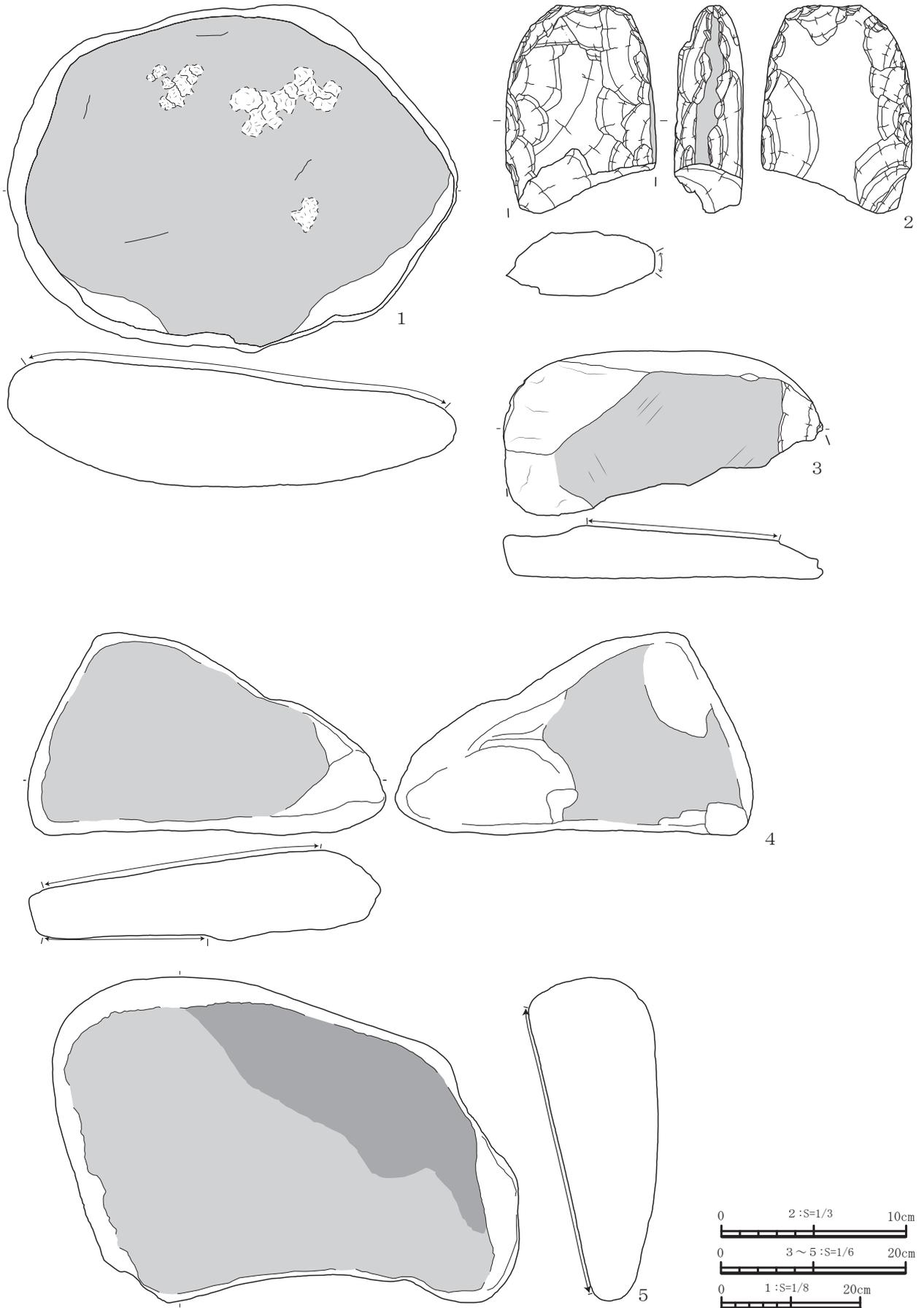


図43 第9号竪穴建物跡(4)

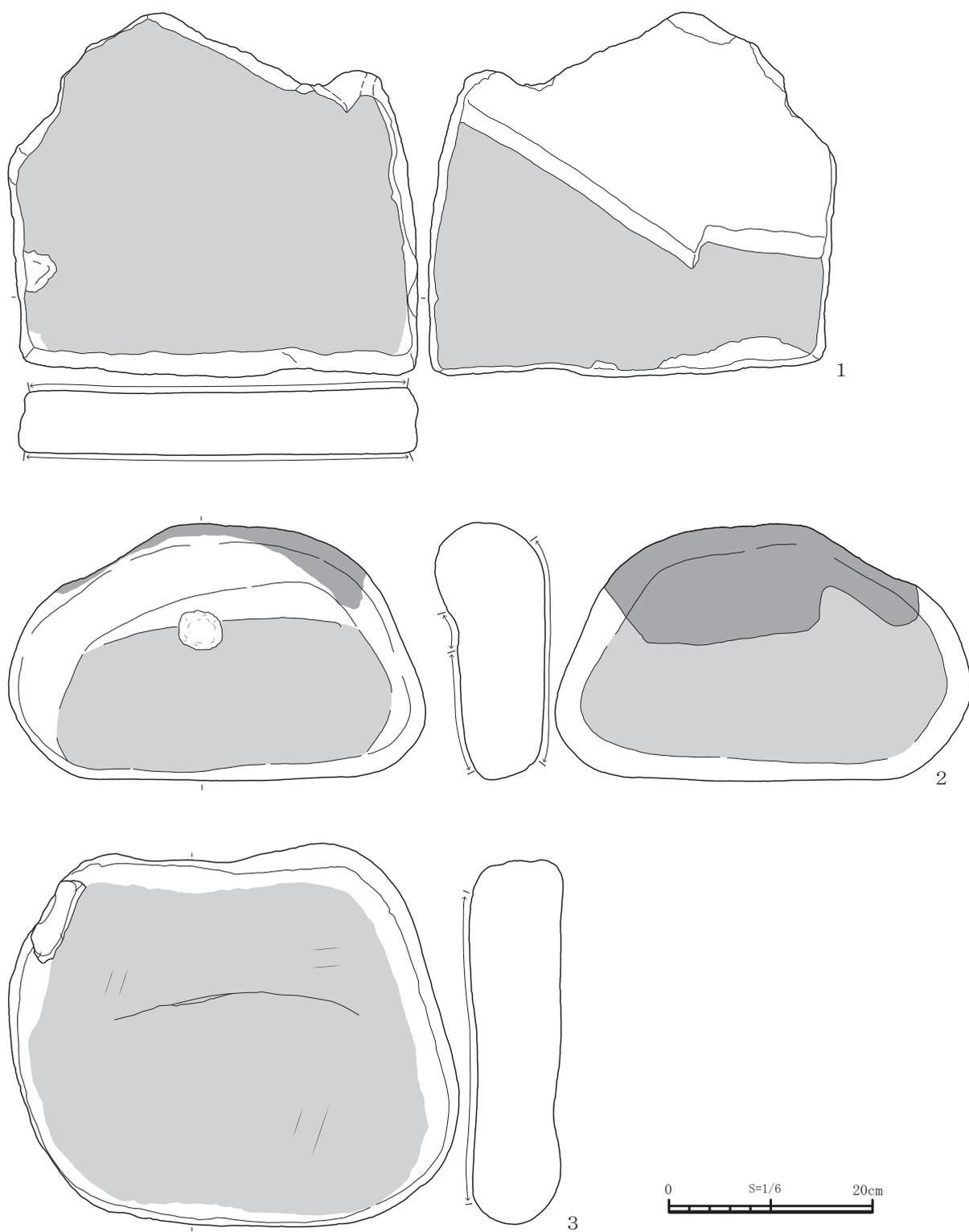


图44 第9号竖穴建物跡(5)

42- 1は床面や炉の中から出土したもので、口径40cmの大型の円筒下層d2式土器である。その他の床面や堆積土出土の土器片も円筒下層d式土器のものである。

剥片石器は、石鏃1点(3.2g)・石槍1点(2.9g)・石匙1点(7.5g)・石核1点(221.1g)・スクレイパー9点(108.5g)・二次加工のある剥片4点(54.6g)・微細剥離のある剥片36点(354.2g)・剥片80点(204.7g)が出土した。床面からは石槍1点(2.9g)・スクレイパー3点(14.9g)・二次加工のある剥片2点(35.8g)・微細剥離のある剥片7点(103.5g)・剥片29点(73.4g)の42点(230.5g)が、炉からは剥片7点(4.9g)が出土している。

礫石器は、磨石10点、敲石1点・凹石2点、半円状扁平打製石器6点、台石8点、剥片7点である。床面から出土した半円状扁平打製石器(43- 2)、台石(43- 1・3~5、44- 1~3)を図示した。

焼成粘土塊が2点、炉の堆積土から出土した。写真69- 5は指頭圧痕とつまみがつく。

【自然科学分析】地床炉堆積土内より炭化物サンプルを採取し、2点の放射性炭素年代測定を行った。その結果、縄文時代中期後葉に相当する年代値を示した。また地床炉堆積土から水洗選別した微細遺物の分析を行った。その結果、遺跡周辺に生育していたと考えられるタデ属・ナス属の炭化種実が僅かに確認された。また微細な骨片も堆積土中から1点出土したが、詳細な同定には至らなかった。

【時期】床面や炉から出土した図42-1や地床炉からの採取サンプルの放射性年代測定結果より、縄文時代前期後葉の円筒土器下層d式の竪穴建物跡の可能性が高い。(永嶋)

(3) 土坑(図45~56、写真21~26・38~41)

土坑は上端形状が円形のもの20基を検出した。3箇所程度の集中が見られ、調査区南側の台地縁辺から落ち際のSI01周辺にSK01~03・05~08・10・15・18、台地上の緩やかな尾根筋であるSI05の南側にSK04・11~14・17、急斜面の捨て場付近のSK16・19~21である。出土遺物より帰属時期を判断できそうなものはSK03が大木10式併行期、SK05が十腰内I式期、SK16が円筒下層d式、SK18が榎林式~大木10式併行期、SK21が円筒下層d式期である。また放射性炭素年代測定法によって、十腰内I式が出土しているSK05の炭化物サンプルは円筒下層d式期に近い測定値を示し、SK10は榎林式期、SK14は円筒下層d式期に近い測定値であった。

第1号土坑(SK01)(図45、写真21)

【位置・確認】J-52グリッドにおいて、暗褐色土の落ち込みとして確認した。

【重複】無し。

【規模・平面形・壁面】108×90cm程の楕円形を呈し、壁面は一部フラスコ状に立ち上がる。

【堆積土】暗褐色土が堆積している。

【出土遺物】土器が36g、剥片石器が4点・27gが出土した。帰属時期を示す遺物の出土は無かった。

【時期】帰属時期不明であるが、周辺遺構から縄文時代の土坑である可能性が高い。

第2号土坑(SK02)(図45・49、写真21・38)

【位置・確認】J-48グリッドにおいて、炭化物粒を含むにぶい黄褐色の落ち込みとして確認した。

【重複】無し。

【規模・平面形・壁面】120 × 115 cm程の円形を呈し、壁面はフラスコ状に立ち上がる。

【堆積土】底面は壁面崩落の黄褐色土が堆積し、その後も同様のこぶい黄褐色土が堆積している。

【出土遺物】土器が2,714 g、剥片石器が61点・439 gが出土した。49-1は底面近くから出土した円筒下層d式の大型破片である。そのほかにも堆積土中から同様の時期の土器片が出土している。

剥片石器は、石槍1点(18.3g)・スクレイパー2点(14.2g)・二次加工のある剥片3点(30.9g)・微細剥離のある剥片14点(190.8g)・剥片41点(185.2g)が出土した。

【時期】床面近く出土の土器片より、縄文時代前期後葉円筒下層d式期と考えられる。

第3号土坑(SK03)(図45・49、写真21・39)

【位置・確認】J-50・51グリッドのSI01床面において、倒立気味の土器(49-10)を検出し、その周辺の褐色土の落ち込みとして確認した。

【重複】SI01と重複し、当土坑が新しい。

【規模・平面形・壁面】底面は110 × 90 cm程の隅丸方形を呈し、壁面はやや開きながら立ち上がる。

【堆積土】黒褐色土を多く含む褐色土が堆積している。

【出土遺物】土器が1,496 g、剥片石器が65点・86 gが出土した。49-10はR単軸絡条体1類が縦位に施される深鉢、11はRL縄文が充填された逆U字文が口頸部～胴部上半に施され、胴部下半にRL縄文が充填される波頭文が施されるもので、共に大木10式併行期のものである。10は底面下面に板目状の痕跡が残る。剥片石器は、微細剥離のある剥片12点(48.8g)・剥片53点(37.9g)が出土した。

【時期】床面出土の土器より、縄文時代中期末葉大木10式併行期の土坑と考えられる。

第4号土坑(SK04)(図45・49、写真22・39)

【位置・確認】P-42グリッドにおいて、直径2 m近い黒色土の落ち込みとして確認した。

【重複】無し

【規模・平面形・壁面】底面は一辺150 cmほどの隅丸方形を呈し、上端は直径180 cmほどの円形を呈する。壁面高さは140 cmほどで、ほぼ真上に立ち上がっている。

【堆積土】底面壁際には壁面崩落土である黄褐色土や褐色土が堆積し、その内側や上位には黒褐色土や暗褐色土が堆積している。

【出土遺物】土器が207 g、剥片石器が8点・100 g、礫石器は2点・5,373gが出土した。帰属時期を示すような土器片は出土しなかったが、石器は、スクレイパー1点、二次加工ある剥片1点、石核1点、磨石1点、浮子とされる軽石製品1点が出土した。

剥片石器は、石核1点(54.2g)・スクレイパー1点(16.3g)・二次加工のある剥片1点(4.9g)・微細剥離のある剥片4点(21.7g)・剥片1点(3.0g)が出土した。

礫石器は、堆積土から軽石製浮子(49-17)と台石(49-16)が1点ずつ出土した。16は表裏面ともに中央付近が研磨により平滑である。17は表面の中央に縦方向に半周する溝が作出される。

【時期】帰属時期を示す遺物は出土しなかったが、土層や出土した土器片・石器から、縄文時代の土坑と考えられる。

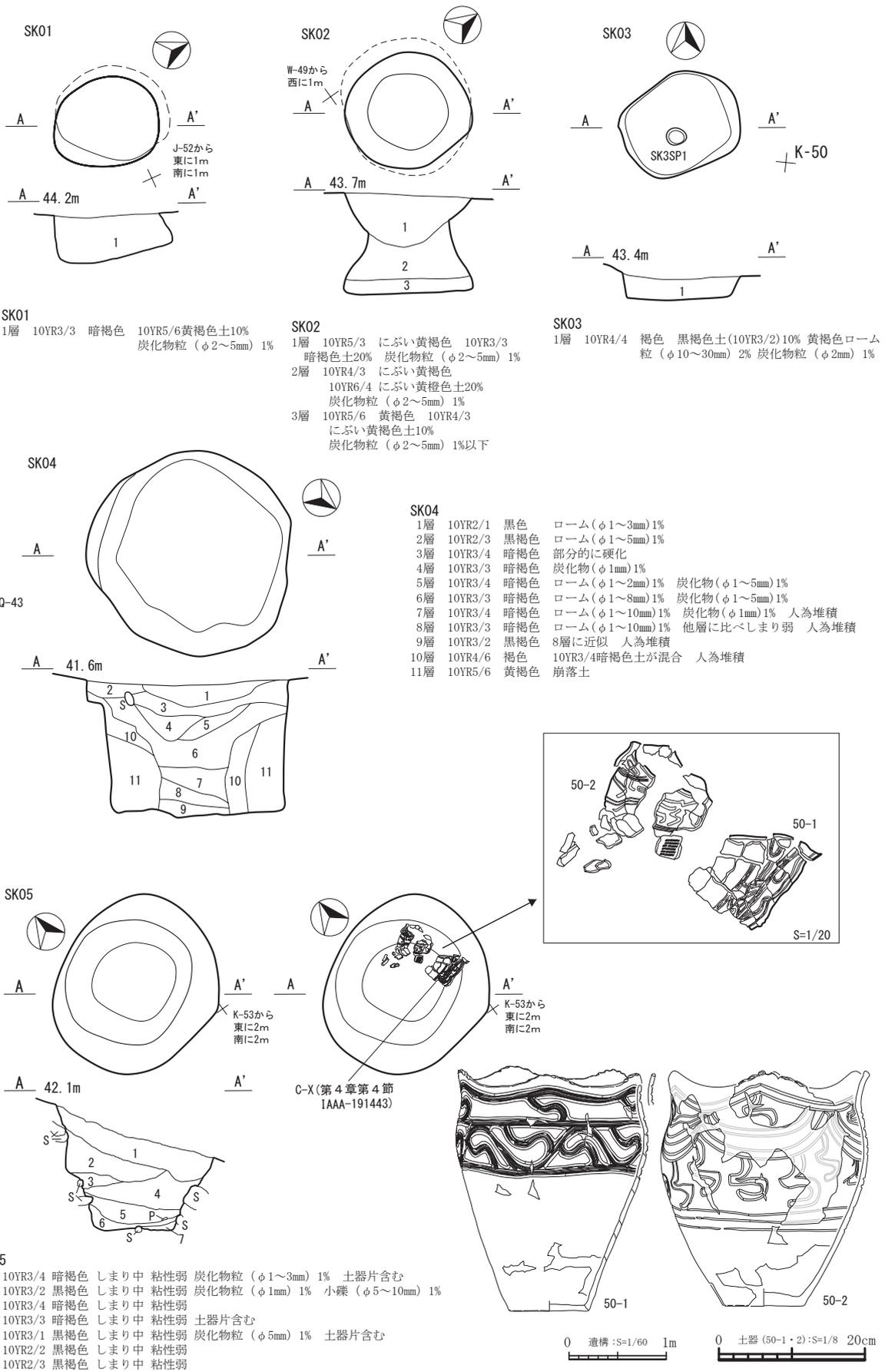


図45 土坑(1)

第5号土坑 (SK05) (図 45・50・51、写真 22・39)

【位置・確認】 K -53 グリッドにおいて、暗褐色の落ち込みとして確認した。

【重複】 無し

【規模・平面形・壁面】 底面は直径 90 cmほどの円形を呈し、上端は 180 × 150 cmほどの楕円形を呈する。壁面は 130 cmほどの高さで、外側に開きながら立ち上がっている。

【堆積土】 黒褐色や暗褐色土の土層が堆積している。

【出土遺物】 土器が 9,651 g、剥片石器が 110 点・627 g、礫石器は、3 点・298 g が出土した。土坑底面から十腰内 I 式期の有文深鉢 2 点 (50- 1・2) が土圧で潰れたような状態で出土した。

剥片石器は、石鏃 1 点 (1.3g)・石錐 1 点 (5.2g)・石核 2 点 (85.0g)・スクレイパー 9 点 (128.9g)・二次加工のある剥片 1 点 (1.0g)・微細剥離のある剥片 24 点 (236.7g)・剥片 72 点 (169.1g) が出土した。底面からは微細剥離のある剥片 2 点 (5.1g)・剥片 2 点 (1.5g) が出土している。

礫石器は堆積土から、半円状扁平打製石器 1 点と剥片 2 点が出土した。

【自然科学分析】 当土坑底面から出土の十腰内 I 式土器と共に出土した炭化物片 1 点の放射性炭素年代測定値は、想定していた縄文時代後期前葉を示すものではなく、縄文時代前期後葉頃の値を示した (第 4 章第 4 節参照)。また微細遺物の選別と同定を行ったが、目立った抽出物は見られなかった。

【時期】 底面出土の十腰内 I 式土器の存在から、縄文時代後期前葉の土坑と考えられるが、放射性炭素年代測定結果は、より古い測定値を示している。回帰的・重層的な場の利用により、古い炭化物が縄文時代後期以降の堆積土に含まれていた可能性がある。

第6号土坑 (SK06) (図 46・51、写真 23・40)

【位置・確認】 J -53 グリッドにおいて、褐色の落ち込みとして確認した。

【重複】 無し

【規模・平面形・壁面】 底面は 110 × 80 cmほどの楕円形、上端は 150 × 140 cmほどの楕円形を呈する。壁面は 120 cmほどの高さで、外側に開きながら立ち上がっている。

【堆積土】 褐色や黄褐色土の土層が堆積している。

【出土遺物】 土器が 2,125 g、剥片石器が 16 点・205 g、礫石器は 2 点・599 g が出土した。堆積土上位から円筒下層 d 式土器の小片が出土している。

剥片石器は、石鏃 1 点 (1.6g)・石匙 1 点 (12.9g)・石核 2 点 (121.8g)・スクレイパー 1 点 (12.7g)・微細剥離のある剥片 4 点 (44.9g)・剥片 7 点 (11.8g) が出土した。

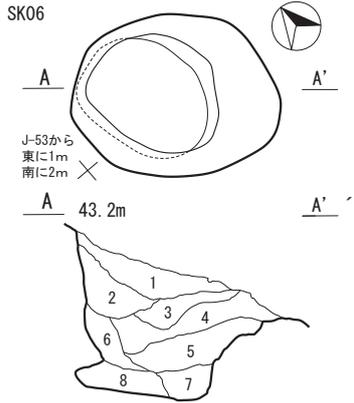
礫石器は、堆積土から磨石 2 点が出土した。

土器片利用土製品 (円形) (51-13) が 1 点、堆積土 1 層から出土した。底部片の外表面を円形に打ち欠き、擦り加工が施される。帰属時期は不明である。

【時期】 時期を直接的に示すような出土状態の土器はなかったが、隣接する SK05 に構造がよく似ていることから、縄文時代後期前葉の可能性もあるが、詳細は不明である。

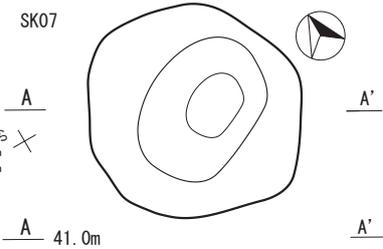
第7号土坑 (SK07) (図 46・52、写真 23・40)

【位置・確認】 M -51 グリッドにおいて、炭化物粒を含む褐色の落ち込みとして確認した。



SK06

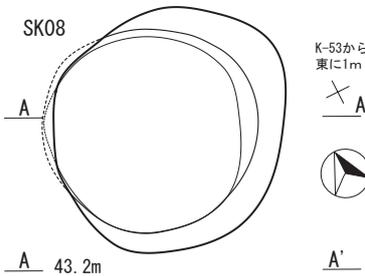
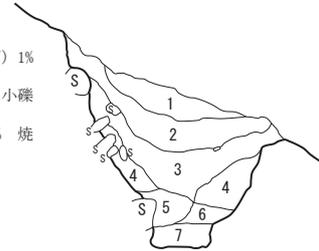
- 1層 10YR4/6 褐色 しまり中 粘性中 黄褐色ローム粒 (φ10~30mm) 20% 炭化物粒 (φ3~5mm) 5%
- 2層 10YR4/4 褐色 しまり中 粘性中 黄褐色ローム粒 (φ10~20mm) 15% 炭化物粒 (φ1mm) 3%
- 3層 10YR5/8 黄褐色 しまり中 粘性中 黄褐色ローム粒 (φ20~50mm) 5% 炭化物粒 (φ1mm) 1%
- 4層 10YR3/4 暗褐色 しまり中 粘性中 黄褐色ローム粒 (φ3mm) 7% 炭化物粒 (φ1~5mm) 1%
- 5層 10YR4/3 にぶい黄褐色 しまり中 粘性中 黄褐色ローム粒 (φ10~30mm) 10% 炭化物粒 (φ2mm) 1%
- 6層 10YR5/6 黄褐色 しまり中 粘性中 黄褐色ローム粒 (φ10~50mm) 30% 炭化物粒 (φ1mm) 1%
- 7層 10YR5/4 にぶい黄褐色 しまり中 粘性中 黄褐色ローム粒 (φ10~30mm) 15%
- 8層 10YR3/3 暗褐色 しまり中 粘性中 黄褐色ローム粒 (φ10mm) 2% 炭化物粒 (φ1mm) 1%



SK07

SK07

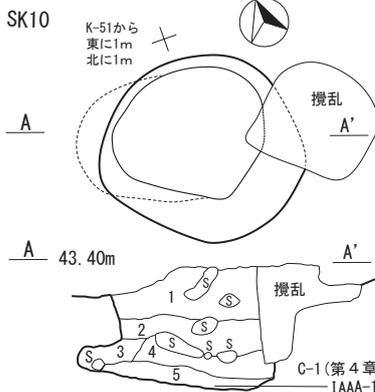
- 1層 7.5YR4/3 褐色 しまりやや弱 粘性中 黄橙色 (10YR7/4) 土ブロック (φ10mm程) 1% 炭化物粒 (φ2mm以下) 1% 礫 (φ100mm程) 数個混入
- 2層 7.5YR4/3 褐色 しまり弱 粘性中 橙色 (7.5YR7/6) ローム粒 (φ5mm以下) 10% 炭化物粒 (φ3mm以下) 1% 小礫 (φ50mm) 少数 縄文土器片出土
- 3層 7.5YR4/4 褐色 しまり弱 粘性中 明褐色 (7.5YR 5/6) ローム粒 (φ2mm以下) 5% 炭化物粒 (φ2mm以下) 1% 焼土粒 (φ10mm以下) 1% 縄文土器片出土
- 4層 7.5YR4/4 褐色 しまり弱 粘性中 明褐色ローム粒 (φ2mm程) 2% 礫 (φ70mm以下) 混入
- 5層 7.5YR4/4 褐色 しまり中 粘性やや強 明褐色ローム粒 (φ10mm以下) 2% 縄文土器片出土
- 6層 7.5YR5/4 にぶい褐色 しまり弱 粘性やや強 明褐色ローム粒 (φ10mm以下) 10% 小礫 (φ30mm) 混入
- 7層 7.5YR4/4 褐色 しまり中 粘性やや強 明褐色ローム粒20%含む



K-53から 東に1m

SK08

- 1層 7.5YR4/4 褐色 しまり弱 粘性弱 炭化物粒 (φ1~5mm以下) 1% 礫 (φ150mm) 縄文土器片含む
- 2層 10YR4/6 褐色 しまり中 粘性中 炭化物粒 (φ1~5mm) 1%
- 3層 7.5YR4/3 褐色 しまり中 粘性中 黄褐色 (10YR5/6) ローム粒 (φ2mm以下) 2% 炭化物粒 (φ1mm程) 1%
- 4層 7.5YR4/3 褐色 しまり中 粘性やや強 炭化物粒 (φ5mm以下) 1%
- 5層 7.5YR4/6 褐色 しまり中 粘性やや強 炭化物粒 (φ2mm程) 2% 調査時6層と命名
- 6層 7.5YR4/4 褐色 しまり中 粘性やや強 黄褐色ローム粒 (φ2mm以下) 2% 炭化物粒 (φ1mm程) 1% 調査時5層と命名
- 7層 7.5YR5/4 にぶい褐色 しまり中 粘性中 黄褐色ローム粒 (φ5mm以下) 5% 炭化物粒 (φ1mm程) 1%
- 8層 10YR4/6 褐色 しまり中 粘性中 炭化物粒 (φ1mm程) 1%

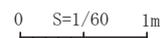


K-51から 東に1m 北に1m

SK10

- 1層 10YR6/8 明黄褐色 しまり強 粘性中 炭化物粒 (φ1~3mm) 5% 礫 (φ10~50mm) 含む
- 2層 10YR7/8 黄橙色 しまり強 粘性中 炭化物粒 (φ1mm) 3% 礫 (φ20~40mm) 含む
- 3層 10YR3/3 暗褐色 しまり強 粘性中 炭化物粒 (φ10mm) 1%
- 4層 10YR3/4 暗褐色 しまり強 粘性中 炭化物粒 (φ1mm) 2%
- 5層 10YR5/6 黄褐色 しまり中 粘性中 炭化物粒 (φ1mm) 1%

図46 土坑(2)



【重複】無し

【規模・平面形・壁面】底面は54×40 cmほどの楕円形、上端は180×170 cmほどの楕円形を呈する。壁面は170 cmほどの高さで、外側に広く開きながら立ち上がっている。

【堆積土】褐色の土層が堆積している。

【出土遺物】土器が2,268 g、剥片石器が20点・255 gが出土した。底面に近い5層から円筒下層d式土器の小片が出土している。その上位の堆積土からも同時期の土器片が出土している。

剥片石器は、石鏃1点(1.4g)・石匙1点(5.8g)・スクレイパー4点(102.9g)・二次加工のある剥片2点(40.0g)・微細剥離のある剥片6点(86.9g)・剥片6点(18.2g)が出土した。

【まとめ】時期を直接的に示すような出土状態の土器はなかったが、ほぼ同一標高のSK05に構造がよく似ていることから、縄文時代後期前葉の可能性もある。しかし出土している土器片は堆積土中の円筒下層d式土器であり、詳細は不明である。

第8号土坑 (SK08) (図46・52、写真23・40)

【位置・確認】K-51・52グリッドにおいて、炭化物粒を含む褐色の落ち込みとして確認した。

【重複】無し

【規模・平面形・壁面】底面は170×160 cmほどの円形、上端は直径190 cmほどの不整な円形を呈する。壁面は90 cmほどの高さで、一部フラスコ状に立ち上がっている。

【堆積土】褐色の土層が堆積している。

【出土遺物】土器が1,885 g、剥片石器が105点・634 g、礫石器は1点・4.2 gが出土した。堆積土から円筒下層d式土器の小片が出土しており、1点のみ後晩期の可能性ある土器片(52-10)が出土している。

剥片石器は、石槍1点(34.9g)・石核1点(107.9g)・スクレイパー4点(151.3g)・微細剥離のある剥片14点(43.2g)・剥片85点(296.8g)が出土した。堆積土から礫石器の剥片1点(52-10)が出土した。

【まとめ】時期を直接的に示すような出土状態の土器はなかったが、堆積土からは円筒下層d式土器の小片が出土している。

第9号土坑 欠番

第10号土坑 (SK10) (図46・53、写真23・40)

【位置・確認】K-50・51グリッドで、炭化物粒を多く含む明黄褐色の落ち込みとして確認した。

【重複】SI01と重複し、当土坑が新しい。

【規模・平面形・壁面】底面は150×100 cmほどの円形、上端は直径150 cmほどの不整な円形を呈する。壁面は95 cmほどの高さで、やや開いて立ち上がるが一部フラスコ状の断面形状となる。

【堆積土】底面には地山由来の黄橙色土が堆積し、暗褐色を挟み、明黄褐色の土層が堆積している。

【出土遺物】土器が493 g、剥片石器が40点・375 gが出土した。

剥片石器は、石鏃4点(10.0g)・石核1点(134.4g)・スクレイパー2点(52.8g)・二次加工のある剥片1点(20.6g)・微細剥離のある剥片10点(81.3g)・剥片22点(76.3g)が出土した。

【まとめ】 詳細な時期を直接的に示すような出土状態の土器はなかったが、縄文時代の石器類が出土している。当土坑底面出土の炭化物1点の放射性炭素年代測定値は、縄文時代中期後葉の値を示している（第4章第4節参照）。

第11号土坑（SK11）（図47、写真24）

【位置・確認】 R・S -41・42 グリッドで、炭化物粒を含む褐色の落ち込みとして確認した。

【重複】 重複なし

【規模・平面形・壁面】 底面は直径140 cmほどの不整な円形、上端は110 × 90 cmほどの楕円形を呈する。壁面は85 cmほどの高さで、フラスコ形に立ち上がる。

【堆積土】 底面には地山由来の褐色や黄褐色土が堆積し、暗褐色を挟み、褐色の土層が堆積している。

【出土遺物】 土器が26 g、剥片石器は微細剥離のある剥片が2点・21.5 g、礫石器は6.7 gが出土した。堆積土から礫石器の剥片1点が出土した。

【時期】 詳細な時期を直接的に示すような出土状態の遺物は無かったが、周辺の遺構・遺物の出土状況から縄文時代のフラスコ状土坑と考えられる。

第12号土坑（SK12）（図47、写真24）

【位置・確認】 Q -42 グリッドで、炭化物粒を含む褐色の落ち込みとして確認した。

【重複】 SV12 と重複し、当遺構が古い。

【規模・平面形・壁面】 底面は170 × 160 cmほどの不整な円形、上端は140 × 130 cmほどの不整な円形を呈する。壁面は95 cmほどの高さで、フラスコ形に立ち上がる。

【堆積土】 底面から上端まで、地山由来の褐色や黄褐色土が堆積している。

【出土遺物】 土器が7 g、剥片石器が4点・119 gが出土した。

剥片石器は、微細剥離のある剥片1点（110.7g）・剥片3点（8.6g）である。

【時期】 詳細な時期を直接的に示すような出土状態の遺物は無かったが、周辺の遺構・遺物の出土状況から縄文時代のフラスコ状土坑と考えられる。

第13号土坑（SK13）（図47・53、写真24・40）

【位置・確認】 P -43 グリッドで、炭化物粒を含む褐色の落ち込みとして確認した。

【重複】 重複なし

【規模・平面形・壁面】 底面は直径140 cmほどの不整な円形、上端は直径110 cmほどの不整な円形を呈する。壁面は40 cmほどの高さで、フラスコ形に立ち上がる。

【堆積土】 底面から上端まで、地山由来の褐色土が堆積している。

【出土遺物】 土器が160 g、剥片石器が53点・968 g、礫石器は87 gが出土した。堆積土から円筒下層d式土器の小片が出土している。剥片石器は、石核1点（284.2g）・スクレイパー2点（28.9g）・微細剥離のある剥片23点（413.8g）・剥片27点（241.8g）が出土した。

堆積土から、礫石器の剥片2点が出土した。

【時期】 堆積土から縄文土器片や石器類が出土しており、断面フラスコ形を呈することから、縄文時代のフラスコ状土坑と考えられる。

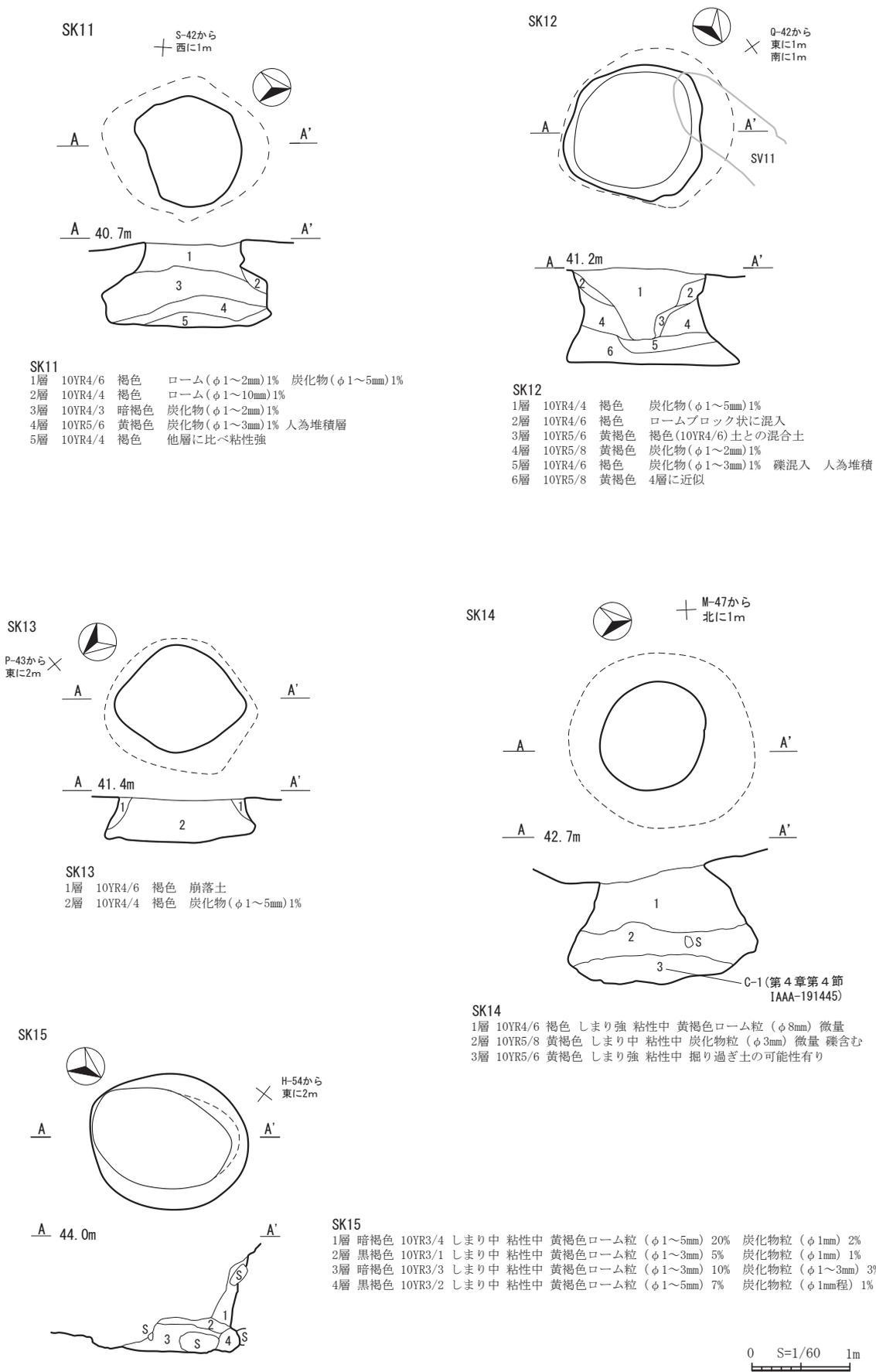


図47 土坑(3)

第14号土坑 (SK14) (図47・54、写真24・40)

【位置・確認】M-46グリッドで、褐色の落ち込みとして確認した。

【重複】重複なし

【規模・平面形・壁面】底面は直径185cmほどの円形、上端は110×100cmほどの楕円形を呈する。壁面は115cmほどの高さで、フラスコ形に立ち上がる。

【堆積土】底面から上端まで、地山由来の黄褐色土・褐色土が堆積している。

【出土遺物】土器が781g、剥片石器が9点・34g、礫石器は22,719gが出土した。堆積土から円筒下層d式土器の小片が出土している。凹み石1点、石皿1点が出土している。剥片石器は、石鏃1点(0.5g)・微細剥離のある剥片4点(30.0g)・剥片4点(4.3g)が出土した。

礫石器は堆積土から磨石1点、凹石1点、台石1点、剥片1点である。台石(54-5)は完形であり、方形板状を呈する。

【時期】堆積土から縄文土器片や石器類が出土しており、断面フラスコ形を呈することから、縄文時代のフラスコ状土坑と考えられる。

第15号土坑 (SK15) (図47、写真25)

【位置・確認】H-54グリッドで、ある程度、堆積土を除去した段階で、炭化物粒を含む暗褐色の落ち込みとして確認した。

【重複】重複なし

【規模・平面形・壁面】底面は150×100cmほどの楕円形、上端は170×140cmほどの楕円形を呈する。壁面は100cmほどの高さで、真上に立ち上がる。

【堆積土】底面から上端まで、炭化物粒を含む黒褐色土と暗褐色土が堆積している。

【出土遺物】遺物出土なし。

【時期】炭化物を含んだ暗褐色・黒褐色土の堆積土から、縄文時代の土坑と考えられる。

第16号土坑 (SK16) (図48・54・55、写真25・41)

【位置・確認】P・Q-47・48グリッドで、炭化物粒を含む黒色の落ち込みとして確認した。

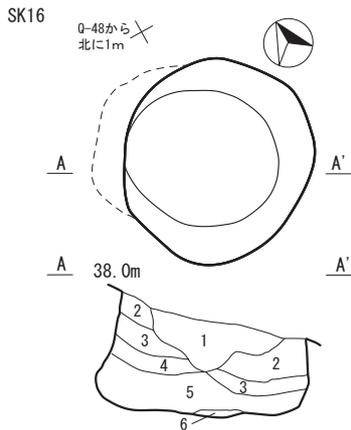
【重複】重複なし

【規模・平面形・壁面】底面は170×130cmほどの楕円形、上端は直径150cmほどの円形を呈する。壁面は90cmほどの高さで、斜面上方側がフラスコ形に立ち上がる。

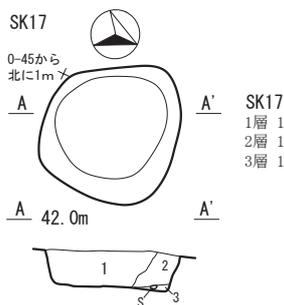
【堆積土】底面から上端まで、炭化物粒を含んだ黒褐色・暗褐色・黒色土が堆積している。

【出土遺物】土器が4,978g、剥片石器が78点・909g、礫石器は28gが出土した。堆積土から略完形の円筒下層d1式土器が出土した(54-6)。口頸部に緻密なR絡条体やLR原体の側面圧痕を施し、胴部にはR多軸絡条体が縦走する。54-7も堆積土から出土した大型の破片であり、口頸部には側面圧痕で菱形を表現している。55-8は口頸部に円形刺突列が施されるものである。榎林式土器の小片も1点のみ堆積土から出土している。

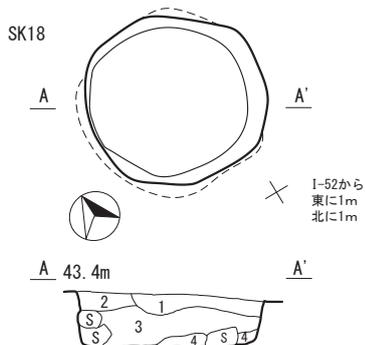
剥片石器は、スクレイパー10点(161.9g)・二次加工のある剥片2点(103.4g)・微細剥離のある剥片24点(381.2g)・剥片42点(263.2g)が出土した。礫石器は、堆積土から磨石1点が出土した。



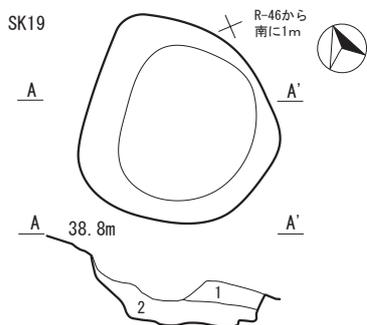
- SK16
- 1層 10YR2/1 黒色 しまり中 粘性中 黄褐色ローム粒 (φ1~3mm) 3% 炭化物粒 (φ2~5mm) 5%
焼土粒 (φ1mm) 2%
- 2層 10YR3/3 暗褐色 しまり中 粘性中 黄褐色ローム粒 (φ3~5mm) 5% 炭化物粒 (φ1mm) 3%
焼土粒 (φ1mm) 1%
- 3層 10YR2/2 黒褐色 しまり中 粘性中 黄褐色ローム粒 (φ1~3mm) 2% 炭化物粒 (φ5mm) 1%
焼土粒 (φ1mm) 1%
- 4層 10YR3/4 暗褐色 しまり中 粘性中 黄褐色ローム粒 (φ5~10mm) 10% 炭化物粒 (φ10mm) 1%
- 5層 10YR3/3 暗褐色 しまり中 粘性中 黄褐色ローム粒 (φ3~5mm) 7% 炭化物粒 (φ1~5mm) 2%
- 6層 10YR2/2 黒褐色 しまり中 粘性中 黄褐色ローム粒 (φ2mm) 1% 炭化物粒 (φ3mm) 1%



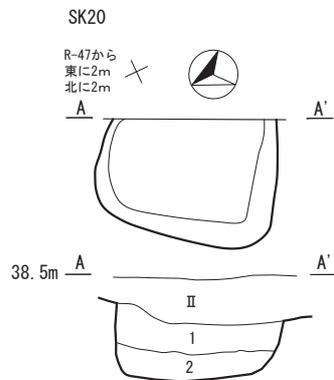
- SK17
- 1層 10YR3/3 暗褐色 しまり中 粘性中 黄褐色ローム粒 (φ3~10mm) 7% 炭化物粒 (φ1~5mm) 20%
- 2層 10YR3/4 暗褐色 しまり中 粘性中 黄褐色ローム粒 (φ3~5mm) 10% 炭化物粒 (φ1mm) 5%
- 3層 10YR3/2 黒褐色 しまり中 粘性中 黄褐色ローム粒 (φ5~10mm) 15% 炭化物粒 (φ1mm) 2%



- SK18
- 1層 10YR3/2 黒褐色 しまり中 粘性中 黄褐色ローム粒 (φ3~5mm) 7% 炭化物粒 (φ1mm) 3%
- 2層 10YR3/4 暗褐色 しまり中 粘性中 黒褐色(10YR2/2)土ブロック (φ5~10mm) 5% 地山土主体の層
- 3層 10YR3/3 暗褐色 しまり中 粘性中 黄褐色ローム粒 (φ5~15mm) 7% 炭化物粒 (φ1~5mm) 1%
- 4層 10YR2/2 黒褐色 しまり中 粘性中 黄褐色ローム粒 (φ5~15mm) 3% 炭化物粒 (φ1mm) 1%



- SK19
- 1層 10YR3/4 暗褐色 黄褐色ローム粒 (φ5mm) 1% 炭化物粒 (φ2~5mm) 7%
- 2層 10YR3/3 暗褐色 黄褐色ローム粒 (φ3mm) 2% 炭化物粒 (φ1mm) 1%



- SK20
- 1層 10YR3/3 暗褐色 黄褐色ローム粒 (φ1mm) 1% 炭化物粒 (φ3~5mm) 3%
- 2層 10YR3/4 暗褐色 黄褐色ローム粒 (φ2mm) 2% 炭化物粒 (φ1mm) 1%

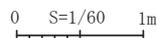
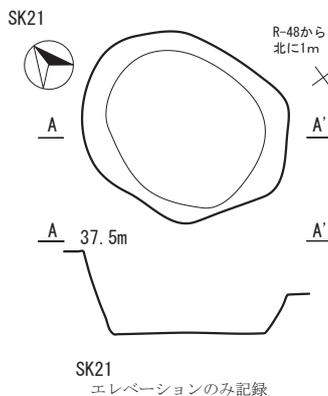


図48 土坑(4)

【時期】堆積土から略完形の円筒下層 d 1 式土器が出土していることから、縄文時代前期後葉円筒下層 d 1 式期のフラスコ状土坑と考えられる。

第 17 号土坑 (SK17) (図 48・55、写真 25・41)

【位置・確認】N・O -44 グリッドで、炭化物粒を含む暗褐色の落ち込みとして確認した。

【重複】重複なし

【規模・平面形・壁面】底面は直径 85 cm ほどの円形、上端は一辺 100 cm ほどの隅丸方形を呈する。壁面は 30 cm ほどの高さで、外に開きながら立ち上がる。

【堆積土】炭化物粒を含んだ黒褐色・暗褐色土が堆積している。

【出土遺物】土器が 116 g、剥片石器が 10 点・90 g が出土した。堆積土から石鏃 1 点と石核 1 点が出土している。剥片石器は、石鏃 1 点 (4.8g)・石核 1 点 (19.5g)・微細剥離のある剥片 6 点 (56.1g)・剥片 2 点 (9.6g) が出土した。

【時期】詳細な時期を示す遺物は出土していないが、本土坑堆積土および周辺の遺構・遺物の出土状況から縄文時代の土坑と考えられる。

第 18 号土坑 (SK18) (図 48・55、写真 25・26・41)

【位置・確認】I -51 グリッドで、炭化物粒を含む黒褐色の落ち込みとして確認した。

【重複】重複なし

【規模・平面形・壁面】底面は直径 140 cm ほどの円形、上端は直径 150 cm ほどの円形を呈する。壁面は 40 cm ほどの高さで、やや外に開きながら立ち上がる。

【堆積土】炭化物粒を含んだ黒褐色・暗褐色土が堆積している。壁面や底面には第 V 層由来の礫も露出している。

【出土遺物】土器が 1,273 g、剥片石器が 2 点・11 g が出土した。55-13 は無文の壺で、土坑壁面に横位に接して、口にあたかも礫で蓋をしたような状態で出土した。土器の焼成や器形、外傾接合の特徴、周辺の同様の土坑の時期から、榎林式あるいは大木 10 式併行期と考える。

剥片石器は、微細剥離のある剥片 1 点 (10.0g)・剥片 1 点 (1.9g) が出土した。

【時期】縄文時代中期後葉榎林式期あるいは中期末葉大木 10 式併行期の土坑である。

第 19 号土坑 (SK19) (図 48、写真 26)

【位置・確認】Q -46 グリッドで、炭化物粒を多く含む暗褐色の落ち込みとして確認した。

【重複】重複なし

【規模・平面形・壁面】底面は 120 × 100 cm ほどの楕円形、上端は 160 × 150 cm ほどの円形を呈する。壁面は 45 cm ほどの高さで、やや外に開きながら立ち上がる。

【堆積土】炭化物粒を含んだ暗褐色土が堆積している。壁面や底面には第 V 層由来の礫も露出している。

【出土遺物】帰属時期を示す遺物は出土していない。

【時期】詳細時期不明であるが、同一区域にある SK16 と SK21 が縄文時代前期後葉円筒下層 d 式期の可能性があることから、当土坑も同様の時期の可能性はある。

第 20 号土坑 (SK20) (図 48・55、写真 26・41)

【位置・確認】 R-46 グリッドで、炭化物粒を含む暗褐色の落ち込みとして確認した。

【重複】 重複なし

【規模・平面形・壁面】 底面は一辺 110 cm ほどの隅丸方形、上端は一辺 140 cm ほどの隅丸方形を呈する可能性がある。壁面は 60 cm ほどの高さで、やや外に開きながら立ち上がる。

【堆積土】 炭化物粒を含んだ暗褐色土が堆積している。壁面や底面には第 V 層由来の礫も露出している。

【出土遺物】 土器が 537 g、剥片石器が 4 点・371 g が出土した。堆積土からは円筒下層 d 式期の土器片が出土している。SI09 出土の円筒下層 d 2 式土器 (42-1) の同一個体破片 1 点も堆積土から出土している。剥片石器は、スクレイパー 2 点 (365.3g)・剥片 2 点 (5.7g) が出土した。

【時期】 同一区域にある SK16 と SK21 が縄文時代前期後葉円筒下層 d 式期の可能性があることから、当土坑も同様の時期の可能性はある。

第 21 号土坑 (SK21) (図 48・55・56、写真 26・41)

【位置・確認】 Q-47 グリッドで、楕円形の落ち込みとして確認した。

【重複】 重複なし

【規模・平面形・壁面】 底面は 130 × 110 cm ほどの楕円形、上端は 170 × 130 cm ほどの楕円形を呈する。壁面は 65 cm ほどの高さで、外に開きながら立ち上がる。

【堆積土】 記録なし

【出土遺物】 土器が 892 g、剥片石器が 17 点・101 g、礫石器は 3.9 g が出土した。堆積土からは円筒下層 d 式期の土器片が出土している。また円筒下層 d 式期の土器片利用円盤が 3 点この土坑から出土しており、注目される。

剥片石器は、石槍 1 点 (1.0g)・スクレイパー 2 点 (50.7g)・二次加工のある剥片 1 点 (3.7g)・微細剥離のある剥片 4 点 (14.6g)・剥片 9 点 (31.0g) が出土した。堆積土から、礫石器の剥片 1 点が出土した。

【時期】 同一地区にある SK16 が円筒下層 d 式期であること、当土坑の堆積土から同様の時期の土器片利用円盤 3 点が出土していることから、縄文時代前期後葉の土坑の可能性はある。

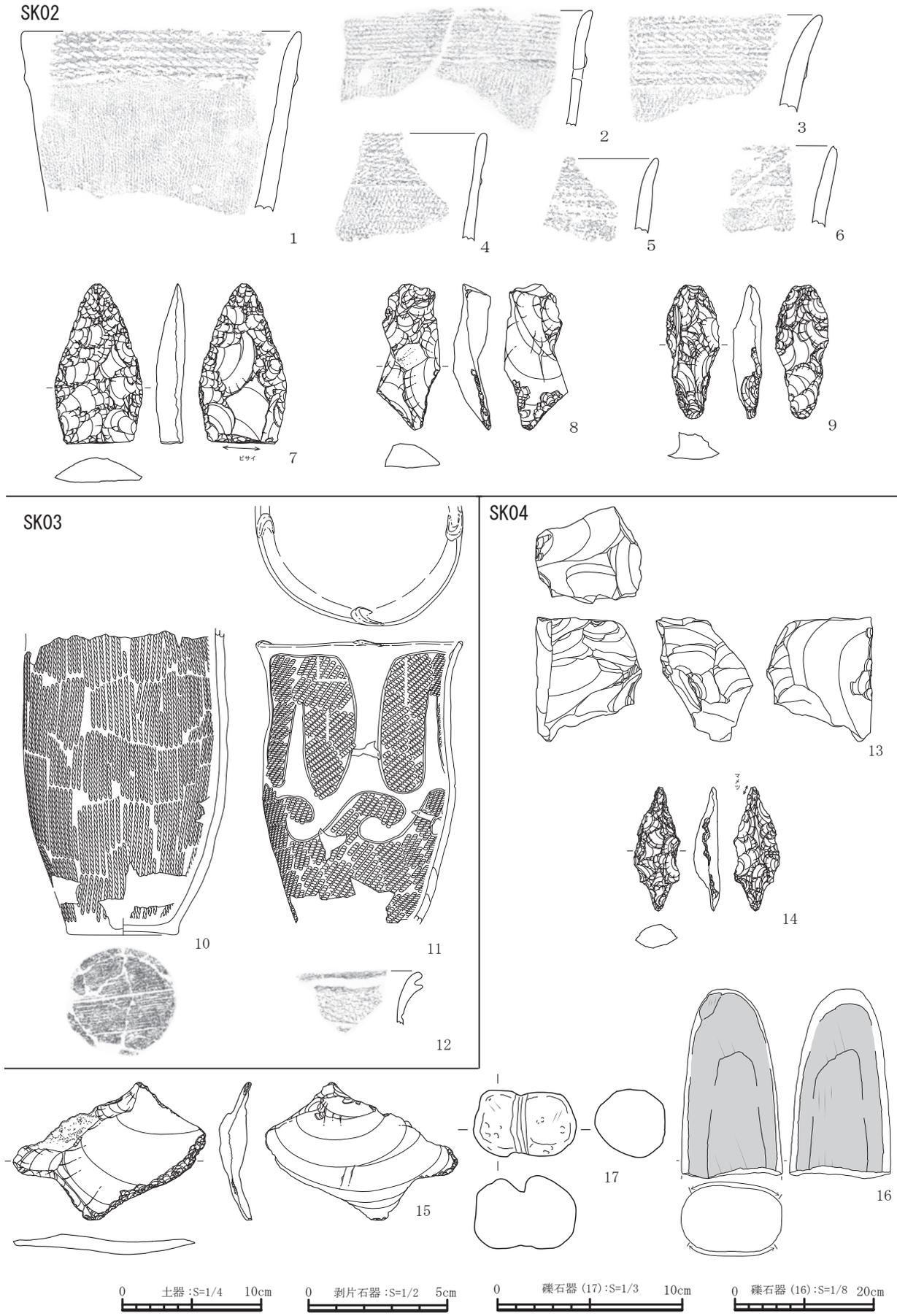


図49 土坑(5)

SK05

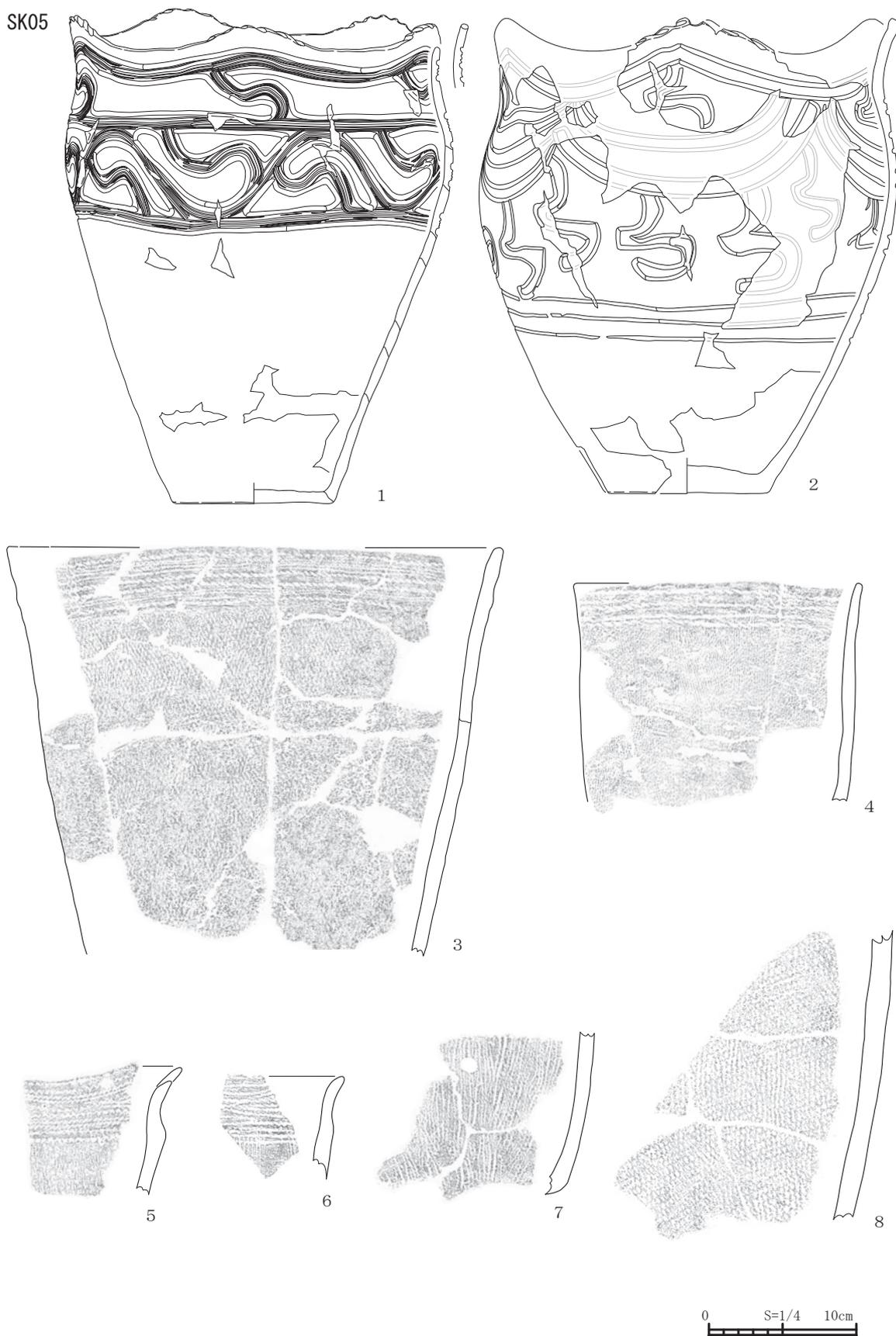


图50 土坑(6)

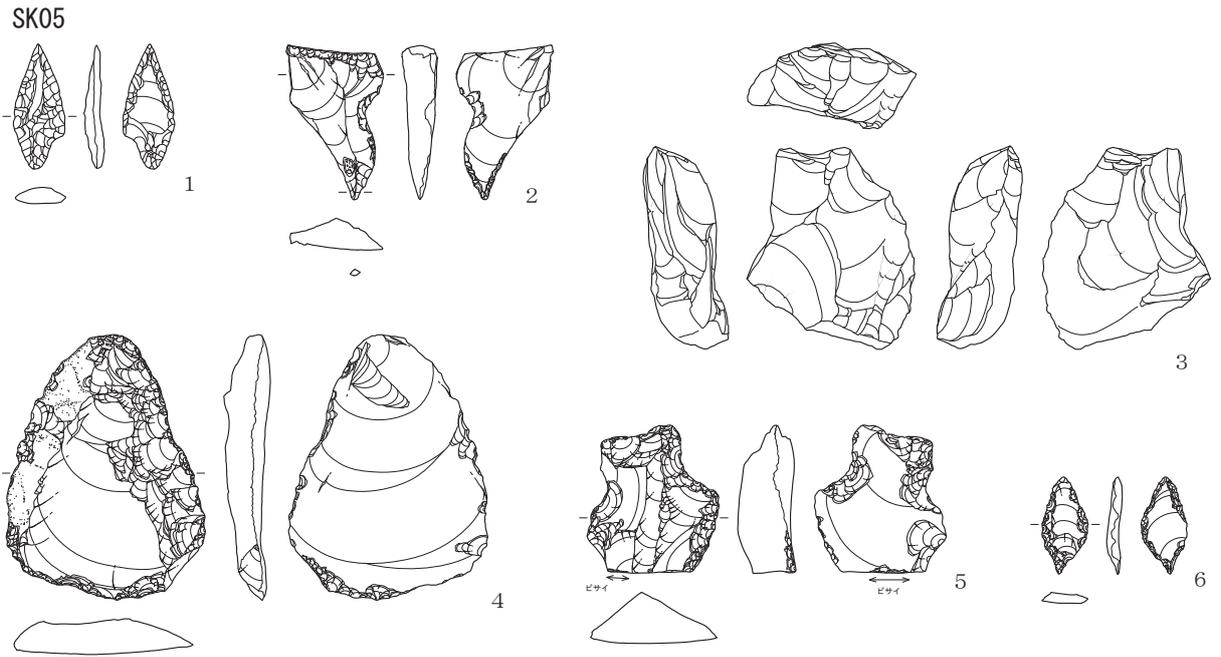
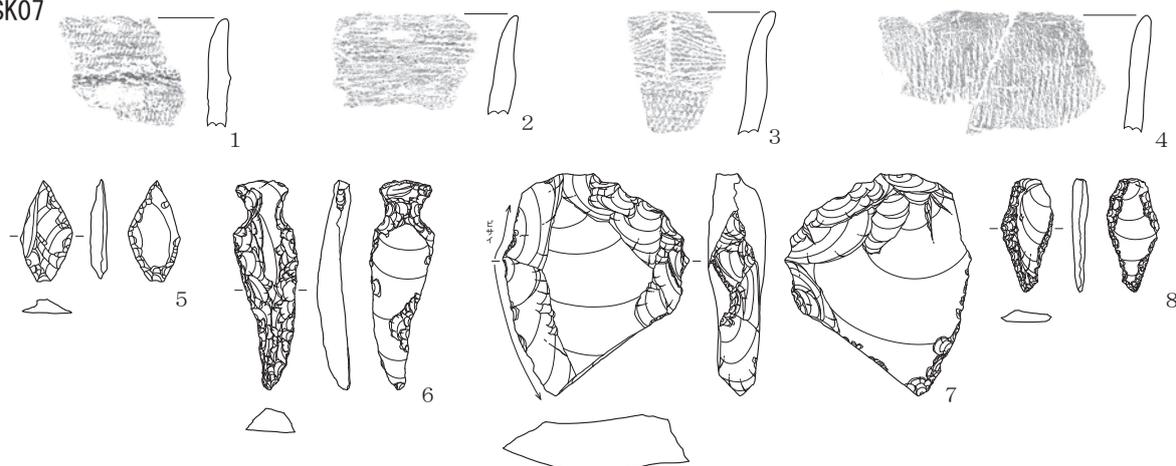


図51 土坑(7)

SK07



SK08

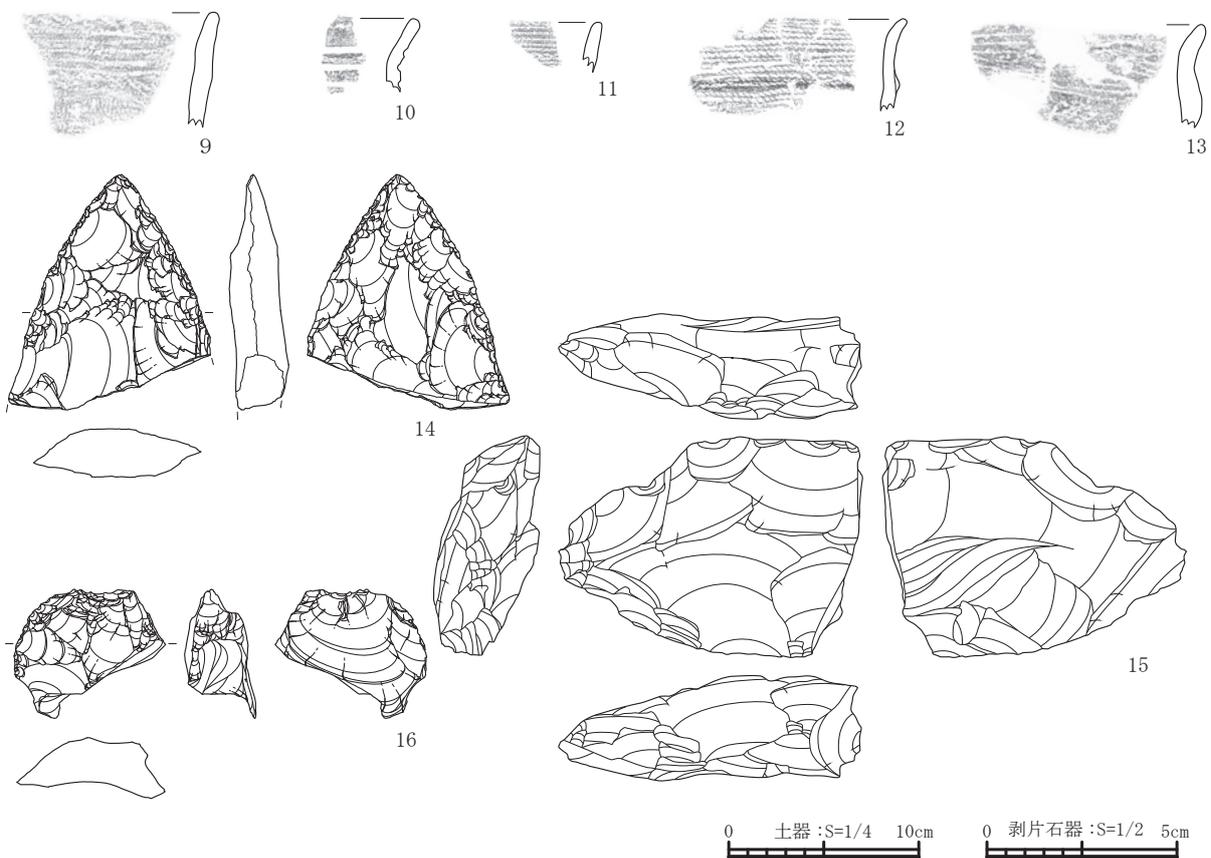
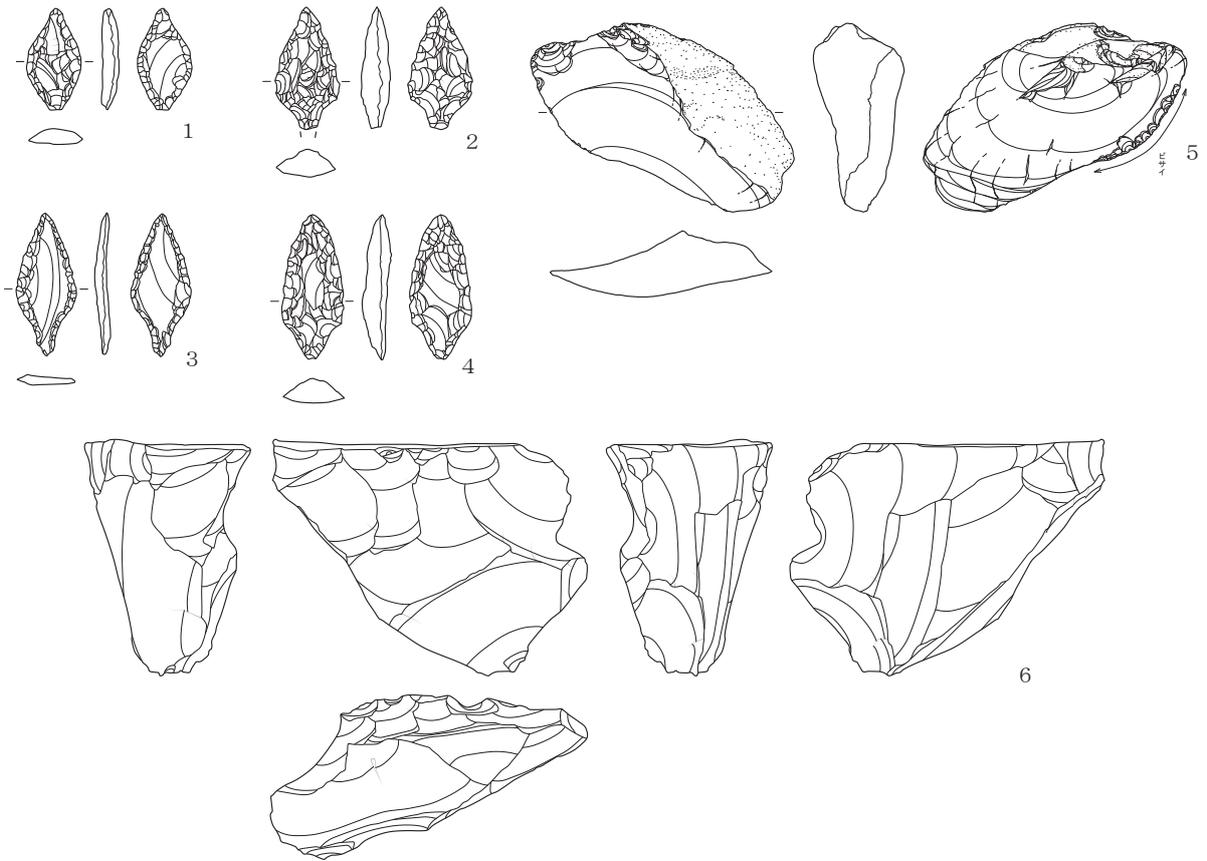
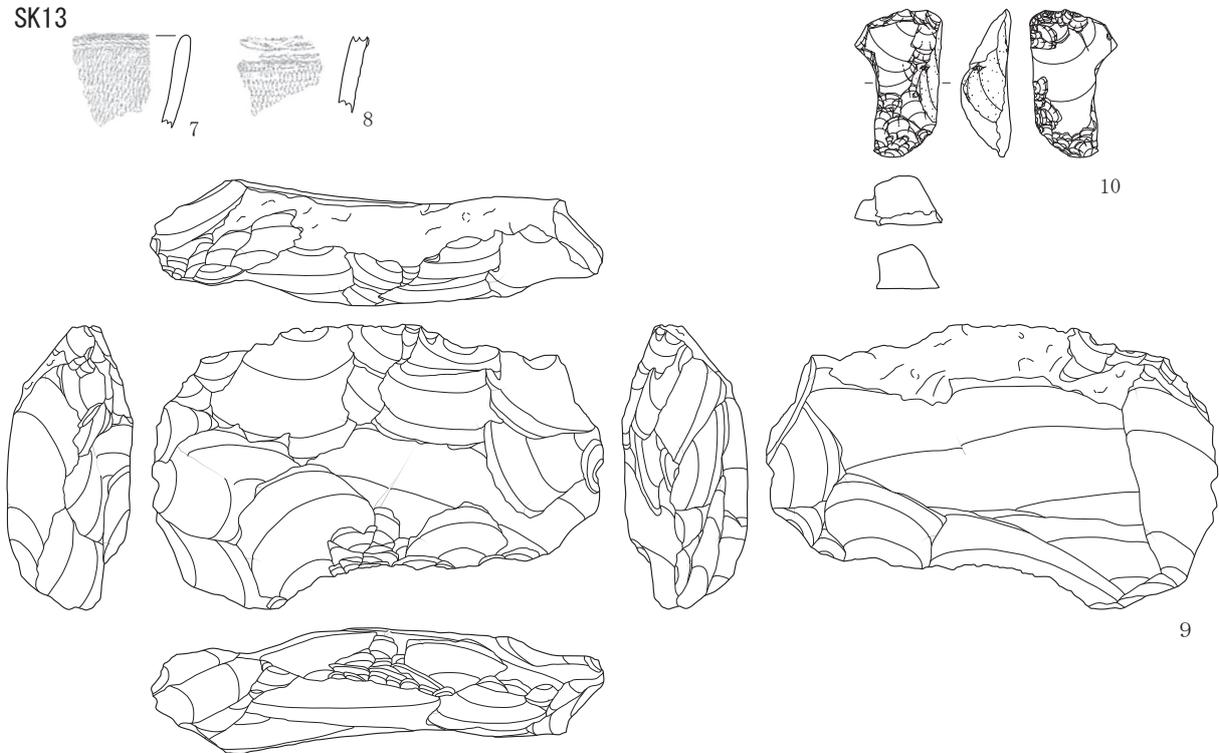


图52 土坑(8)

SK10



SK13

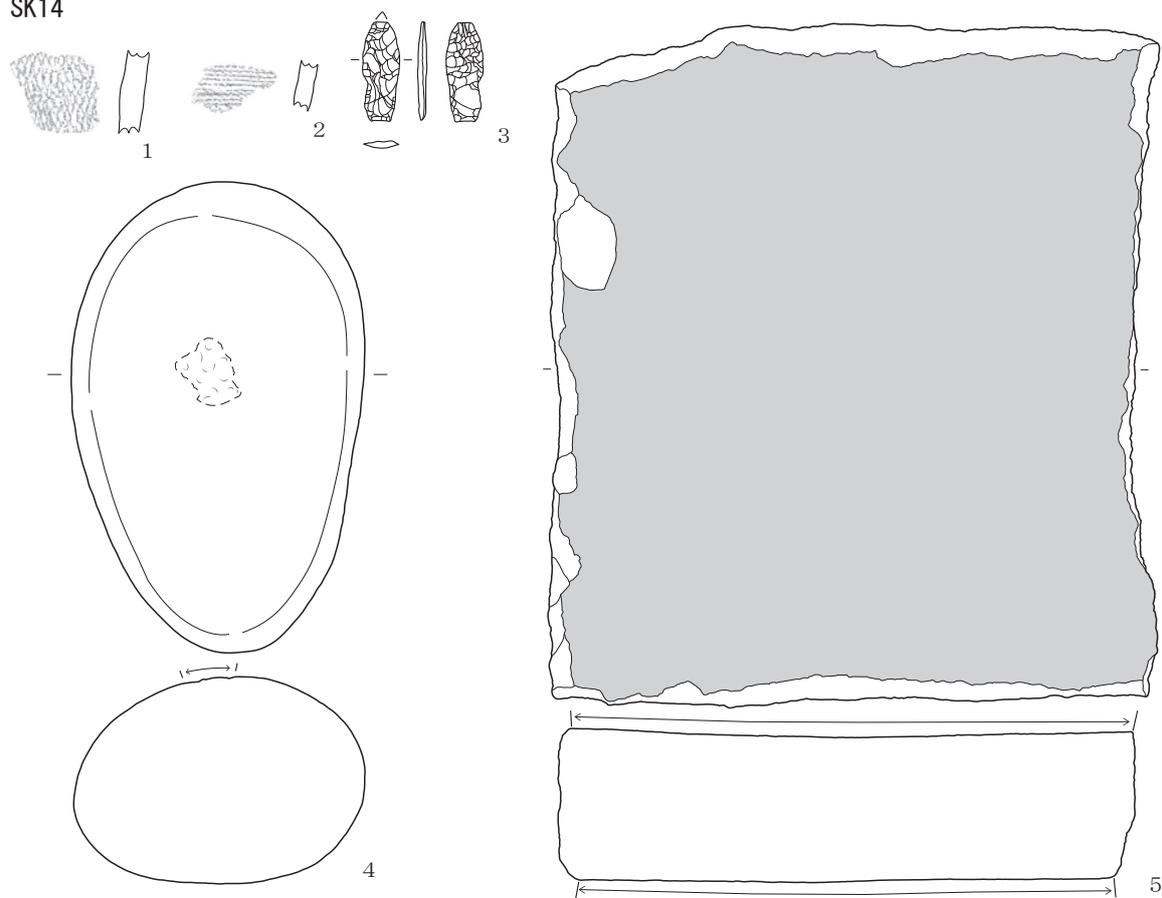


0 土器 :S=1/4 10cm

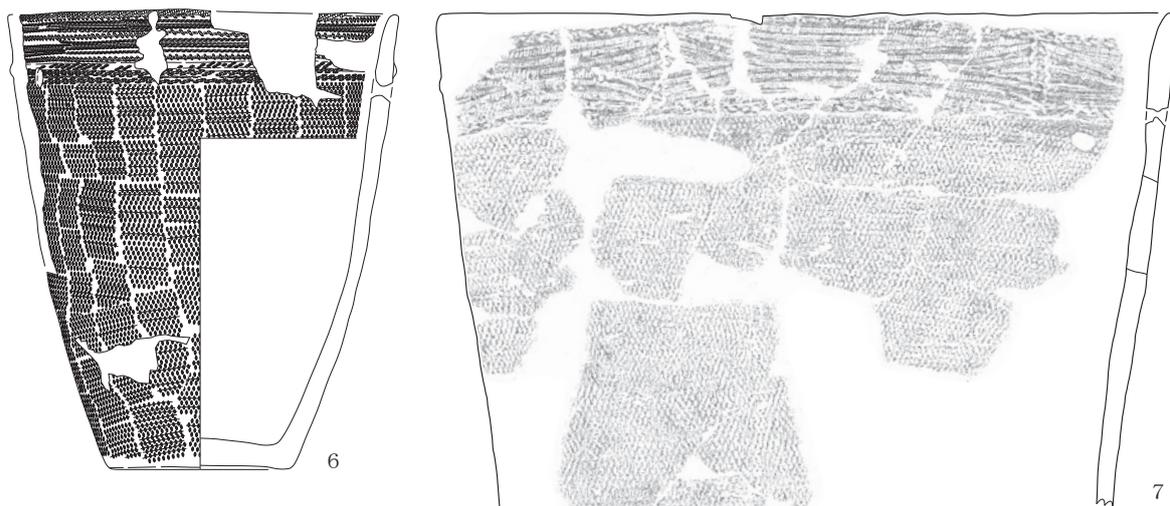
0 剥片石器 :S=1/2 5cm

図53 土坑(9)

SK14



SK16



0 土器・礫石器(4):S=1/3 10cm 0 剥片石器:S=1/2 5cm 0 土器・礫石器(5):S=1/4 10cm

图54 土坑(10)

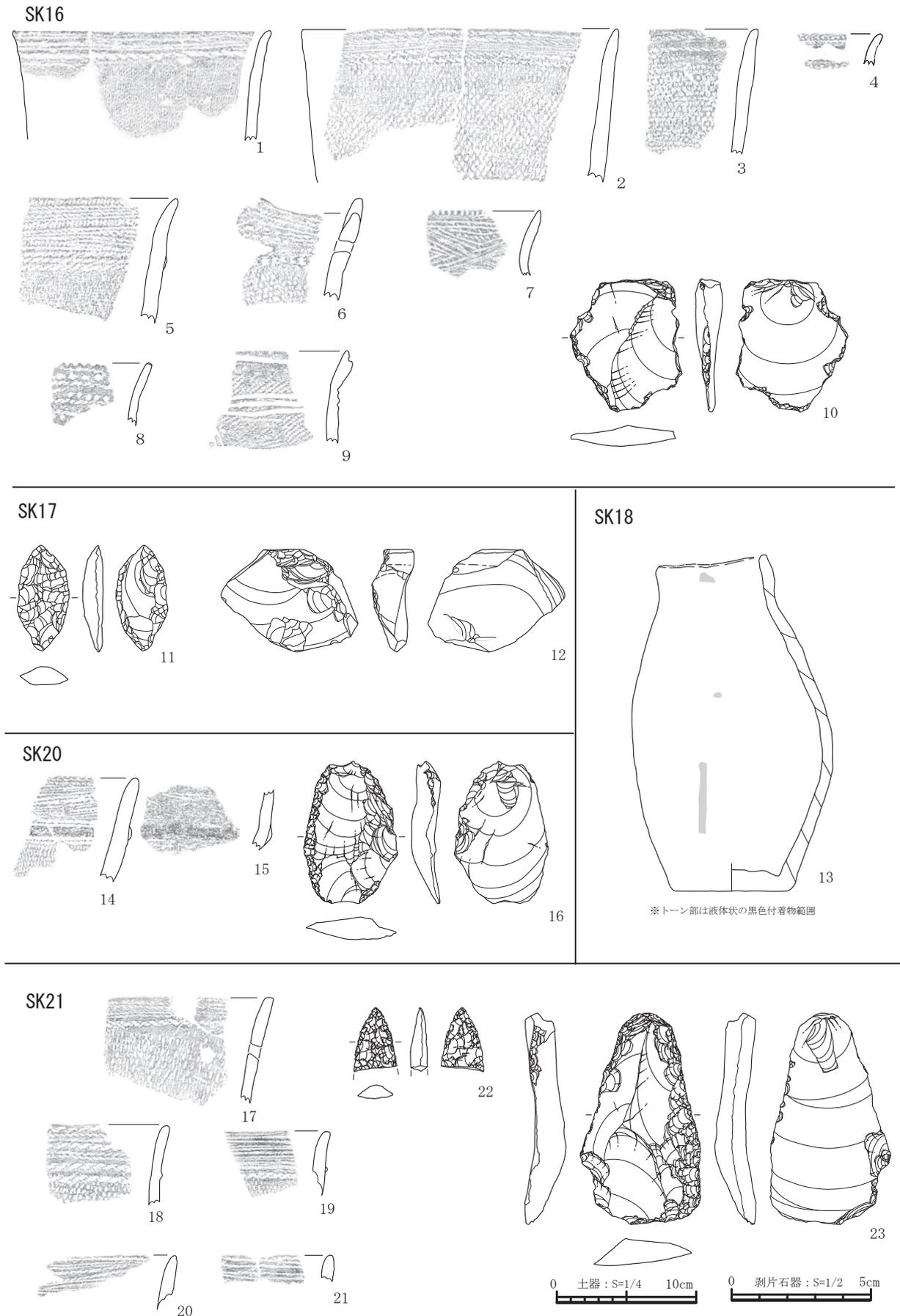


図55 土坑(11)

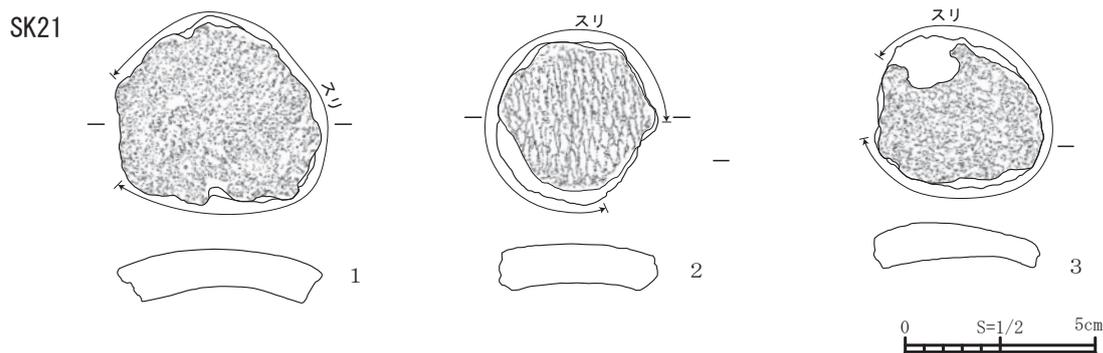


図56 土坑(12)

(4) 溝状土坑 (図 57 ~ 60、写真 27 ~ 29・41)

溝状土坑は、15基検出した。大きく北-南方向、東-西方向の2方向のものに二分され、台地平坦部で3箇所程度のまとまりが見られた。北-南方向のものはSV05・06・07・13・14とSV01・11・12・15、東-西方向のものはSV02・03・04・08・09・10であるが、それぞれが一連のものであるかは不明である。

SV03・04・07・08から、円筒下層d式土器や土器片利用円盤が出土しているが、全て溝状土坑廃絶後の壁面崩壊や流れ込みによるものと考えられた。SV09・10・14が、縄文時代前期後葉のSI09を掘り込んで構築されていることから、それ以後の構築であることは確実である。

第1号溝状土坑 (SV01) (図 57、写真 27)

【位置・確認】 J -49 グリッドで、炭化物粒を含む黄褐色の落ち込みとして確認した。

【重複】 SI01 と重複し、当溝状土坑が新しい。

【規模・平面形・壁面】 底面は確認長 245 × 幅 30 cmほど、上端は確認長 275 × 最大幅 85 cmほどの長楕円形を呈する。壁面は 100 cmほどの高さで、中端で開きながら立ち上がる。

【堆積土】 4層に暗褐色土を含むほかは、壁崩落土の褐色・黄色土が堆積している。

【出土遺物】 土器が 15 g、剥片石器が 5点・17 gが出土した。剥片石器は、微細剥離のある剥片 2点 (12.7g)・剥片 3点 (4.8g) である。

【時期】 縄文時代中期後葉の SI01 より新しい溝状土坑である。

第2号溝状土坑 (SV02) (図 57、写真 27)

【位置・確認】 T -35 グリッドで、炭化物粒を含む褐色の落ち込みとして確認した。

【重複】 重複なし

【規模・平面形・壁面】 底面は長さ 295 × 最大幅 20 cmほど、上端は現存長 300 × 最大幅 35 cmほどの長楕円形を呈する。壁面は 80 cmほどの高さで、短軸断面は底面からやや開きながら立ち上がり、長軸断面は片側がややオーバーハングしている。

【堆積土】 3層中に黒い土が少量混入するほかは、壁崩落土の褐色土が堆積している。

【出土遺物】 土器が 39 gが出土したが、図化していない。

【時期】縄文時代の溝状土坑である。

第3号溝状土坑 (SV03) (図 57・60、写真 27)

【位置・確認】T -30・31 グリッドで、明褐色の落ち込みとして確認した。北西側に同一方向をとる SV04 が位置する。

【重複】重複なし

【規模・平面形・壁面】底面は長さ 260 × 最大幅 20 cm ほど、上端は長軸長 260 × 最大幅 25 cm ほどの長楕円形を呈する。壁面は 20 cm ほどの高さしか残存せず、短軸・長軸断面共に真上に立ち上がる。

【堆積土】2層中に黒褐色土ブロックを含み、この中から縄文時代前期後葉円筒下層 d 式の土器片が出土している。4層の黒褐色ブロックも同一の土層で、基本層序第Ⅲ層の崩落土と考えられる。その他、地山崩落土の褐色・明褐色の土層を中心に堆積している。

【出土遺物】土器が 239 g、剥片石器が 7 点・117 g が出土した。2層中より円筒下層 d 式の土器片が出土している。剥片石器は、石核 1 点 (81.9g)・スクレイパー 1 点 (2.5g)・微細剥離のある剥片 4 点 (29.9g)・剥片 1 点 (3.1g) が出土した。

【時期】縄文時代前期後葉以降に、構築された溝状土坑である。

第4号溝状土坑 (SV04) (図 57・60、写真 27)

【位置・確認】S・T -30 グリッドで、黒褐色ブロックを含む明褐色の落ち込みとして確認した。南東側に同一方向をとる SV03 が位置する。

【重複】重複なし

【規模・平面形・壁面】底面は長さ 245 × 最大幅 20 cm ほど、上端は長軸長 250 × 最大幅 25 cm ほどの長楕円形を呈する。壁面は 65 cm ほどの高さで、短軸・長軸断面共に真上に立ち上がる。

【堆積土】1層中に黒褐色土ブロックを含み、この中から縄文時代前期後葉円筒下層 d 式の土器片が出土している。その他は地山崩落土の褐色・明褐色の土層を中心に堆積している。

【出土遺物】土器が 267 g、剥片石器が 6 点・38 g が出土した。1層中より円筒下層 d 式の土器片が出土している。剥片石器は、微細剥離のある剥片 3 点 (23.8g)・剥片 3 点 (15.0g) が出土した。

【時期】縄文時代前期後葉以降に、構築された溝状土坑である。

第5号溝状土坑 (SV05) (図 57、写真 27・28)

【位置・確認】S -29 グリッドで、炭化物粒を含むにぶい黄褐色土の落ち込みとして確認した。

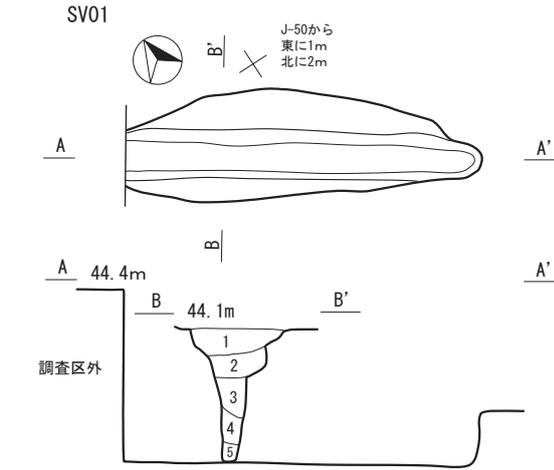
【重複】重複なし

【規模・平面形・壁面】底面は長さ 260 × 最大幅 15 cm ほど、上端は長軸長 250 × 最大幅 40 cm ほどの長楕円形を呈する。壁面は 80 cm ほどの高さで、短軸断面は開きながら、長軸断面は片側が真上、片側がオーバーハングして立ち上がる。

【堆積土】地山崩落土の褐色・明褐色・にぶい黄褐色土で堆積している。

【出土遺物】出土なし

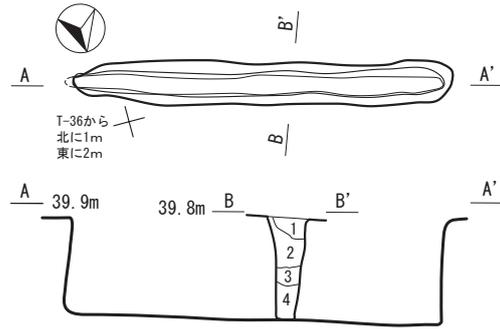
【時期】縄文時代に構築された溝状土坑である。



SV01

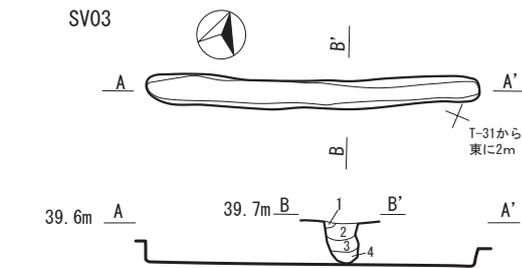
- 1層 10YR4/3 にぶい黄褐色 しまり中 粘性中 黄褐色ローム粒 (φ5~10mm) 15%
炭化物粒 (φ1~3mm) 3%
- 2層 10YR4/4 褐色 しまり中 粘性中 黄褐色ローム粒 (φ5~10mm) 20% 炭化物粒 (φ3~5mm) 5% 焼土粒 (φ3mm) 1%
- 3層 10YR4/3 にぶい黄褐色 しまり中 粘性中 黄褐色ローム粒 (φ5~10mm) 25%
炭化物粒 (φ1mm) 3%
- 4層 10YR3/4 暗褐色 しまり弱 粘性中 黄褐色ローム粒 (φ5~10mm) 30%
炭化物粒 (φ1mm) 1%
- 5層 10YR4/6 褐色 しまり弱 粘性弱 黄褐色ローム粒 (φ5~10mm) 1%
炭化物粒 (φ1mm) 3%

SV02



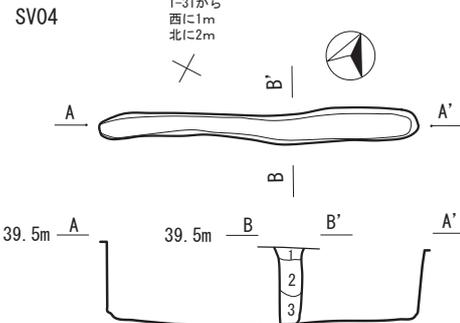
SV02

- 1層 7.5YR4/3 褐色 しまり弱 粘性弱 にぶい褐色ローム粒 (φ1mm) 2%
炭化物粒 (φ5mm以下) 1%
- 2層 10YR4/4 褐色 しまり中 粘性中 炭化物粒 (φ10mm) 1%
- 3層 7.5YR4/6 褐色 しまり中 粘性中 ほぼローム層であるが、一部に
黒色土混入
- 4層 10YR4/4 褐色 しまり中 粘性中



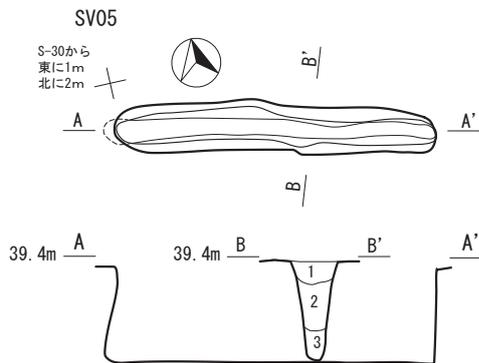
SV03

- 1層 7.5YR4/6 明褐色 しまりやや強 粘性やや弱 ロームブロックが混入した土層
- 2層 7.5YR4/6 褐色 しまり弱 粘性中 黄褐色ローム粒 (φ5~10mm) 20% 炭化物粒 (φ5mm以下) 1% 焼土粒 (φ1mm以下) 1%
黒褐色 (7.5YR3/2) 土ブロック15%含む
黒褐色土ブロック中より円筒下層式土器片出土。
- 3層 7.5YR4/3 褐色 しまりやや強 粘性中 壁面ロームの崩落土
- 4層 7.5YR4/4 褐色 しまりやや強 粘性中 黒褐色 (7.5YR3/2) 土20%含む
この黒褐色土は2層中の円筒下層式土器片を出土するブロックと同様の壁崩落土



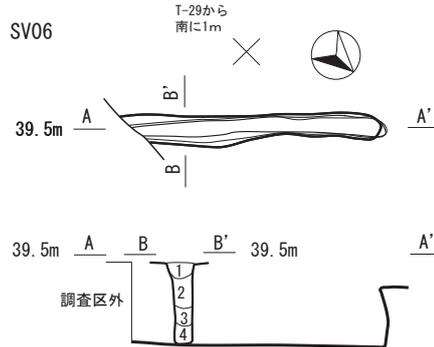
SV04

- 1層 7.5YR5/6 明褐色 しまり弱 粘性弱 円筒下層式土器片が出土する
黒褐色土ブロック15%混入 炭化物粒 (φ5mm) 1%
- 2層 7.5YR4/4 褐色 しまり弱 粘性弱 明褐色 (7.5YR5/6)
ロームブロック (φ30mm以下) 15%混入
- 3層 7.5YR4/6 褐色 しまり中 粘性中 壁面ロームの崩落土



SV05

- 1層 10YR4/3 にぶい黄褐色 しまり弱 粘性弱 褐色ローム粒 (φ5mm以下) 15%
炭化物粒 (φ1~3mm) 3%
- 2層 7.5YR5/6 明褐色 しまり弱 粘性中 ローム層
- 3層 7.5YR4/6 褐色 しまり中 粘性中 にぶい褐色ローム粒5%



SV06

- 1層 10YR3/4 暗褐色 しまり弱 粘性弱 明褐色 (7.5YR5/6) のローム粒 (φ5mm以下) 3%
- 2層 10YR4/6 褐色 しまり中 粘性中 褐色 (7.5YR4/4) 土10%混入 炭化物粒 (φ5mm) 1%
- 3層 7.5YR5/6 明褐色 しまり中 粘性やや強 暗褐色 (10YR3/4) 土10%
- 4層 7.5YR4/3 褐色 しまりやや弱 粘性強 にぶい褐色 (7.5YR5/3)
ローム粒 (φ2mm) 1%

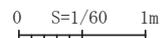


図57 溝状土坑(1)

第6号溝状土坑 (SV06) (図 57、写真 27・28)

【位置・確認】 T -29 グリッドで、暗褐色の落ち込みとして確認した。

【重複】 重複なし

【規模・平面形・壁面】 底面は確認長 190 × 最大幅 15 cm ほど、上端は確認長 200 × 最大幅 25 cm ほどの長楕円形を呈する。壁面は 50 cm ほどの高さで、短軸断面はほぼ真上に、長軸断面は片側がオーバーハングして立ち上がる。

【堆積土】 地山崩落土の褐色・明褐色を中心とし、1層に暗褐色土が堆積している。

【出土遺物】 土器が 53 g が出土した。

【時期】 縄文時代に構築された溝状土坑である。

第7号溝状土坑 (SV07) (図 58・60、写真 28・41)

【位置・確認】 Q -27・28、R -28 グリッドで、暗褐色の落ち込みとして確認した。

【重複】 重複なし

【規模・平面形・壁面】 底面は長軸長 350 × 最大幅 15 cm ほど、上端は長軸長 330 × 最大幅 30 cm ほどの長楕円形を呈する。壁面は 70 cm ほどの高さで、短軸断面は中端以上で広がりながら立ち上がり、長軸断面は両側がオーバーハングして立ち上がる。

【堆積土】 最下層の5層に黒褐色土を 20% 含むほかは、地山崩落土の褐色・にぶい黄褐色を中心に堆積している。

【出土遺物】 土器が 23 g、剥片石器が 7 点・23 g が出土した。土器片利用土製品（円形）が堆積土から 1 点出土した。胴部片の外表面を円形に打ち欠き、半分程度に擦り加工が施される。地文は L 多軸絡条体で、繊維が少量含まれる。地文や胎土等から縄文時代前期後葉のものであるが、遺構内に落ち込んだものと考えられる。

剥片石器は、二次加工のある剥片 1 点 (7.0g) ・微細剥離のある剥片 1 点 (10.2g) ・剥片 5 点 (5.9g) が出土した。

【時期】 縄文時代に、構築された溝状土坑である。

第8号溝状土坑 (SV08) (図 58・60、写真 27・28・41)

【位置・確認】 S -31 グリッドで、暗褐色の落ち込みとして確認した。

【重複】 遺構との重複は無いが、遺物集中ブロック範囲と重なっている。

【規模・平面形・壁面】 底面は長軸長 265 × 最大幅 15 cm ほど、上端は長軸長 240 × 最大幅 30 cm ほどの長楕円形を呈する。壁面は 60 cm ほどの高さで、短軸断面は中端以上で広がりながら立ち上がり、長軸断面は両側がオーバーハングして立ち上がる。

【堆積土】 最下層の4層と1層は壁面上位の遺物集中ブロックが落ち込んだと考えられる暗褐色土層であり、それぞれ円筒下層 d 式土器が出土している。2・3層は地山崩落土の褐色土である。落とし穴掘り込み面に近い壁面上側の暗褐色土層がまず崩落し堆積（4層）した後に、壁面下側の褐色土が崩落し3層・2層と堆積し、その後また壁面上位の暗褐色土が落ち込んだものと考えられる。

【出土遺物】 土器が 3,038 g、剥片石器が 28 点・160 g が出土した。60-7 は復元個体となった円筒

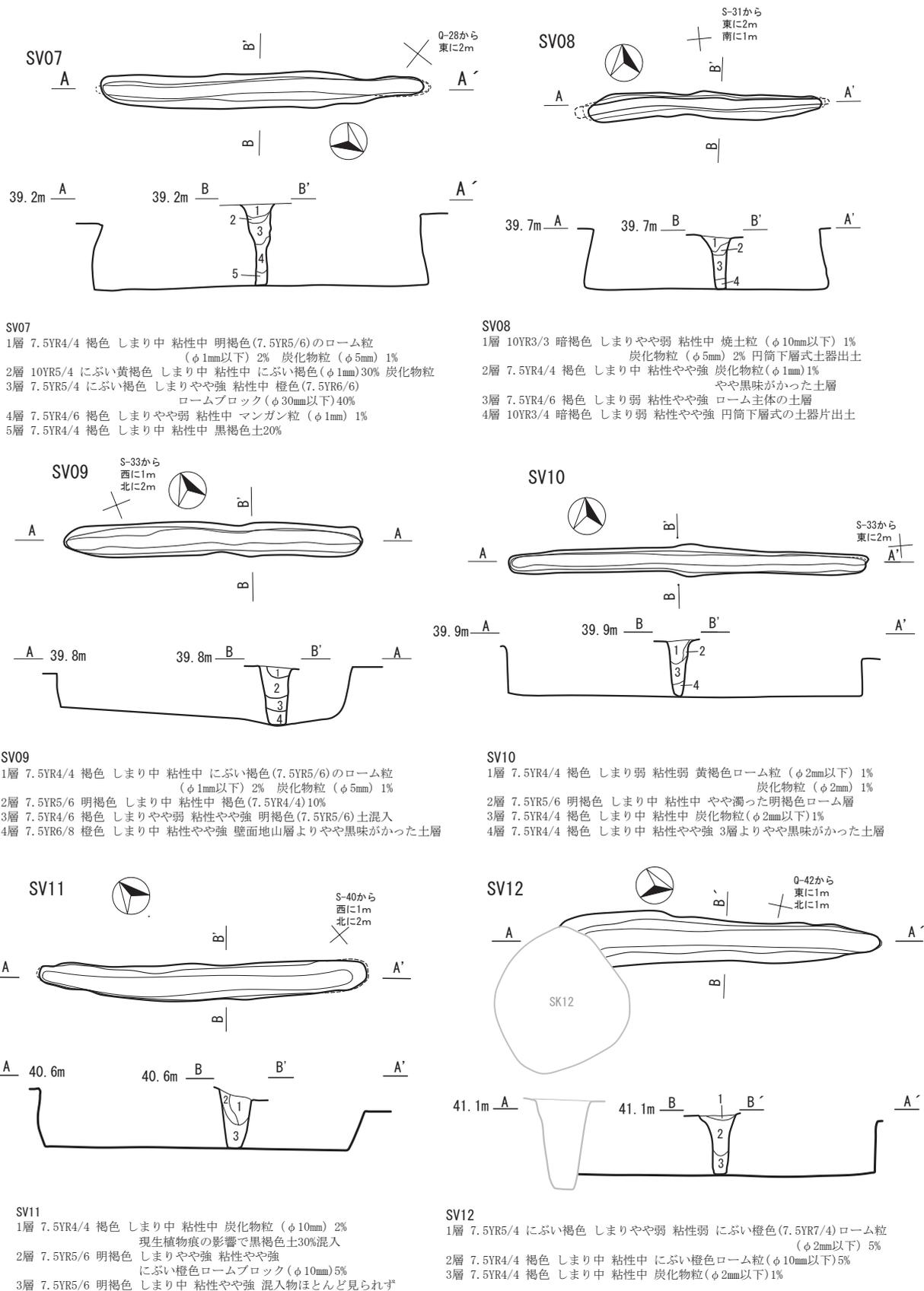


図58 溝状土坑(2)

下層 d 1 式であるが、4層と1層の両層から破片が出土した。石鏃1点も堆積土より出土している。土器片利用土製品（円形）が堆積土1層から1点出土した。底部片の外面を円形に打ち欠き、一部に擦り加工が施される。胎土に繊維を含むことから、前期後葉に帰属する。当層から出土した遺物は、全て周辺に分布する遺物集中ブロックに由来する可能性が高い。

剥片石器は、石鏃1点(2.8g)・石核1点(15.6g)・スクレイパー2点(17.9g)・二次加工のある剥片1点(1.6g)・微細剥離のある剥片9点(91.6g)・剥片14点(31.1g)が出土した。

【時期】縄文時代に、構築された溝状土坑である。

第9号溝状土坑 (SV09) (図 58、写真 27・28)

【位置・確認】R・S -32 グリッドで、炭化物粒を含む褐色の落ち込みとして確認した。すぐ南側に SV10 が位置する。

【重複】重複なし

【規模・平面形・壁面】底面は長軸長 305 × 最大幅 20 cm ほど、上端は長軸長 300 × 最大幅 35 cm ほどの長楕円形を呈する。壁面は 65 cm ほどの高さで、短軸断面は僅かに開きながら、長軸断面は真上に立ち上がる。

【堆積土】地山崩落土の褐色・明褐色を中心として堆積しているが、最下面の4層はやや黒味が強い褐色である。

【出土遺物】土器が 87 g が出土した。

【時期】縄文時代に構築された溝状土坑である。

第10号溝状土坑 (SV10) (図 58、写真 27・28・29)

【位置・確認】R・S -32・33 グリッドで、炭化物粒を含む褐色の落ち込みとして確認した。すぐ北側に SV09 が位置する。

【重複】SI09 と重複し、当溝状土坑が新しい。

【規模・平面形・壁面】底面は長軸長 365 × 最大幅 12 cm ほど、上端は長軸長 380 × 最大幅 30 cm ほどの長楕円形を呈する。壁面は 40 cm ほどの高さで、短軸断面は僅かに開きながら、長軸断面は真上に立ち上がる。

【堆積土】地山崩落土の褐色・明褐色を中心として堆積しているが、最下面の4層はやや黒味が強い褐色である。

【出土遺物】土器が 188 g、剥片石器が 9 点・28 g が出土した。剥片石器は、石鏃1点(1.6g)・スクレイパー1点(10.8g)・微細剥離のある剥片1点(2.9g)・剥片6点(12.9g)である。

【時期】縄文時代に構築された溝状土坑である。

第11号溝状土坑 (SV11) (図 58、写真 29)

【位置・確認】R -39 グリッドで、炭化物粒を含む褐色の落ち込みとして確認した。

【重複】重複なし

【規模・平面形・壁面】底面は長軸長 320 × 最大幅 20 cm ほど、上端は長軸長 340 × 最大幅 35 cm ほど

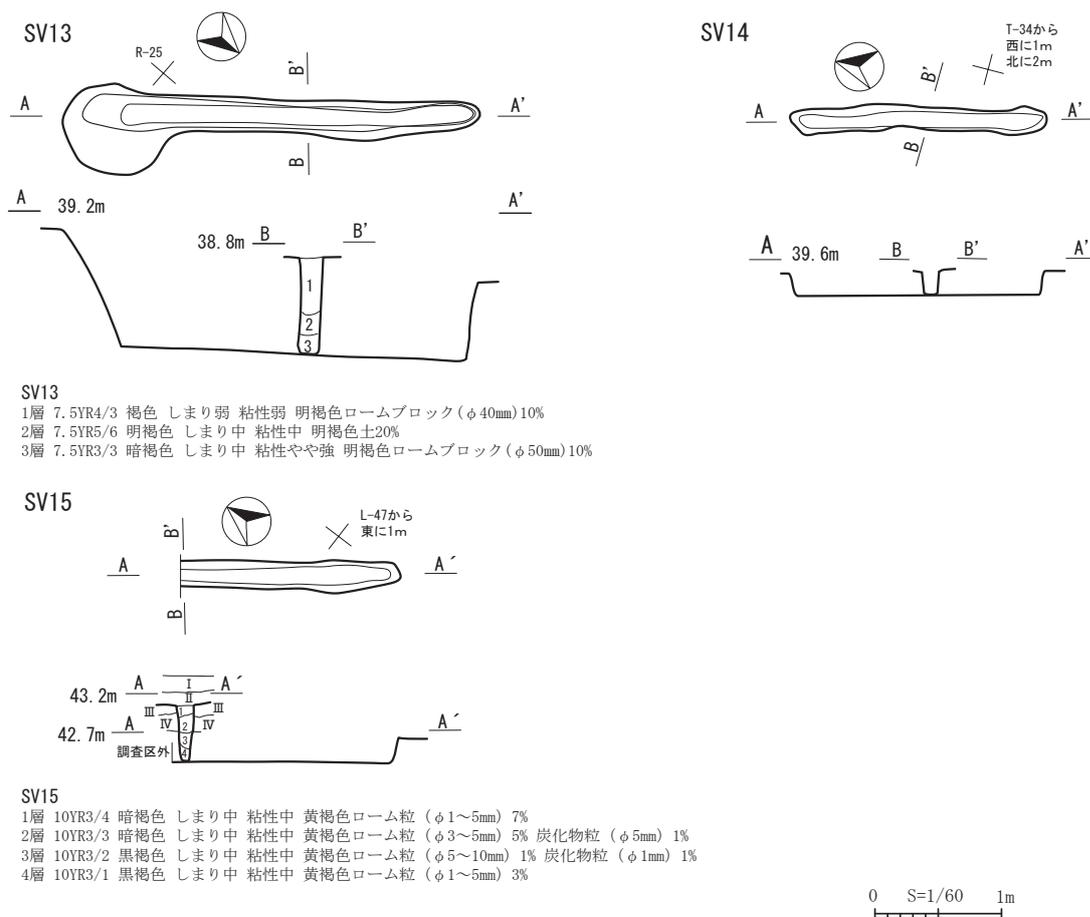


図59 溝状土坑(3)

の長楕円形を呈する。壁面は60 cmほどの高さで、短軸断面は僅かに開きながら、長軸断面は片側が中端がオーバーハングして、もう一方はやや開きながら立ち上がる。

【堆積土】地山崩落土の褐色・明褐色を中心として堆積している。

【出土遺物】なし

【時期】縄文時代に構築された溝状土坑である。

第12号溝状土坑(SV12)(図58、写真29)

【位置・確認】Q-41・42グリッドで、にぶい褐色の落ち込みとして確認した。

【重複】SK12と重複し、本溝状土坑が新しい。

【規模・平面形・壁面】底面は現存長305×最大幅20 cmほど、上端は現存長330×最大幅55 cmほどの長楕円形を呈する。壁面は60 cmほどの高さで、短軸断面は中端で開きながら、長軸断面の片側は真上に立ち上がる。

【堆積土】地山崩落土の褐色・にぶい褐色を中心として堆積している。

【出土遺物】出土なし

【時期】縄文時代に構築された溝状土坑である。

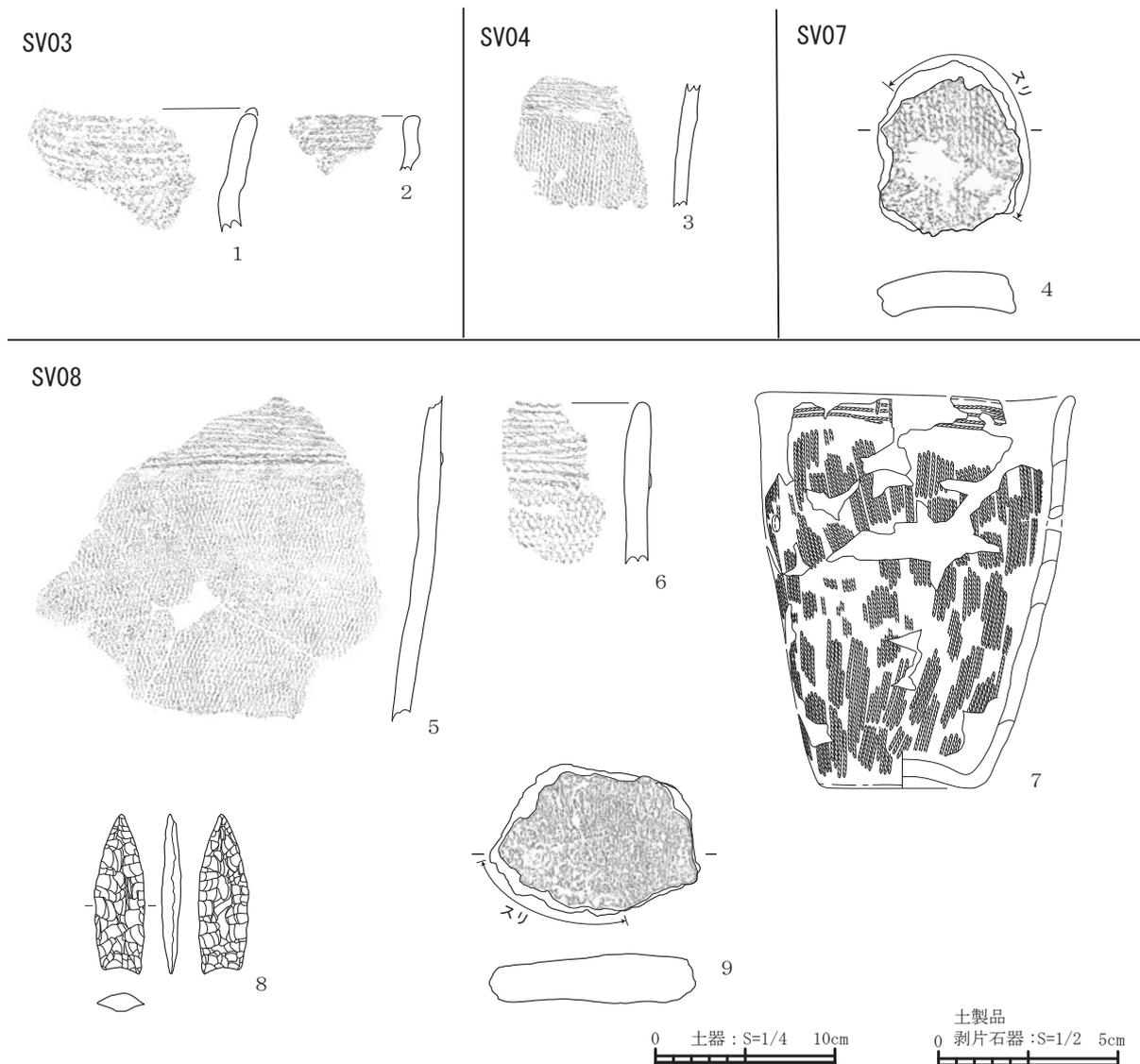


図60 溝状土坑(4)

第13号溝状土坑 (SV13) (図59、写真29)

【位置・確認】Q・R-24・25グリッドで、褐色の落ち込みとして確認した。

【重複】重複なし

【規模・平面形・壁面】底面は長軸長280×最大幅15cmほど、上端は長軸長325×最大幅30cmほどの長楕円形を呈する。壁面は90cmほどの高さで、短軸断面は真上に、長軸断面の片側は中端で開きながら、もう一方は大きく開きながら立ち上がる。

【堆積土】底面上に暗褐色土が堆積した後、地山崩落土の褐色・明褐色土が堆積している。

【出土遺物】土器が54gが出土した。

【時期】縄文時代に構築された溝状土坑である。

第14号溝状土坑 (SV14) (図59、写真29)

【位置・確認】SI09精査中に、床面で溝状土坑のプランを確認した。

【重複】SI09より新しいと考えられるが、竪穴建物跡の床面で確認した時点では前後関係は不明であった。

【規模・平面形・壁面】底面は長軸長190×最大幅20cmほど、上端は長軸長200×最大幅20cmほどの長楕円形を呈する。壁面は検出時には20cmほどの残存に止まり、短軸・長軸断面共に真上に立ち上がる。

【出土遺物】なし

【時期】縄文時代に構築された溝状土坑である。

第15号溝状土坑(SV15)(図59、写真29)

【位置・確認】J-49グリッドで、暗褐色の落ち込みとして確認した。

【重複】重複なし

【規模・平面形・壁面】底面は現存長165×最大幅15cmほど、上端は現存長175×最大幅20cmほどの長楕円形を呈する。壁面は20cmほどの高さで、短軸断面はほぼ真上に、長軸断面の片側は真上に立ち上がる。

【堆積土】黒褐色土・暗褐色土が堆積している。

【出土遺物】出土なし

【時期】縄文時代に構築された溝状土坑である。

(5) 遺物集中区(図61～63、写真30・42)

R-30 遺物集中ブロック(BL01)

【位置・確認】R-30グリッド、第Ⅲ層中で、遺物の集中を確認した。

【重複】明確な重複はないが、本遺構と、SV08の堆積土から出土した土器の様相が似ているため、SV08が一部を掘り込んで構築した可能性がある。

【規模・平面形・壁面】約2.8×2.0mの規模で集中が見られた。検出レベルはほぼ同一であるため、短時間の一括廃棄ブロックの可能性はある。

【堆積土】第Ⅲ層、遺物包含層の精査中に検出した。

【出土遺物】土器が12,975g、剥片石器が64点・835g、礫石器は5点・966gが出土した。土器は15点図示し、全て円筒下層d式である。いずれも器面の剥落が顕著である。全て平口縁で、口縁部文様は、2点(62-7・8)のみ山形の押圧文で、他は平行押圧文である。器形は62-15を除きすべて直立する。地文は、多軸絡条体が10点(62-1・2など)と最も多く、単軸絡条体第1類は3点(62-3・10・11)である。寸法は、口径が30cm以上のものが3点(62-1・2・7)、20～25cmのものが5点(62-3～6・8)、10cm程度のものが2点(62-9・15)ある。出土した土器は、一括性があり、円筒下層d2式に特徴的な装飾的な要素(波状口縁や貼付文など)を持つものが含まれないことから、円筒下層d1式の土器群と考えられる。

剥片石器は、石鏃3点(4.8g)・石槍1点(29.9g)・石核5点(297.4g)・スクレイパー10点(175.4g)・二次加工のある剥片7点(72.0g)・微細剥離のある剥片24点(193.0g)・剥片14点(62.5g)が出土した。

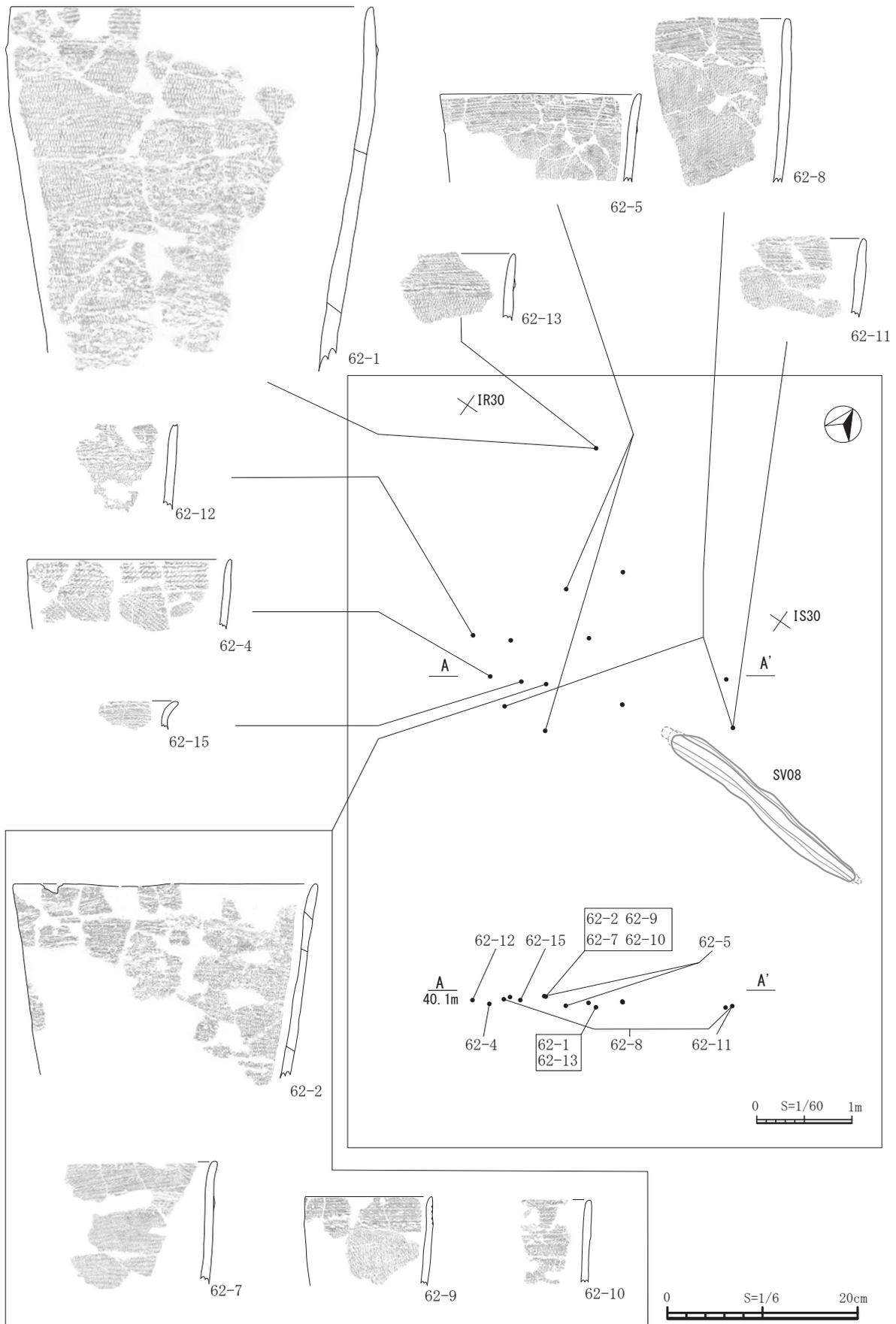


図61 R-30遺物集中ブロック(1)

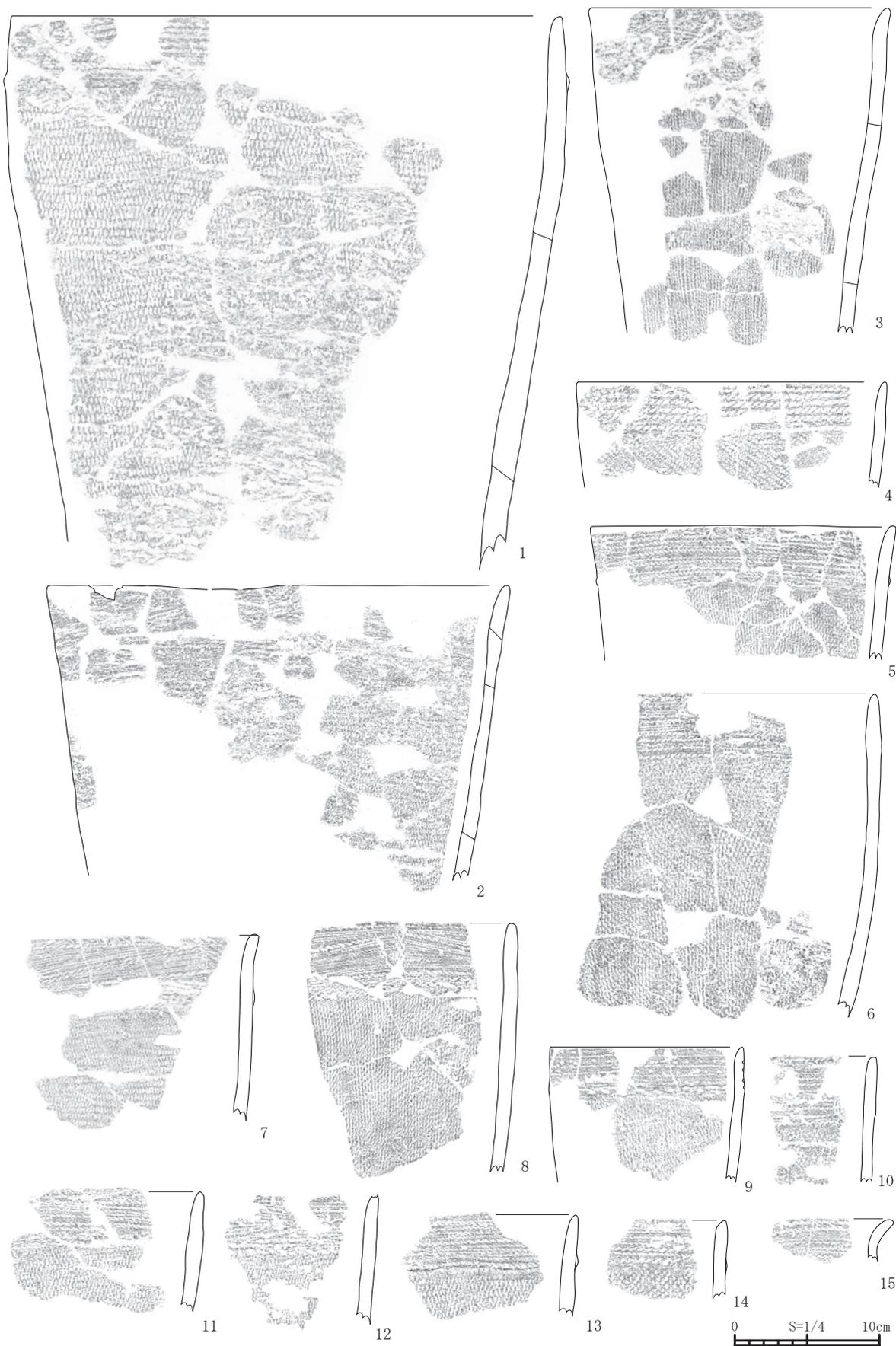


図62 R-30遺物集中ブロック(2)

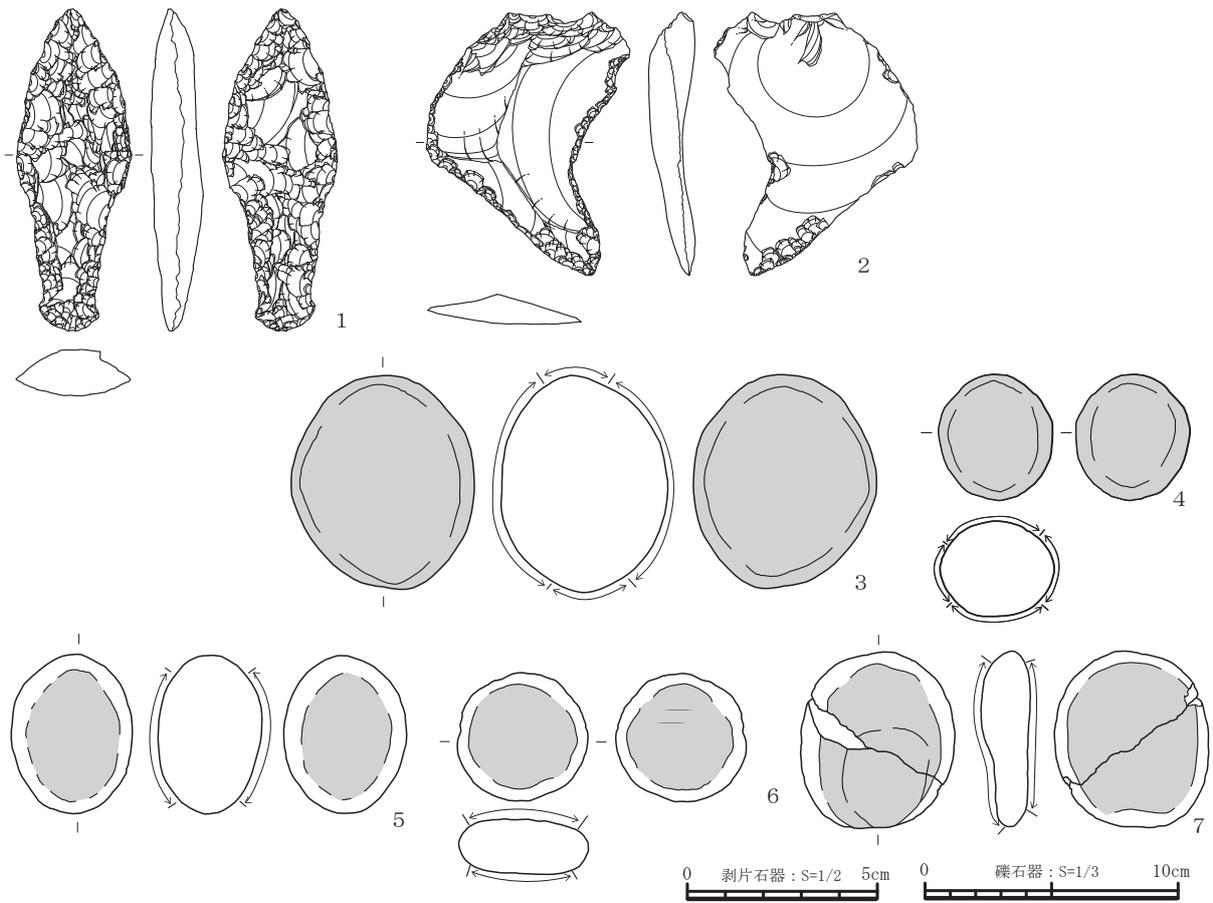


図63 R-30 遺物集中ブロック(3)

礫石器は磨石5点が出土し、全点図示した。全面に磨面が認められるもの(63-3・4)、表裏面に磨面が認められるもの(63-5~7)があり、63-5は表面下側に浅い凹みが認められる。

【時期】縄文時代前期後葉円筒下層d1式の一括性のある廃棄ブロックで、SV08より古い。

2 遺構外出土遺物

(1) 縄文土器

古野(2)遺跡からは、913.4kgの縄文土器が出土した。このうち、796.8kg(87.2%)が遺構外から出土した。出土した土器の時期は、縄文時代前期後葉(円筒下層d式)～晩期後葉(大洞A'式)である。このうち、円筒下層d式がその多くを占め、次に榎林式が多い。

縄文土器は調査区全体から出土したが、概ねO-52、P-42、R-45グリッドを結んだ南東斜面エリアから多く出土した。南東斜面からは、円筒下層d式土器、次いで榎林式土器が多量に出土し、斜面捨て場の様相を呈している。

(ア) 縄文時代前期後葉

円筒下層d式(図64～83)

遺構外から出土した土器の多くを占める。前期後葉(円筒下層d式)は、円筒下層d1式と円筒下層d2式に細分できるとされているが、良好な出土状態の資料は確認されなかった。これは、円筒下層d1期～d2式期を通じて土器を廃棄し続けた所産であるともいえる。

加えて、資料の多くが、口縁が原体押圧文(平行・山形)、平口縁、区画部が微隆帯、地文は単軸絡条体・多軸絡条体のものの破片資料であった。これは、円筒下層d1～d2式にわたる特徴である。

掲載にあたっては、口縁部文様、口縁部形態、地文、器形といった特徴のまとまりに分類し、175点を図示した。なお、新しくなるにつれて、頸部が伸び明瞭に屈曲することに伴い文様も幾何学的に変化しているような特徴をもつものは、円筒下層d2式として記載した。詳細な型式分類については、第5章第1節を参照されたい。

・平行押圧文、平口縁、単軸絡条体第1類のもの(図64～65)

22点を図示した。このうち、器形が、口縁部で直立もしくは緩く外反するものは、18点(64-1～65-9)で、屈曲する器形は4点(65-10～13)である。寸法は、64-1は約32cmと最も口径が大きく、他は約20～30cmのあいだに収まるものが多い。頸部区画部は、微隆帯がつくものが15点(64-1・2・5～8、65-2～8・10・11)と多い。

・平行押圧文、平口縁、多軸絡条体のもの(図66～72-1～7・9)

38点を図示した。同時期で最も多い群である。このうち、器形が口縁部で直立もしくは緩く外反するものは、30点(66-1～71-13)とほとんどを占める。寸法は、口径が約30cmを超えるものが9点(66-1～69-1)、約20～30cmのものが8点(69-2～70-5)、それ以下のものが5点(71-1～5)である。区画部は微隆帯がつくものが24点(66～67、68-2・3、69～70-1・3～5、71-1・2・4・7～11・13)と多い。多軸絡条体は、角ばった軸を用いることで回転時の軸の押圧痕が残るもの(以下、角軸)が14点(66-1、67-1、68-1・2、69-2～4、70-1・2・5、71-1・4・6・11)と多い。

66-1は、胎土に凝灰岩や石英等の白色の小礫を多数含む。68-1は、胴部上半に区画部のような平行押圧と口縁部のような作出がみられる。71-1～3は寸法が似通っており規格性が見受けられる。

器形が頸部で明瞭に屈曲するものは7点(72-1～7)ある。すべて口径が20cm以下の小型である。こ

の群は円筒下層 d 2 式に含まれる可能性もある。

72-9は、地文は胴部上半が単軸絡条体第1類、下半は多軸絡条体である。同じ組合せの地文をもつ個体は出土していない。

・平行押圧文、平口縁、単軸絡条体第1A類のもの（図72-10～15）

6点図示した。地文は、1点（72-15）が単節縄文（LR）の絡条体である。口縁部が屈曲する器形は1点（72-15）のみで、ほかは頸部で直立または緩く外反する。口径は、1点（72-10）が25cm、2点（72-11, 12）は20cm前後である。区画部は、3点（72-12～14）で隆帯に棒状工具の刺突、原体押圧が施される。72-11は区画部に羽状縄文、15は結節回転文がつく。

・平行押圧文、平口縁、回転縄文のもの（図72-8、73-1）

2点図示した。72-8は、口縁部が直立し、地文はLR斜行縄文で、区画部は隆帯に刺突がつく。73-1は、口縁部は緩く外反し、地文が不明瞭だが、RRL縦走縄文と考えられる。

・平行押圧文、平口縁、条痕のもの（図73-2～8）

7点図示した。このうち、73-6を除く6点が、縦走する条痕が地文である。73-6・8は口縁部に条痕が横走する。器形は、73-5・7が緩く外反し、8が屈曲する。

・山形押圧文、平口縁、単軸絡条体第1類のもの（図74・75）

14点図示した。器形は、口縁部が直立または緩く外反するものが10点（74、75-1～6）と多い。このうち、口縁部文様は、原体押圧で山形を表現するものだが、口縁部の幅が狭いほど山形は緩く、広くなるにつれ菱形に近づく（75-1～3）傾向がある。この変化は、型式学的な属性の変遷を示す可能性がある。75-6は、平行文の上から斜めの押圧を加えて山形を表現している。口径は、約25～30cmのものが、3点（74-1・2、75-1）、約20～25cmのものが6点（74-3・4、75-2～5）と多い。全ての個体に隆帯が、区画部につく。

頸部が屈曲する器形のもの、4点（75-7～10）あり、75-7は口径が約22cmである。

・山形押圧文、平口縁、多軸絡条体のもの（図76・77）

19点図示した。口縁部が直立もしくは緩く外反するものは11点（76、77-1～6）と多い。このうち、口縁部文様は緩い山形のものが多いが、平行押圧文に斜めの押圧で山形を作出しているものが1点（76-2）、菱形に近いものが1点（76-1）ある。口径は、約30cm以上が4点（76-1・2・4・5）、約25～30cmが4点（76-3、77-1～3）ある。区画部は隆帯の付くものが8点（76-1・2・4・5、77-1～3・6）と多い。地文の多軸絡条体は、角軸が2点（77-2・6）ある。

口縁部が屈曲する器形のもの、8点（77-7～14）ある。口縁部文様は、菱形に近い山形文様が施文される。区画部は、屈曲部に隆帯が付くものが2点（77-8・9）あるほかは、屈曲部に刺突等の文様が施文される。この群は円筒下層 d 2 式に含まれる可能性がある。

・山形押圧文、平口縁、その他の地文のもの(図78-1~6)

6点図示した。地文が、回転縄文は2点(78-1・2)、縦走の条痕は2点(78-3・4)ある。

円筒下層d2式(図78-7~82-3)

波状口縁、口縁部文様が幾何学的になるもの、口縁部に貼付があるといった、新相の属性をもつ群を円筒下層d2式とした。

・波状口縁のもの(図78-7~18, 79)

33点図示した。このうち、地文が単軸絡条体第1類のものは5点図示した(78-7~11)。口縁部形態は、78-8が頂部二股、78-11は緩い波状もしくは、突起がつく。口縁部文様は、口縁部に沿って縄文が押圧される。器形は、直立する1点(78-11)、屈曲する1点(78-10)を除き、緩く外反する。区画部は1点(78-9)に隆帯がつく。

地文が多軸絡条体のものは10点(78-12~18、79-1~3)図示し、1点(78-13)は角軸である。78-12は頂部二股の波状口縁である。口縁部文様は、波状頂部から縦に押圧文が入り、波状に沿って平行押圧文が施される。区画部は、隆帯のつくものが4点(78-14~16、79-2)あり、79-1は屈曲する。

地文が単軸絡条体第1A類のものは1点(79-4)で、頂部が二股の緩い波状口縁である。

回転縄文のものは4点(79-5~7・10)である。79-5は頂部二股の波状口縁で、口縁部文様は、山形もしくは連続する三角形の文様が想定される。区画部は羽状縄文で、直立する器形である。79-6・7は屈曲する器形である。

地文が条痕のものは、7点(79-8~14)図示した。口縁部形態は、頂部二股のものが2点(79-10・15)ある。区画部は、微隆帯が付くものは2点(79-11・13)ある。器形は、屈曲が付くものが2点(14・15)ある。

口縁部片は、6点(79-16~21)ある。79-16は透かし、18は刺突と穿孔が入る。79-16・21の口縁部文様は、16が菱形文、21三角形文が想定できる。79-17は頂部二股の口縁部形態である。79-20・21は頸部が屈曲する。

・平口縁、幾何学的な文様がつくもの(図80)

11点図示した。幾何学的な文様は、菱形文様、矢羽根状文様、三角形文様の3つに分類できる。

菱形文様は6点(80-1~6)図示した。口縁部が直立もしくは緩く外反するものは3点(80-1~3)で、ほかは屈曲する。地文は、単軸絡条体第1類が2点(80-2・6)で、ほかは多軸絡条体である。区画部は、隆帯が付くものが5点(80-1・2・4~6)ある。

矢羽根状文様は2点(80-7・8)あり、いずれも上下2段に展開する似通った個体である。口縁部が緩く外反し、口径は約30cm、地文は多軸絡条体、区画部に隆帯がつく。

連続する三角形文様は、3点(80-9~11)で、地文は2点(80-9・10)とも回転縄文が施文される。

・口縁部に粘土紐が貼付されるもの(図81、82-1~3)

17点図示した。地文が多軸絡条体のものは4点(81-1~4)ある。すべて波状口縁の頂部から縦に

粘土紐が貼付される。81-2・3は三角形文様がつく。81-2以外は、口縁部で屈曲する。

地文が回転縄文のものは6点（81-6～10・12）ある。口縁部の貼付文は、頂部から縦に貼付されるものが5点（81-8～12）、81-5は口縁部に俵状の貼付、81-6は頂部に貼付、81-7は口縁部に円形の貼付が施される。器形は、81-11以外は、口縁部で屈曲する。口縁部片が3点（82-1～3）ある。いずれも頂部から縦に貼付文が付く。82-1は頂部直下に透かしが入る。

81-14は、口縁に横U字状に貼付文が付き、その中を山形文が充填される。また、地文の縦回転の羽状縄文の上から結節回転文が施される。

81-13は、口縁部に刺突に囲まれた円凹文が付く。地文は多軸絡条体で区画部に隆帯がつく。

縄文時代前期後葉のその他の土器（図82-4～13、83）

・口縁部に文様がないもの。

7点（82-4～10）図示した。82-4は緩い波状口縁で、口縁部に斜縄文、地文に単軸絡条体第1類が施文される。82-5は折り返し口縁で、屈曲のある器形、地文は斜縄文である。82-6～8は、口縁部以下に条痕が施文される。82-9は口縁部に刺突列、地文は単軸絡条体第1類が施文される小型土器である。82-10は、無文で、口縁部が波状口縁である。このうち、3点（82-4・5・10）が、円筒下層d2式の可能性がある。

・口縁部が欠損するもの

6点（82-11～83-3）図示した。82-11は、胴部片で、地文が多軸絡条体、区画部に隆帯がつく。82-12・13は胴部片で地文が縦条痕である。

83-1は、胴部片で、縦につく隆帯が残存しており、地文は縦位の縄文回転の上から結節回転文が縦に施文される。83-2・3は胴部が四角形を呈する胴部片である。83-2は、地文がRLの縦走、3はRLRが横走する。

異系統のもの（図83-4）

83-4は、大木6式系が想定できる胴部片である。器形は胴部で丸くなる金魚鉢型が想定され、断面U字状の工具で施文された鋸歯文の下に、微隆帯がつき、上から刺突列がめぐる。

（イ）縄文時代中期中葉のもの（図83-5）

1点図示した。円筒上層e式の波状口縁の頂部が想定でき、円状の透かしが入る。

（ウ）縄文時代中期後葉（榎林式）のもの（図84～88）

前期後葉の次に多く出土し、83点図示した。主に文様モチーフ、口縁部形態等で分類した。

・縦に弧線が大きく展開するもの（図84、85-1）

2点図示した。84-1は、口径が53.7cm、器高が65.0cmの超大型の深鉢である。口縁部は二個一対の突起で渦巻状沈線が入り、胴部文様は互い違いに大振りの弧線が入り組んでいる。85-1は、口径が31.5cm、器高が47.7cmと大型である。口縁部は波状で渦巻状沈線が入り、胴部文様は、重層弧線文の下に大振りの弧線が入り、弧線の頂部から縦に波状文が施文される。

・渦巻状のモチーフのもの(図85-3~13)

11点図示した。文様の全体モチーフがわかるものはない。5点(85-3~7)は渦巻文が曲線で接続する渦巻曲線文が想定される。残り6点は、水平もしくは垂直に渦巻文が展開する文様が想定される。口径がわかるものは3点(85-3・8・10)あり、いずれも10cm前後である。口縁部が残存するのは6点(85-3・4・8~10・12)あり、波状口縁で沈線が施される。85-3は、口唇部の渦巻沈線が深く施文され、浮彫状になっている。

・弧線が重層するもの(重層弧線文)(図85-14・15、86-1~9)

11点図示した。文様の全体モチーフがわかるものはない。2点(85-14、86-2)は3層にわたり文様展開するが、他は2層である。口径がわかるものは4点(85-14・15、86-1・2)あり、いずれも30cm前後である。口縁部は2点(86-8・9)を除き残存し、いずれも波状口縁である。3点(86-2・7・6)を除き、口唇部に渦巻状の沈線が施される。

・その他の文様(図85-2、86-10・11)

3点図示した。85-2は波状口縁で、胴部に逆Y字の沈線文とそれから横走する沈線が配置される。86-10は、平口縁の破片で、隆線により施文され、文様は縦に区画された渦巻き文が横位に展開している。胴部で大きく括れる器形が想定できる。

86-11は遺構外の当時期資料で、唯一の完形個体である。横断面が楕円形の器形で口縁部は、波頂部が二個一对の4単位の波状口縁で波頂部は二個一对で、口唇部には沈線が入る。文様は3本沈線が頸部に横位、そこから胴部に垂直あるいは波状沈線が垂下する。斜面捨て場からの出土であるが、底部は意図的な穿孔が認められ、特殊な用途が想定できる。

・波状口縁片で文様モチーフがあるもの(図86-12~21、87-1~8)

18点図示した。いずれも波状口縁の頂部から渦巻状に沈線が施される。このうち、弧状等のモチーフが縦に展開する文様が想定できるものは、10点(86-12~21)ある。横位沈線が施文されるものは8点(87-1~8)ある。

・波状口縁部片で文様モチーフが残存しないと思われるもの(図87-9~19)

11点図示した。頂部から渦巻状沈線が口唇部に施文されるものは7点ある(87-9~14・16)。87-19は頂部に円状に沈線が施文される、

・波状口縁で無文のもの(図87-20~26、88-1~9)

16点図示した。波状口縁の頂部に刺突が付くものは5点(87-20~24)、貼付がつくものは2点(87-25・26)、87-26は円状の貼付文が付く。2点(88-2・3)は頂部が肥厚する。88-1は、3単位の波状口縁で、器高は29cm、口径は21cmである。口径がわかるものは4点あり、いずれも20cm前後に収まる。88-6~8は平口縁の可能性もある。

・その他（図88-10～16）

7点図示した。3点（88-10～12）は口縁部に沈線が施され、88-10は、口径が17cmで、口縁部は、透かしが入る突起と低い山形突起が交互に連続する。口縁部と透かし内面に沈線が施文される。3点（13～15）は口縁部片で、13は透かしが入り、14・15は取手が付く。16は胴～底部が残存し地文縄文である。

・口縁部が開く小型土器（図88-17～20）

4点図示した。頸部で屈曲する器形である。口径がわかる2点（88-17・18）は10cm前後、他2点は頸～胴部片である。いずれも口縁部が無文、頸部に沈線に区画された刺突列が配置され、胴部に渦巻文が施文される。

（エ）縄文時代後期（図89）

当該期の型式分類については関根・児玉（2013）に準拠した。後期初頭新段階が3点、十腰内I式古段階が7点、「十腰内VI群」前後が1点の計11点図示した。

・後期2期（後期初頭新段階）（図89-1～3）

3点図示した。いずれも深鉢の口縁～頸部片である。2点（89-1・2）は頸部に、三角形を基調とする縄文が施文される。1点（89-3）は、沈線で渦巻モチーフ文様が施文される。

・後期3期 第1段階（十腰内I式古段階）（図89-4～10）

7点図示した。深鉢は3点あり、89-4は、口縁～頸部片である。無節縄文の上に横走沈線が2条入る。89-5は、折り返し口縁の緩い波状口縁、頸部には波状頂部下に円文、その間に楕円文が上下2段に配置され、胴部には沈線で網目文が施文される。89-6は、頸部が隆沈線により区画され、中は楕円文が充填され、胴部には単軸絡条体第5類により網目文が施文される。

鉢は1点（89-7）あり、胴部片で、沈線による入組文が施される。89-8は鉢系か壺と考えられ、渦巻文がある。

壺は2点（89-9・10）あり、いずれも胴部片で、隆帯により文様がつき、89-9は縦モチーフ、10は渦巻状モチーフが想定される。明確な時期比定は難しく、中期後葉～当該期まで可能性がある。

・後期8期（後期末葉「十腰内VI群」前後）（図89-11）

1点図示した。台付鉢であり、口縁部は肥厚する突起に縦に沈線が入る。頸部には横沈線に区画された刻目列が2条めぐる。胴部に、黒色のタール状の物質が付着している。

（オ）縄文時代晩期（図90・91）

・大洞B2式（図90-1・2）

2点図示し、いずれも深鉢である。90-1は、口縁～頸部片で、突起口縁、口縁部と頸部と頸部の文様は入組三叉文が想定できる。90-2は、頸～胴部片で、頸部で緩く括れる器形、頸部文様は入組三叉文である。

・大洞C 1式 (図90-3~17、91-1~3)

18点図示した。円筒下層d式、榎林式に次ぐ3番目に多い出土量である。深鉢・鉢、台付鉢、浅鉢壺、粗製土器類があり、器種セットが揃っている。

深鉢・鉢は9点(90-3~11)図示した。器形は、頸部が内湾するものが1点(90-9)で他は頸部で屈曲する。口縁部形態は、小波状口縁が2点(90-10・11)、連続する二個一対の突起が4点(90-5~8)ある。頸部文様は、連続した沈線間にめぐる刺突列(沈線間刺突列)が9点全てに施文される。口径がわかるものは、6点あり、1点(90-5)が28cmと大型で、他は10~15cm前後に収まる。

浅鉢は3点(90-12~14)図示した。90-12は、小波状口縁、頸部に沈線間刺突列がめぐる。90-13は、残存率の高い優品で、外面の前面に黒漆と思われる付着物が残る。平口縁で頸部に刺突列、胴部には配置文と充填文が施文される。90-14は、口唇部に浮彫りで表現された入組文、口縁部は、間隔の狭い二個一対の突起が付き、胴部に配置文が施文され、外面の前面に黒漆と思われる付着物が残る。

台部は、3点(90-15~17)図示した。90-15は、台付鉢の台部が想定でき、連続した刺突列がめぐる。90-16は下部に沈線、90-17は沈線間に刺突列が施文される。

壺は3点(91-1~3)図示した。91-1は、口径が11cm、球胴形で最大径は31cmである。口縁部に二個一対の突起が近接して二つ付き、頸部に無文帯、沈線間の刺突列が2条施文される。91-2は口頸部で沈線が施文され、91-3は頸部に沈線間の刺突列がめぐる。

・晩期前葉~中葉 (図91-4~8)

明確な時期比定が難しいが晩期前葉に属すると思われるものは5点ある。91-4は深鉢で、頸部が括れ、無文帯がある。91-5は小波状口縁で、地文が無文、91-6は無文の壺の口縁部片である。91-7は粗製土器で口径が26cm、口縁部が内湾し、地文は斜行縄文である。91-8は粗製土器で地文は斜行縄文である。

・晩期後葉 (図91-9~11)

3点図示した。鉢は1点(91-9)で、口縁部は二個一対の低い突起が付き、頸部で緩く外反する。頸部文様は匹字文が想定され、口縁部内面には沈線が施文される。大洞A 2~A'式と考えられる。壺は1点(91-10)で、頸部に流水工字文が想定できる文様が2段にわたり施文され、上段はネガ文様、下段はポジ文様であり、大洞A 1式と考えられる。浅鉢は1点(91-11)で、頸部に変形工字文が想定できる文様が施文され、大洞A'式と考えられる。

(長谷川)

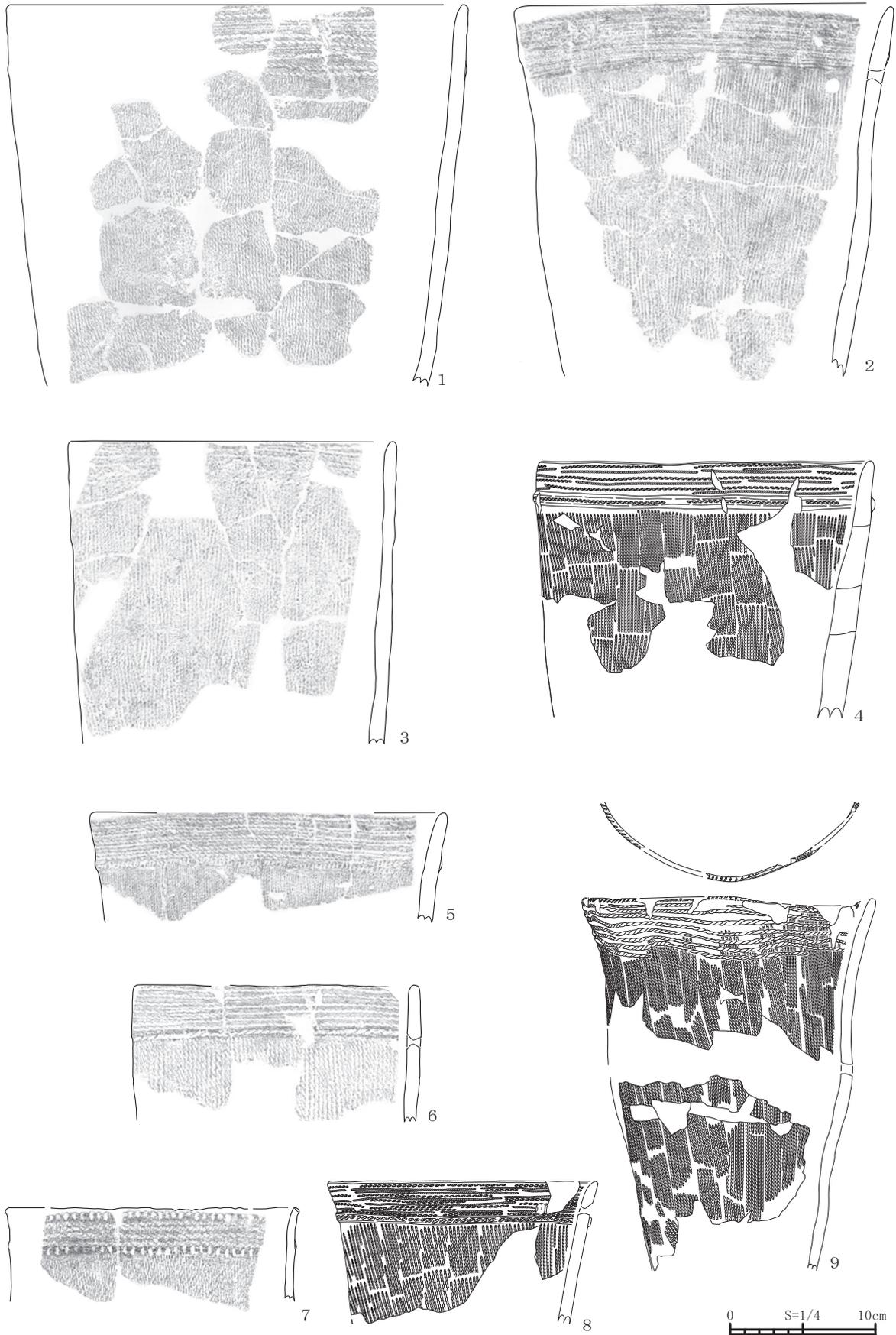


図64 遺構外出土遺物（縄文時代・1）

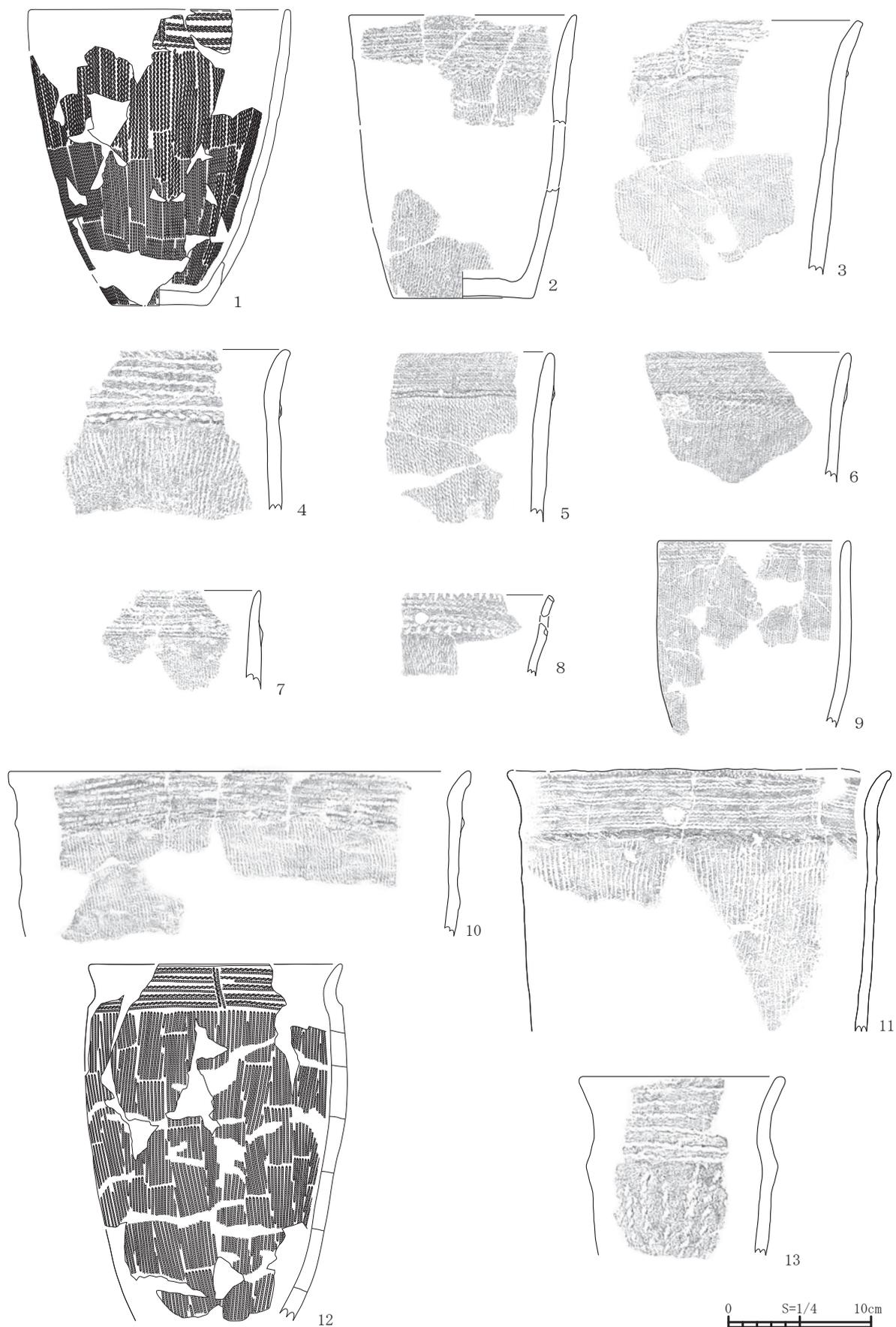


図65 遺構外出土遺物（縄文時代・2）



0 S=1/4 10cm

図66 遺構外出土遺物（縄文時代・3）

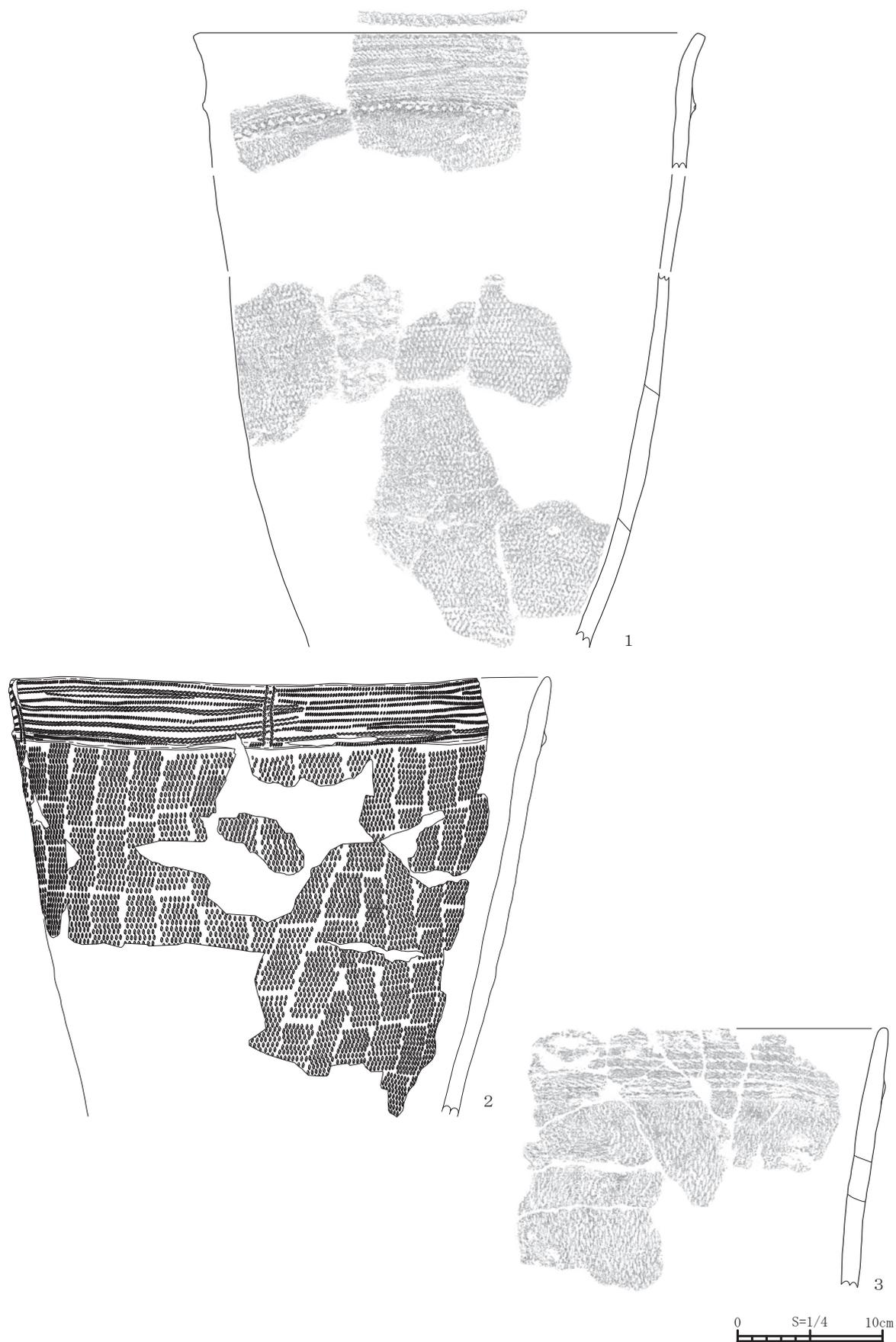


図67 遺構外出土遺物（縄文時代・4）



図68 遺構外出土遺物（縄文時代・5）

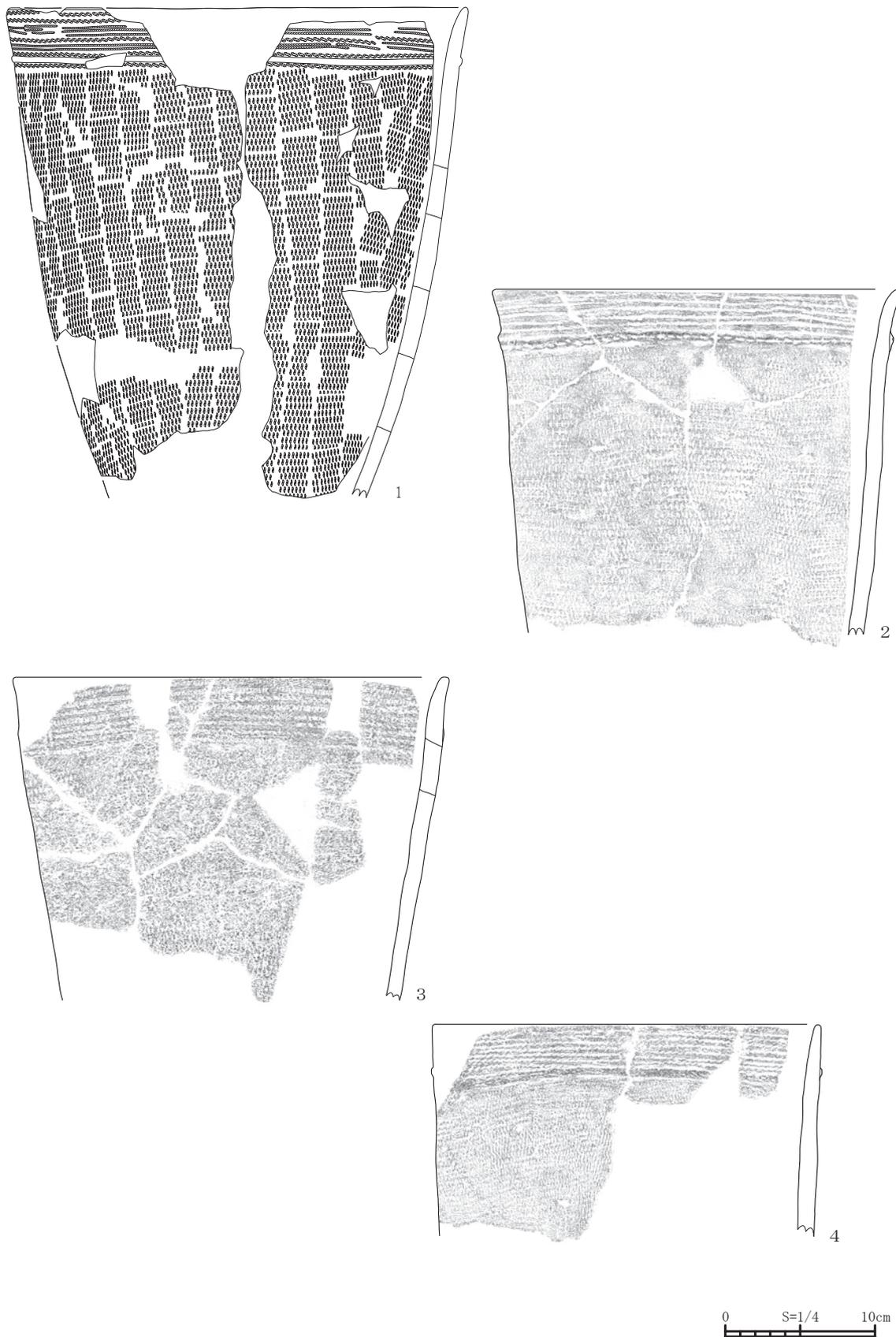


図69 遺構外出土遺物（縄文時代・6）

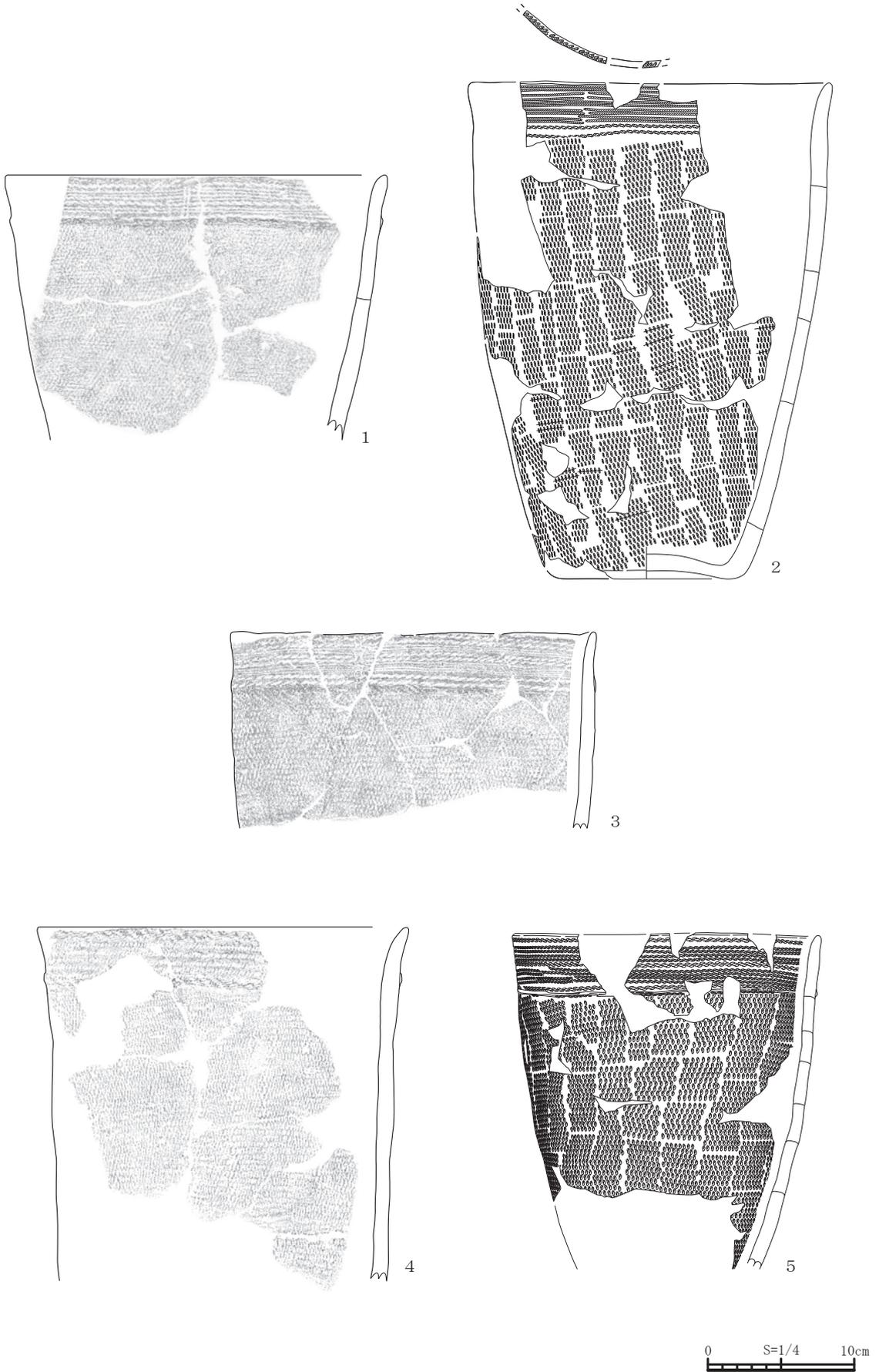


図70 遺構外出土遺物（縄文時代・7）

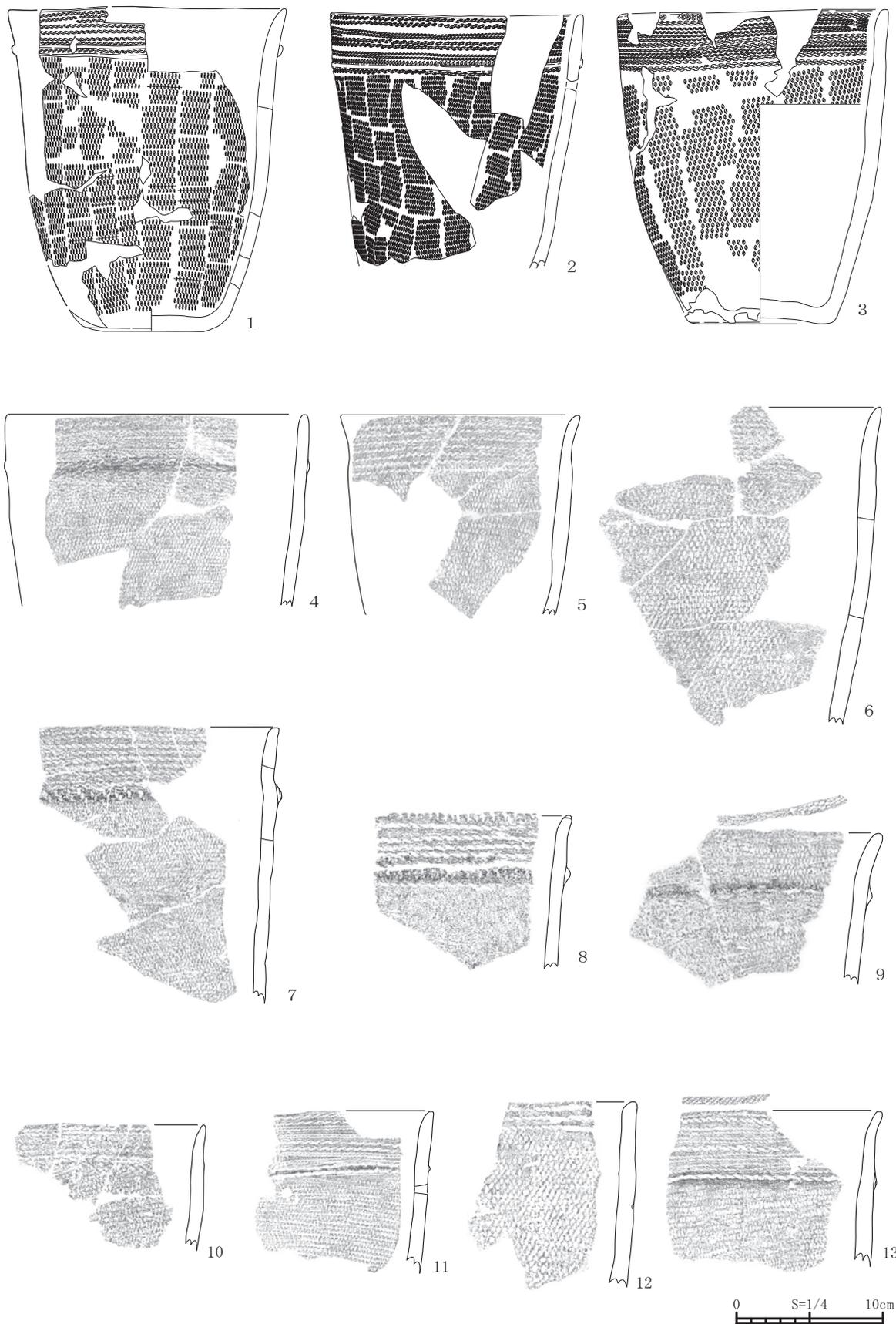


図71 遺構外出土遺物（縄文時代・8）

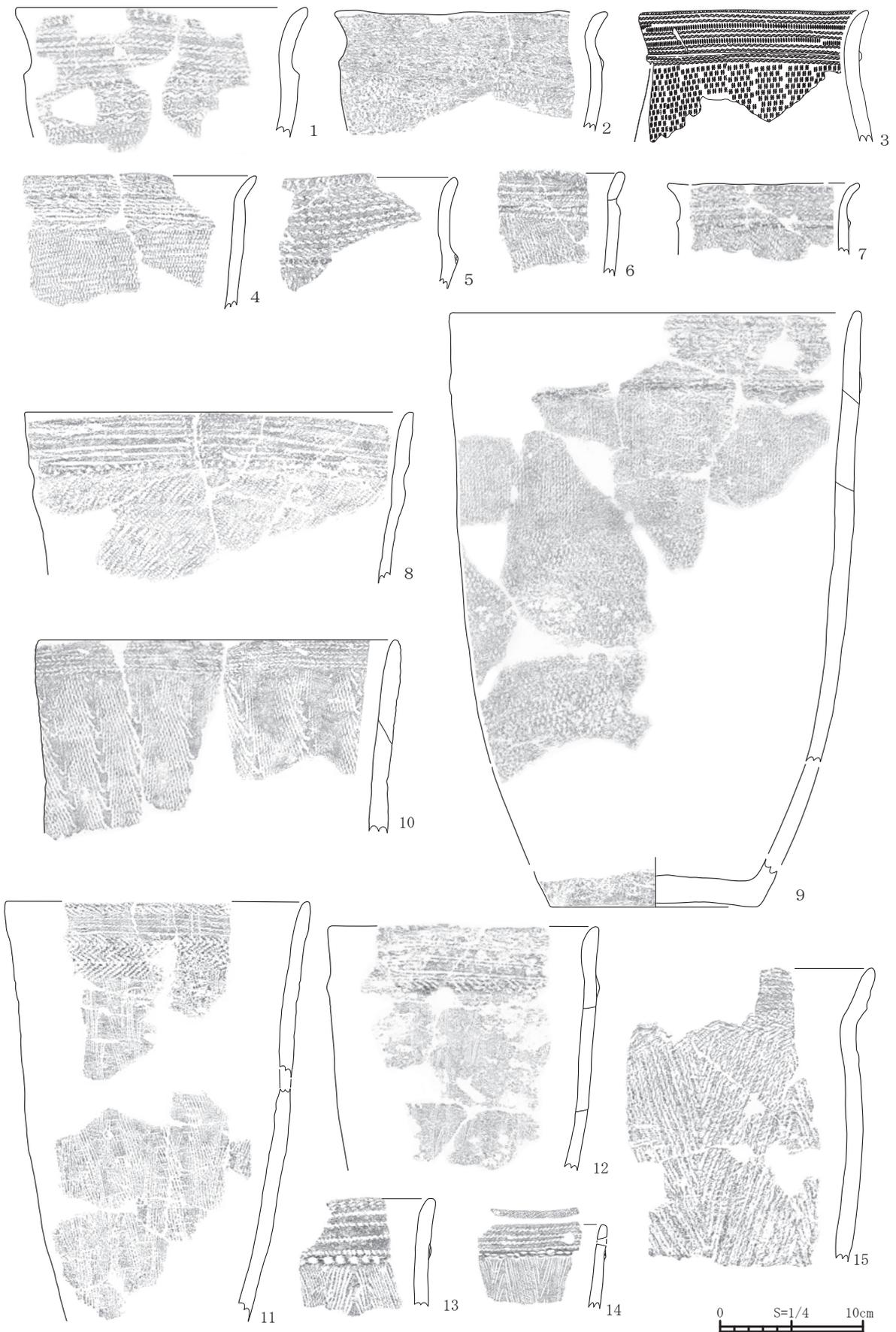


図72 遺構外出土遺物（縄文時代・9）

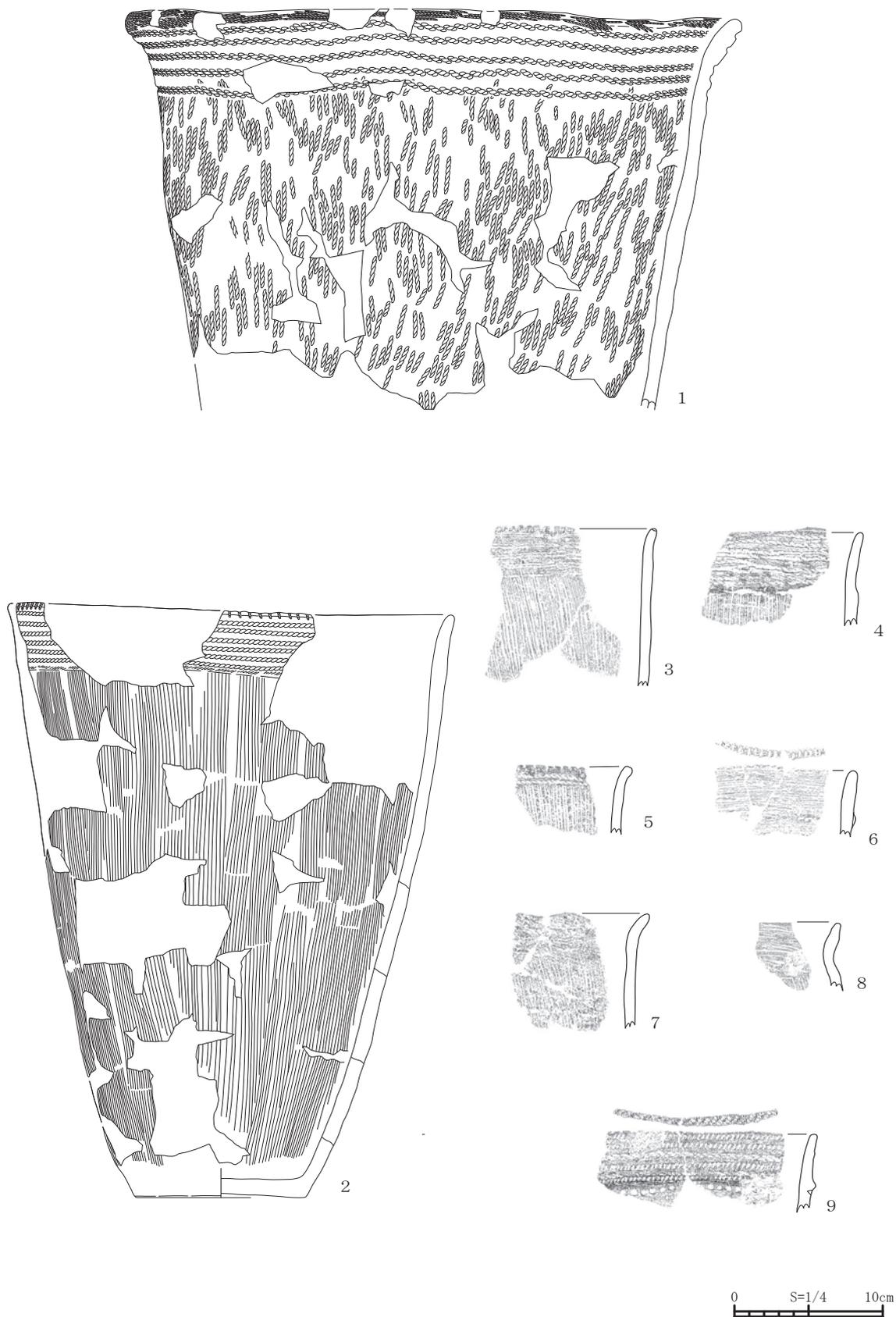


図73 遺構外出土遺物（縄文時代・10）



図74 遺構外出土遺物（縄文時代・11）

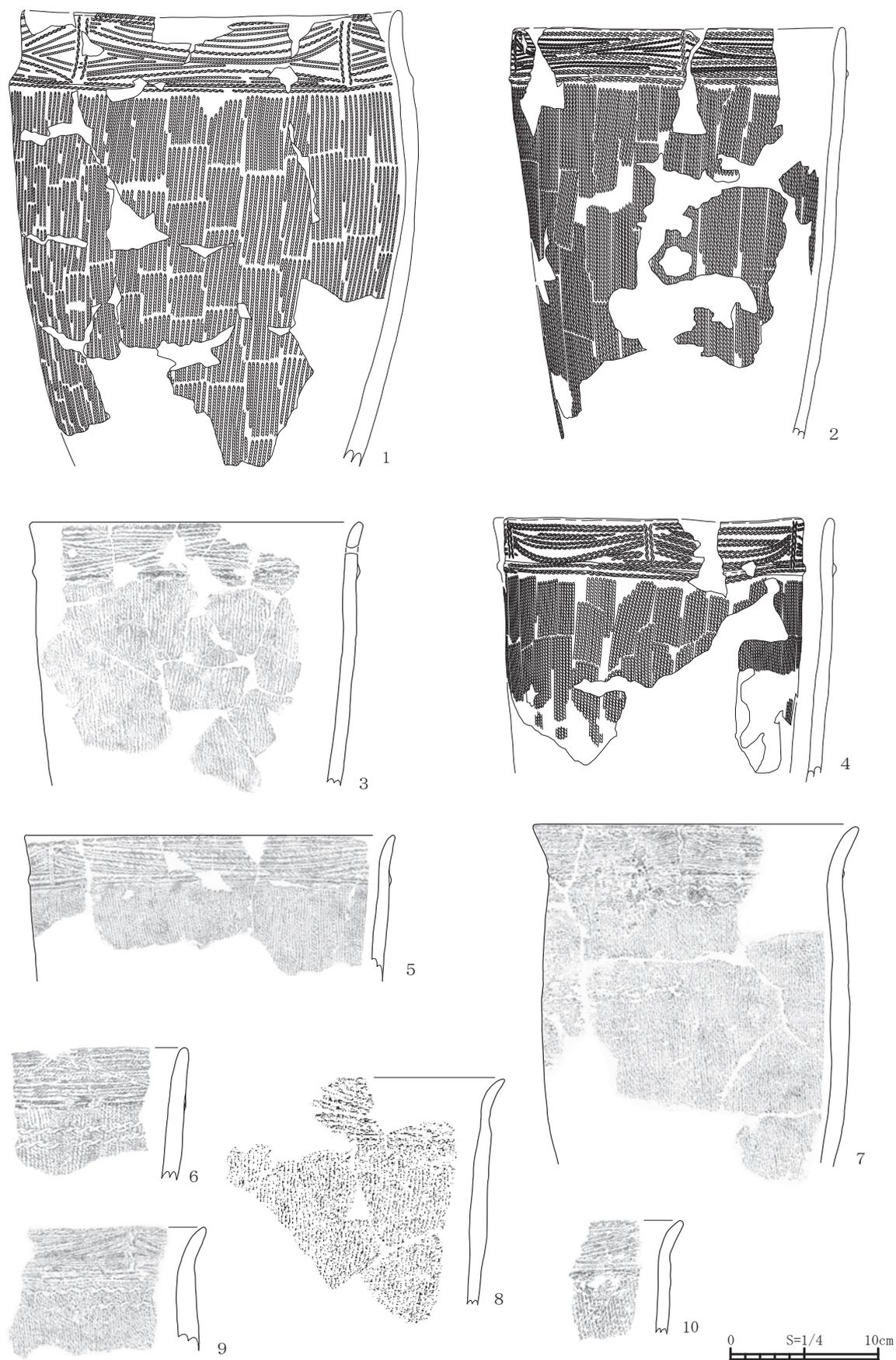


図75 遺構外出土遺物（縄文時代・12）

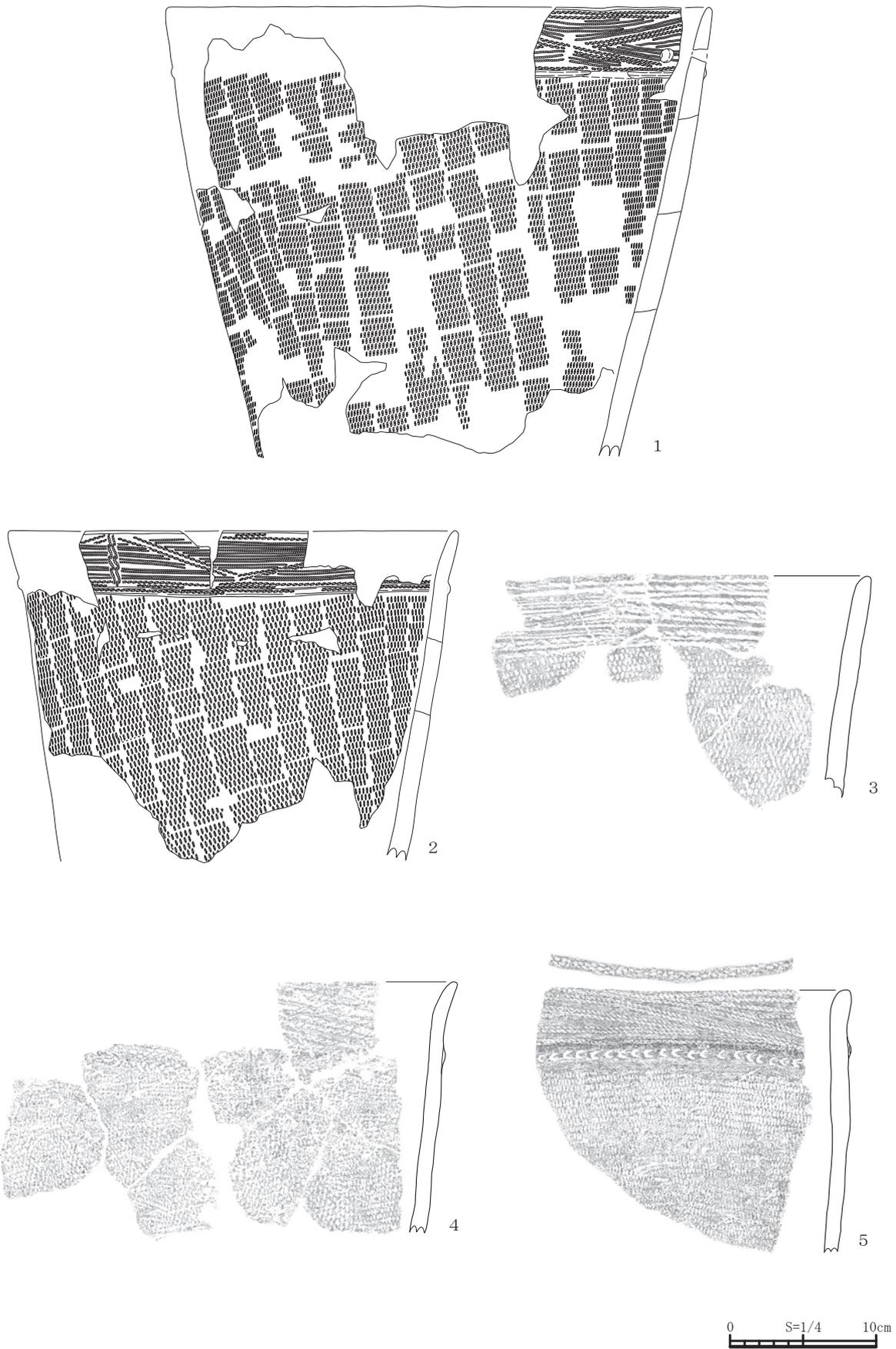


図76 遺構外出土遺物（縄文時代・13）

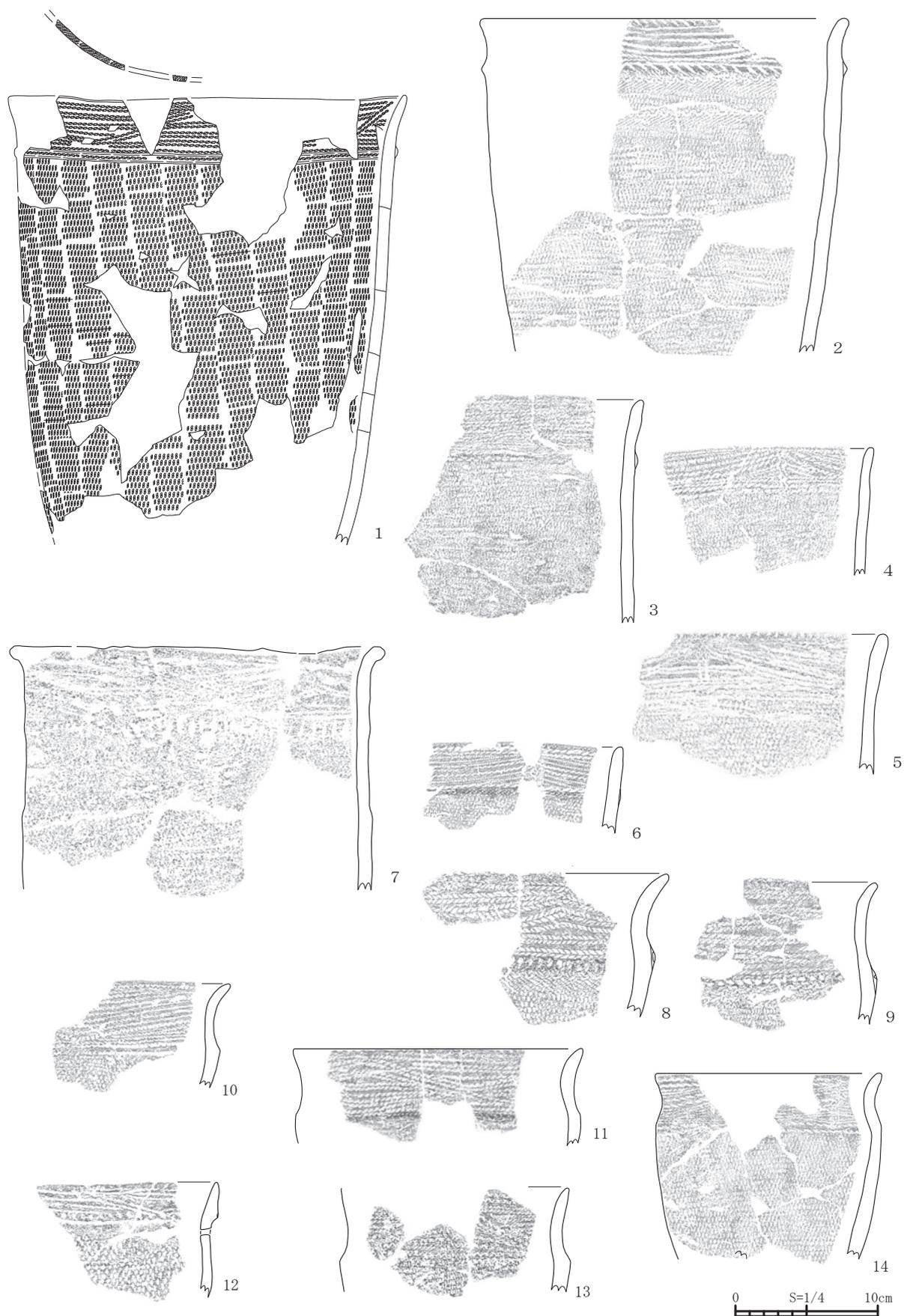


図77 遺構外出土遺物（縄文時代・14）

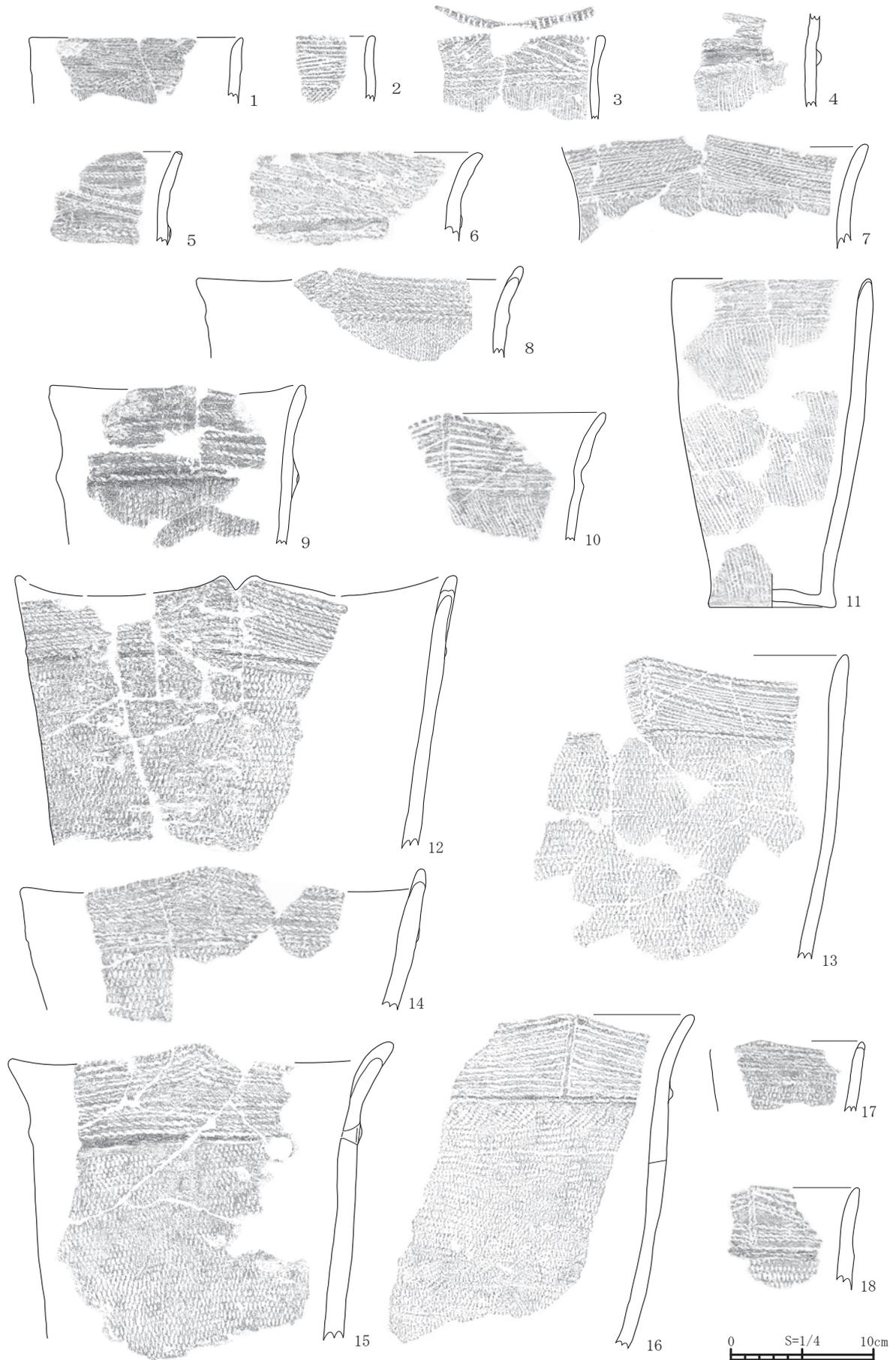


図78 遺構外出土遺物（縄文時代・15）

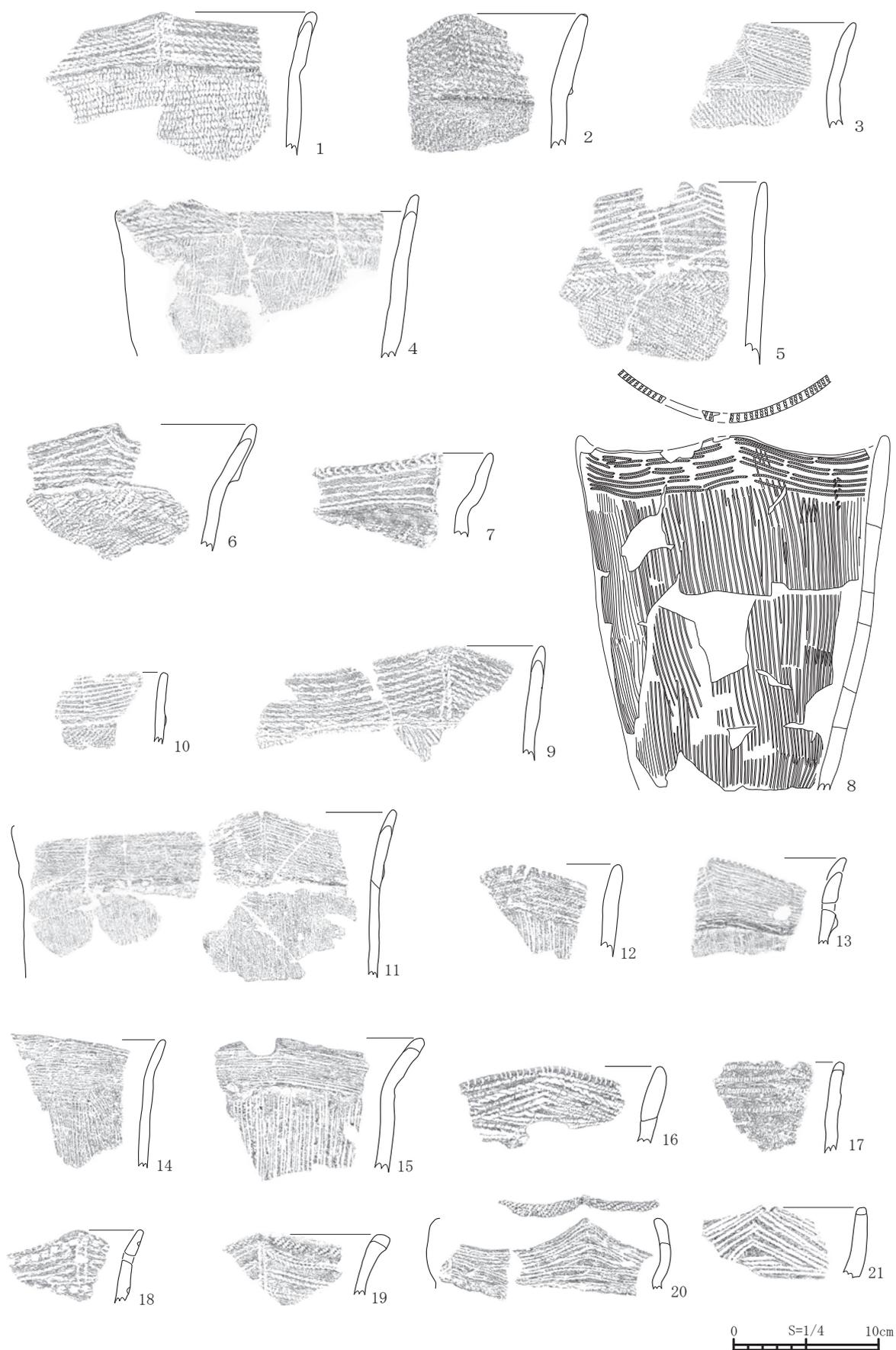


図79 遺構外出土遺物（縄文時代・16）

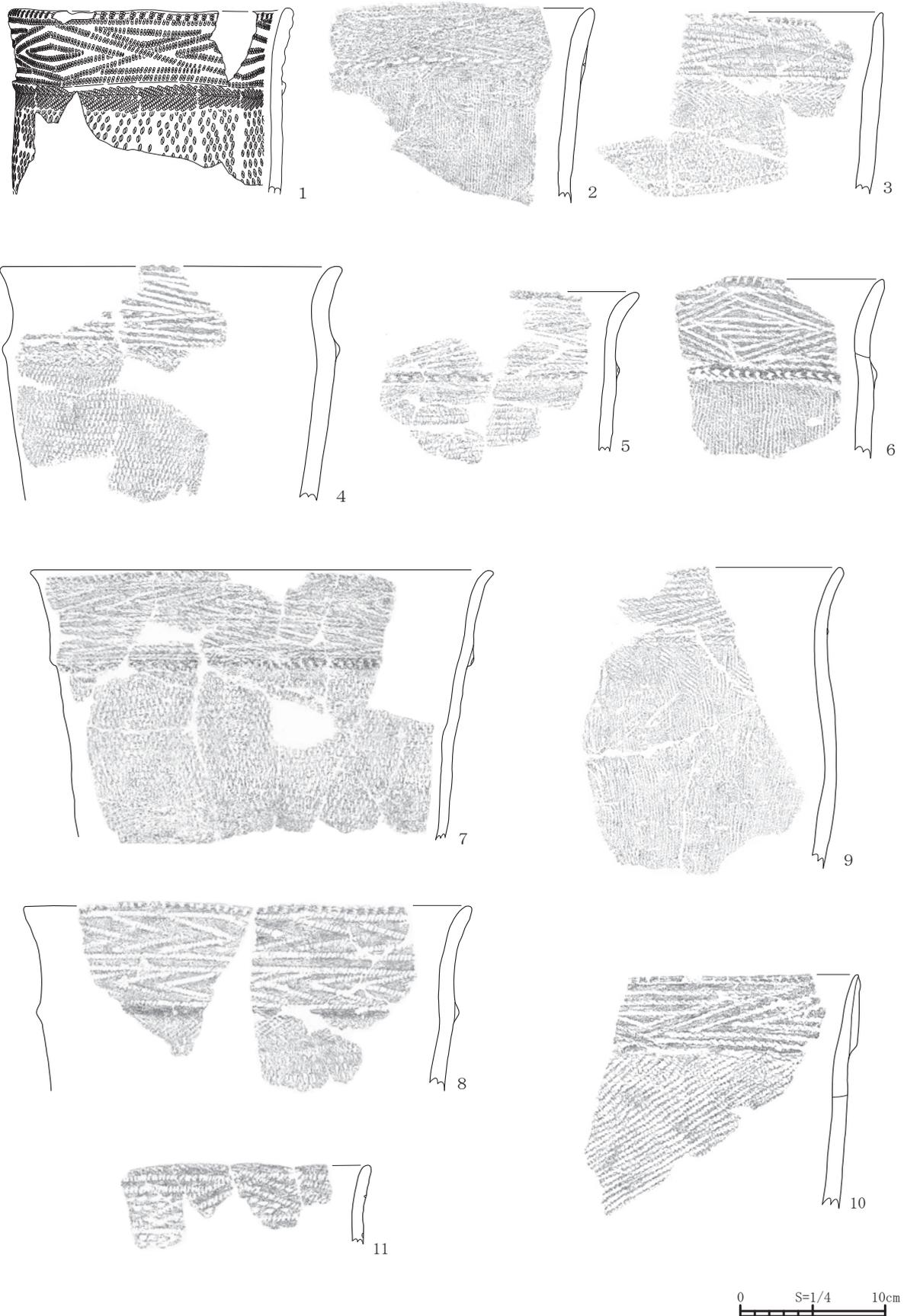


図80 遺構外出土遺物（縄文時代・17）

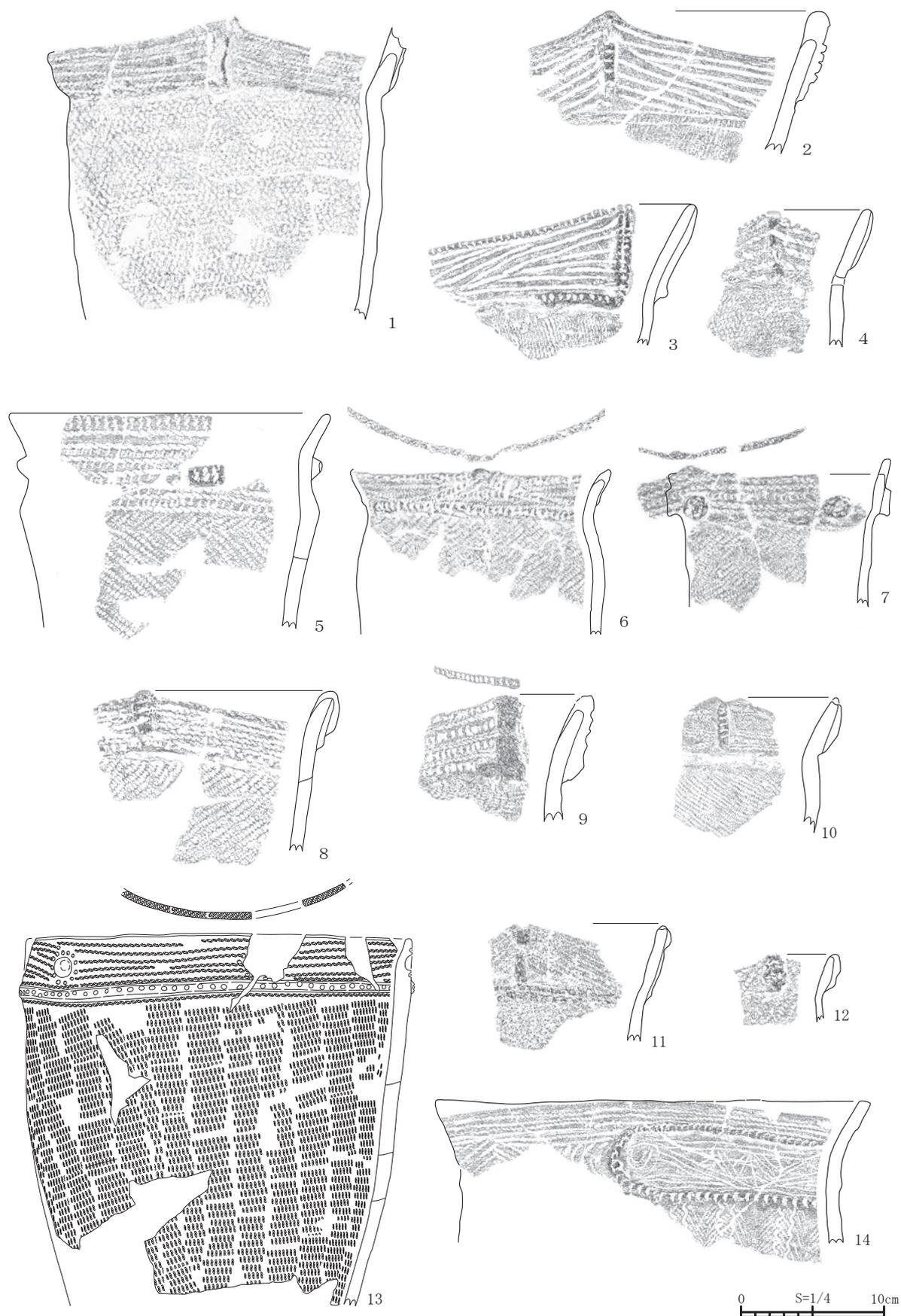


図81 遺構外出土遺物（縄文時代・18）



図82 遺構外出土遺物（縄文時代・19）

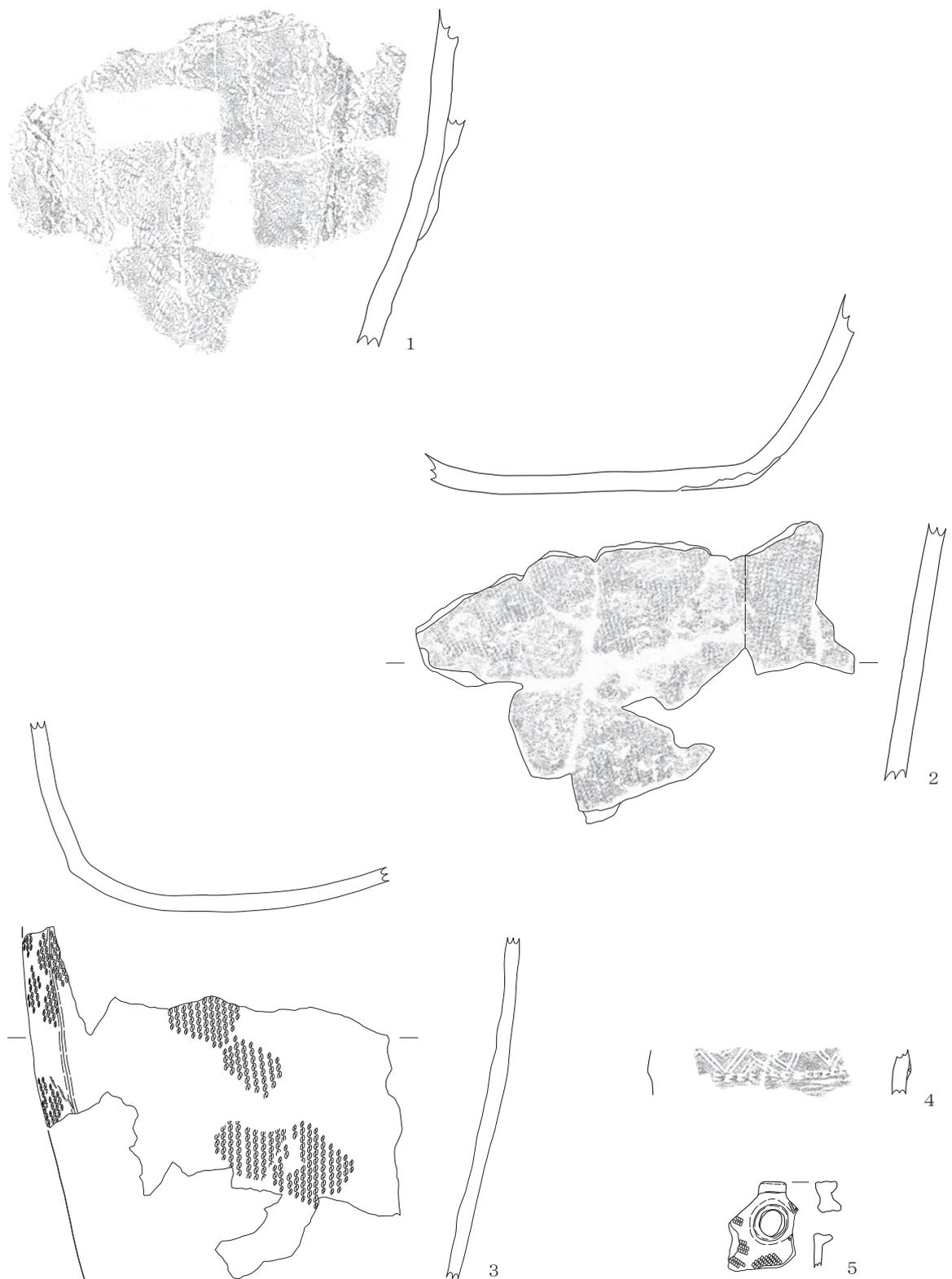
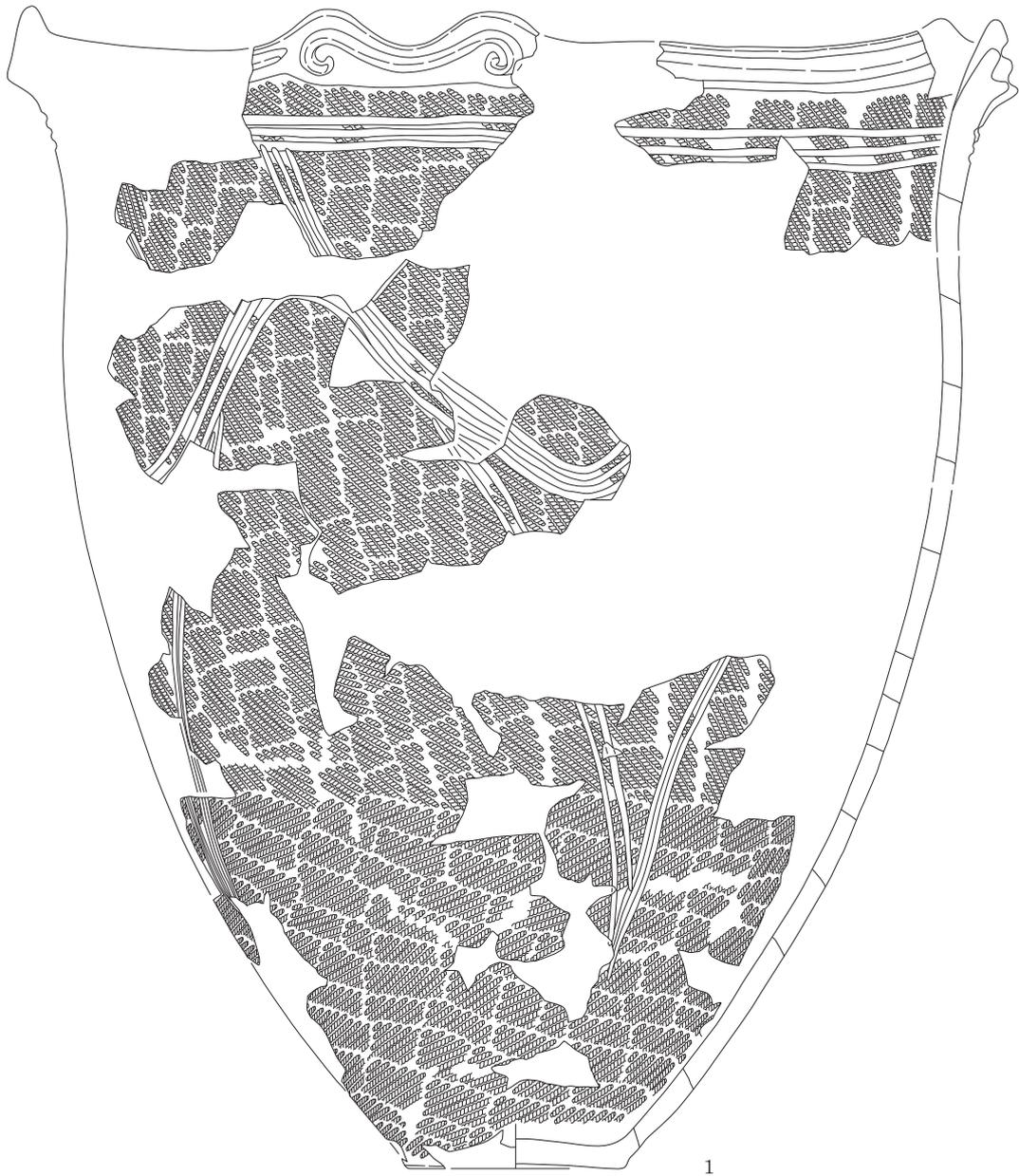


図83 遺構外出土遺物（縄文時代・20）



0 S=1/4 10cm

図84 遺構外出土遺物（縄文時代・21）



図85 遺構外出土遺物（縄文時代・22）

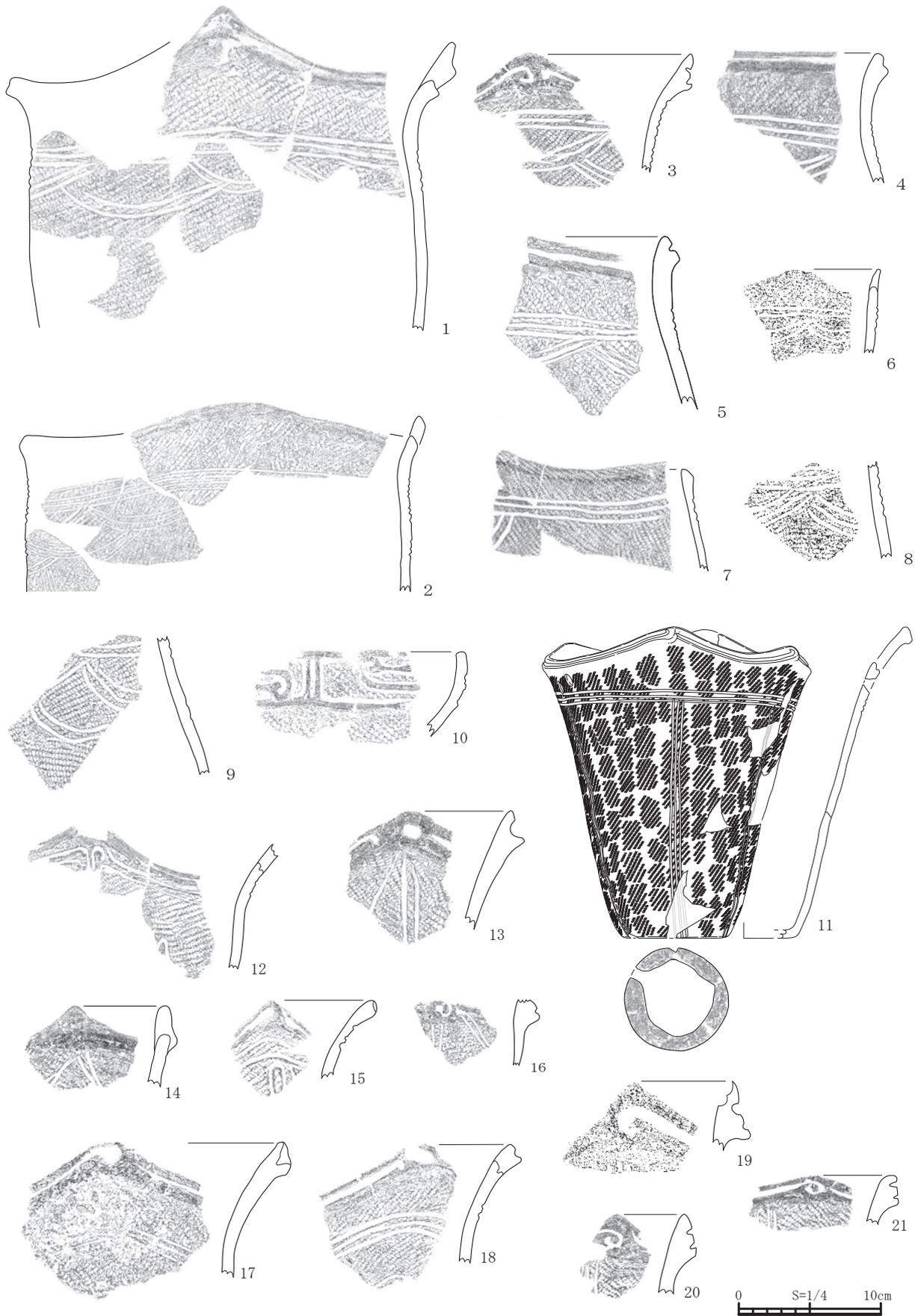


図86 遺構外出土遺物（縄文時代・23）

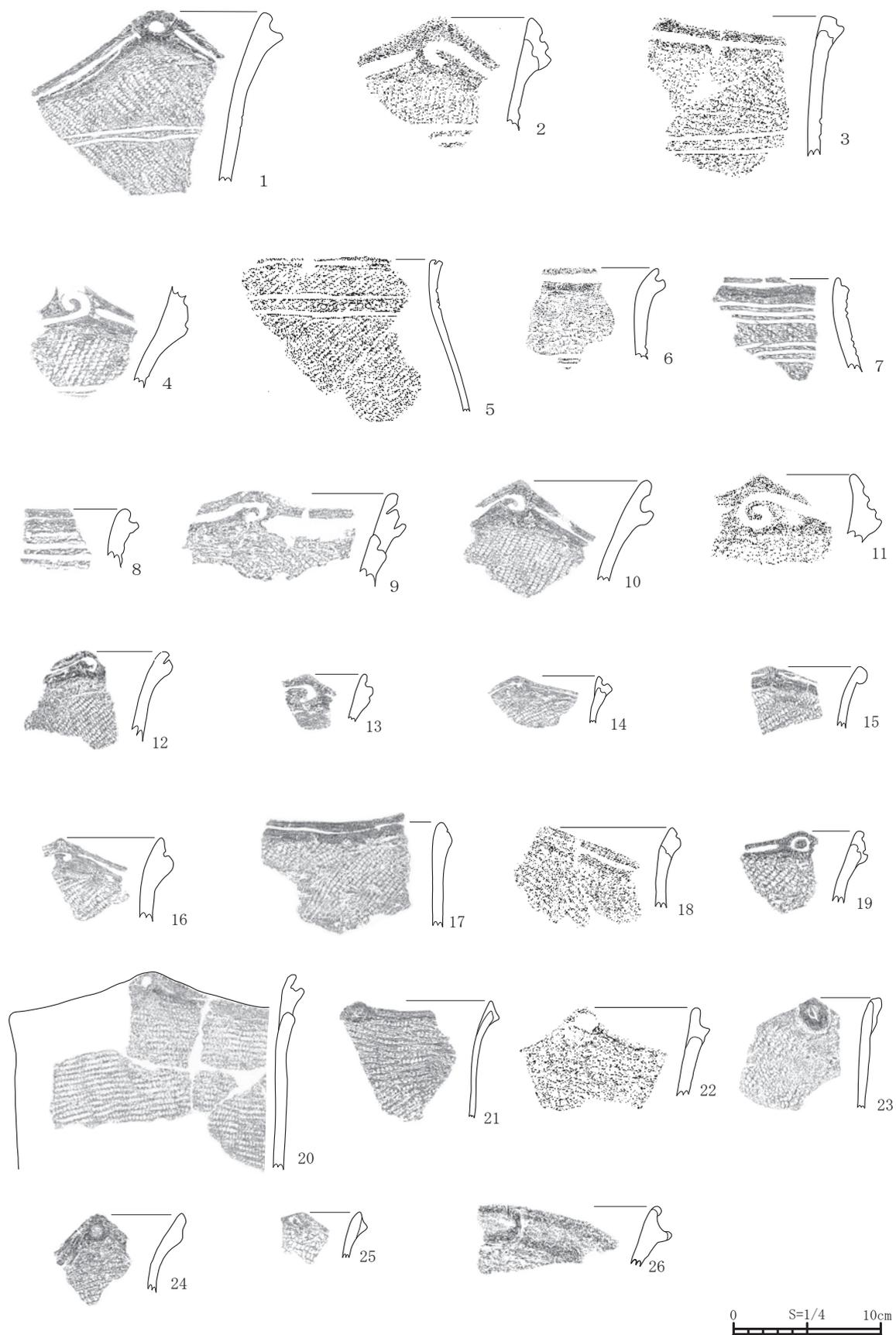


図87 遺構外出土遺物（縄文時代・24）

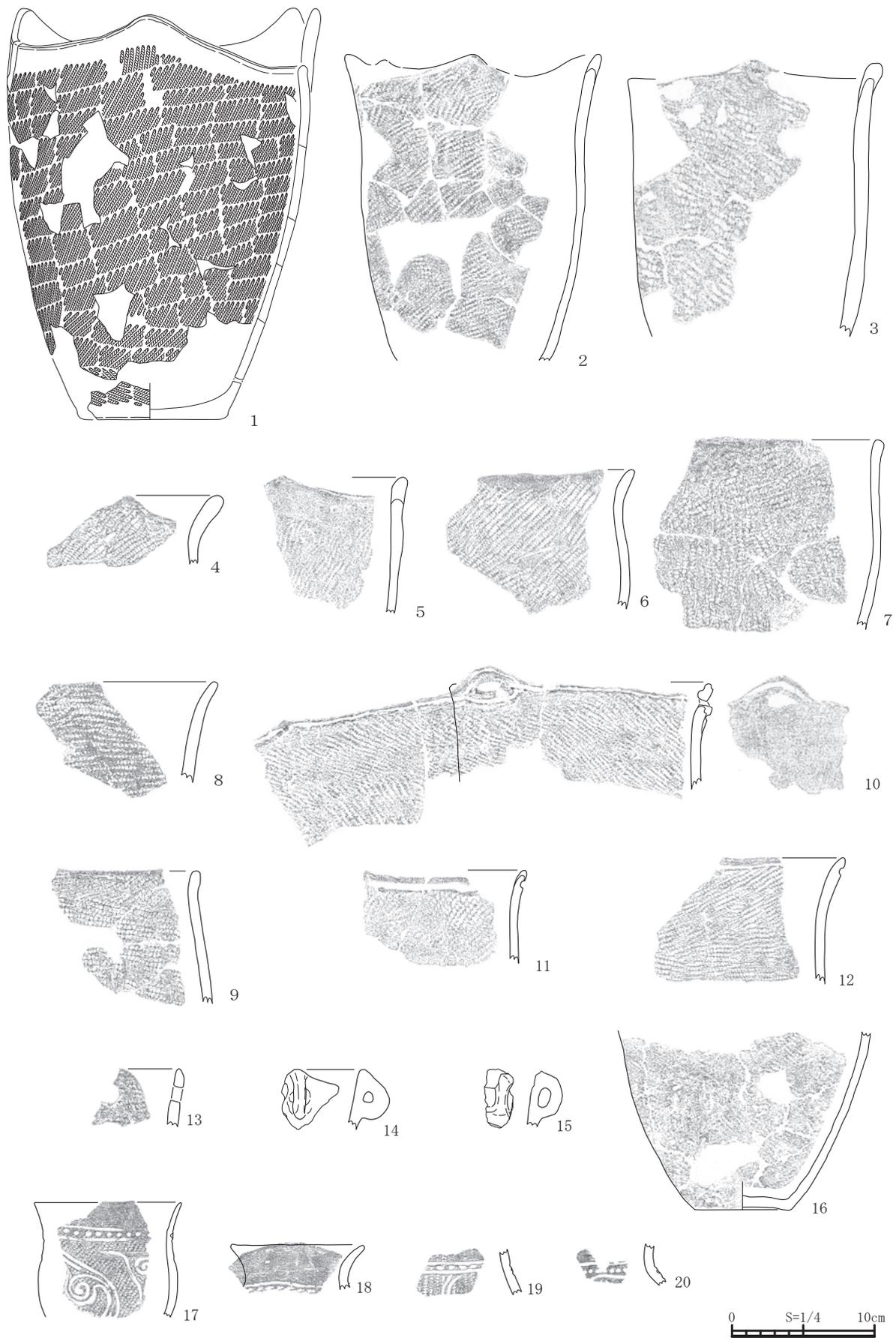


図88 遺構外出土遺物（縄文時代・25）

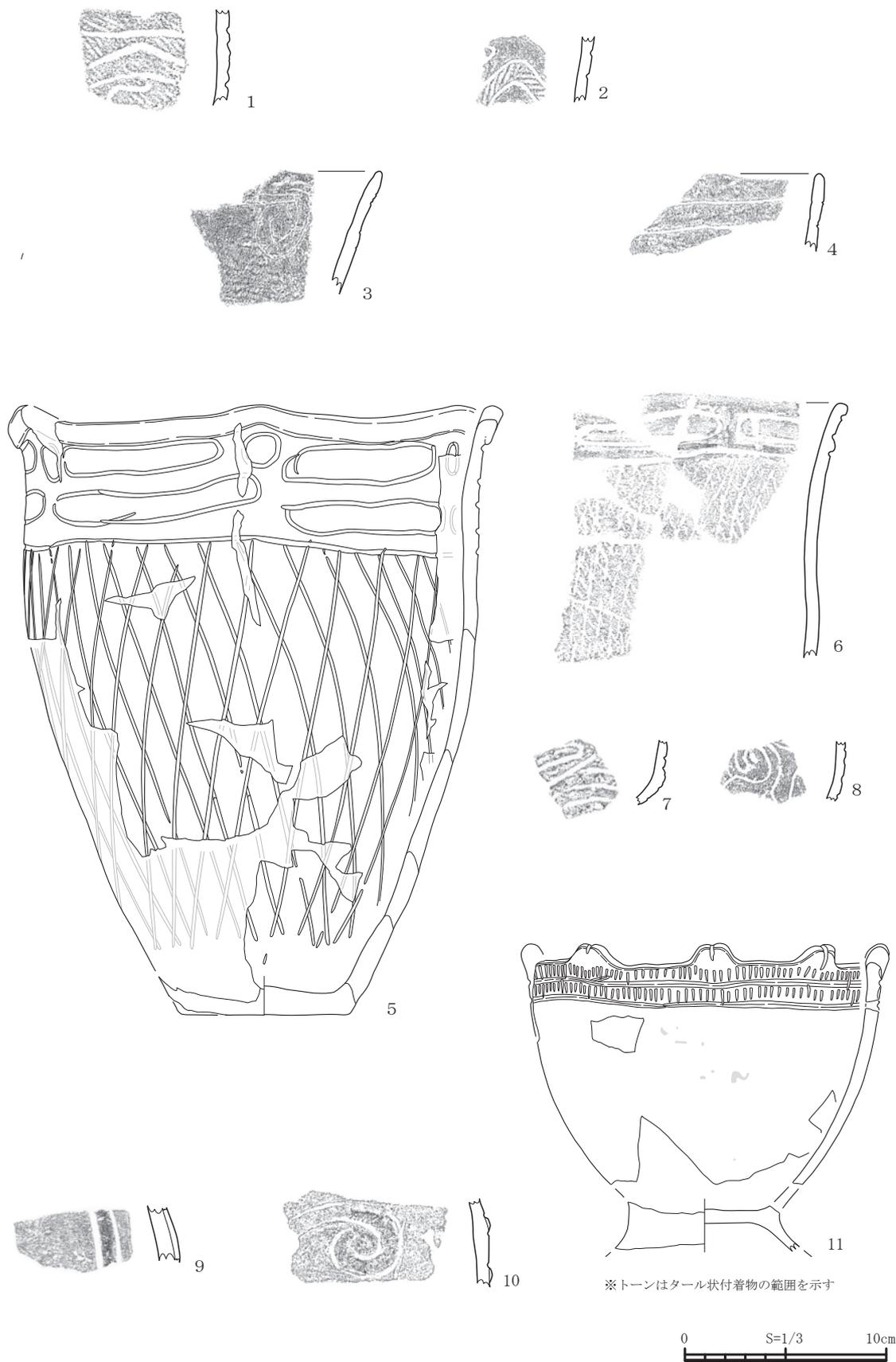


図89 遺構外出土遺物（縄文時代・26）



※トーンは黒漆と思われる付着物の範囲を示す

図90 遺構外出土遺物（縄文時代・27）



図91 遺構外出土遺物（縄文時代・28）

(2) 石器類

剥片石器

遺構外からは総数で13,456点(114,346.9g)の剥片石器が出土した。第Ⅰ層から5,413点(31,728.8g)・第Ⅱ層から1,402点(10,898.5g)・第Ⅲ層から6,641点(71,719.6g)の出土である。

26グリッド以南の調査区のほぼ全域から出土しているが、丘陵の斜面と平場に4箇所の纏まりが確認される。斜面は①第1号・第2号竪穴建物跡付近の斜面上部・②Q-47・48を中心にした丘陵の斜面下部、平場は③第1号竪穴建物跡から第4号土坑までの標高41m以上の範囲・④遺物集中区付近のQ～S-29～34である。その中でも②に特に集中しており、土器と同様に捨て場に遺棄されたものであると推測される。

石材は、珪質頁岩が重量比で95.52%を占め(13,324点・109,228.2g)、流紋岩2.24%(78点・2,560.9g)、安山岩0.68%(4点・782.5g)、凝灰岩0.46%(19点・527.2g)、頁岩0.38%(8点・430.7g)、砂岩0.37%(1点・420.7g)、デイサイト0.18%(1点・205.9g)、玉髓0.09%(5点・104.1g)、玉髓質珪質頁岩0.04%(12点・49.7g)、黒曜石0.02%(1点・21.8g)、石英脈0.01%(1点・8.9g)、鉄石英0.01%(1点・6.2g)、礫岩0.00%(1点・0.1g)となっている。

器種は、石鏃(重量比0.24%:107点・278.8g)、石錐(0.01%:3点・6.0g)、石槍(1.06%:54点・1,217.6g)、石篋(0.46%:12点・525.6g)、石匙(0.6%:36点・682.2g)、石核(17.48%:331点・19,989.1g)、スクレイパー(14.90%:854点・17,032.2g)、二次加工のある剥片(6.61%:439点・7,556.0g)、微細剥離のある剥片(30.92%:3,194点・35,351.9g)、剥片(27.21%:8,425点・31,109.5g)、原石(0.52%:1点・598.0g)が出土している。出土位置・石材・器種ともに偏在する出土状況を示す。

以下、器種ごとに述べる。

石鏃(図92-1～21)

107点(278.8g)出土し、21点を図示した。1～4は無茎のもので、1が凹基、2が円基、3・4が尖基である。5～21は有茎のもので、5が凹基、6～10が平基、11～21が尖基である。器形は、両側縁が直線的な三角形のもの(1・7・8・11)、両側縁がやや湾曲し全長が短いもの(5・6・12～14)、両側縁がやや直線的な二等辺三角形のもの(2～4・9・10・15～17)、両側縁が湾曲する柳葉状のもの(18～21)がある。最大幅は、前者は基部付近にあるが、後者になるほど器体中央付近になる。3・6・7・12・15～18は調整が刃部のみで、厚さは6mm以下で平たく薄い。茎部が欠損しているものもあるため厳密ではないが、全長が3cm未満の小型(1・7・12・15・16)、3～4cmの中型(2・3・5・6・8・9・13・14・17)、4cm以上の大型(4・10・11・18～21)に分類できそうである。21は調整が粗く、未成品の可能性もある。

石錐(図92-22・23)

3点(6.0g)出土し、うち2点を図示した。ともに摘み部のない棒状のもので、先端部は両面調整により作り出されている。22は先端部の調整のみで器体中央の断面形状は三角形を呈するのに対し、23の調整は全体に及び器体中央の断面は半円状である。

石槍(図92-24~28、図93-1~5)

54点(1,217.6g)出土し、10点を図示した。全長が8cm以上のものを大型(92-24~28)・6~8cmのものを中型(93-1~3)・6cm未満のものを小型(93-4・5)とした。器形は、両側縁が直線的なもの(92-24・27・28)と、湾曲するもの(92-25・26、93-1~5)がある。器面調整は器面中央まで及び、断面が薄い凸レンズ状となるものが多い。92-25は器面調整が素材縁辺にとどまり、素材剥片の剥離面が残る。断面は台形状である。93-3・4は表面の器面調整が正面中央に及ぶものの、裏面の器面調整が平坦なもので、断面形状が三角形のものである。92-27は黒曜石で、産地同定の結果、深浦産と推定された(第4章第1節参照)。

石篋(図93-6~11)

12点(525.6g)出土し、6点を図示した。全長が9cm以上のものを大型(6・7)・8~9cmのものを中型(8・9)・8cm未満のものを小型(10・11)とした。器形は、両面加工により側縁が概ね平行になるもの(6・8・11)と、剥片に側縁加工を施し撥状となるもの(7・9・10)がある。断面形状は、前者の6・11は凸レンズ状を、後者は三角形を呈する。刃部形状は、弧状のもの(6・7・10・11)と直線的なもの(8・9)がある。9は側面の調整は丁寧であるが、刃部の調整は卓越していない。8は表裏面、10は裏面の器面調整が平坦なもので、10の断面形状は三角形である。8は全体に摩滅が著しい。

石匙(図94-1~12)

36点(682.2g)出土し、12点を図示した。剥片の縁辺に片面から二次加工を施し、裏面は摘み部以外の加工は行わないものが多い。断面形状は横長の三角形か台形状を呈するものが多い。

1~6は縦型である。5は表面の器面調整が正面中央に及ぶもので、断面形状は三角形である。6は石槍の可能性もあるが、摘み部状の抉りが見られることから石匙とした。器面調整が両面とも器面中央まで及ぶもので、断面形状は凸レンズ状である。刃部の表裏面に黒色物質が付着している。

7~12は横型のものである。9が裏面から片面に刃部調整を施したもの、11は刃部調整が両面のものである。10は摘み部を素材剥片の頭部に作り出している。8には裏面に表皮が残る。

石核(図95~図97)

331点(19,989.1g)出土し、14点を図示した。素材となる礫や剥片の打面を転移しながら剥片を作出している。95-1は、今回確認されたもので最も大きなもので、正面に長さ約7~8cm、幅7cmの剥片をとった痕跡が認められる。2は剥離面を打面としたもので、舟底型を呈する。3は、上面の礫面を打面として剥片作出を行い、下面からも剥離が試みられるものの、表裏面ほどの大きな剥離はみられない。96-1は、正面を求心状に剥離を施し、そこを打面として、もう1面に剥離が施される。

2・4は剥片を作出してできた平坦面を打面としている。3は上下の平坦面を打面として、上下二方向から剥離が施される。5・7は、剥片の主要剥離面に求心状に剥離が施される。6は上面の打面を固定して巡るように剥片剥離がなされる。97-1は、下面に礫表を残し、上面と表裏面に3方向から剥離が施される。2~4は、剥片の表裏面に側縁調整が施されず、大きく抉れるように求心状に剥離

が施されるものである。2は両面体状であり槍先の未成品とも類似するが、二次加工でつくられた側縁が石槍のように直線的にならずにいびつであるため石核として捉えた。

スクレイパー(図98-1～14、図99-1～12)

854点(17,032.2g)出土し、26点を図示した。素材剥片の縁辺に連続する二次加工が施されるもので、大きく刃部の角度によって鋭角のもの(98-1～4・8・9・13、99-5)、急角度のもの(98-5～7・10～14、99-1～4・6～12)に分けられる。加工部位は素材剥片の1側縁から4側縁にみられるものがある。その他、剥離が片面と両面のものがある。

98-1～4・6～8は1側縁に刃部加工が施されるものである。1～3・6～8は剥離が片面、4は両面のものである。

98-5・9～99-3は2側縁に刃部加工が施されるものである。98-10～13、99-1は剥離が片面、98-9・14は1側縁が片面・1側縁が両面、99-2・3は両面のものである。99-1は正面左側縁に錯向して刃部加工が施されている。

99-4～11は3辺に刃部調整が施されるものである。4・6・98-10～13、99-1は剥離が片面、5・7・8・9・10は2側縁が片面・1側縁が両面、11は両面のものである。

99-12は4側縁に刃部加工が施されるものである。剥離は片面である。

98-1は刃部の一部に光沢が認められる。8は、素材剥片の頭部に明確な抉りが作り出されないものの、石匙の可能性はある。13は、頭部に石匙の摘み部と類似した抉りが施され、正面右側縁中央と左側縁下端に抉り状の剥離が施される。99-2・3・9・10は、素材剥片の下端部に表裏面より二次加工が施され、下端部が細身になるため、石錐の可能性はある。6は刃部加工が側縁全体に及ばず、部分的である。7は正面右側縁が抉り状に剥離が施され、形がくの字状になる。8は2側縁が直線状に2次加工が連続して施され、下端部に抉り状の剥離が施される。9は器面に被熱痕跡が認められる。98-2等では微細剥離が認められ、また、表皮が残る素材を利用するものが見られる。

二次加工のある剥片(図99-13)

439点(7,556.0g)出土し、1点を図示した。13は表皮が残る剥片を素材とし、正面は端部から、裏面は側縁下端に片面から刃部とは異なる粗い加工がなされたものである。石核の可能性もあるものの、本器種として扱った。

微細剥離のある剥片

図示しなかったが3,194点(35,351.9g)出土している。

剥片

図示しなかったが8,425点(31,109.5g)出土している。

原石(写真61)

図示しなかったが1点(598.0g)出土している(写真61)

(平山)

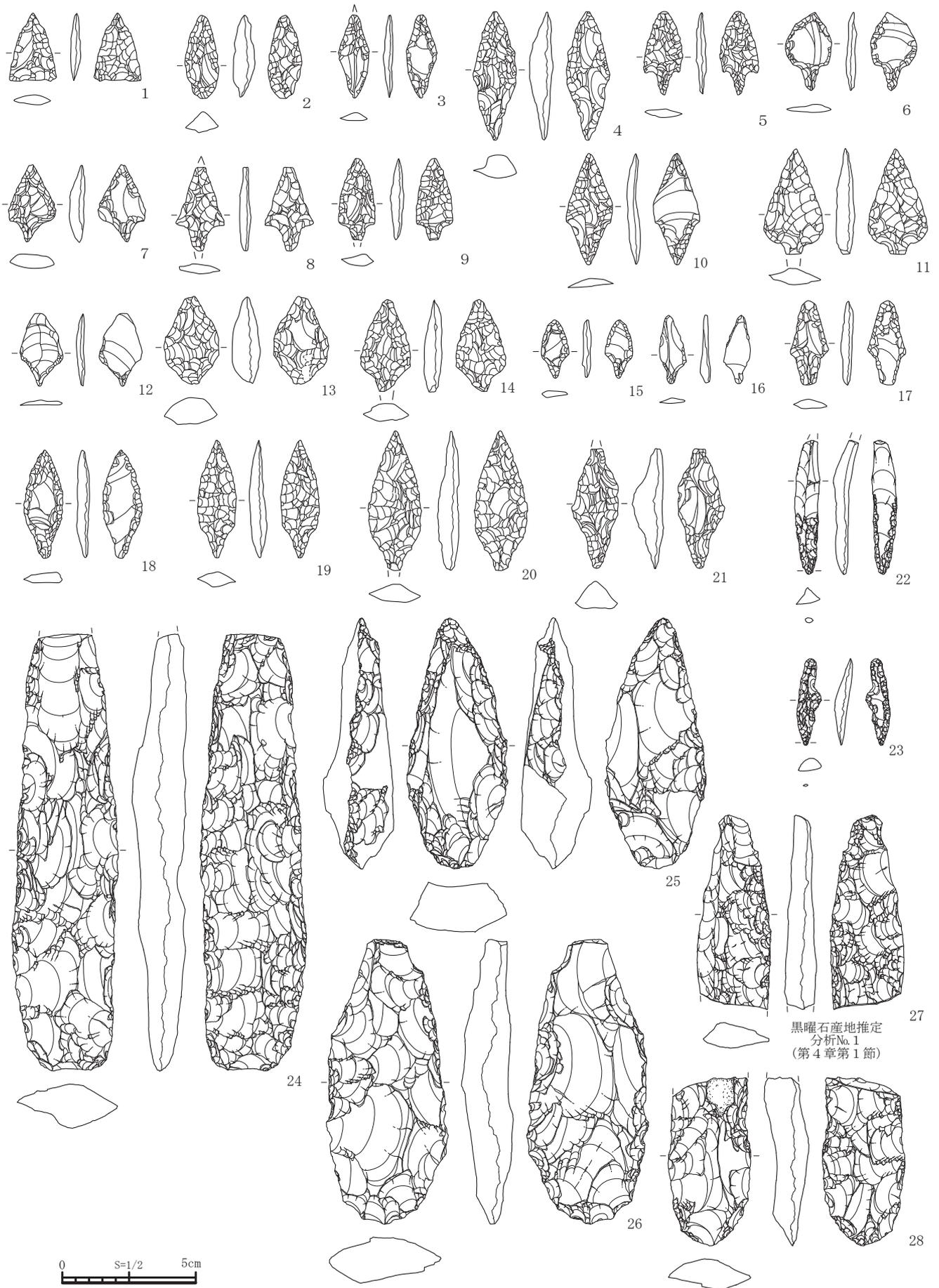


図92 遺構外出土遺物(縄文時代・29)

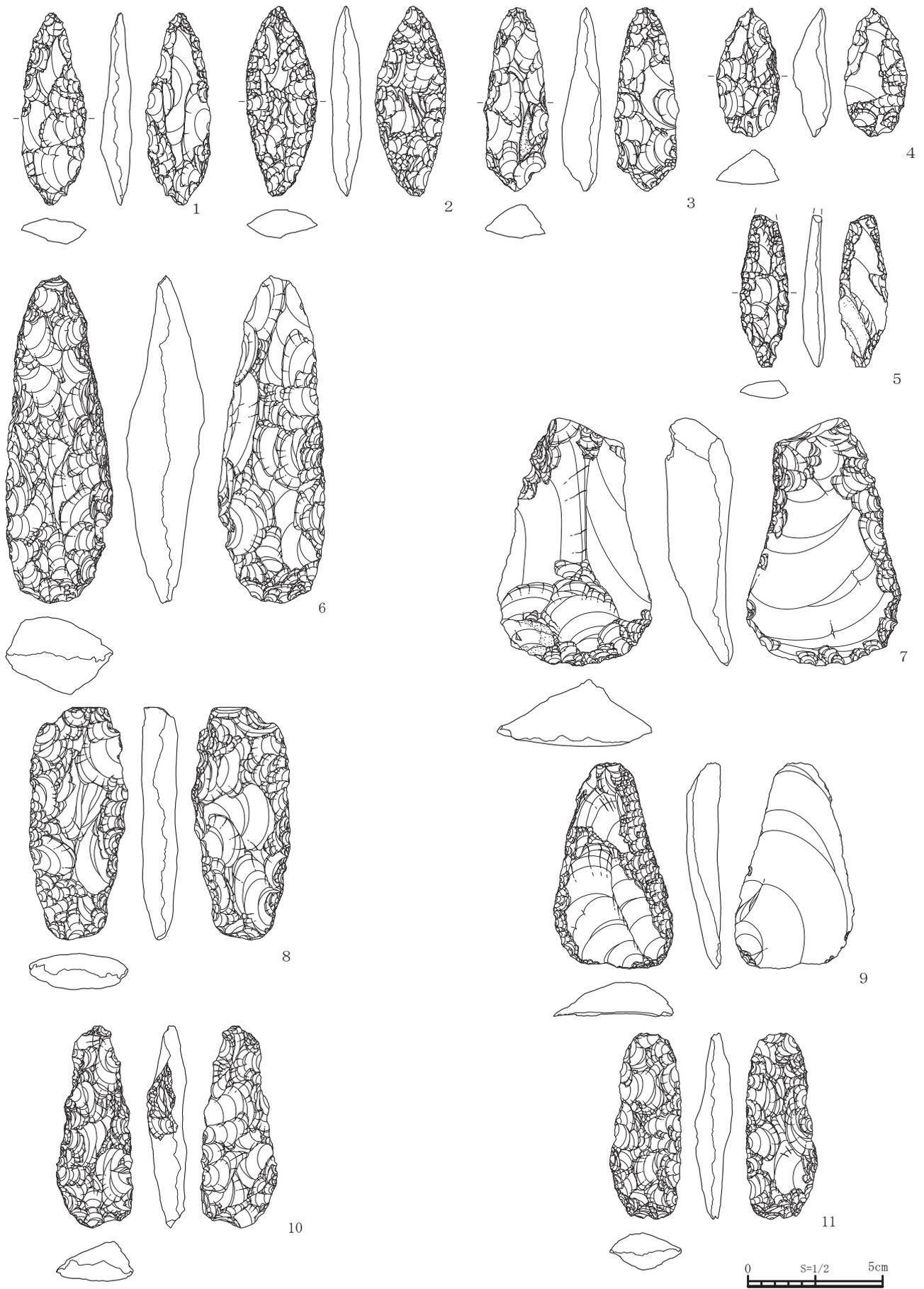


図93 遺構外出土遺物(縄文時代・30)

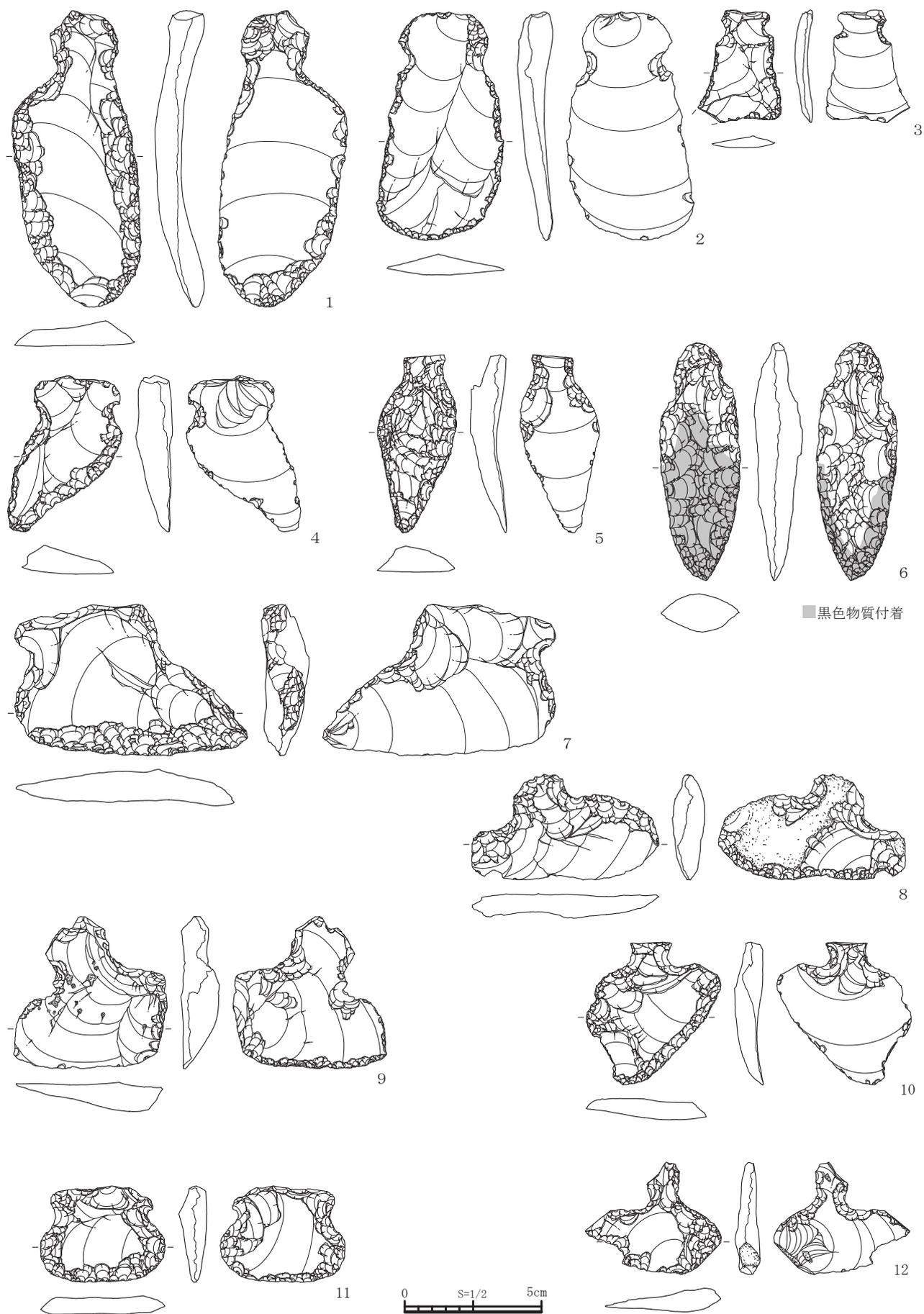


図94 遺構外出土遺物(縄文時代・31)

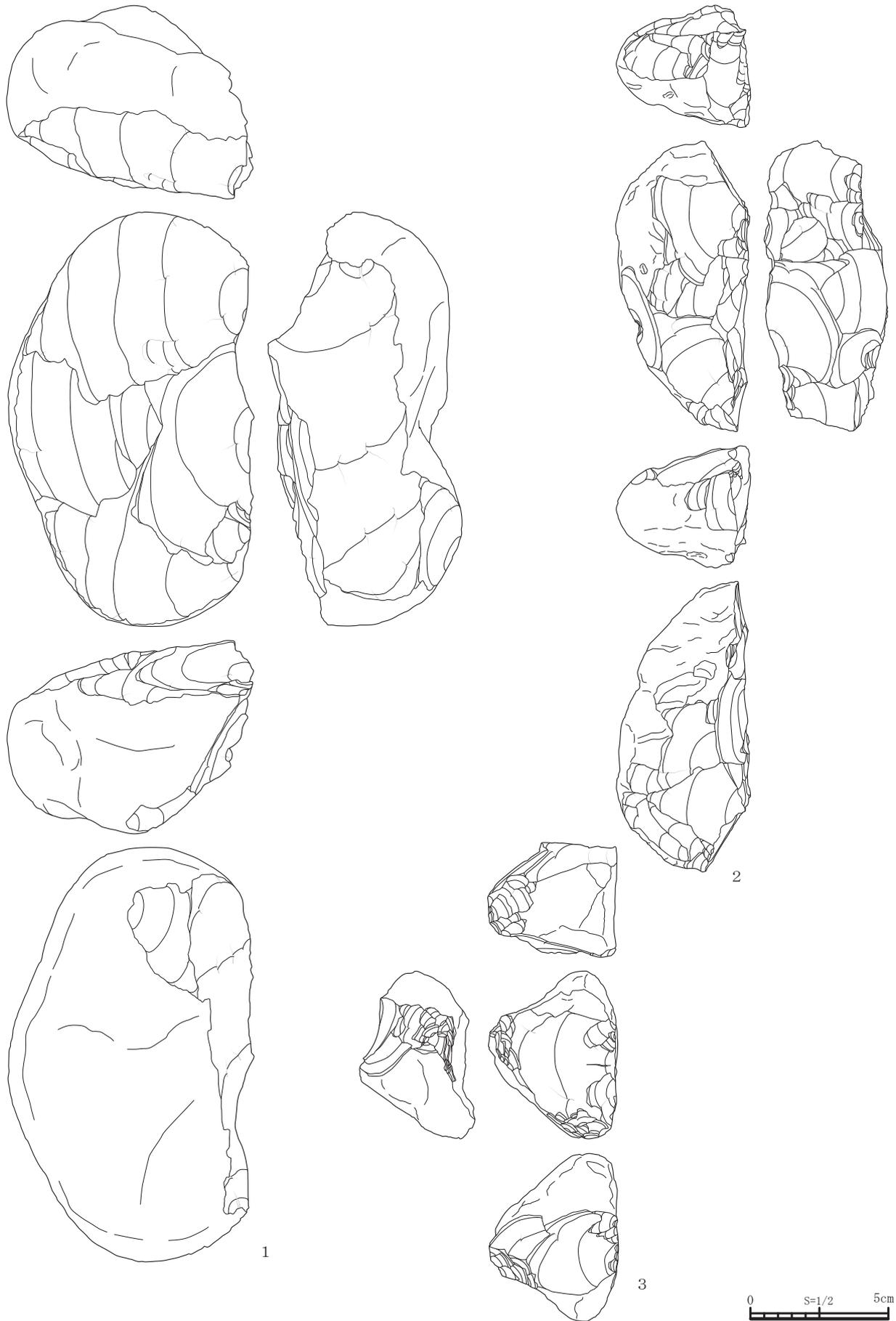


図95 遺構外出土遺物(縄文時代・32)

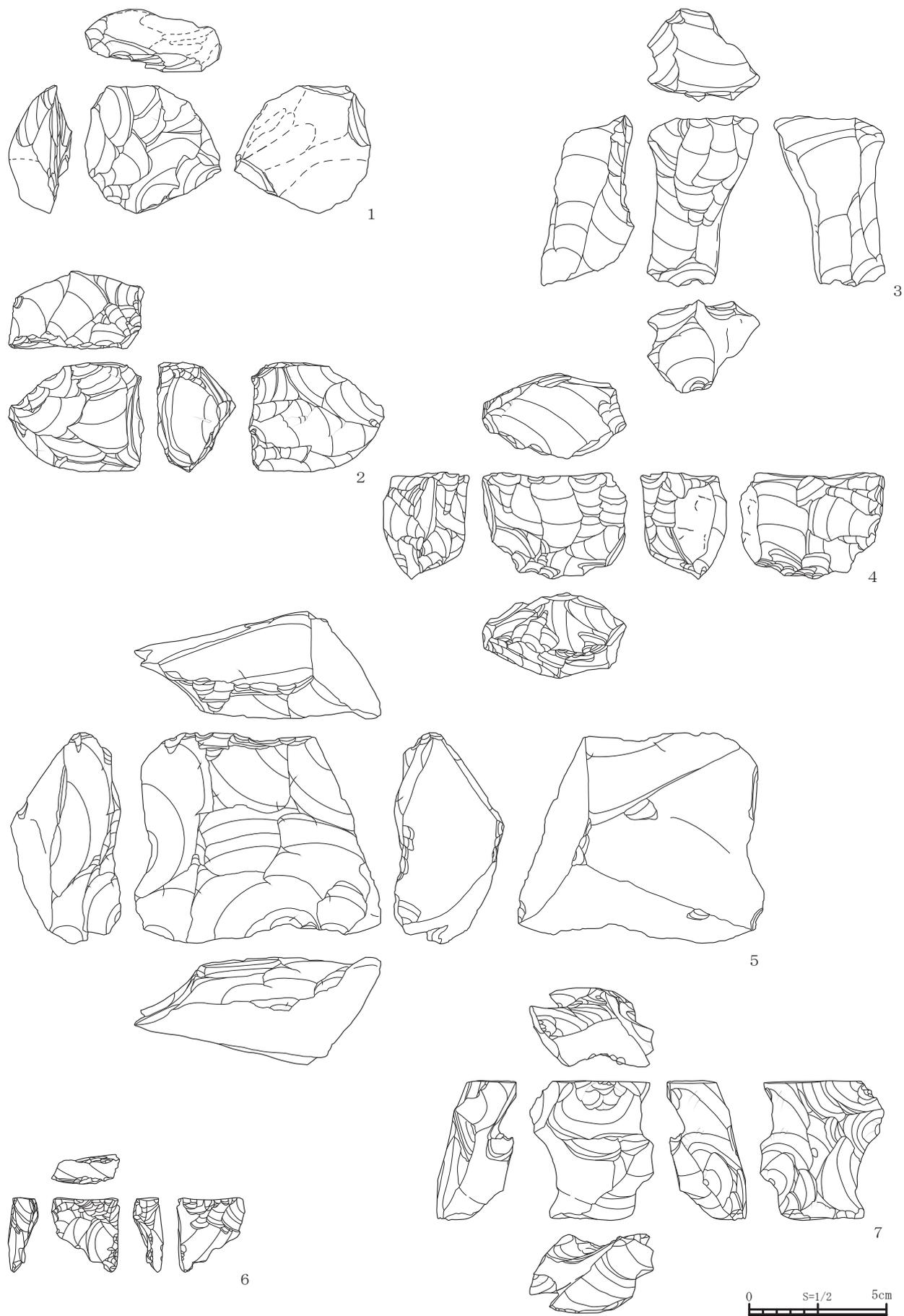


図96 遺構外出土遺物(縄文時代・33)

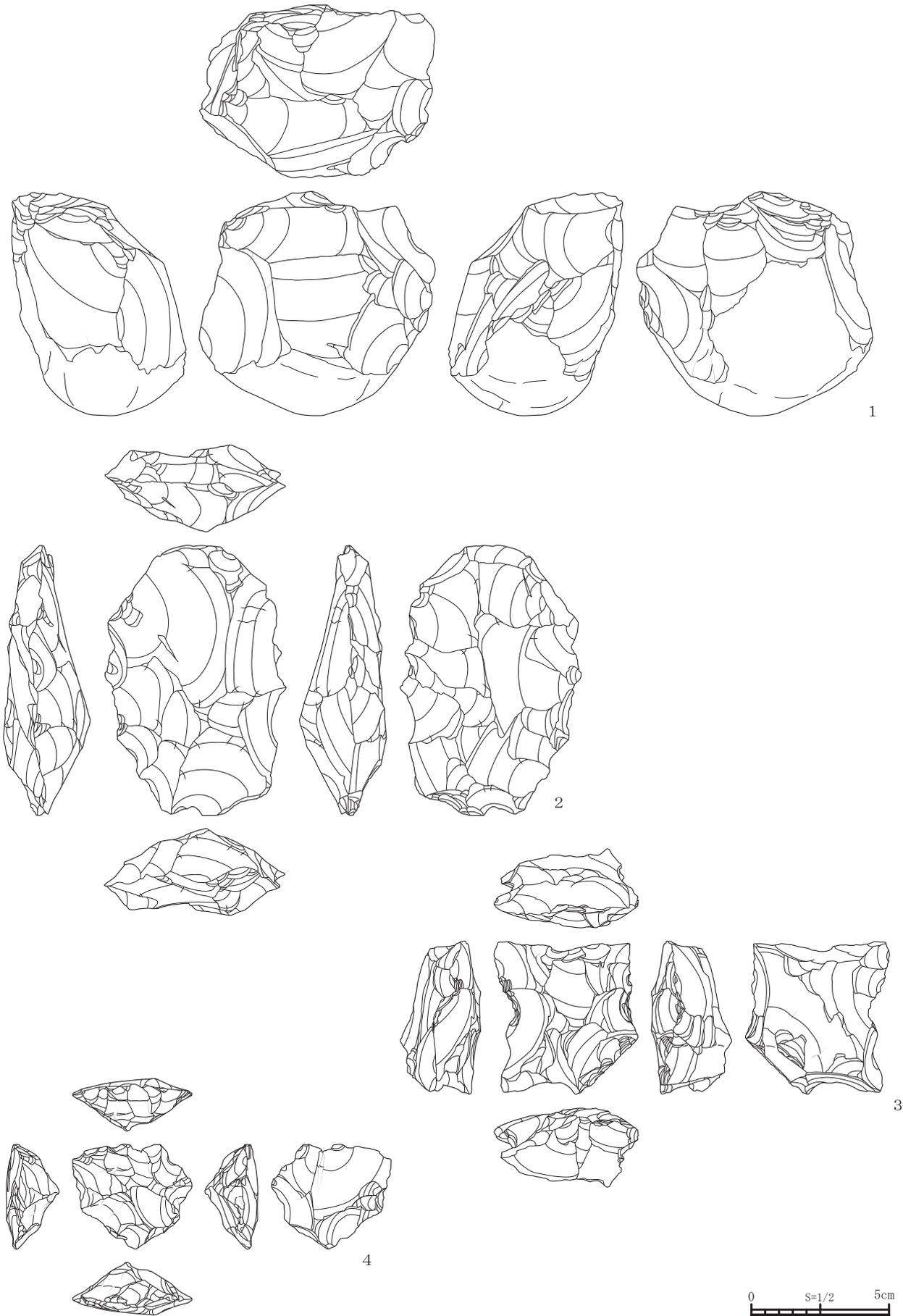


図97 遺構外出土遺物(縄文時代・34)

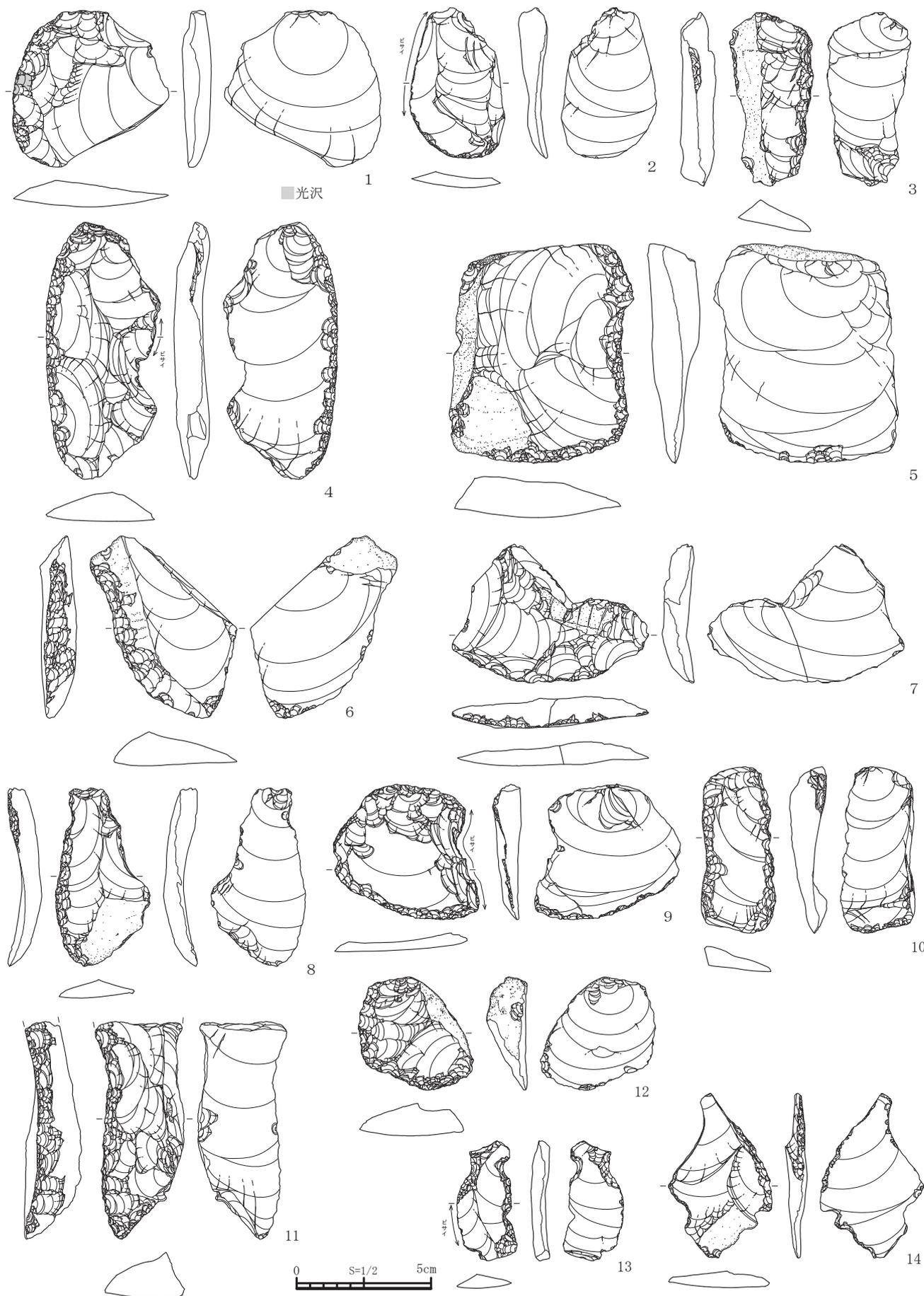


図98 遺構外出土遺物(縄文時代・35)



図99 遺構外出土遺物(縄文時代・36)

礫石器 (図100~113、写真62~67)

礫石器は磨製石斧28点 (4, 601. 4g)、擦切具3点 (203. 4g)、敲磨器類180点 (71, 342. 9g)、半円状扁平打製石器12点 (5, 482. 6g)、抉入扁平打製石器11点 (6, 264. 1g)、台石70点 (181, 844. 2g)、砥石1点 (24. 6g)、剥片45点 (1, 684. 9g)、総数350点、総重量271, 448. 1gである。礫石器の多くは、主に安山岩を素材として利用している。剥片は、礫石器に利用される安山岩や花崗閃緑岩等の破片のうち、礫石器製作や使用時等に生じた可能性のあるもの、器種分類ができなかったものを取扱った。礫石器は、出土層位が第I層から第IV層まで出土している。

磨製石斧 (図100~101-12)

成品や未成品、素材、破片等28点が出土し、27点を図示した。石材は緑色岩14点、安山岩8点、花崗閃緑岩5点、泥岩1点である。緑色岩製のものは、北海道平取町額平川産の石材の可能性が高い。100-1が完形でこの他を、部位ごとに分類すると、刃部を欠くもの (100-3・12~15, 101-1~4)、基部欠損のもの (100-5~11)、刃部のみのもの (101-5~8)、未成品 (101-9・10)、磨製石斧の素材 (101-11・12) である。磨製石斧の多くは、表面に整形時の剥離痕が残るものの、丁寧に研磨が施され、刃部が残るものは両刃に整えられる。

全体的に基部から刃部にかけて幅広になるものが主体となるが、100-4や7、11のように基部に対して狭い刃部を形成するものもみられる。全体の長さがわかるものは長軸14cm前後のもの、10cm前後の小型のものがある。断面形は楕円形のものが多く、2cm以上の厚みをもつもの、厚さが2cm以下の薄いものがある。100-1~3は、刃部先端に使用による剥離がみられる。1は裏面中央に敲打によるつぶれが認められる。2は、正面の右下の剥離に磨滅がみられることから、刃部再生を行った可能性がある。15は正面に被熱痕と焼けハジケによる剥落がみられる。101-2は裏面の多くが剥落し、あばた状となる。3は欠損部以外の側縁に敲打整形によるつぶれが認められる。

3は、他のものに比べ幅が広く、半円状扁平打製石器の破片に形状が類似するものの、剥離、敲打整形から研磨による整形という磨製石斧の製作技法をとるため、本器種と捉えた。9・10は未成品であり、いずれも花崗閃緑岩を石材に用いられる。9は正面に礫面を多く残し、裏面を全周するように剥離整形を行った後、長軸側縁を重点的に表裏面へ敲打整形が施される。刃部は片刃状であり、研磨による磨痕がみられない。10は短軸方向から打ち割りした素材剥片の2側縁を正面側から剥離を入れ、抉り状に加工したもので、磨製石斧の製作段階が9よりも以前のもと考えられる。

11・12は、いずれも石材に緑色岩を利用した磨製石斧の素材片である。11は正面左側に自然面を残しつつも、右側と側面には研磨による平滑面と側縁に擦切痕とみられる溝状の凹みが確認される。溝は長軸に平行するよう作出され、幅が0.7~0.8cmである。12は正面に研磨による平滑面がみられる。

擦切具 (図101-13~15)

3点が出土し、全点図示した。石材は流紋岩 (101-13)、安山岩 (14)、泥岩 (15) が用いられる。素材剥片の縁辺には、研磨によって平行する擦痕がみとめられる。13は裏面に剥離面を残すものの、研磨された面は平滑となる。下縁に横位方向の線條痕がみられ、その範囲が刃部とみられる。刃部は幅が0.6~0.9cmであり、他の研磨された面と比べて剥離面と異なるざらつきをもつ。14は2側縁が研

磨によって断面凸状となり刃部を形成する。刃部は、13と同様にざらつきをもち、幅が0.7～1.3cmである。15は素材剥片の打面を残し、左右と下の3側縁に研磨による平滑な刃部が作出される。刃部は幅が0.6～0.7cmである。

敲磨器類（図101-16～108-3）

素材礫に磨面や敲打痕等が複合的にみられるものがあり、以下に使用痕跡により分類する。

磨面をもつもの（磨石）（図101-16～105-6）

151点が出土し42点を図示した。石材は安山岩が150点、花崗閃緑岩が1点であり、ほぼ安山岩が利用される。図101-16～18は、形状が球状をなし、全面に磨面がみられる。球状の磨石は大きさが約4～9cmである。長さによって小型（5cm以下）、中型（7cm以下）、大型（それ以上）の3つに分かれる。図101-19～103-2は円盤状で表裏の2面に磨面がみられる。円盤状の磨石は、長さが4～12cm、厚さが2～7cmであり、長さ7cm以上の大型のものとそれ以下の小型のものがある。図103-3～105-4は楕円形の礫の表裏の2面に磨面がみられる。楕円形の磨石は、長さ約5cm～20cm、幅が約3～12cmである。大きさの小さいものほど、長さとの差が小さい傾向にある。図105-5・6の磨面は、礫の平坦面の3面にみられるもの（5）、礫の全面にみられるもの（6）である。

敲打痕をもつもの（敲石）（図105-7～106-3）

敲石は9点が出土し、6点図示した。円形または楕円形の礫の側縁を使用し、石材は花崗閃緑岩が7点、安山岩1点、チャート1点利用される。105-7～9は、楕円礫の長軸端部に1面の敲打をもつものである。106-1は礫の側縁に2か所の敲打痕がみられる。2はチャート製であり、長軸下端部に1面の敲打面がみられる。3は楕円礫の長軸両端部に敲打痕がみとめられる。

磨面と敲打痕等を複合的にもつもの（図106-4～108-3）

20点が出土し、15点図示した。礫の表裏面に磨面と敲打による凹みをもつもの（106-4・5、107-2）、礫の片面にのみ凹みをもつもの（106-6～9、107-1）、敲打による凹みと側面に磨面をもつもの（107-3・4）、磨面と長軸端部に敲打痕をもつもの（107-5）、磨面と敲打による凹み、長軸端部等に敲打痕をもつもの（107-6、108-1～3）がある。106-9は、正面中央のやや下位の凹み部分に重なるように自然の凹みがみられる。108-3は楕円形をなし、側縁調整が半円状扁平打製石器と同様であるが、磨面と異なる側縁を敲石のように使用しているため本器種と捉えた。

半円状扁平打製石器（図108-4～109-5）

12点出土し、7点図示した。石材は安山岩と花崗閃緑岩がそれぞれ6点と4点、デイサイトと流紋岩が1点ずつ利用されている。素材が礫素材のもの8点、礫を短軸方向から敲打し、剥片となったものを加工し本器種として利用するものが4点である。安山岩のものは全て礫を素材とし、この他の石材は礫や剥片を素材として利用される。側縁の機能部は108-5のように断面が鋭角で線状になるものもあるが、多くは幅が約5mm～2cmの平坦面を形成する。108-5は、長軸端部が研磨により側縁が直線

状に作り出される。109-2は表裏面に磨面をもつものの、側面が磨りや敲きによる摩滅によるものと考え、本器種と捉えた。109-3は2側縁に磨面をもち、裏面の下位に敲打痕がみとめられる。109-4は小型の礫を利用し、素材となる礫が楕円形であるものの、側縁調整が109-1等と同じであることから本器種と捉えた。

挟入扁平打製石器 (図109-6~111-4)

11点出土し、全点図示した。石材は安山岩5点、花崗閃緑岩6点である。礫の長軸端部を打ち欠き、挟りを作り出すもので、半円状扁平打製石器同様に直線的な側縁に剥離のみでなく、磨りや敲きによる潰れ痕が確認される。側縁の機能部は111-4のように断面が鋭角で線状になるものもあるが、多くは幅約5mm~2cm平坦面を形成する。110-3は長軸の片方に挟りをもち、下端部が敲打によりつぶれ直線状となる。6は、上端と下端で大きさの異なる剥離が施され、両端で挟りの大きさが異なる。111-1は側縁の磨りや敲きによる潰れ痕が顕著ではないものの、側縁調整から本器種として捉えた。正面の上端部にみられる敲打痕は、半円状扁平打製石器や本器種の側縁にみられる敲打痕と位置が異なる。上端の挟りに関わる可能性が考えられるものの、判然としない。3は表裏面に磨面をもつものの、素材となる礫の長軸両端を打ち欠きによって挟りを作出し、側面が磨りや敲きによる摩滅により形成されたものと考え、本器種と捉えた。

台石 (図111-5~113-5)

70点出土し、13点を図示した。石材は安山岩が68点、流紋岩が2点である。円形または楕円形の礫(112-5~113-1)、方形に近い板状礫(113-2~5)を素材とし、表面の平坦な範囲には磨痕がみられる。板状のものは、第14号土坑出土(54-5)のような形状となるとみられ、礫素材のものに比べ、破損した状態のものが多い。112-1~3、113-1は敲打によるあばた状の凹みがみられる。113-1は形状や機能面が磨石と酷似するものの、手で持ち使用するには大きさや重量が大きいため本器種として捉えた。113-3は全面に被熱痕がみとめられる。4は流紋岩の礫表面にざらつきをもった磨面がみられる。全体が研磨され凹面となり、特に正面下半部は楕円形状の浅いくぼみが形成される。

砥石 (図113-6)

出土した1点を図示した。円形の軽石表裏面に研磨による線状痕と磨痕がみられる。

(藤田)



図100 遺構外出土遺物(縄文時代・37)



図101 遺構外出土遺物(縄文時代・38)

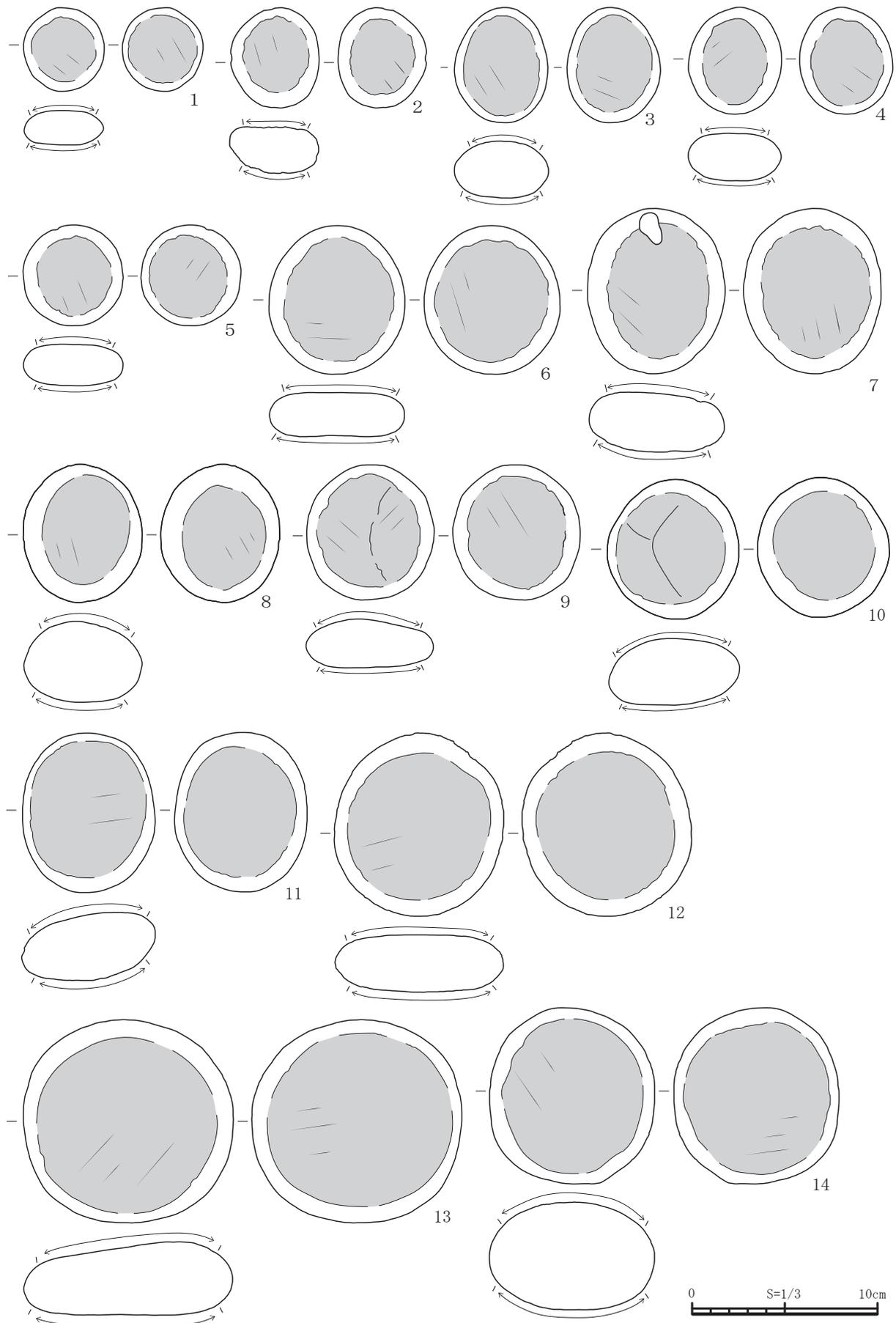


図102 遺構外出土遺物(縄文時代・39)

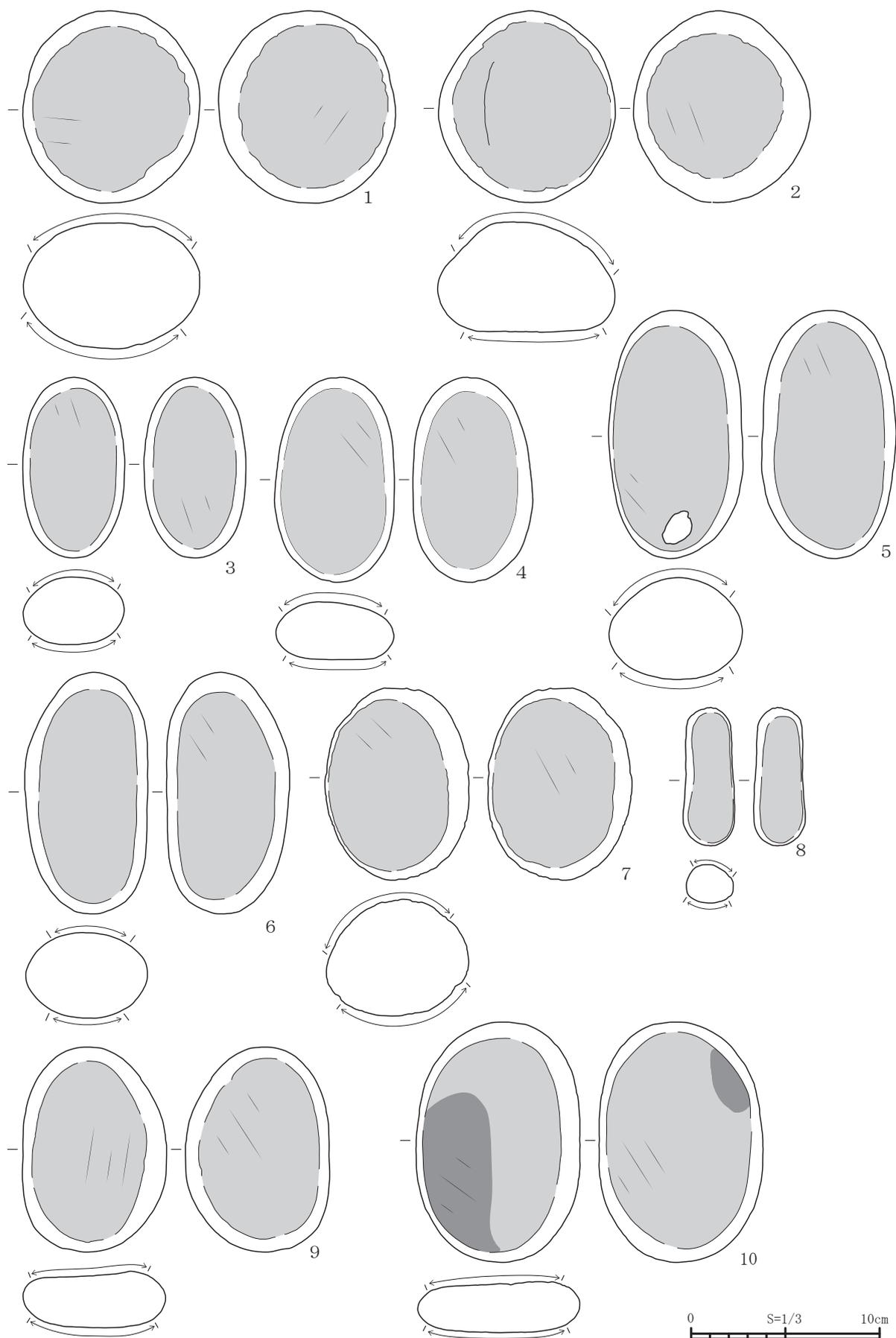


図103 遺構外出土遺物(縄文時代・40)

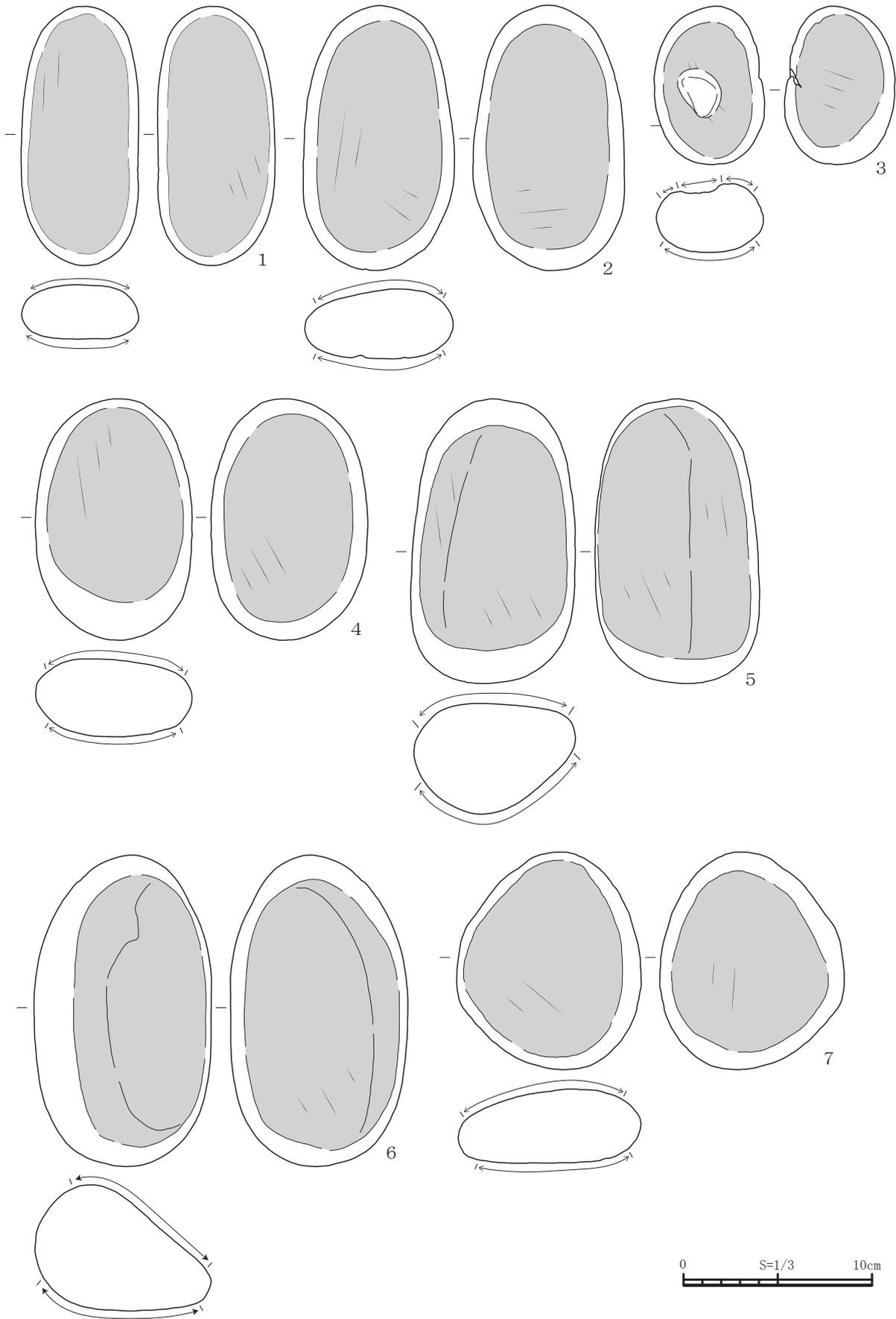


図104 遺構外出土遺物(縄文時代・41)

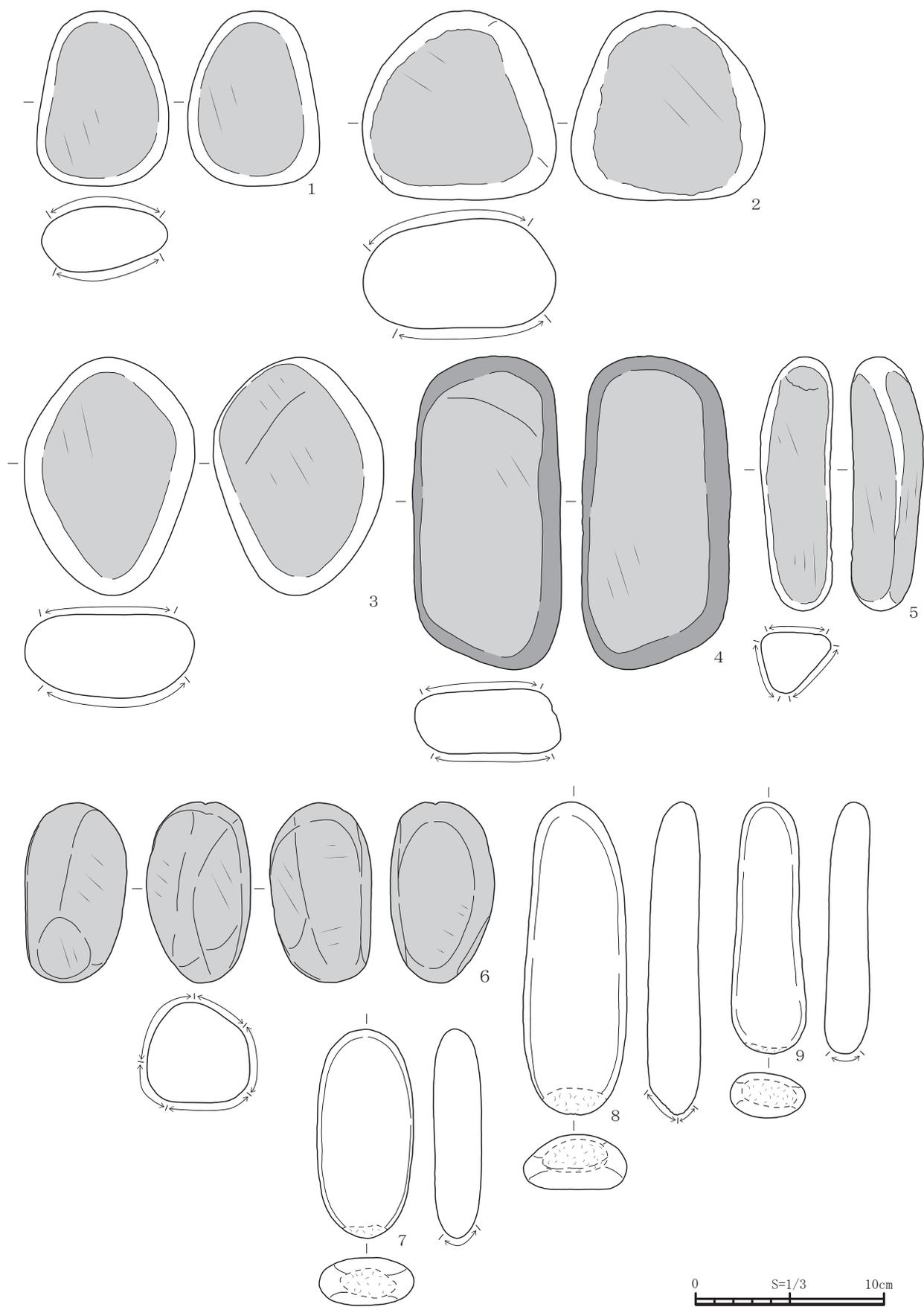


図105 遺構外出土遺物(縄文時代・42)



図106 遺構外出土遺物(縄文時代・43)

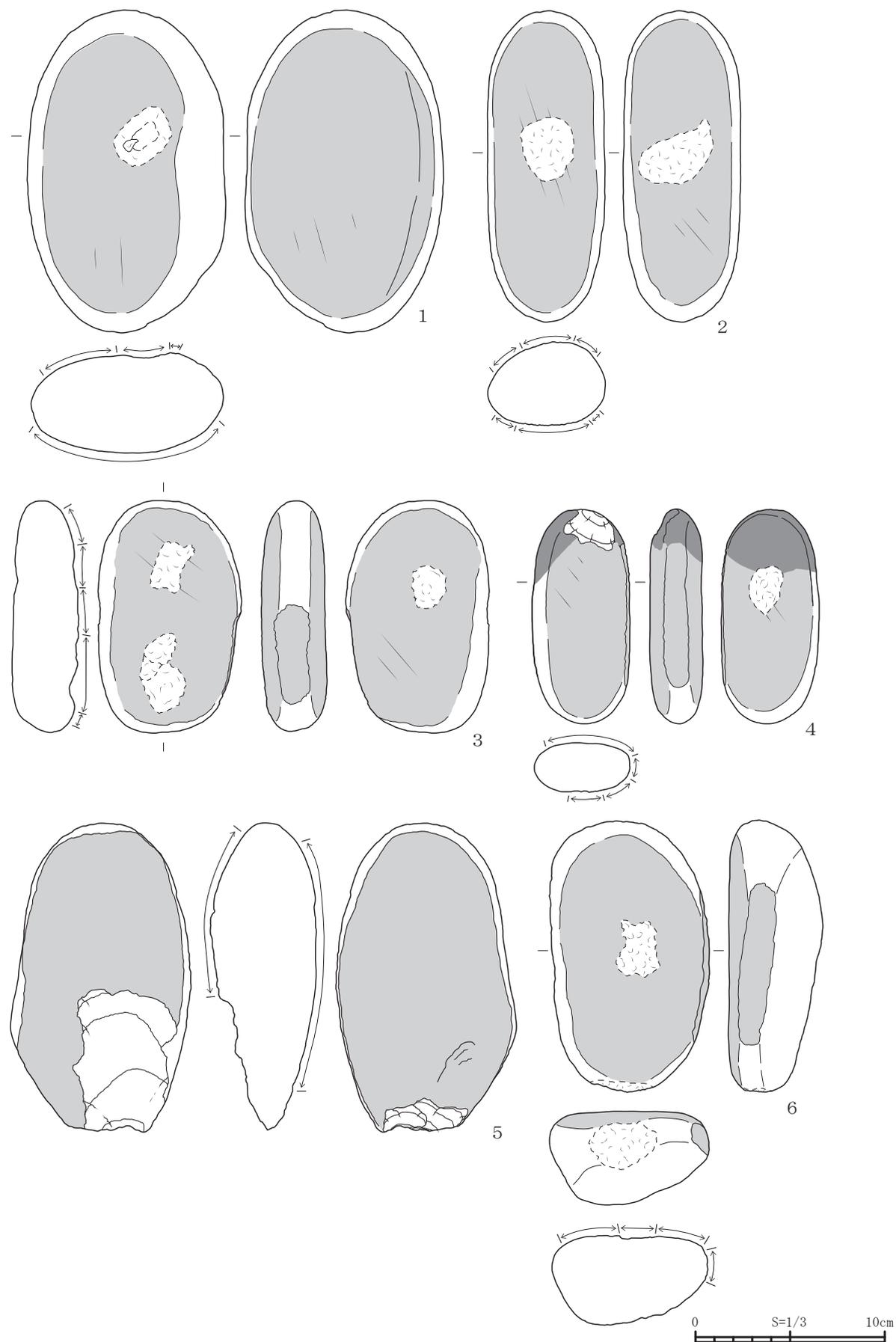


図107 遺構外出土遺物(縄文時代・44)

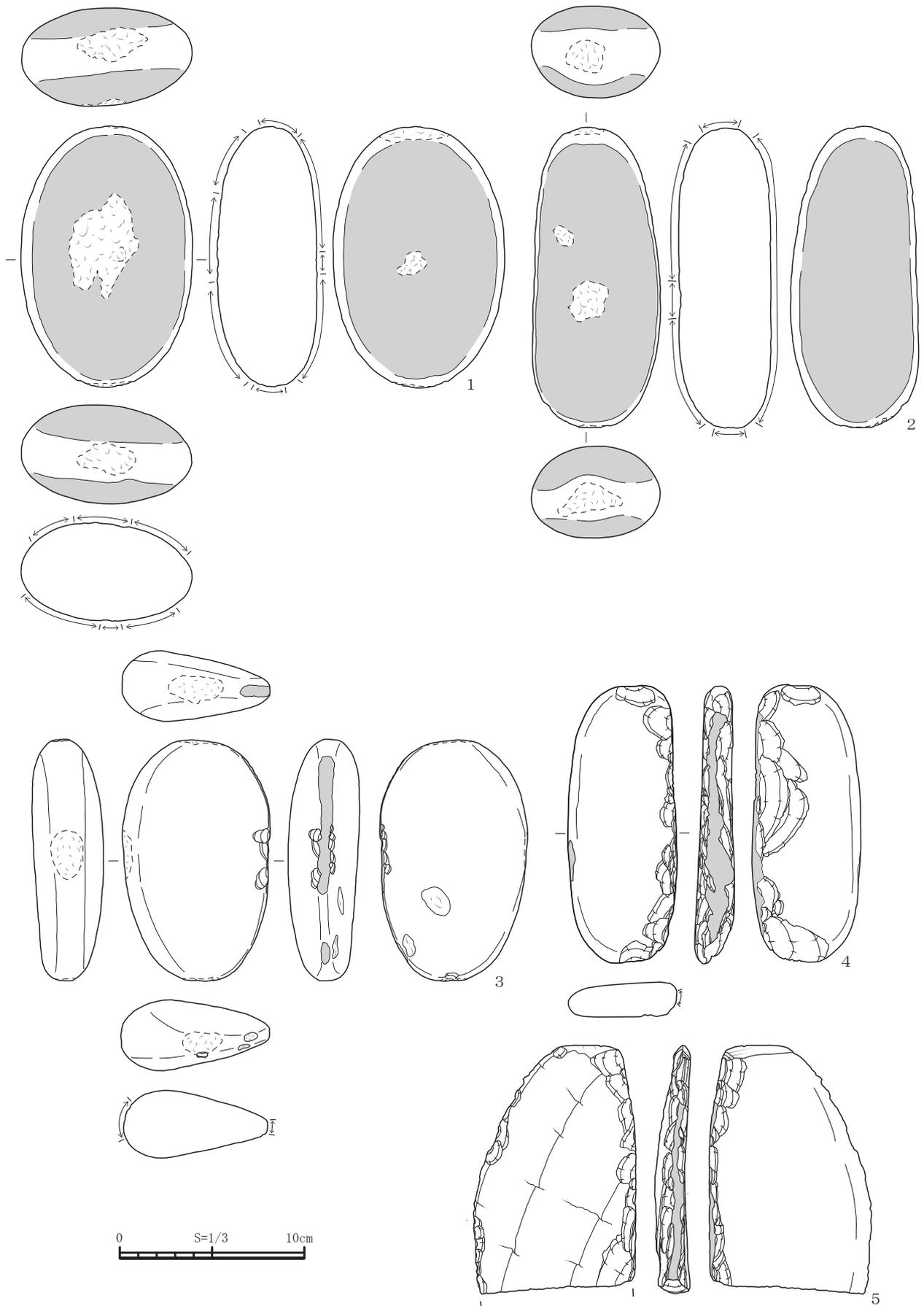


図108 遺構外出土遺物(縄文時代・45)

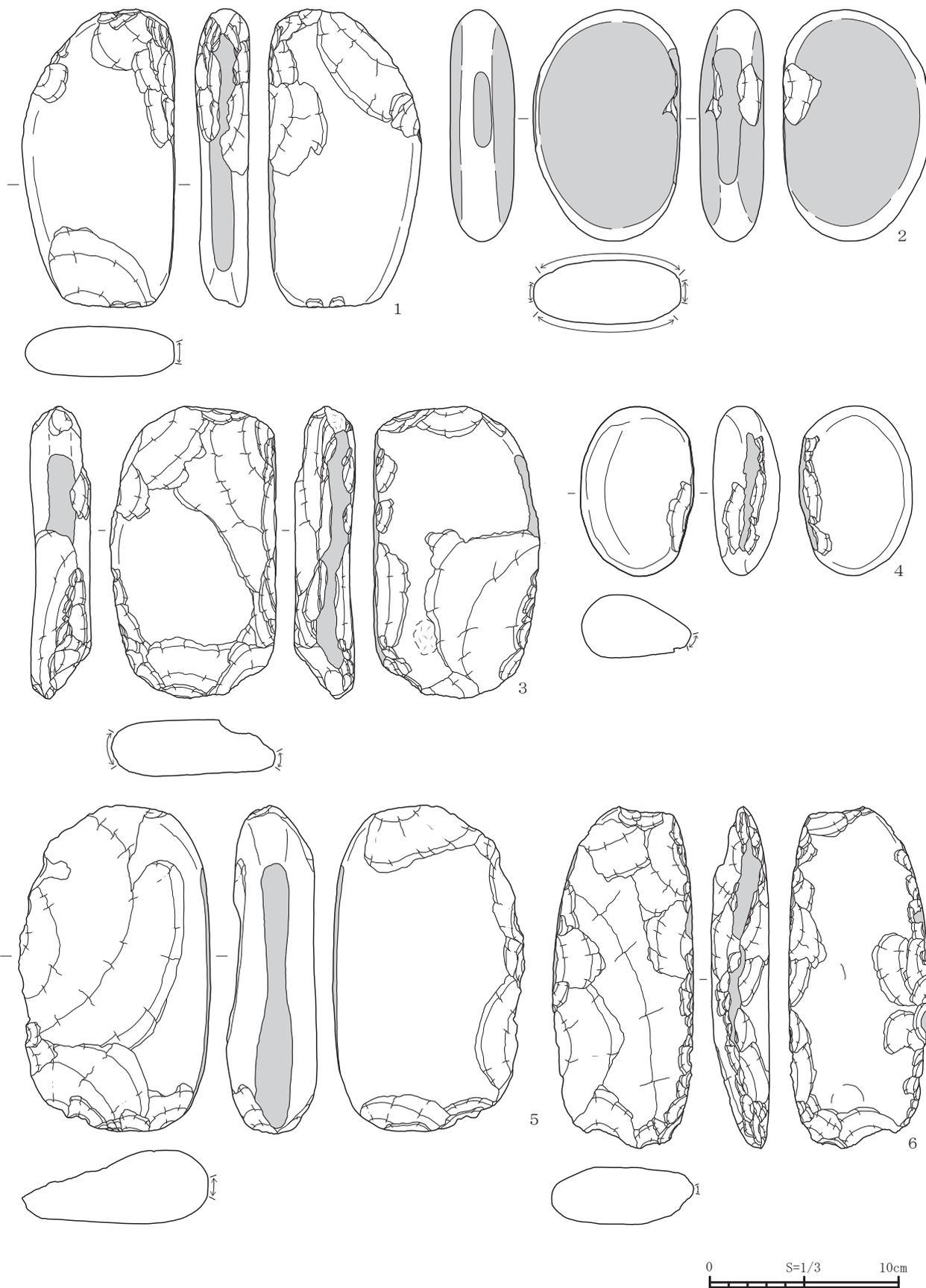


図109 遺構外出土遺物(縄文時代・46)

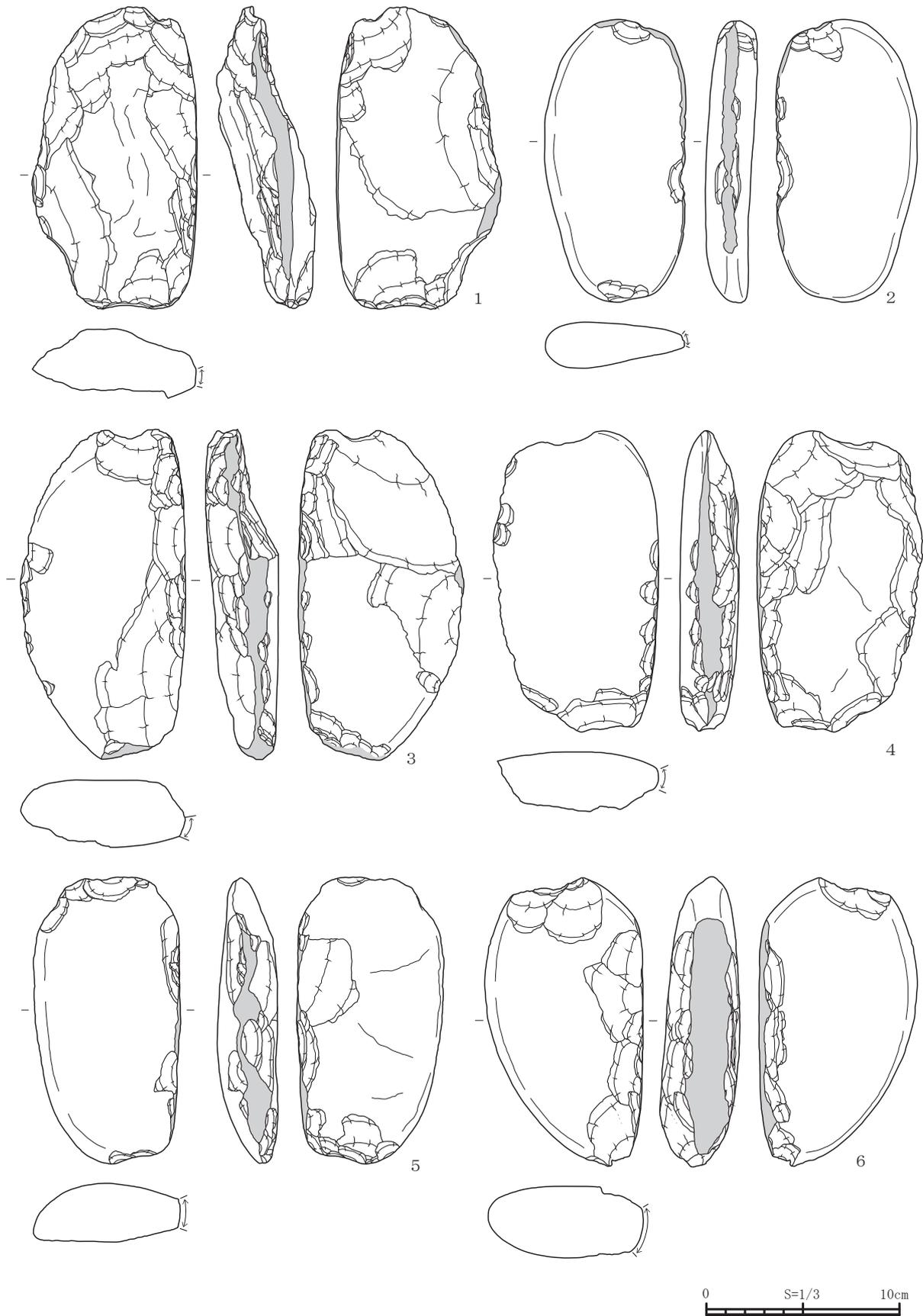


図110 遺構外出土遺物(縄文時代・47)



图111 遺構外出土遺物(縄文時代・48)

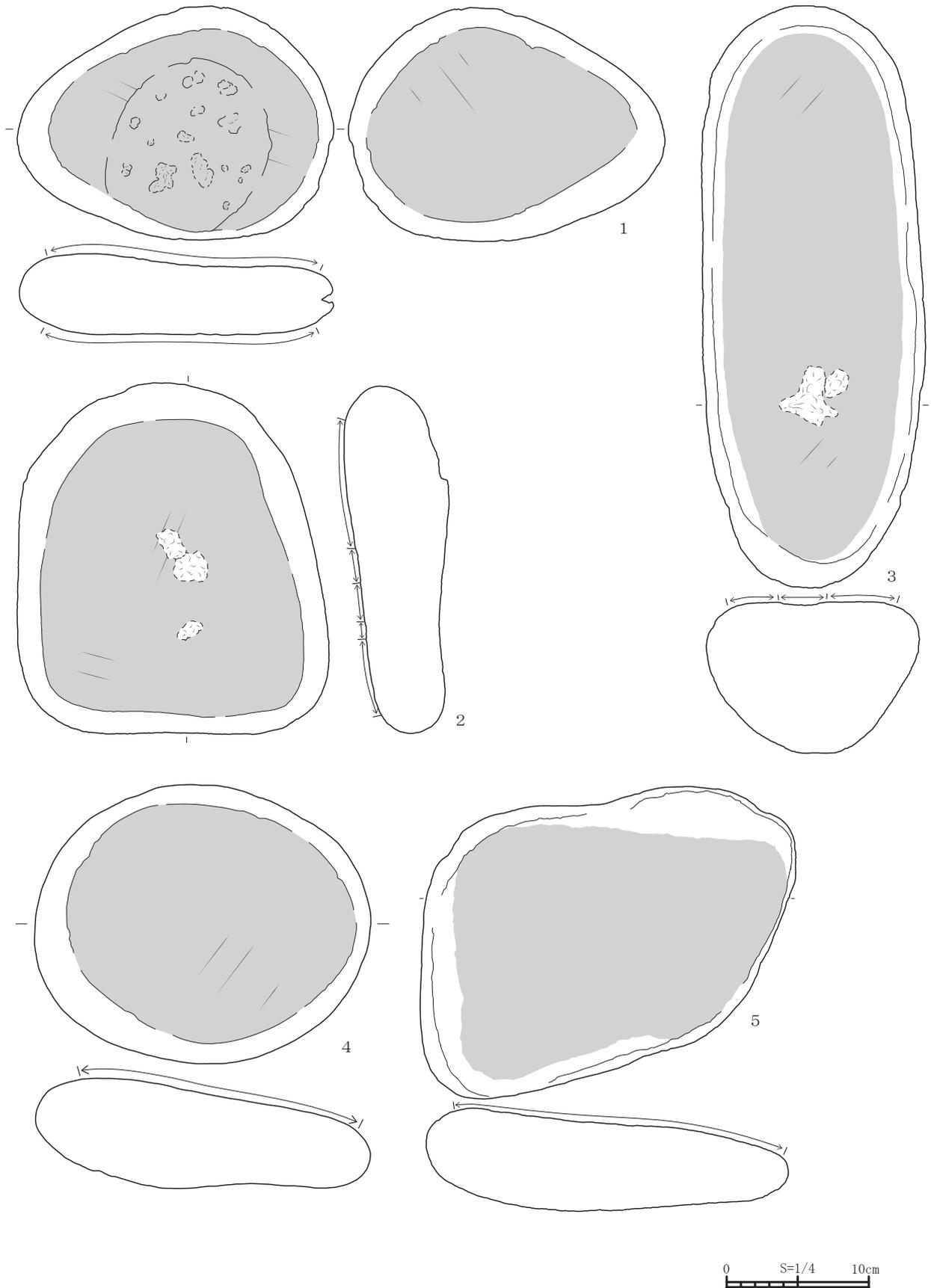


図112 遺構外出土遺物(縄文時代・49)

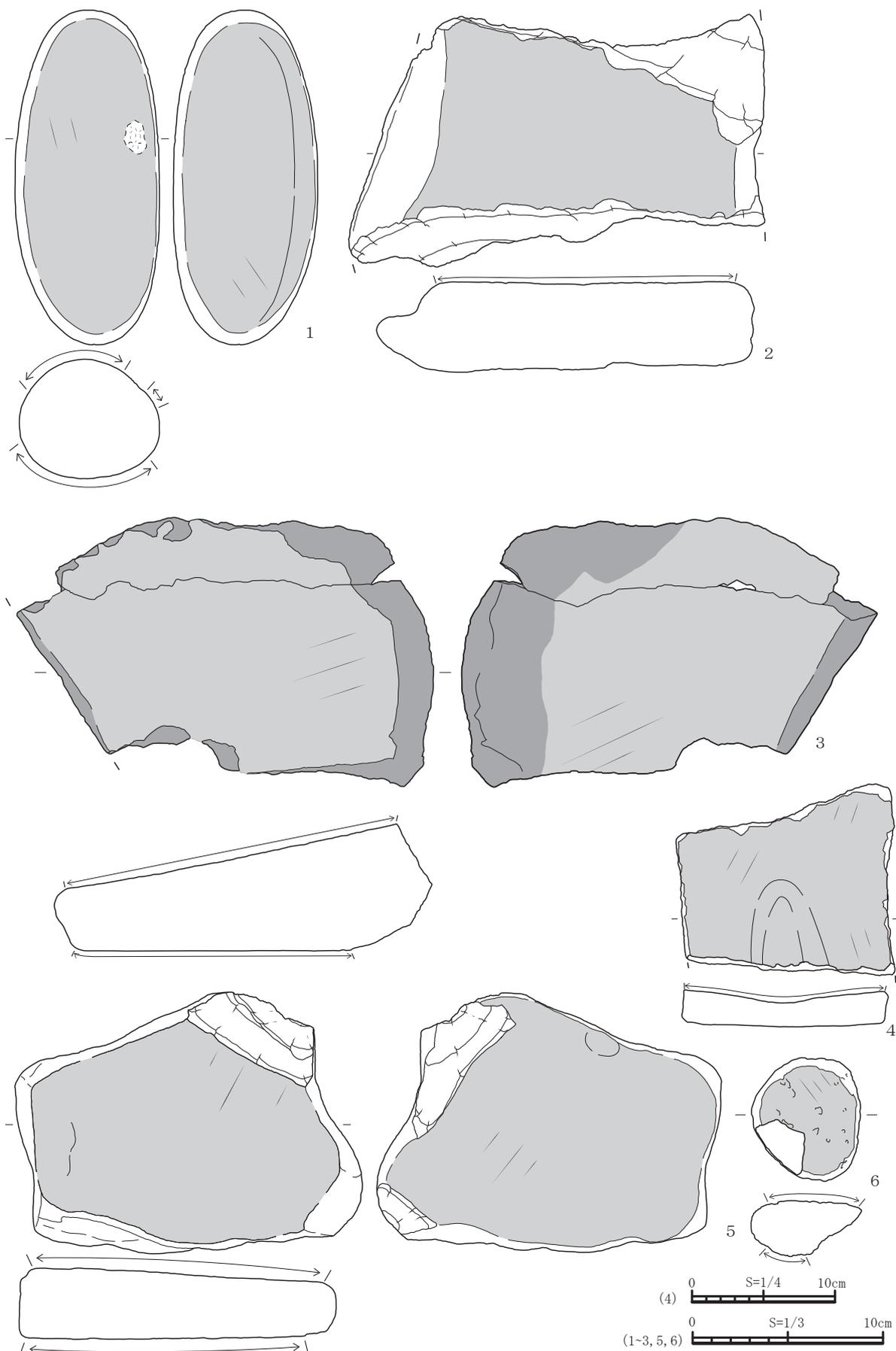


图113 遺構外出土遺物(縄文時代・50)

(3) 土製品・石製品

土製品

遺構外からは、土偶が1点、土器片利用土製品（円形）が17点、土器片利用土製品（三角形）が5点、土器片加工品が4点、ミニチュア土器が1点、焼成粘土塊が14点出土した。出土地点は、ほとんどが南東の斜面捨て場である。時期ごと、器種ごとに記述した。

(ア) 縄文時代前期後葉

土器片利用土製品（円形）（図115-1～17）

17点出土し図示した。すべて円筒下層d式の土器を利用している。

使用部位は、地文のみの胴部が15点（115-1～15）と多い。寸法は、径4cmほどものが2点（115-14・15）、5～6cmに収まるものが12点と最も多く、6cmをこえるものが3点（115-3・5・17）ある。このうち穿孔は2点（115-1・2）にあり、地文は多軸絡条体、側面は擦り加工される。穿孔途中のものは2点（115-3・4）ある。115-3は、前面に穿孔途中の痕跡があり、地文が単軸絡条体第1類で、側面は擦り加工される。115-4は、前面に穿孔途中の痕跡が薄いものの2箇所を確認でき、地文は多軸絡条体、側面は擦り加工される。

115-5は、胴部片を利用し、地文が単軸絡条体第1A類で、側面に断面V字型に溝がほぼ全周施文される。円形に加工し、擦りを施した後に、側面に鋭利な工具で溝を作出している。表面に土器使用時の付着と思われる炭化物が付着している。

穿孔がないものは、10点（115-6～15）あり、地文は単軸絡条体第1類のものが1点（115-12）、不明が2点（115-11・13）あり、ほか7点は多軸絡条体である。穿孔がなく、底部片を利用しているものは2点（115-16・17）あり、側面に擦り加工される。

土器片利用加工品（図116-1～3）

3点図示した。円筒下層d式の土器を利用している。

116-1・2は、土器片の外周を打ち欠いて整形しており、土器片利用土製品の素材破片等の可能性が想定できる。116-1は、波状口縁と思われ、口縁部に平行押圧文、区画は隆帯、地文は多軸絡条体である。116-2は、平口縁、平行押圧文、区画は隆帯、地文は単軸絡条体第1類である。116-3は、土器を擦切っている。単軸絡条体第1類が施文される胴部片で、端部と中心部に擦切り痕跡があり、端部は切り取り後、中心部は切り取り途中である。

(イ) 縄文時代中期後葉

土 偶（図114-1）

1点図示した。形態、文様等から榎林式に比定できる。捨て場域（Q-47）から出土した。頭部から胴部が残存し、頸部で上下に、腕部は穿孔に沿って折損する。頭部は左右、裏面に突起が伸び、頭頂部が丸く作出される。頭部の穿孔は、左右の突起部と左頭部に3箇所縦にあけられる。穿孔方向は、粘土粒の動きから上から下への穿孔と思われる。

顔は、鼻が縦に細長く、目鼻口は、同じ工具での刺突が想定できる。目の周りから左右突起に向

かって沈線文があるが、右眼部の一部はナデ消されている。口の下沈線に向かって鍵状に沈線文が両側から入り裏面へとつながり弧状に下がる。胴部は、地文のLR斜行縄文のうえから、2条の横沈線ののち、乳房の間を通るように弧状沈線が2条1対で施文され、その間を縦沈線が充填する。

裏面は、地文がLR縦回転、横回転の順に施文され、そのうえから、後頭部の下にわずかに沈線が縦に3条、頸部に横に2条、胴部に2条あり、表から繋がる弧状文が2条施文される。

腕部は欠損するものの、穿孔の痕跡がみられる。両腕部の穿孔は上部に向かって斜めに入る。穿孔からは、縦の繊維痕が観察できる。

土偶は、沈線文に全体的に明確なモチーフが見受けられず、描画時の揺れや書き足し、ナデ消しが見受けられる。後頭部の穿孔は片側のみで、乳房は対称性が弱い。このような特徴から、明確なモデル等を想定しない中で作られた可能性が指摘できる。

土器片利用土製品（三角形）（図116-4～8）

5点図示した。すべて榎林式の土器を利用している。土器片の外周を三角形に打ち欠いている。三辺が直線に近い3点（116-4～6）は、寸法が、幅8～9cmほどと規格性が見られる。側面に擦りが施されるものは、116-7を除く4点にみられる。116-7・8は、少し小型で幅が6cm程度である。いずれも、文様のある胴部を利用している。文様は、弧状文が2点（116-4・6）、有棘渦巻文の一部と思われるものが2点（116-5・7）、方形の区画文が1点（116-8）である。

土器片加工品（図116-9）

1点図示した。榎林式の土器を利用している。土器片を打ち欠いて整形しており、土器片利用土製品の素材の可能性等が想定できる。下端部の長さが9cmで、長辺の角度が、116-4の寸法（8.6cm）と近く、同様の三角形素材を得ようとしたのかもしれない。口唇部に沈線が入り、有棘渦巻文が胴部に施文される。

（ウ）その他（時期不明）のもの

ミニチュア土器（図116-10）

1点図示した。深鉢型の胴～底部である。胎土に繊維は含まれない。帰属時期は不明である。

焼成粘土塊（写真69-7～20）

14点写真で掲載した。胎土に繊維が含まれる4点（写真69-11～14）は、円筒下層d式に比定でき、ほかは帰属時期不明である。このうち、ほとんどに指頭圧痕がある。写真69-11は植物圧痕がある。写真69-12は胎土に含まれる繊維が残存し、工具痕が認められる。

石製品

遺構外からは、玦状耳飾が1点、三角形岩板が1点、不明石製品が1点、棒状礫が19点出土した。

玦状耳飾（図117-1）

1点出土し図示した。遺構外から出土し、石材は橄欖岩に近い珪質頁岩と鑑定された。玦状耳飾の

形態については、「日本列島の耳飾り」（水ノ江 2019）で示されている分類基準に従うと、形態は三角形、断面は扁平形である。三角形の片側の破片で、頂部に二次穿孔がある。二次穿孔は両側から穿たれており、表面には未穿孔の窪みがある。切目は、断面三角形で両側から長軸方向の擦痕が入り、擦切技法と考えられる。丁寧に調整されており、擦痕が縦横に入り、主に横擦痕を切るように縦擦痕がある。側面は「く」字形を呈する。形態から縄文時代前期後葉（円筒下層 d 式期）と考えられる。

三角形石製品（図117-2）

1点出土し図示した。M-53グリッド、捨て場域からの出土である。流紋岩の板状節理の自然礫である。一部に打ち欠き、擦り加工を施している。帰属時期については、同様の形態である土器片利用土製品（三角形）が縄文時代中期後葉（榎林式）に比定できるため同時期の可能性がある。

不明石製品（図117-3）

1点出土し図示した。M-48グリッド、捨て場域からの出土である。石材は安山岩で、穿孔は自然のものである。表面の穿孔付近に敲打痕、下部にわずかに擦痕がある。

棒状礫（図117-4～12）

19点出土し、9点図示した。出土位置は、北側と南側に大きく分かれる。北側はSV06～SV03周辺（S-29～31グリッド）から8点、南側は、南東斜面捨て場から9点出土した。寸法は最も小さいものが38mm、大きいもので476mmと様々だが、概ね10mm未満、100～200mm、200mm以上の3グループに分類できる。10mm未満のものは4点あり、100～200mmのものは10点と最も多く、4点（117-9～12）図示し、200mm以上のものは5点（117-4～8）あり図示した。

二次加工等は4点で確認できる。被熱による剥離があるものが1点（117-10）、横からの衝撃により生じた折損があるものが2点（117-12・8）、二次剥離が加わるものが1点（117-9）ある。折損は、風化面の比較から縄文時代の所産と考えられる。

（長谷川）

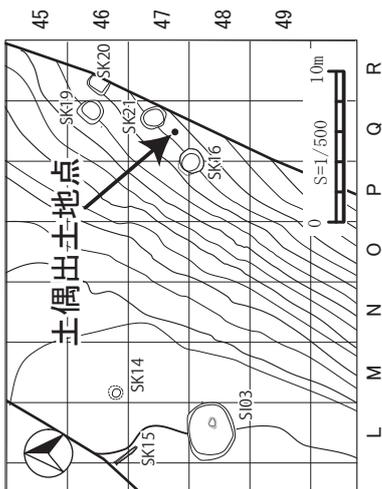
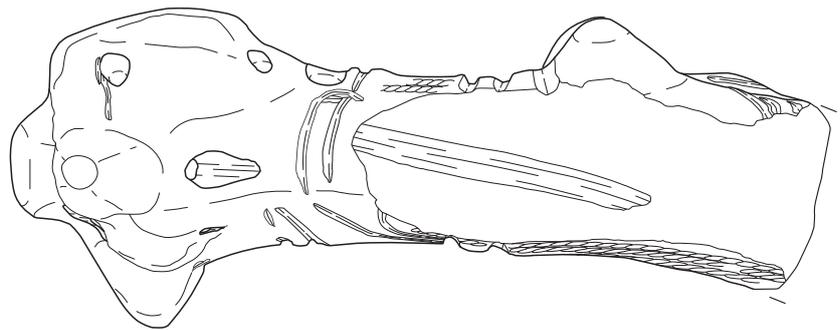
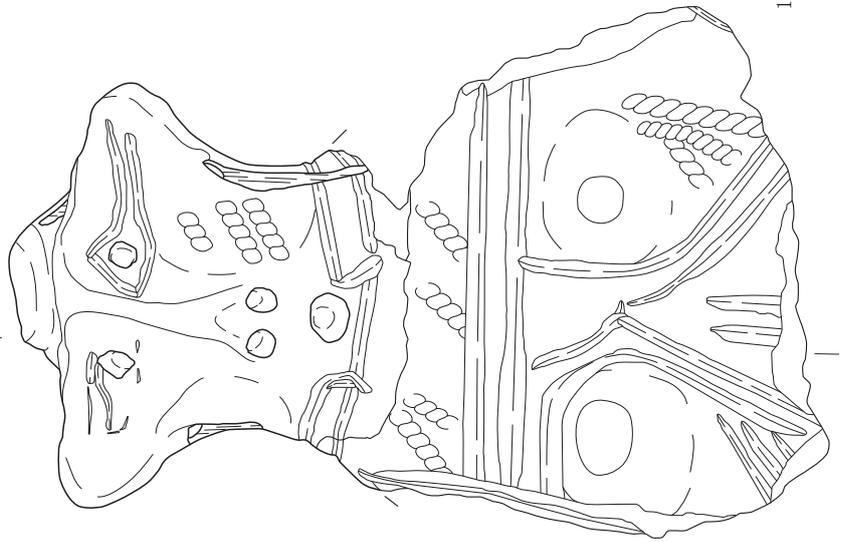
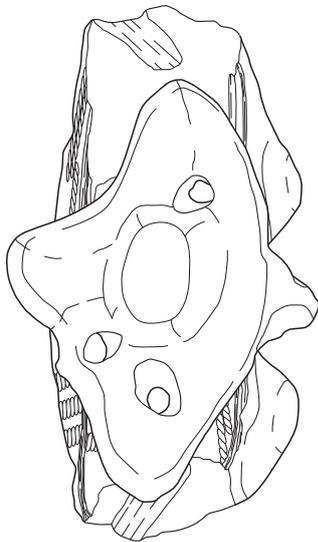
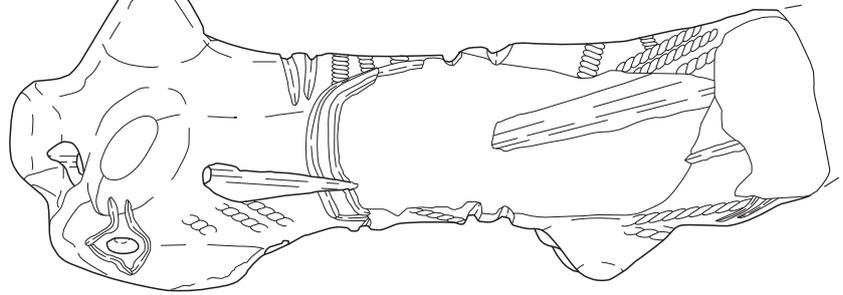
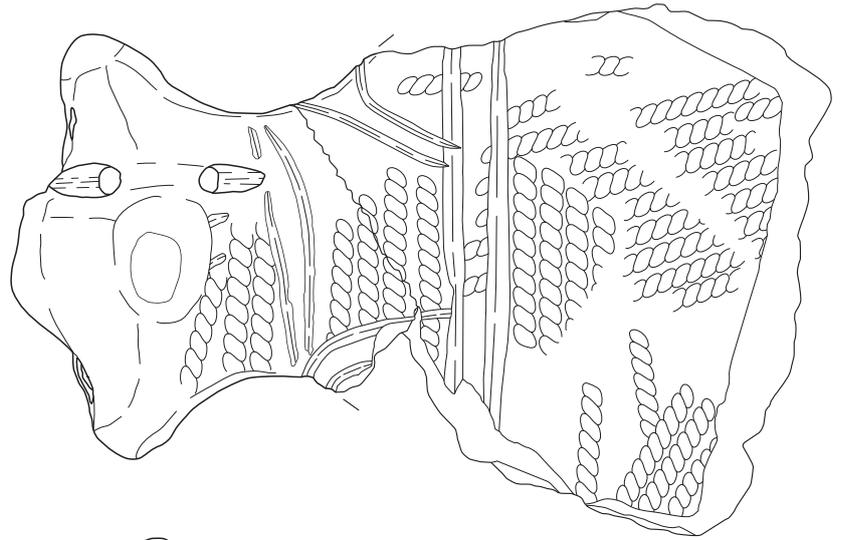
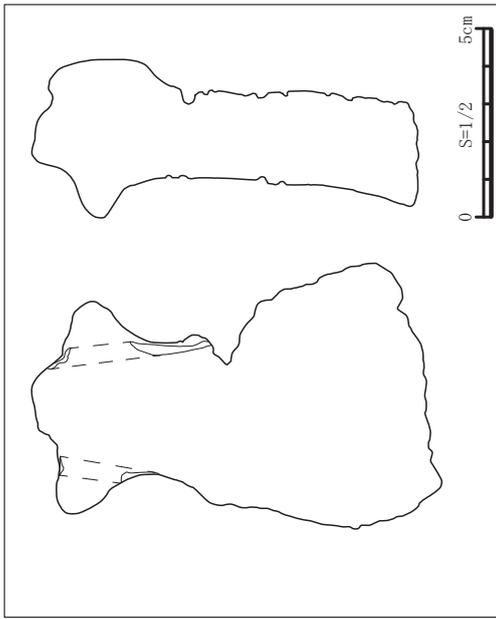


图114 遺構外出土遺物 (縄文時代・51)

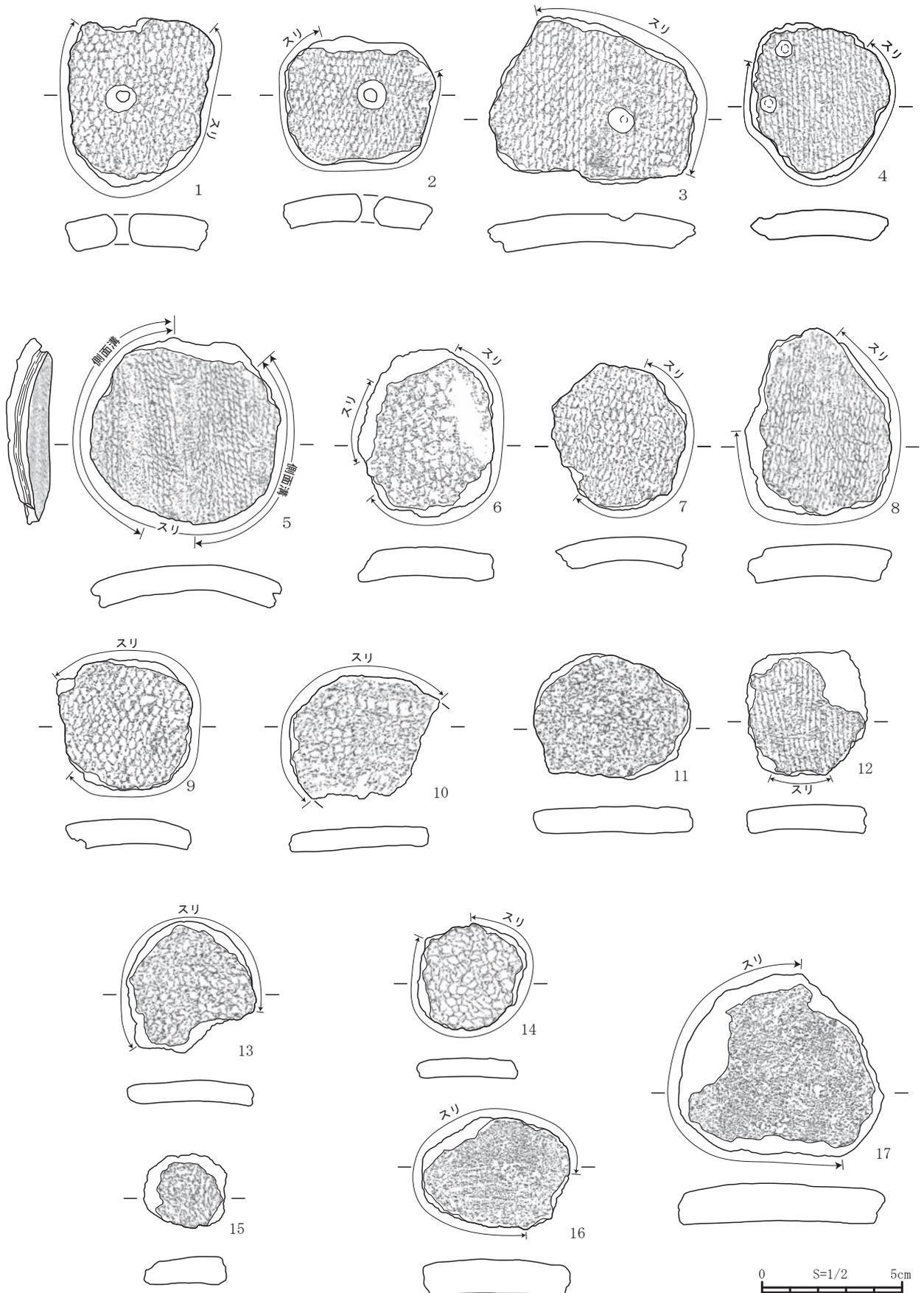


図115 遺構外出土遺物（縄文時代・52）